三條西殿跡

平安京跡研究調査報告

第7輯

財團法人　古代學協會

昭和58年

序　　文

三条大路，烏丸小路の西北角，平安京左京三条三坊十二町は三条西殿に当り，この邸宅は，12世紀初頭に白河法皇が御所とし，同法皇は，この西殿の西対で崩御され，その建物が鳥羽殿に移されたことで知られる。その後，鳥羽上皇や中宮の藤原璋子（待賢門院）の御所にもなり，かれらの女の統子内親王（上西門院）もしばしば渡御した，いわゆる皇室と関係の深い邸宅であったが，12世紀中期の焼失で幕を閉じた。

こうした文献学の成果を考古学的にも解明するため，古代學協會・平安博物館は，これまで三条西殿跡地を３次に亘って発掘してきた。

中でも，第１次調査は，今回調査地内を，自主発掘したもので，三条大路，烏丸小路の側溝の検出に成功したのである。

今次の調査が第４次発掘ということになるが，今回の調査によって，平安，室町，江戸の各時代の三条大路の側溝を検出しえたことは，従来の成果を更に前進せしめたものである。

ここに報告書を公けにすることによって，斯界にいささかなりとも，貢献できれば望外の喜びであり，また，発掘から報告書刊行の間，各位から寄せられた多くの援助に，心から感謝を申し上げる次第である。

昭和58年7月

(財)古代學協會専務理事
平安博物館館長　角田文衛

例　言

1．本書は，昭和56年に(財)古代學協會が千吉株式会社の委託を受けて実施した京都市中京区烏丸通三条上ル場之町608－1番地の発掘調査報告書である。

2．本書の執筆は下條信行，植山　茂，定森秀夫，鵤谷　寿が分担し，ⅠとⅣに関しては各項の末尾に明記した。遺構・遺物の説明は層位・中国陶磁を下條，三条大路北側側溝・瓦を植山，その他を定森が分担執筆した。また，動物骨・植物遺体は，京都大学理学部動物学教室の辻村純代氏に鑑定・執筆していただいた。なお，貝は当館の片岡　雅が鑑定した。

3．遺構・遺物の実測・トレースは主に渡辺　仁，吉田卓史，保坂雅美，藤友陽子が行った。遺構写真は植山，定森が，遺物写真は水口　薫が撮影した。

4．本書では磁北を使用した。遺物実測図は原則として縮尺を⅓とした。図版の遺物写真は縮尺不同であるが，古銭・巡礼札は実大である。図版の遺物番号は挿図の番号と一致する。

5．編集は下條，植山の指導のもとに定森が行った。

目　　次

頁
Ⅰ．はじめに …… 1
1．調査に至る経過と調査組織 …… 1
2．第1～3次調査の概要 …… 3
3．第4次調査の経過 …… 4
Ⅱ．層位と包含層出土遺物 …… 6
1．層　　位 …… 6
2．包含層出土遺物 …… 8
Ⅲ．遺構と出土遺物 …… 17
1．遺構の概要 …… 17
2．三条大路北側側溝と出土遺物 …… 17
3．烏丸小路西側側溝と出土遺物 …… 75
4．井戸と出土遺物 …… 80
5．土壙と出土遺物 …… 87
6．ムロと出土遺物 …… 108
7．瓦溜と出土遺物 …… 112
8．その他の遺構と遺物 …… 112
Ⅵ．まとめ …… 140
1．遺構のまとめ …… 140
2．遺物のまとめ …… 142
3．文献学的考察 …… 152

図　版　目　次

図版第1　発掘前状況・層位・北区完掘状況
図版第2　南区完掘状況
図版第3　三条大路北側側溝 (1)
図版第4　同　上 (2)
図版第5　同　上 (3)
図版第6　同　上 (4)
図版第7　同　上 (5)
図版第8　同　上 (6)
図版第9　同　上 (7)
図版第10　同　上 (8)
図版第11　同　上 (9)
図版第12　同　上 (10)
図版第13　同　上 (11)
図版第14　三条大路北側側溝動物骨，編物出土状況
図版第15　烏丸小路西側側溝
図版第16　烏丸小路西側側溝堰
図版第17　井　戸　34
図版第18　井　戸　40
図版第19　井　戸　42・20
図版第20　井　戸　50
図版第21　B4土壙1・柱穴列部分
図版第22　B5ムロ
図版第23　C3石組遺構・C5石組遺構1・A5石組遺構
図版第24　B3建物址
図版第25　灰色粘質土・灰緑砂2出土遺物
図版第26　暗灰色土2・1出土遺物
図版第27　灰黒色土出土遺物
図版第28　三条大路側溝Ⅳ出土遺物 (1)
図版第29　同　上 (2)
図版第30　同　上 (3)
図版第31　同　上 (4)
図版第32　同　上 (5)
図版第33　同　上 (6)
図版第34　同　上 (7)
図版第35　同　上 (8)
図版第36　同　上 (9)
図版第37　三条大路道路上出土遺物
図版第38　三条大路側溝東Ⅱ・Ⅰ出土遺物，同溝東Ⅰ石組使用石仏
図版第39　三条大路側溝ⅢB出土遺物 (1)
図版第40　同　上 (2)
図版第41　同　上 (3)
図版第42　同　上 (4)
図版第43　同　上 (5)
図版第44　三条大路側溝ⅢA出土遺物 (1)
図版第45　同　上 (2)
図版第46　三条大路側溝西Ⅱ出土遺物 (1)
図版第47　同　上 (2)
図版第48　同　上 (3)
図版第49　三条大路側溝西Ⅰ出土遺物
図版第50　三条大路側溝出土古銭
図版第51　烏丸小路側溝出土遺物
図版第52　烏丸小路側溝東側敲ち割り出土遺物
図版第53　井戸34・その他の井戸出土遺物
図版第54　井戸42・40出土遺物
図版第55　井戸出土古銭
図版第56　C4土壙11・D3小土壙群№14出土遺物
図版第57　B5土壙1出土遺物 (1)
図版第58　同　上 (2)
図版第59　D2土壙6出土遺物・A6土壙2出土遺物 (1)
図版第60　A6土壙2出土遺物 (2)
図版第61　同　上 (3)・三条大路側溝ⅢB出土遺物
図版第62　B4土壙1出土遺物 (1)
図版第63　同　上 (2)
図版第64　同　上 (3)・その他の土壙出土遺物
図版第65　B5ムロ出土遺物
図版第66　ムロ埋甕・瓦溜13出土遺物
図版第67　発掘区出土瓦 (1)
図版第68　同　上 (2)

図版第69　発掘区出土瓦 (3)
図版第70　同　上　(4)
図版第71　同　上　(5)・A 5石組遺構出土磚
図版第72　発掘区出土瓦 (6)
図版第73　動物骨 (1)
図版第74　同　上 (2)
図版第75　動物骨 (3)
図版第76　貝 (1)
図版第77　貝 (2)・植物遺体
図版第78　『洛中絵図 寛永十四年七月二日』部分
図版第79　『洛中絵図 寛永後万治前』部分
図版第80　『洛中洛外図』部分

挿　図　目　次

第1図　発掘調査地位置図……1
第2図　平安京条坊図……2
第3図　発掘区とグリッド配置図……4
第4図　南区北壁層位図……7
第5図　南区北壁層位部分図……7
第6図　A 4における層位模式図……8
第7図　灰色粘質土出土遺物実測図 (1) …9
第8図　同　上　(2) …10
第9図　灰緑砂2出土遺物実測図……11
第10図　暗灰色土2出土遺物実測図……12
第11図　暗灰色土1出土遺物実測図……13
第12図　灰黒色土出土遺物実測図 (1) ……14
第13図　同　上　(2) ……15
第14図　平安時代遺構図……19
第15図　鎌倉～安土桃山時代遺構図……21
第16図　江戸時代以降遺構図……23
第17図　三条大路側溝西Ⅱ北側石組側面図……25
第18図　三条大路側溝西Ⅱ北側石組断面図……25
第19図　B・C 6付近遺構図……26
第20図　B 6出土擂鉢実測図……26
第21図　A・B 6南壁層位図……27
第22図　A・B 6南壁面E出土土師器実測図……27
第23図　三条大路側溝Ⅳ溝内層位図……28
第24図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (1)……28
第25図　同　上　(2)……29
第26図　同　上　(3)……30
第27図　同　上　(4)……31
第28図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (5)……33
第29図　同　上　(6)……34
第30図　同　上　(7)……35
第31図　同　上　(8)……37
第32図　同　上　(9)……38
第33図　同　上　(10)……39
第34図　同　上　(11)……40
第35図　同　上　(12)……42
第36図　同　上　(13)……43
第37図　同　上　(14)……44
第38図　同　上　(15)……45
第39図　同　上　(16)……46
第40図　同　上　(17)……47
第41図　同　上　(18)……48
第42図　同　上　(19)……49
第43図　同　上　(20)……50
第44図　同　上　(21)……51
第45図　三条大路道路上出土遺物実測図 (1)……53
第46図　同　上　(2)……54
第47図　三条大路側溝東Ⅱ出土遺物実測図……55
第48図　三条大路側溝東Ⅰ出土遺物実測図……55
第49図　三条大路側溝東Ⅰ石組使用石仏実測図……56
第50図　三条大路側溝ⅢB出土遺物実測図 (1)……57
第51図　同　上　(2)……58
第52図　同　上　(3)……59

第53図　三条大路側溝Ⅲ B出土遺物実測図 (4)……59
第54図　同　上 (5)……60
第55図　同　上 (6)……61
第56図　同　上 (7)……62
第57図　同　上 (8)……63
第58図　同　上 (9)……64
第59図　三条大路側溝Ⅲ A出土遺物実測図 (1)……65
第60図　同　上 (2)……66
第61図　同　上 (3)……67
第62図　三条大路側溝西Ⅱ出土遺物実測図 (1)……68
第63図　同　上 (2)……69
第64図　同　上 (3)……70
第65図　同　上 (4)……71
第66図　同　上 (5)……72
第67図　三条大路側溝西Ⅰ出土遺物実測図 (1)……73
第68図　同　上 (2)……74
第69図　同　上 (3)……74
第70図　三条大路側溝出土古銭拓影……74
第71図　烏丸小路側溝堰実測図……75
第72図　烏丸小路側溝出土遺物実測図……77
第73図　烏丸小路側溝出土古銭拓影……77
第74図　烏丸小路側溝東側殺ち割り出土遺物実測図 (1) ……78
第75図　同　上 (2) ……79
第76図　井戸配置図……79
第77図　井戸類型模式図……80
第78図　井戸34出土遺物実測図……83
第79図　井戸42出土遺物実測図……84
第80図　井戸40実測図……85
第81図　井戸40出土遺物実測図……86
第82図　その他の井戸出土遺物実測図……86
第83図　井戸出土古銭拓影……87
第84図　A 3 土壙 3 出土遺物実測図……88
第85図　C 4 土壙11出土遺物実測図……89
第86図　D 5 土壙 5 出土遺物実測図……90
第87図　D 3 小土壙群№14出土遺物実測図……91
第88図　B 5 土壙 1 出土遺物実測図 (1) …92
第89図　B 5 土壙 1 出土遺物実測図 (2)… 93
第90図　同　上 (3)… 94
第91図　同　上 (4)… 95
第92図　同　上 (5)… 96
第93図　D 2 土壙 6 出土遺物実測図 …… 97
第94図　A 6 土壙 2 出土遺物実測図 (1)… 99
第95図　同　上 (2)…100
第96図　同　上 (3)…101
第97図　同　上 (4)…102
第98図　同　上 (5)…103
第99図　B 4 土壙 1 出土遺物実測図 (1)…104
第100図　同　上 (2)…105
第101図　同　上 (3)…106
第102図　同　上 (4)…107
第103図　その他の土壙出土遺物実測図 …108
第104図　ムロ埋甕実測図 ……109
第105図　B 5 ムロ出土遺物実測図 (1)……110
第106図　同　上 (2)……111
第107図　瓦溜13出土遺物実測図 ……113
第108図　C 3 石組遺構実測図 ……114
第109図　A 5 石組遺構出土遺物実測図 …115
第110図　柱穴列実測図 ……116
第111図　発掘区出土瓦実測図 (1)……117
第112図　同　上 (2)……118
第113図　同　上 (3)……119
第114図　同　上 (4)……121
第115図　同　上 (5)……122
第116図　同　上 (6)……123
第117図　同　上 (7)……124
第118図　同　上 (8)……125
第119図　同　上 (9)……126
第120図　同　上 (10)……129
第121図　同　上 (11)……130
第122図　同　上 (12)……131
第123図　同　上 (13)……132
第124図　同　上 (14)……133
第125図　同　上 (15)……134
第126図　現在の烏丸三条と溝東Ⅰ調査風景 ……141
第127図　出土軒瓦一覧図 (1)……144
第128図　同　上 (2)……145
第129図　同　上 (3)……146

第130図 出土軒瓦一覧図 (4)……147
第131図　　同　　上　(5)……148
第132図 軒瓦出土分布図 ……151
第133図『三十二番歌合』巡礼図……152

付　図　目　次

付図第1　三条大路北側側溝実測図
付図第2　島丸小路西側側溝実測図

表　目　次

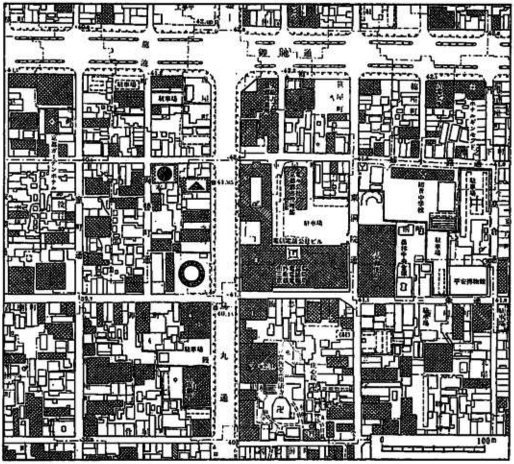
第1表　三条大路側溝出土古銭一覧表……74
第2表　井戸一覧表……82
第3表　井戸出土古銭一覧表……87
第4表　出土獣骨の時代別の
　　種と部位一覧表……136，137
第5表　出土獣骨一覧表 ……138
第6表　出土獣骨の時代別最少個体数表
　　……138
第7表　出土植物遺体一覧表 ……139

Ⅰ．は じ め に

1. 調査に至る経過と調査組織

昭和56年の初頭，千吉株式会社（京都市中京区三条通室町西入衣棚町55）より，古代學協會・平安博物館に同社所有の京都市中京区烏丸通三条上ル場之町 608－1 番地の発掘依頼があった。それは同社が該地に地上 8 階，地下 1 階の千吉烏丸ビルを建設するのに伴う事前発掘を内容とするものであったが，同地についてはすでに京都市埋蔵文化財調査センターより発掘調査を必要とする旨の指導を同社が受けており，また同地は三条西殿跡地としてその重要性を認め，次項で略述するように当博物館が昭和44年に発掘調査を行ったという経緯もあって，当博物館で同地の発掘を引き受けることとなった。

発掘地は烏丸三条交差点の西北角に位置し，東西41.5m，南北42.5mのほぼ方形をなし，その面積は1,790㎡である。この敷地の西端には幅 8 mの南北に長いビルがあり，残余の部分は



第1図　発掘調査地位置図（○…第1・4次地点，▲…第2次地点，●…第3次地点）

駐車場として利用されていたが，このビルも毀し，敷地全面に新ビルを建設しようとの計画であるから，発掘対象地は敷地のほぼ全面に及ぶこととなった。

当博物館は，これまでに三条西殿跡地について３次にわたる発掘調査を行ってきた。

第１次調査　　烏丸通三条上ル場之町（昭和44年）

第２次調査　　姉小路烏丸下ル場之町（昭和48年）

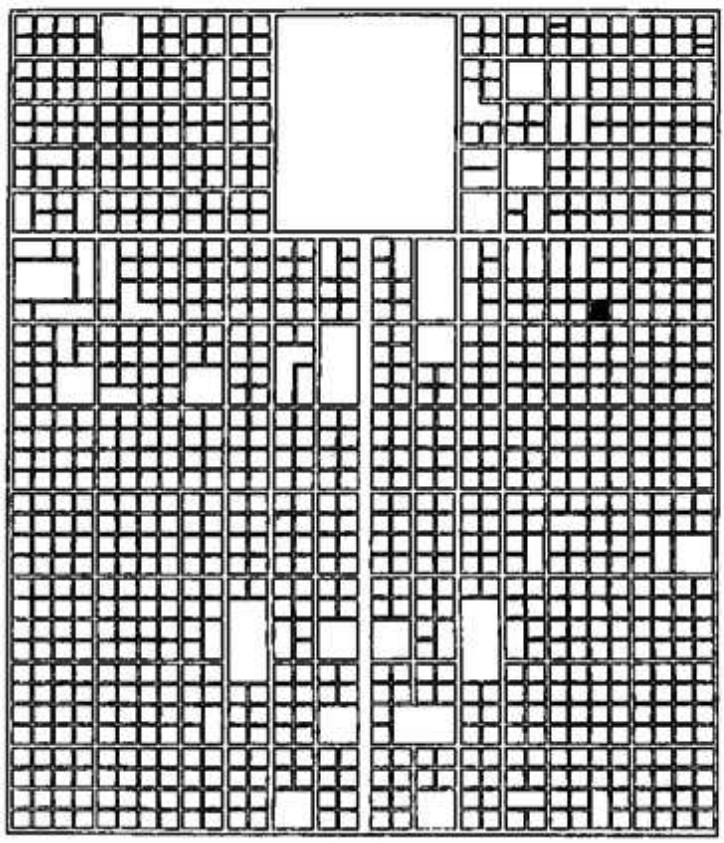
第３次調査　　両替町通姉小路下ル柿本町（昭和48年）

したがって，今回の調査を三条西殿跡第４次調査とすることにした(第１図参照)。

第２，３次調査については未報告で，第１次調査については『平安京三条西殿跡発掘調査報告』として，『平安博物館研究紀要』第３輯(京都，昭和46年)にその概要が報告されているが，今回新たに，次項に第１～３次調査の概要を記すことにした。

第１次調査は，今次調査の敷地内に南北，東西に厂字形にトレンチを入れたものであるが，南北トレンチの南端と東西トレンチの東端に三条大路，烏丸小路の側溝を検出しており，今回の調査では，両溝を線として顕わにし，加えてその交差点を明らかにすることを当初の主要な目的として発掘を開始した。

この調査の遂行は平安博物館考古学第三研究室が担当することになり，以下の調査員がこれにあたった。



第２図　平安京条坊図（■が三条西殿）

下條　信行（平安博物館助教授・調査主任）

植山　　茂（平安博物館助手）

定森　秀夫（平安博物館助手）

このほか，当博物館考古学第三研究室の鈴木まどか，川西宏幸，文献学研究室の熊谷寿，藤本孝一の各氏には随時考古学的，文献学的な援助を受けた。

調査補助，遺物整理には下記の諸氏が携わった。

渡辺　仁・津田美貴子・保坂雅美・藤友陽子・三谷洋子・中野真紀子・国木田明子・喜多清恵・吉田卓史・前川嘉章・西野紀子・永井　真・寺島桂

子・DAVID BICKNELL・市橋重喜・鈴木　信・寺内正明

また下記の諸氏には，調査や整理にあたって種々の御教示を頂いた。御芳名を記して感謝する次第である。

岩野見司・泉　拓良・井上喜久男・岡崎　敬・江崎　武・岡内三真・荻野繁春・亀井明徳・木村幾多郎・狐塚省三・黒崎　直・斉藤孝正・志佐惇彦・杉山信三・鈴田由起夫・平出紀男・村越　潔・森田　稔・横山浩一・吉永陽三

末尾ではあるが，調査にあたって多大の援助を与えられた千吉株式会社および窓口として調査の進行役を果された同社の吉川　浩氏に感謝する次第である。　（下條）

2. 第1～3次調査の概要

三条西殿跡，すなわち平安京左京三条三坊十二町(第2図参照)に対しては，前述のように平安博物館によって3次の発掘調査が実施されてきた。その第1次から第3次の調査概要は次のとおりである。

1) 第1次調査

調 査 地　京都市中京区烏丸通三条上ル場之町608－1番地

調査期間　昭和44年5月15日～6月2日

調査面積　約190㎡

調査担当　伊藤玄三・白石太一郎・近藤喬一

調査地は三条通と烏丸通の交差点西北角の駐車場予定地で，三条西殿の東南部にあたると推定された。調査はこの敷地内の西寄りと北寄りに幅3mの，南北トレンチ，東西トレンチを設定して行われた。その結果，南北トレンチ南端と，東西トレンチ東端で溝状遺構が検出され，それぞれ三条大路北側側溝，烏丸小路西側側溝と推定された。この他各時期の井戸や土壙なども検出され，12～15世紀を中心とする多量の遺物も出土した。この調査では平安京内でも部分的にも，平安～鎌倉・室町期の遺構が検出できることが判明し，また溝の検出によって平安京の条坊の一つの基準点となってきた。

2) 第2次調査

調 査 地　京都市中京区姉小路烏丸下ル場之町592番地

調査期間　昭和48年3月12日～24日

調査面積　約150㎡

調査担当　伊藤玄三・甲元真之

この調査は前回の調査地の北約80mで，三条西殿の東北部にあたると推定され，ビル建設の事前調査として実施された。その結果，平安時代末期から鎌倉，室町期の土壙や井戸，柱穴などが検出されたが，当初期待された烏丸小路西側側溝の延長は，敷地の制約などにより検出されるにはいたらなかった。

3) 第3次調査

調 査 地　京都市中京区両替町通姉小路下ル柿本町412番地

3. 第4次調査の経過

調査期間　昭和48年4月2日～14日

調査面積　約80㎡

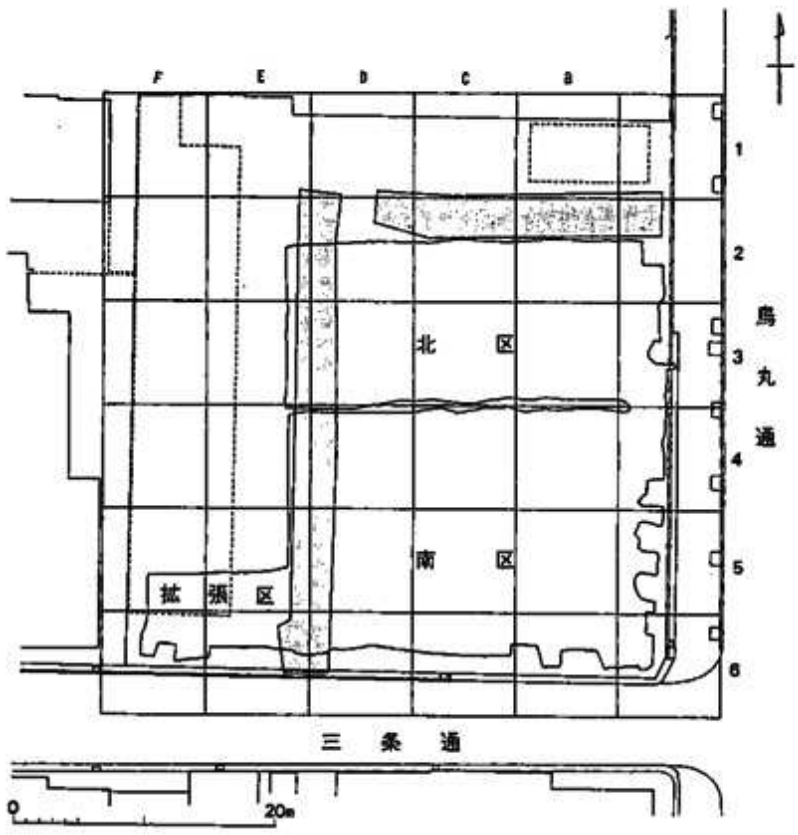
調査担当　上野佳也

調査地は姉小路に面する三条西殿北部と推定され，ビル建設の事前調査として実施された。調査の結果は，前回同様に各時期の井戸や土壙，柱穴状遺構などが検出されたが，直接平安時代の三条西殿に関するものは確認できなかった。なお，姉小路の南側側溝などの発見も期待されたが，少なくとも調査範囲内では認められなかった。（植山）

3. 第4次調査の経過

昭和56年2月19日から発掘現場に入り，最初にグリッドを設定した。このグリッドは，第1次調査のグリッドとは別に，任意に新しく8m四方に組み直したもので，北から1～6，東からA～Fとした(第3図)。

排土の関係上まず発掘区の南半分(南区)を対象に調査を開始した。現地表(標高約40.6m)よりほぼ0.6m下までを，南側から北側へ順次重機で排土していくのに合わせて，調査も南側から進めていった。そして，瓦溜・井戸・土壙などが検出されるごとに精査を行った。また，第1次調査南北トレンチの埋戻土を排土し，三条大路北側側溝の一部(溝Ⅲの上面。第1次調査で溝Ⅰcとされたもの)を露出させた。これを基にして，まずC～E-5・6の部分で石組の溝西Ⅰ(第1次調査で溝Ⅰaとされたもの)を検出した。一方，B5ムロによって破壊された溝の東側への続きとしてA5・6で石組の溝東Ⅰを検出した。第1次調査の時に，この下にもう一つの石組溝(第1次調査で溝Ⅰbとされたもの)があって，重複していることが判明していたので，上の溝Ⅰの精査後，その石組



第3図　発掘区とグリッド配置図（斜部は第1次調査のトレンチ）

をはずし，C～E－5・6とA・B－5・6において石組の溝Ⅱを検出した。ところで，これらの石組溝は室町時代後期以降の遺物しか出土せず，平安時代の溝を検出できずにいた。そこで，C5・6において南北に一部截ち割ったところ，素掘りの溝Ⅲとこれらの石組溝のすぐ北側で平安時代後期の素掘り溝Ⅳを検出した。また，烏丸小路西側側溝も検出できずにいたが，地山まで下げた時点で，発掘区東辺際のところで烏丸小路西側側溝と推定される溝を検出した。溝の他にこの南区では多数の井戸・土壙などが検出されたが，中・近世のものが著しく多かった(北区も同様)。

三条大路側溝・烏丸小路側溝を除いて，この南区を全掘した時点で，溝は精査のために残して，北半分(北区)の調査に入った。調査日数が残り少なくなっていたため，この北区では一気に地山まで重機で排土し，残った遺構を調査するという方法をとった。同時に，ビル解体が終わったあと，ビル跡の南側に三条大路側溝の西への延長が残存している可能性が十分考えられたため，E・F－5・6へ拡張して，北区の調査と溝の精査と併行して，この調査も行った。この拡張区では溝Ⅰと溝Ⅱの石組そのものは検出できなかったが，平安時代後期の溝Ⅳと溝Ⅲの延長を検出した。なお，ビル跡では一切の遺構が破壊されていた。烏丸小路側溝は，A3で東側たちあがりが地山ではなかったため，50cm幅で東側へ截ち割ってみたところ，その下で両側に木枠を設置した遺構を検出したが，これの性格は不明であった。

このように，三条大路と烏丸小路の側溝を検出することを主要な目的として調査を進めてきて，5月19日ほぼ3ケ月間にわたった発掘調査を総て終了した。　(定森)

Ⅱ．層位と包含層出土遺物

1. 層　　位

第4図に示した層位図は南区北壁の東西断面図である。

本遺跡は，中・近世，特に近世の各種の掘り込みが著しく，そのため整合的な層位図を得ることが困難であった。こうした状況はこの北壁においても例外ではなく，近世の瓦を主とする廃棄坑によって，元来の土層はほぼ破壊されつくしている。

しかしその中にあって，Ｂ４東端付近にわずかに20～50cm幅で，プライマリーな層序を残す層位断面を得ることができたので，これを基にして，以下層位の説明を行うこととする(第5図，図版第１上右)。

地表面は標高40.00m～40.60mで，高低があるが，低位の標高は重機操作時に起った二次的なもので，40.60mが現状の地表高である。これより，39.86m～39.90mまでの約80cmが盛土である。この盛土の下面から近世のおびただしい掘り込みがみられ，その大きさは，幅２m～５mに及ぶ巨大なもので，その深さは1.50m～2.30mにも及び，地山すれすれか，地山を削平するにまで至っている。この掘り込みが寸余の空白もおかず，断面に連続して並んでおり，これが新古の連続した堆積層を残さない主要な原因となっている。

盛土下層には拳大～人頭大の礫を含んだ砂層と明褐色粘質土があるが，いづれも近世層で，礫混砂層は人為的埋土である。

その下層は上面39.24m，下面38.85mの濃暗灰色土で，厚さ約40cmである。時期は特定できない。

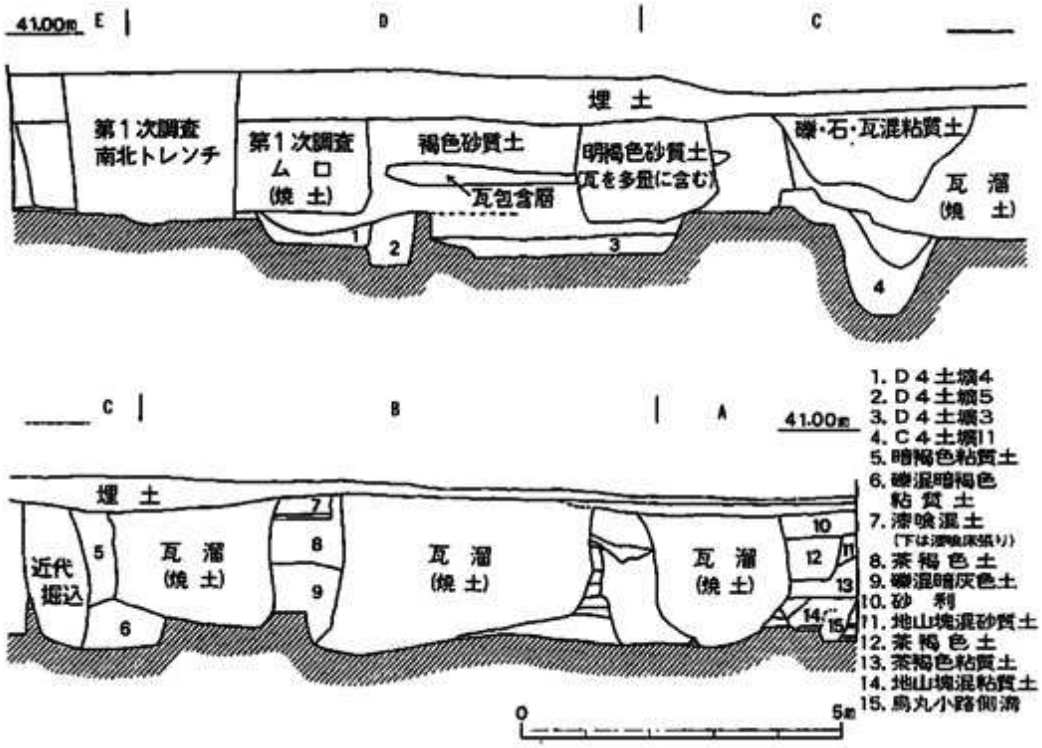
その下層の暗灰色土は，38.85m～38.64mの約20cmの層で，Ａ４，Ｂ４などに小ブロック層として検出されている。その時期はおおよそ13世紀代である。

この下層には厚さ約18cmの炭層を挟んで灰緑砂層がある。38.46m～38.30mの厚さ約15cmの層で，Ａ４において小ブロック層として確かめられている。それによれば，12世紀後半代のものである。

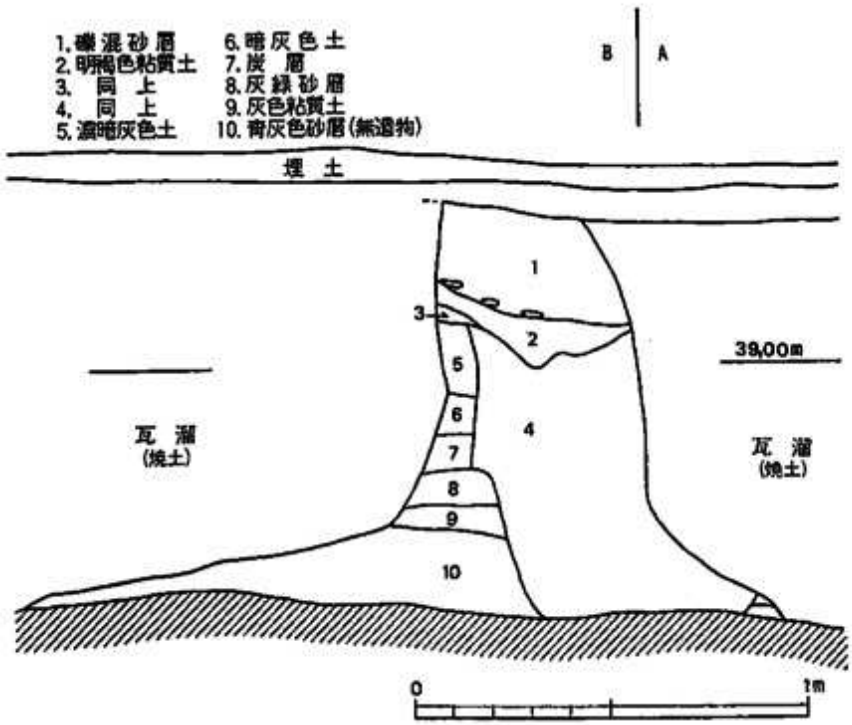
最下層は灰色粘質土で，38.30m～38.10mの20cm弱の層である。この層は，本断面図の西端のＤ４，Ｅ４においても，最下層にみられると共に，Ａ２・３やＢ２・３においても同様の結果を得ている。それらからの出土土器によれば，11世紀中頃から12世紀にかけてのものであるが，12世紀後半以降に下るものではない。

この層の下層に汚染された青灰色砂層があるが無遺物層である。

地山は黄褐色の粘質土層で，発掘区の全面に及んでいる。その標高は，本断面図の西端で38.45m，東端に近いＢ４で37.80mを測り，西から東に傾斜している。



第4図　南区北壁層位図



第5図　南区北壁層位部分図

2. 包含層出土遺物

地山の上に平安時代後期の遺物を包含する灰色粘質土がのるが，削平・掘り込みのためにほとんど残存しておらず，また残存していても部分的なものであった。A2・3，B2・3ではやや厚くこの包含層が残存していたが，やはり極めて部分的なものであった。一方，井戸4の北側と東側で，上から灰黒色土，灰緑砂1，暗灰色土(人工的に上下に分けて取り上げたので，1・2と分けて扱う)，灰緑砂2，地山の順の層位(第6図)が認められたが，これらも極めて部分的なものであった。層の厚さとしては，灰黒色土と暗灰色土は厚かったが，灰緑砂1・2は薄かった。

第6図
A4における層位模式図

1) 灰色粘質土出土遺物（第7・8図，図版第25)

〔土師器〕第7図1～7は『て』字状口縁の皿で，口径10～11.8cm，器高1.2～1.5cm，厚さ2～3mm。8は口径10cmの小形の皿。9～11は口径15～16.2cmの2段ナデ手法による大形の皿で，口縁端部がやや外反する。以上の皿は総て褐色系のものである。12は羽釜で，砂粒を非常に多く含む。13は甕で，口縁端部をつまみあげる。14は復原口径15cmの鉢で，口縁端部をつまみあげる。これに類似したものが左京内膳町SD345上層で出土している[1]が，それより胴部の外傾度が強い。

〔黒色土器〕15は甕で，内面ハケ調整で，内面の炭素吸着の方が外面より著しい。16・17は黒色土器B類の椀で，内外面ともヘラミガキ。口縁部内面に1条の凹線が廻る。器高指数は16が34.2，17が推定で32.5を示す。

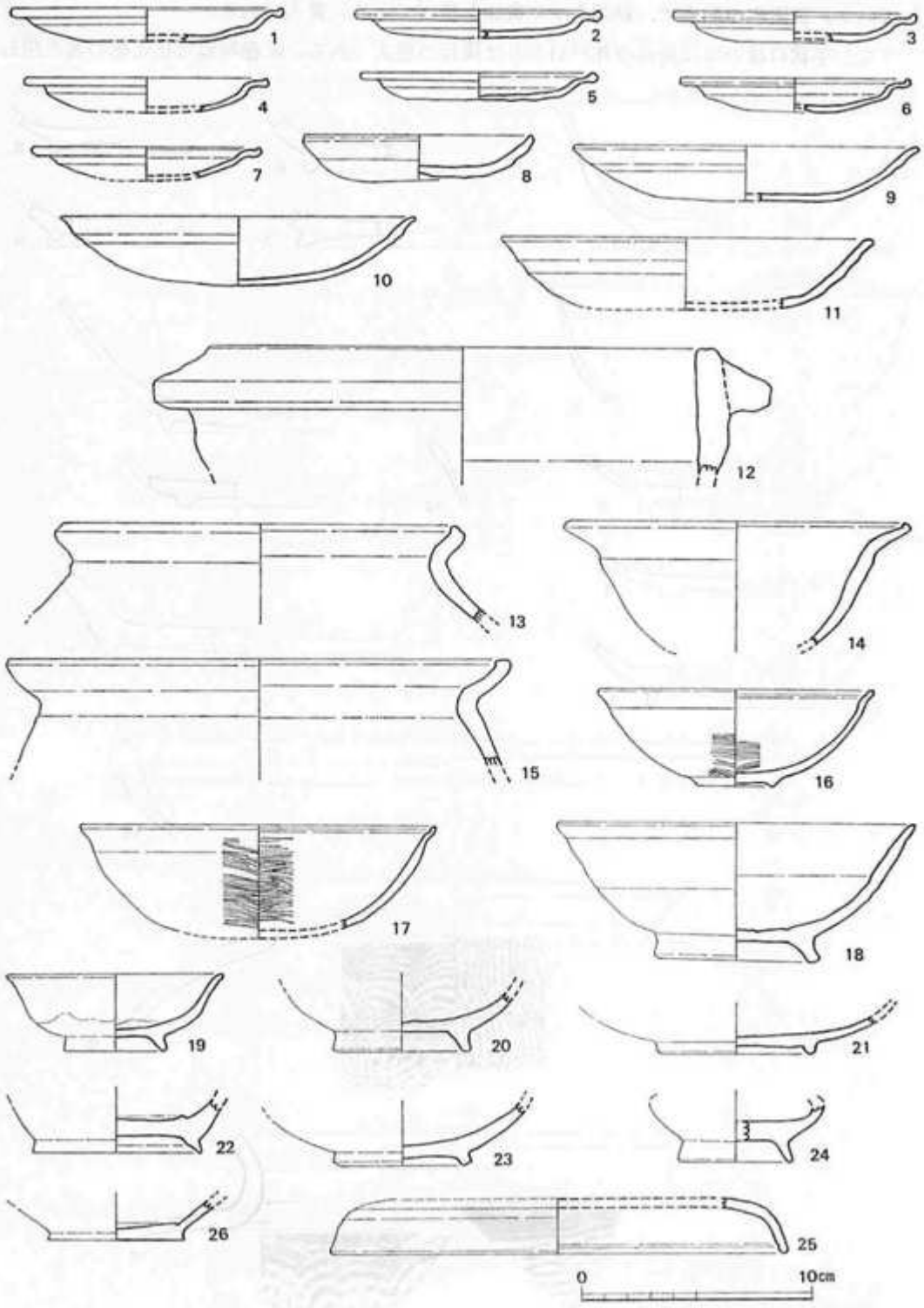
〔白色土器〕18は所謂白色土器で，口径15.6cm，器高6cm，高台が外方へ張り出し，高台内底部には糸切り痕が残る。

〔灰釉陶器〕19は口径9.2cm，器高3.3cmの小椀で，胎土は淡灰褐色を呈し，灰釉はつけ掛けである。高台内底部には糸切り痕が残る。東濃系である。20・21・23は椀底部で，東濃系である。22は瓶類の底部。24は耳皿で，胎土は砂粒を含み灰褐色を呈する。高台内底部には糸切り痕が残る。25は復原口径20cmで，仏花器の蓋になると思われる。

〔緑釉陶器〕第8図1は口径15.2cm，器高6.5cmの椀で，褐色軟質の焼きで，釉は濃緑色を呈する。高台内底部に釉はかかっていない。近江系である。2はやや硬質の焼きで，釉は淡黄緑色である。3は灰褐色のやや軟質の焼きで，釉は黄緑色を呈する。鳴海系である。4～9のうち6・8は褐色軟質の焼きで，近江系である。

〔須恵器〕13は杯で，断面セピア色を呈す。14は鉢で，精良な胎土で暗青灰色を呈す。15・16は甕で，15は外面縦の平行タタキ，16は横の平行タタキで，両者とも内面青海波である。第7図26は灰白色の胎土で，底部は糸切り。

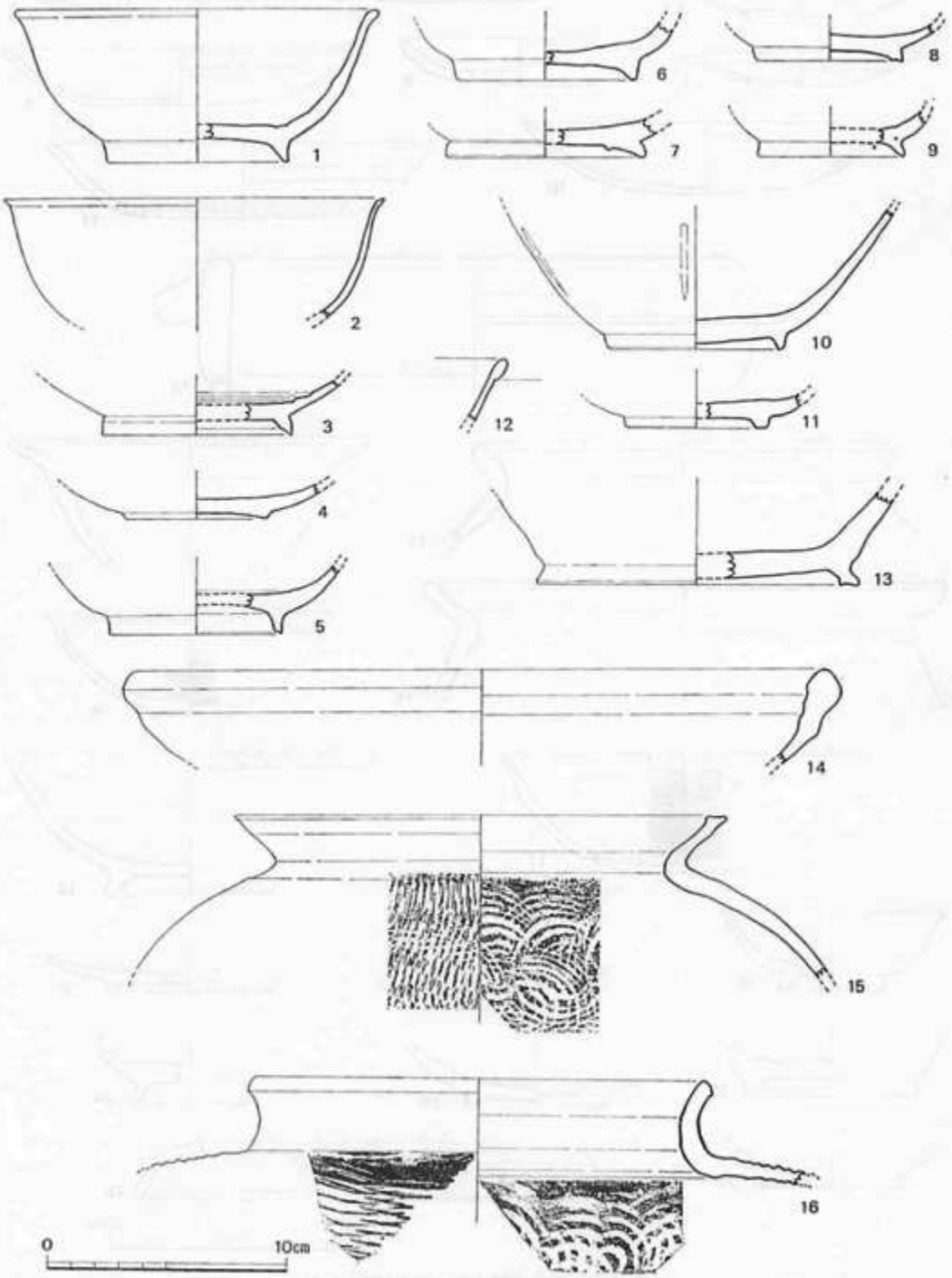
〔中国陶磁〕越州窯青磁(第8図10・11)は，いずれも椀で，丸味をもった体部に，直径7.5cmの輪高台がつく。10の外面には等間隔に5本の櫛沈線が施されている。胎土は淡茶褐色で，釉調も緑色というより淡茶褐色に近い。高台内面も含んで内外全面に施釉され，貫入がみられ



第7図　灰色粘質土出土遺物実測図 (1)

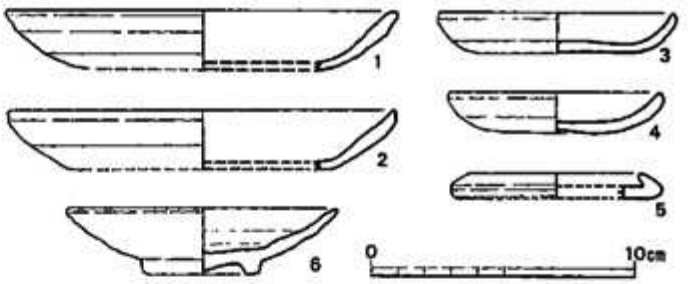
る。内底見込みと外底畳付には目跡が残っている。11も同系のもので全面施釉，貫入，目跡など共通しているが，釉調はやや緑色に近い。白磁(12)は，椀口縁部で平坦で太めの玉縁が付されている。黄灰色の胎土で，釉調もやや黄味を帯びている。貫入がある。

『て』字状口縁の皿は後述の井戸34よりは後行の型式である。灰釉陶器は仏花器の蓋と思わ



第8図　灰色粘質土出土遺物実測図 (2)

れるものが古いものの，他はほぼ11世紀中頃～後半でとらえておくことができるものである。したがって，ほぼ11世紀中頃から後半にかけてのものと考えられる。



第9図　灰緑砂2出土遺物実測図

2）灰緑砂2出土遺物（第9図，図版第25）

出土遺物は少なく，細片が多い。

〔土師器〕1・2は口径15cm，器高2.3cmの大形の皿で，3・4は口径8.2～9cm，器高1.6cmの小形の皿である。5は口縁折り曲げの下皿。以上の皿は総て褐色系である。

〔中国陶磁〕白磁(6)は，有高台の皿で，内面に見込みをとりまいた欠きとりと一条の圏線がみられる。胎土は灰色で，釉は濁黄緑色である。直径10cm，高さ2.7cm，高台径4.4cm，体中位にまで釉がみられる。

この上にのっている暗灰色土2の出土遺物との関連で12世紀後葉頃を考えておきたい。

3）暗灰色土2出土遺物（第10図，図版第26）

〔土師器〕1～19は褐色系，20～29は白色系の皿である。1は復原口径16cm，器高1.9cm，2は復原口径14cm，器高1.6cm，両者とも薄手の大形の皿で，口縁端部をつまみあげている。3は復原口径13.9cm，4～8は口径12cm前後，器高2cm前後で，これらも口縁端部をつまみあげているものが多い。9～15は口径8.2～9.3cm，器高1.5cm前後の小形の皿。16～19は口径8.7～9.7cm，器高1.2～1.5cmの口縁折り曲げの下皿。20～23は白色系の椀タイプの皿で，20は復原口径13.8cm，器高3.2cm，21～23は口径11～12cm，器高2.7cmで，厚味のあるものである。21は底部から口縁部への立ち上がりが強い。24～28は白色系の口縁折り曲げの下皿で，24・25は口径6.6cm，26・27は口径5.8cm，28は口径5.3cm。これのみをみると，非常に僅少な口径差ではあるが，大・中・小の意識が働いていたとも考えられる。29は口径8.3cm，器高1.6cmで，底部と口縁部との間が薄くなっていて，底部は糸切りである。これのみ異質な白色系の皿である。

〔瓦器〕30・31は椀で，粗いヘラミガキが内面のみに施され，外面下方は指オサエである。30は底部内面にも暗文を施す。32は小皿で，螺旋暗文を施す。33・34は羽釜で，33は内面ハケ調整，外面指オサエである。

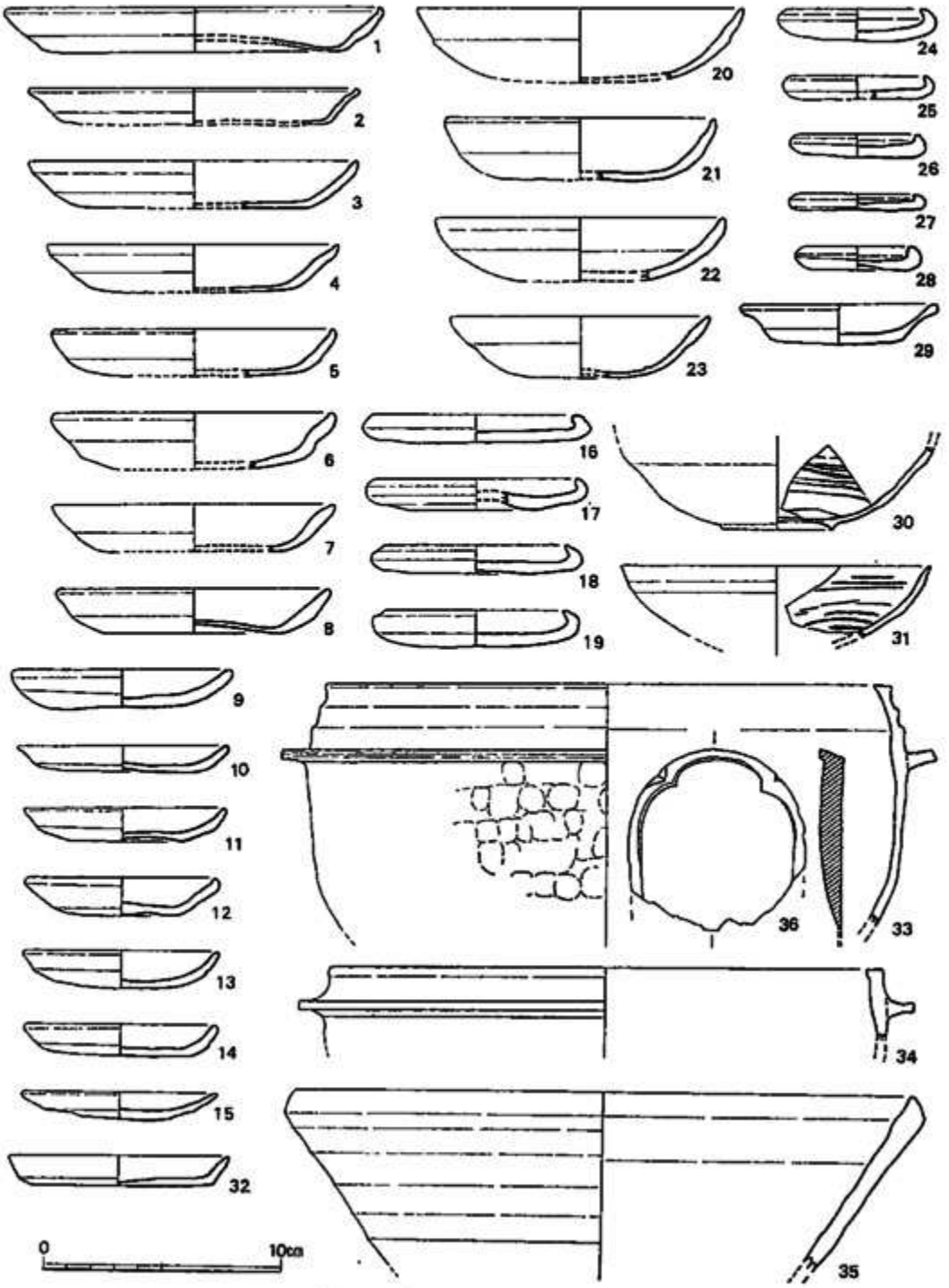
〔須恵器〕35は復原口径27cmの大平鉢で，東播系のものである。

〔石製品〕36は四葉硯と思われる陸部の破片である。

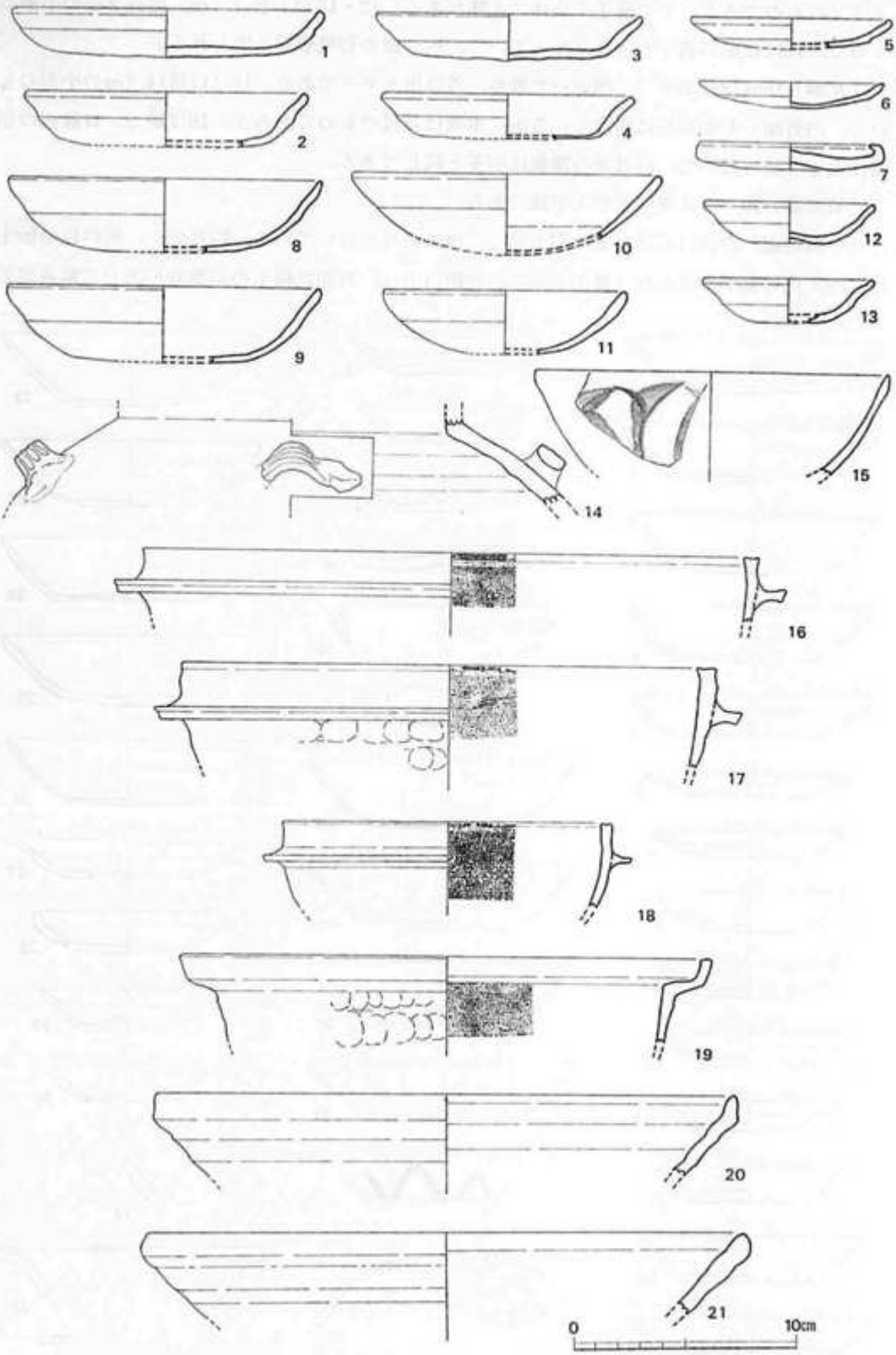
瓦器椀は，白石編年では，30がⅡ－6（12世紀後葉），31がⅡ－7（12世紀末～13世紀初）に近く[2]，橋本編年ではⅢ期(13世紀代)[3]のものと思われること，35の須恵器大平鉢は東播系の編年では12世紀末と思われることから，12世紀末～13世紀初頃の年代を考えておきたい。

4）暗灰色土1出土遺物（第11図，図版第26）

〔土師器〕1～7は褐色系，8～13は白色系の皿である。1は口径14cm，器高2.2cm，2～4は口径11.4～12.6cm，器高2.2cm前後，5・6は口径8.2～9cm，器高1.2cm前後で，3・4は底部からやや外反気味に口縁部に至る。以上は総て1段ナデ手法である。7は口縁折り曲げの下皿。8～10は復原口径14cm前後，器高3.4cm前後，11は口径11cm，器高2.9cmの白色系の椀



第10図　暗灰色土2出土遺物実測図



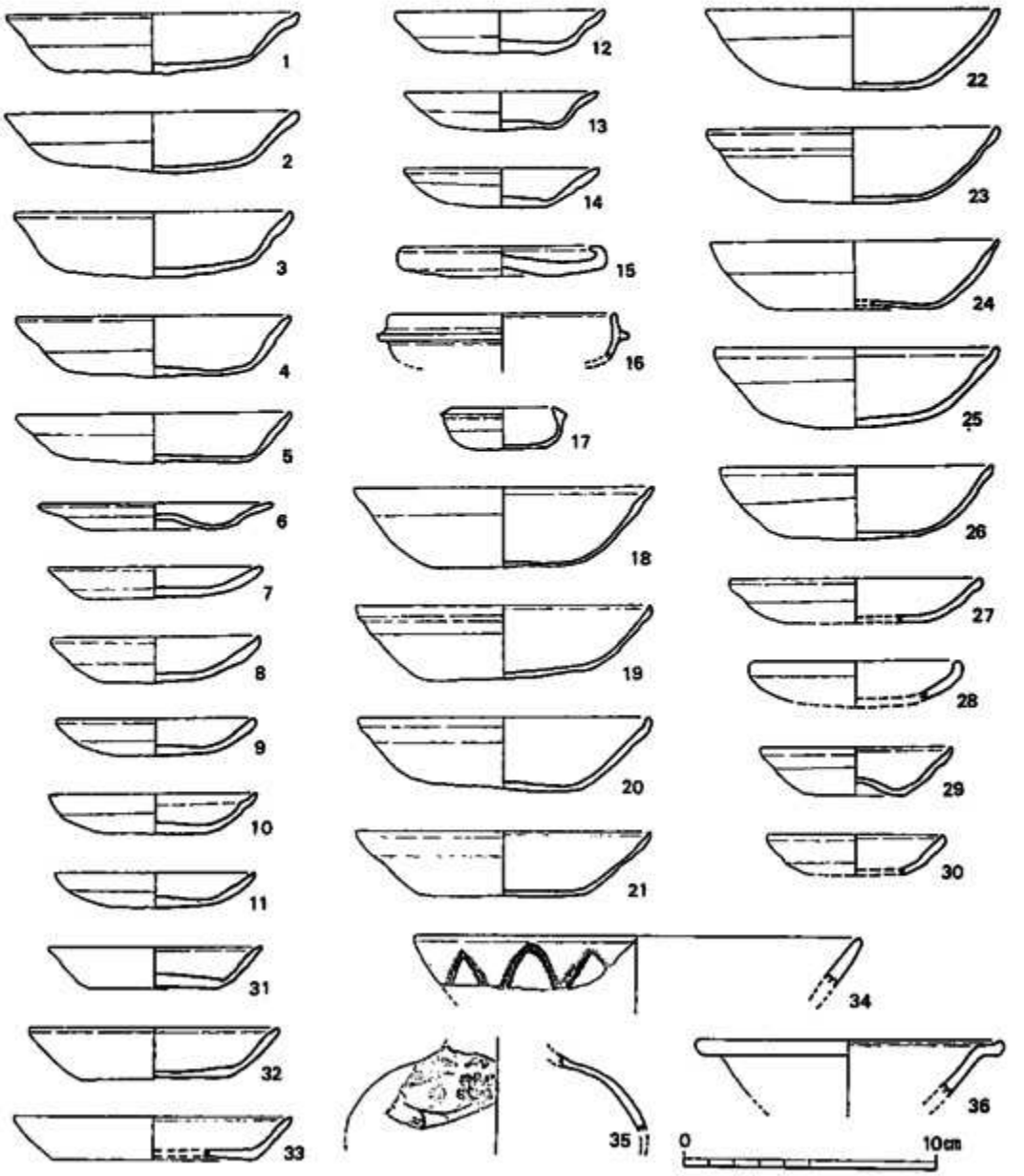
第11図　暗灰色土１出土遺物実測図

タイプのものであり，やや薄手で全体に丸味がある。12・13は口径7.7cm，器高2cmの小形のもので，12は底部が若干上げ底になっていて，ヘソ皿の初現形態と思われる。

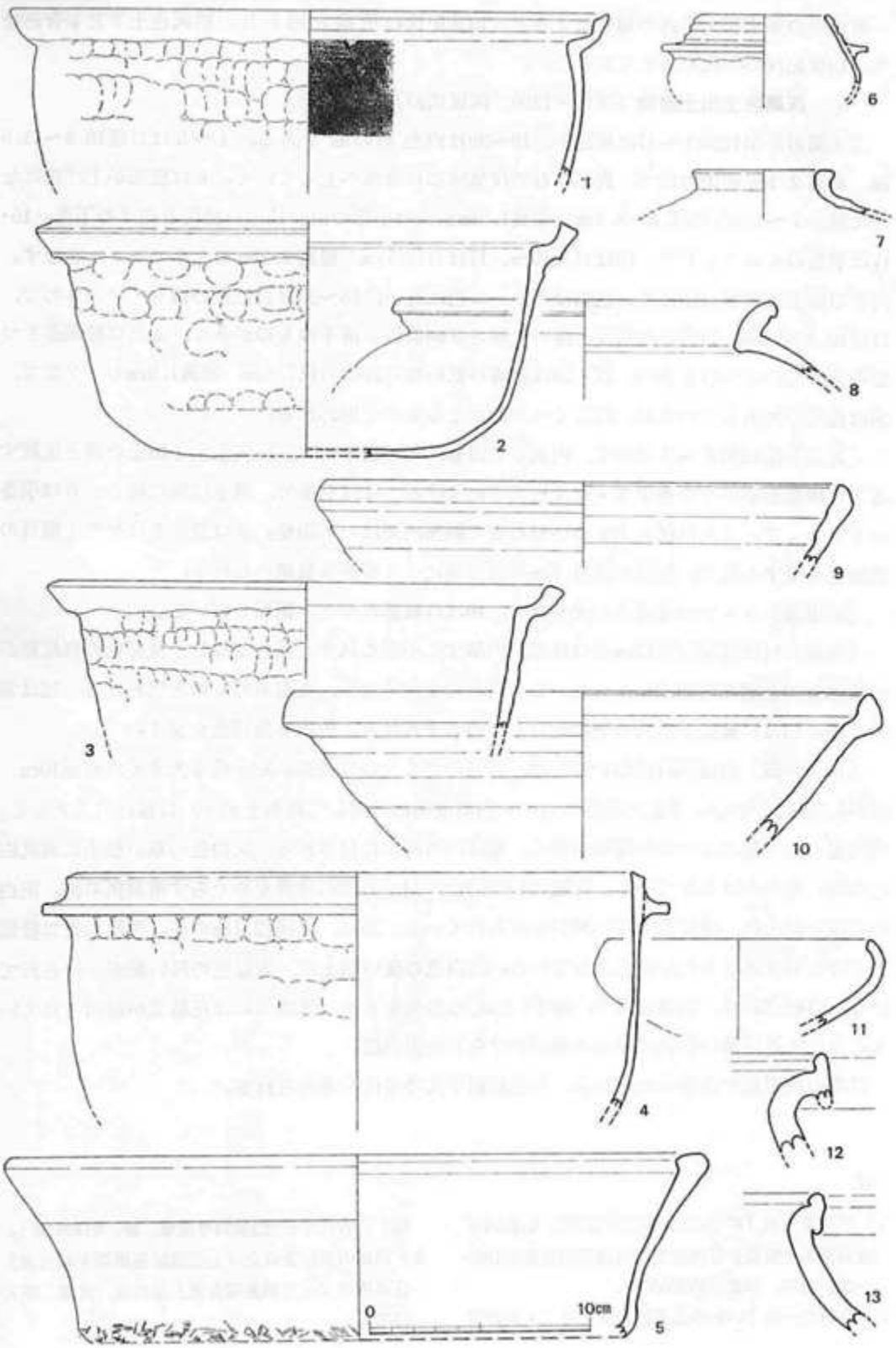
〔瓦器〕16～18は羽釜で，内面ハケ調整，外面指オサエである。18は口径14.8cmの小形のもので，内外面とも赤褐色に焼けているが，本来は瓦質のものであろう。19は鍋で，口縁部の屈曲は大きく整っていて，内外面の調整は羽釜と同じである。

〔須恵器〕20・21は東播系の大平鉢である。

〔中国陶磁〕白磁(14)は，壺の胴上部で，横位の耳が付いている。四耳壺か。灰白色の胎土に，淡灰色の釉がかけられ，貫入がある。青磁(15)は，外面に幅広の鎬蓮弁がめぐる竜泉窯系



第12図　灰黒色土出土遺物実測図 (1)



第13図　灰黒色土出土遺物実測図 (2)

の椀。灰色の胎土に灰緑色の厚い釉がかけられている。直径14.5cm。

東播系の須恵器大平鉢の編年によると，13世紀代の所産と思われ，暗灰色土２とも合わせて，13世紀代の年代を考えておきたい。

5)　灰黒色土出土遺物（第12・13図，図版第27）

〔土師器〕第12図１～17は褐色系，18～30は白色系の皿である。１～５は口径10.8～11.6cm，器高2.4cm前後の皿で，底部から外反気味に口縁部へ上っていく。６は底部が上げ底になった皿。７～14は口径7.8～8.4cm，器高1.5cm前後の小形の皿。15は口縁折り曲げの下皿。16・17は羽釜のミニチュアで，16は口径10cm，17は口径５cm，器高2.2cmの大小のセットをなす。両者の胎土は非常に精良で，色調はクリーム色に近い。18～26は白色系の椀タイプのもので，口径10.8～12cm，器高３cm前後と深い。厚さ２mm前後の薄手のものが多く，また口縁端部をつまみあげているものも多い。27・28は器高の低い皿。29は口径7.6cm，器高1.9cmのヘソ皿で，30は底部が欠失しているが，同じくヘソ皿になるものと思われる。

〔瓦器〕第13図１～３は鍋で，内面ハケ調整，外面指オサエ。暗灰色土１出土の鍋と比較すると口縁部形態がやや整正さ・シャープさに欠ける。４は羽釜で，調整は鍋に同じ。６は羽釜のミニチュア。７は口径6.4cmの小形の壺で胴部内面はハケ調整。８は甕。５はやや土師質の暗褐色を呈する盤で，復原口径31.8cm。底部端にモミ痕が多数認められる。

〔須恵器〕９・10は東播系の大平鉢で，10は口縁部がかなり肥厚している。

〔陶器〕11は復原口径13cmの口縁部が内傾する小形の鉢で，灰色を呈し，淡緑色の自然釉が口縁部外面と胴部内面にかかっている。白色粒を多く含み，東海系のものと思われる。12は常滑の甕。13は口縁部が常滑の甕に近いものの若干異なり，色調も黒褐色を呈す。

〔中国陶磁〕白磁(第12図31～33)は，同様のつくりの口禿皿。33が最も大きく，直径10cm，31が8.5cmで小さい。平底の底部からやや内湾気味に外向して起ち上がり，口縁は口禿となる。内面起ち上り部には一条の圏線が廻る。釉は内外両面に付される。灰白色の粗い胎土に濁乳白色の厚い釉がかけられている。青磁(34・36)は，34が外面に蓮弁をめぐらす竜泉窯系椀。灰白色の硬い胎土に，淡緑色の厚い釉がかけられている。36は，直径12.1cmの杯。外反した口縁端を上方に引きあげるのを特色としている。灰白色の硬い胎土に，青緑色の厚い釉がかけられている。白磁(35)は，瓶の肩部で，薄手(３mm)の器肉をもつ。外表面には花鳥文が陽出されている。白色に近い薄い器肉に厚めの釉がかけられた青白磁。

口禿の白磁皿や土師皿などから，14世紀前半代の年代が考えられる。

註

1）平良泰久他『平安京跡（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要』（『埋蔵文化財発掘調査概報1980－３』所収，京都，昭和55年）。

2）白石太一郎『いわゆる瓦器に関する二・三の問題』（『古代学研究』第54号掲載，堺，昭和44年）。

3）高槻市教育委員会『上牧遺跡発掘調査報告書』（『高槻市文化財調査報告書』第13冊，高槻，昭和55年）。

Ⅲ. 遺構と出土遺物

1. 遺構の概要

1) 平安時代の遺構（第14図）

平安時代の遺構は極めて少なかった。発掘区南辺で検出された平安時代後期の三条大路北側側溝である素掘り溝Ⅳと，それよりやや古い井戸34が主な遺構である。その他には，Ａ３土壙２・Ｃ４土壙11・Ｄ５土壙５などの土壙が若干散在するのみであった。Ｃ４土壙11の南側では直径20～30cmの円形ピットを中心とする小土壙群が検出されたが，そのほとんどは出土遺物が少量でまた細片が多かった。これらのピットがどのような性格で，またどのような相互関連を有するのかは不明である。以上の遺構は，井戸34の上限が10世紀後葉に上りうる最も古いもので，他は総て平安時代後期に属するものである。

2) 鎌倉～安土・桃山時代の遺構（第15図）

遺構の大半は土壙であり，複雑な切り合いなどを呈し，特にＣ５を中心とした部分では遺構が錯綜としていた。主要な遺構は三条大路北側側溝である重複した２本の石組溝Ⅰ・Ⅱと素掘り溝Ⅲで，室町時代後期～江戸時代初期にわたるものである（江戸時代初期にかかる石組溝Ⅰは，第16図に載せた）。また，鎌倉時代後半と推定される烏丸小路西側側溝も検出された。他に，井戸20基，石組遺構４基，柱穴列，建物址と考えられる遺構も若干検出された。

3) 江戸時代以降の遺構（第16図）

石組溝Ⅰが江戸時代初期にかかっている。他には井戸29基（漆喰井戸や明治以降の井戸を含む），瓦溜13ヶ所，ムロ２基などが検出された。

2. 三条大路北側側溝と出土遺物

1) 遺構

三条大路北側側溝と推定される溝はおおまかには４条検出された。すなわち，側石に大きな花崗岩質の石を用いた石組溝があり，その下層に同じように大きな側石を用いた溝がある。さらにその下層は素掘りの溝となっている。この重複する溝のやや北にも素掘りの溝が検出された。以下これを溝Ⅰ，溝Ⅱ，溝Ⅲ，溝Ⅳと仮称する。ただし，溝Ⅰ，溝Ⅱの石組溝はＢ６付近が大きく攪乱を受け，直接連続するものではなく，またその様相もやや異なっているため東西をわけ，溝東Ⅰ，溝西Ⅰのように表示する。

（1） 溝東Ⅰ（付図第１，図版第３）

この溝は西側を井戸32・33で断ち切られており，東側はこの調査地の敷地の外にのびていて，確認できたのは約2.7mであった。上端幅約40cm，下端幅約25cm，深さは良好な部分で約45cmである。両側の石組は，大部分花崗岩質の幅50～60cm程度の石を，長手方向を東西に並べ，ほぼ面をあわせて積んだもので，北側では石仏（第49図，図版第38）も裏がえしにして組み

込まれていた。南側の東端にも格狭間状の文様を刻んだ台石が用いられている。石組の裏込め石は人頭大から拳大の河原石である。また東端ではこの溝に蓋石状に扁平な石をのせているが，その先端は現烏丸通の歩道下であるため調査できなかった。溝底面の傾斜はゆるやかで，東端で標高38.6m，西端で38.55mほどである。溝内の堆積は最下部に粘質土があり，その上は小石を含む砂質土で，上部は砂層となっている。

（2） 溝東Ⅱ（付図第1，図版第4）

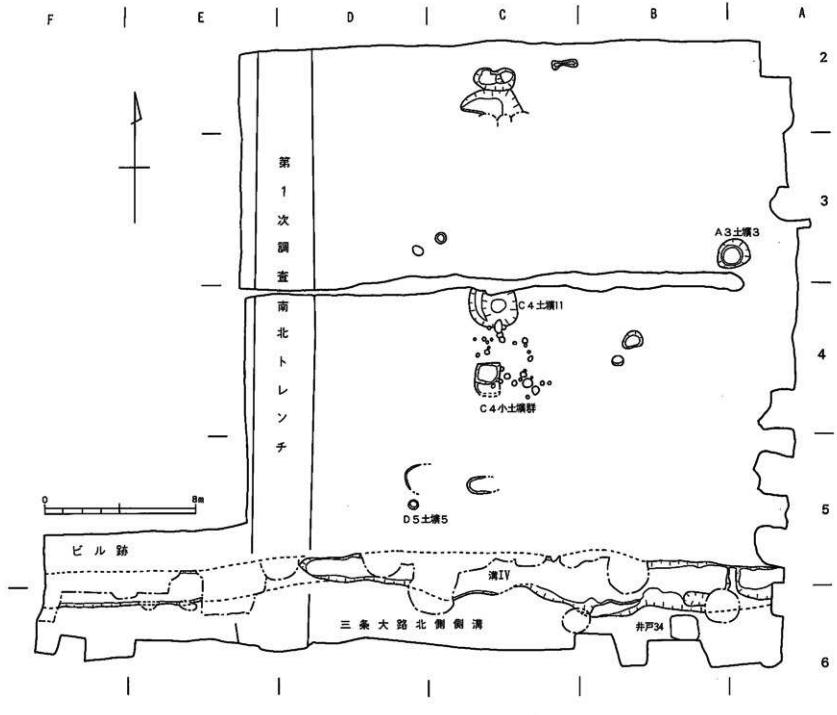
この溝は，溝東Ⅰの直下で検出されたもので，側石は溝東Ⅰよりやや小さいものを用いている。この溝も井戸32で断ち切られているが，北側の石組はかろうじて残っており，約4mが確認され，石組は失われているが，さらに西へ1m程度のびていた。北側の石組は本来のものと見られ，面を揃えているが，南側の石組はやや不揃いで，改築されたものと見られる。この段階での溝は上端幅で約50cm，下端幅で約35cm，深さ約50cmであった。底面の標高は東端で約38.2m，井戸32あたりで38.1m程度である。南側の石組は肩部から1～2段までしかなく，その下は本来の溝内堆積土と見られる水平に薄い層をなす砂質土になっている。本来の溝の掘方は北側の石の面から南へ125cmのところで立ち上っており，この前面に北側と同じ石組がなされるならば，幅は80～90cmであったと推定される。南側石組の裏込め埋土には焼土を含んでいるが遺物は乏しく，改築の時期は明らかではない。

（3） 溝西Ⅰ（付図第1，図版第6・7）

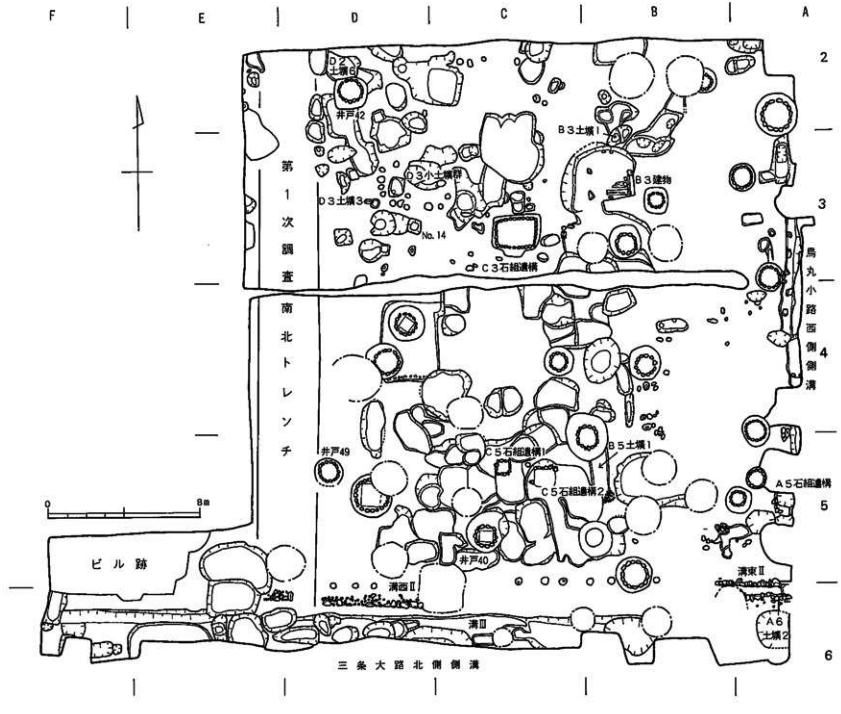
第1次調査の溝Ⅰaに相当するもので，途中瓦溜等で寸断されているが，第1次調査分とあわせると約15.5mが検出された。西端は第1次調査時に検出された部分までで，それより西は撹乱等により，石組は存していない。東部はC6付近で幅が狭くなり，北方へ湾曲している。D6での石組は，北側では主として花崗岩質の幅約50cm，奥行30～50cm程度のやや扁平な石を用い，南側はこれよりやや小さな石を用いて面を揃えたものである。裏込めには拳大の石を多量につめている。溝の幅は約70cmである。溝底にはほぼ全面に鉄サビ分が認められる。溝内の堆積は粘質土と砂質土が交互に層をなすところが多いが，南半と北半で堆積の状態が異なる部分もあり，常に幅一面の水があったものではなく，溝の中を細流が蛇行していたことも多かったように思われる。この部分の溝底の標高は約38.2mである。C6とD6の境付近は撹乱を受け石組は存していないが，溝底の鉄サビ分は連続している。C6では北側の石組は遺存しているが，南側は大きな石が失われておりあまり明確ではない。裏込め石の状態から幅は35～40cmと推定される。溝が狭まるのは溝底の鉄サビ分から，ほぼCとDの境あたりと見られる。C6西半でこの溝は北よりに湾曲して行く。幅もさらに狭まり，約25cmほどになっている。ここでの溝底の標高は約38.35mである。この部分では溝の北側に大小の河原石が多数分布しており，中には明らかに並べられたものもあるがその性格は不明である。

（4） 溝西Ⅱ（付図第1，第17・18図，図版第8）

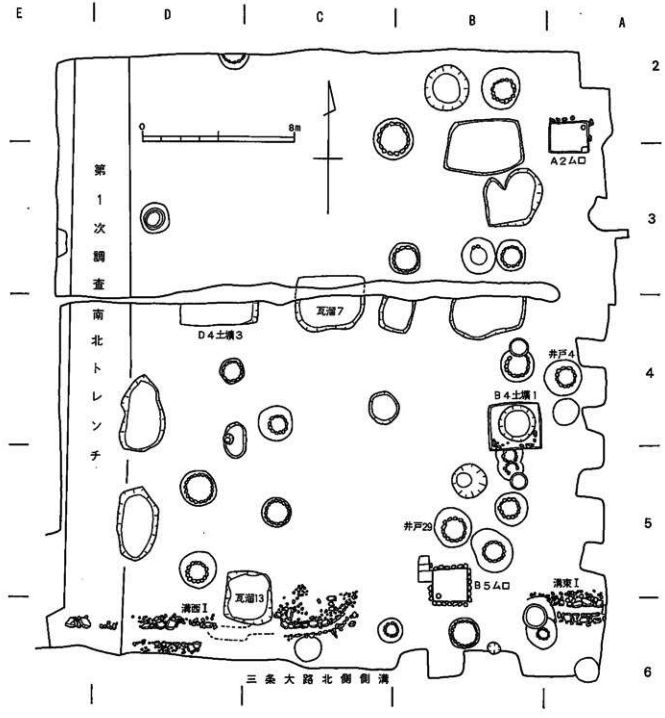
第1次調査の溝Ⅰbに相当し，溝西Ⅰの直下で検出された。北側の石組は主に花崗岩質で，幅40～60cmの大きな石を用いており，大きなものでは幅約80cmの石も組み込まれている。この溝の南端は明瞭ではない。トレンチ南壁付近に比較的大きな石が分布しており，レベル的には



第14図　平安時代遺構図



第15図　鎌倉～安土桃山時代遺構図



第16図　江戸時代以降遺構図

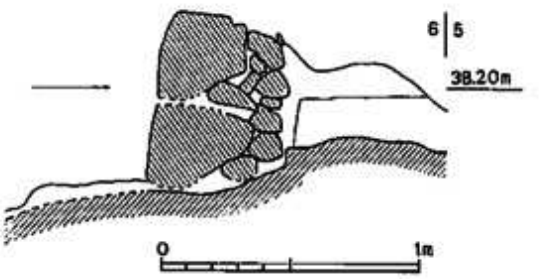
少し高くなるが３個並列した石もあり，これが南端であるならば溝の幅は1.5～1.8mになる。西端は溝西Ⅰと同様，第１次調査時のところまで石組が遺存しているが，それより西には存していない。東部はＣ６半ばまで続くが，溝西Ⅰの石組により破壊されたものか明瞭ではない。溝内の埋土は暗灰黒色の粘質土で，大量に拳大程度の石を含んでいる。溝底の標高は約37.8mである。溝底は石組寄りが地山になっており，地山は石組から南へ40cmほどのところから落ち込み，溝Ⅲの肩となっている。

（５） 溝Ⅲ（付図第１，図版第10）

トレンチ南壁にそって検出された素掘りの溝である。西端はＦ６まで続き，さらに攪地外に延びている。溝の東端はＢ６の井戸35のあたりまでで，ここで終るものと見られる。北または南に続くものかどうかはわからない。南側は検出されなかったが，北側と同じであれば溝の断面形は逆台形を呈するものであろう。溝底には多数の不整形で深さも異なる掘り込みがあり，かなり複雑な様相を呈し一様ではない。溝底の高い部分の標高は西端付近で37.5m，Ｄ６付近で37.75m ほどである。Ｃ６からＢ６にかけて深くなっており底の標高は 37.25m である。この底の部分には北壁にそって数個の石が認められたが，本来のものかは不明である。溝内の埋土は暗青灰色の粘質土で，木球などの木製品を含んでいた。

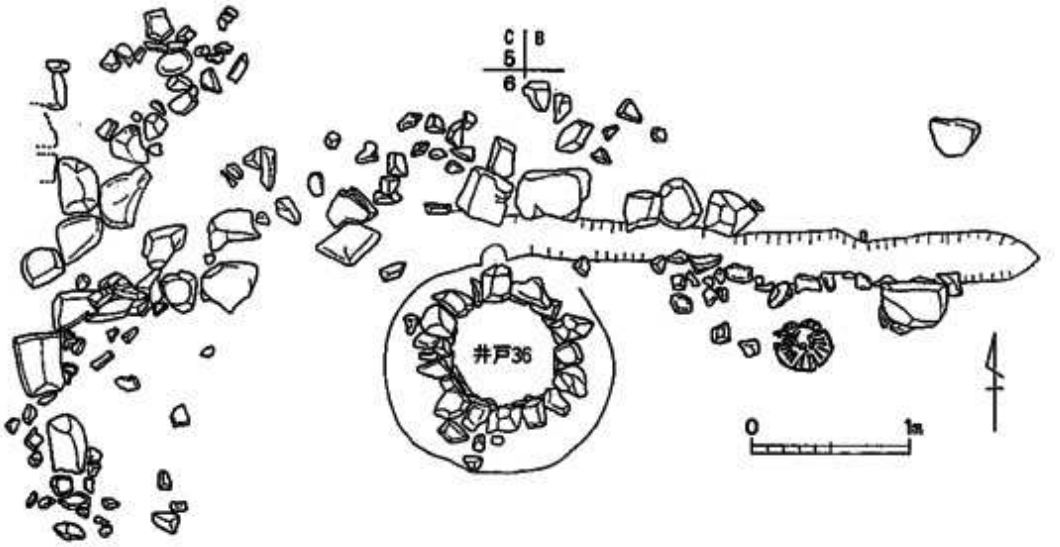
（６） 溝Ⅳ（付図第１，図版第11・12）

重複する溝Ⅰ～Ⅲのやや北側で検出された素掘りの溝で，地山に掘り込まれたものである。第１次調査の溝Ⅱに相当する。かなり寸断されているが，ほぼグリッドの５と６の境を溝の中心として，トレンチの東端から西端まで約



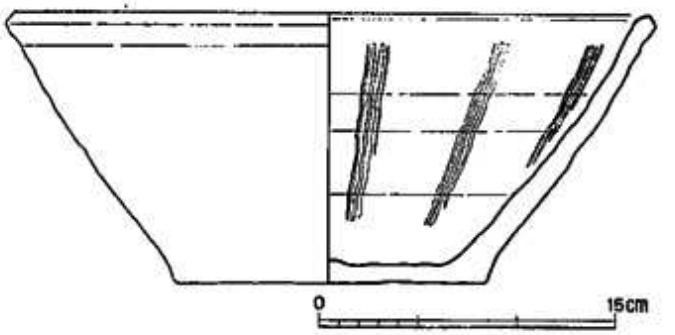
第18図　三条大路側溝西Ⅱ北側石組断面図

第17図　三条大路側溝西Ⅱ北側石組側面図



第19図　B・C6付近遺構図

35mにわたって検出された。上部はすでに削平され，溝底部分がかろうじて残ったものである。本来の溝の断面形はU字形を呈するものかと思われる。下端の幅は一定せず最も広い部分で約2mである。この溝内の埋土には11世紀中頃から12世紀にかけての遺物のみを含んでおり，この溝が平安時代の三条大路北側側溝であったと推定される。溝底の標高はE5で約37.75m，C5で37.65m，A5で37.65mを測る。この数字では西がやや高くなるが，溝底はほぼ水平であり，水がどちらに流れていたかは判断できない。



第20図　B6出土擂鉢実測図

（7） 溝関連遺構（第19図）

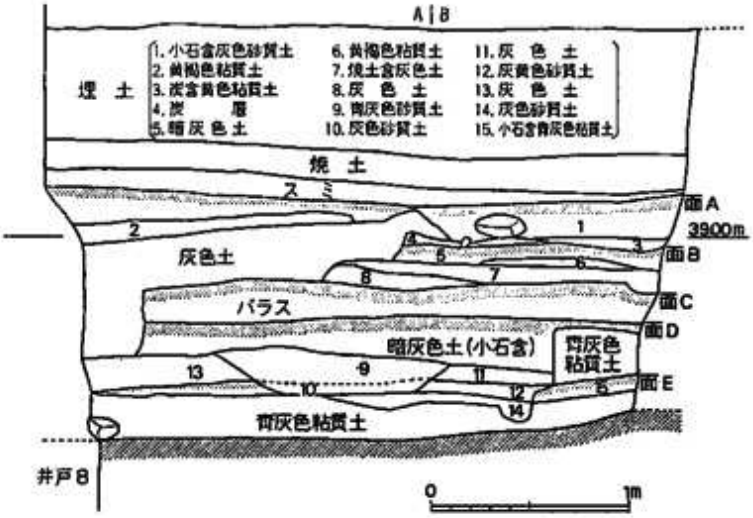
以上の他，B6では井戸35と36の北側に幅20～30cmで砂が帯状に分布していた。この両側には石の並ぶ部分もあり，石組の溝であったと見られる。底面の標高は約38mである。溝の西の延長線上には，溝西Iの湾曲する部分に取りつくような石組があり，ある時点ではこれに流れ込んでいたものと思われる。なお，この溝の南側から擂鉢(第20図)が出土したので，ここで紹介しておく。口径32.5cm，器高13.7cm，白色軟質の焼きで，大きな長石粒を多く含む。内面の条線は4本単位である。

またA5からB5にかけて，溝Ⅳの北の肩をほぼ中心とする幅約90cmの浅い溝が検出された。この溝は溝Ⅳを切って掘り込まれたもので，溝底の標高は約37.9mである。

（8） 三条大路道路（図版第5上）

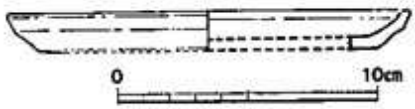
上述の重複する溝に関連して，調査区東南角のA6からB6にかけて路面と見られる遺構が

検出され，南壁の断面観察の結果，5枚の面(A～E)が識別できた(第21図)。いずれも小石を多く含む層があり，その上面がかなり堅くしまっているものである。



第21図 A・B6南壁層位図

面Aの高さは39.2mほどであり，この上面には厚さ約10cmの炭を多量に含む層があり，さらにその上に厚さ約15cmの焼土を含む層があった。この焼土や炭は元治の大火によるものと見られ，面Aは江戸時代末期頃の路面と見なされる。



第22図 A・B6南壁面E出土土師器実測図

面Bはあまり小石を含んでいないが堅くしまったもので，上面に薄い炭を含む層をのせている。途中撹乱を受け，直接の確認はできなかったがこの路面は溝東Ⅰに対応するものと思われる。路面の高さは38.95mほどである。

面Cは多量に小石を含むバラス層の上面で，高さは38.8mほどである。面Dはこのバラス層の下層で，小石を含む暗灰色土の上面にあたる。高さは38.6mほどである。この2面は溝東Ⅱの南まで続き，この溝に対応するものかと思われる。

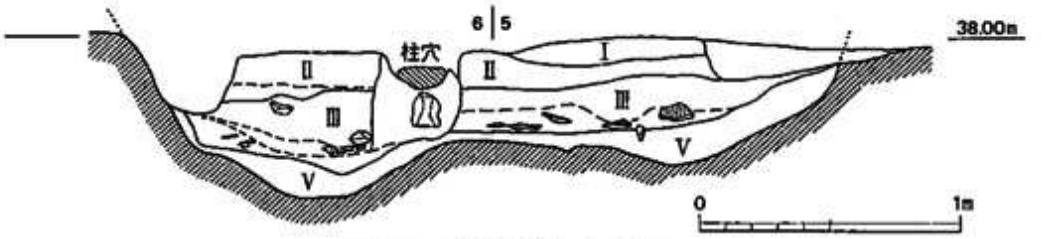
面Eは小石を含む青灰色土層の上面で，高さは38.25mほどである。この面Eから面Cまでに含まれていた遺物は12世紀代の瓦を中心としたもので，面Eは平安時代の三条大路の路面と推定される。なお，この面E上で断面にかかった土師器片を採集した。第22図は復原口径15.4cm，器高1.5cm，褐色系の皿で，わりに堅緻な焼きである。2段ナデ手法で，口縁部がややたち上がる。12世紀中頃の時期が考えられ，前述の瓦の年代とも合う。

2) 遺物

この三条大路北側側溝及び三条大路道路上から多種多量の遺物が出土した。ここでは，遺構とは反対の順で各遺構出土遺物を記すことにするが，溝Ⅲに関しては埋土の暗青灰色粘質土の上に暗灰茶褐色粘質土が薄くのっていて，分層してとりあげたので，前者を溝ⅢB，後者を溝ⅢAとして扱う。なお，三条大路側溝出土古銭は第1表・第70図にまとめた。

(1) 溝Ⅳ出土遺物

B6の溝南側たちあがり中のベース直上出土遺物，B5・6の断面観察用あぜの東側で分層してとりあげた遺物，溝内一括でとりあげた遺物の順に記す。分層可能なところでは5層に分けることができた(第23図)。Ⅰ層はほぼ地山肩部より上の層である。Ⅱ・Ⅲ層は砂質土で，薄



第23図　三条大路側溝Ⅳ溝内層位図

い酸化鉄によって分層できたが，破片は接合するものがある。Ⅳ層は断面にはあらわれなかったが，炭を多量に含む黒灰色粘質土で，北側から流れこんだような状況を呈していた。Ⅴ層は黄褐色粘質の地山土を混じえた層である。このような層位はこの部分周辺にのみ限定されていて，溝全体を通じた層位ではなかった。

（a）　B 6 地山直上出土遺物（第24図，図版第28）

〔黒色土器〕 1 は口径15.5cm，器高 5 cmの黒色土器B類椀で，内外面ともヘラミガキ。口縁部内面に 1 条の凹線をめぐらす。高台は断面台形で，器高指数約31。

〔灰釉陶器〕 2 は椀底部で，胎土は淡灰白色で，砂粒をあまり含まず，灰釉はつけ掛けによる。高台は高さ 1 cmと高く垂直に近いもので，高台内底部には糸切り痕が残る。東濃系である。

〔緑釉陶器〕 3 は椀底部で褐色軟質の焼きである。釉はくすんだ緑色を呈し，高台内底部にも施釉しているが，ほとんど剥離してしまっている。近江系である。

（b）　分層出土遺物

Ⅴ層出土遺物（第25図，図版第28）

〔土師器〕 1 ～ 6 は『て』字状口縁の皿で， 1 ～ 4 は口径10.8～11.8cm， 5・6 は口径14cm。 7 は灰白色を呈する口縁折り曲げの下皿である。 8 ～13は口縁部が外反する皿の系統で， 2 段ナデ手法が主であるが， 1 段ナデ手法もみられる。

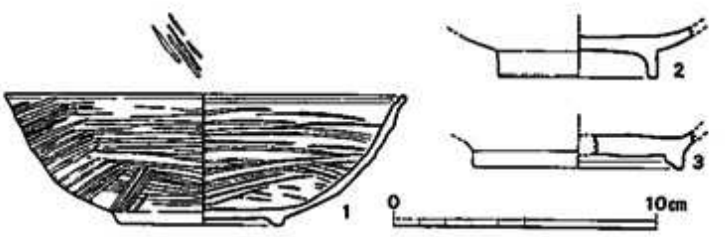
〔須恵器〕 14は復原口径30cmの鉢で，灰白色を呈するやや焼きの悪いものである。

Ⅳ層出土遺物（第25図，図版第28）

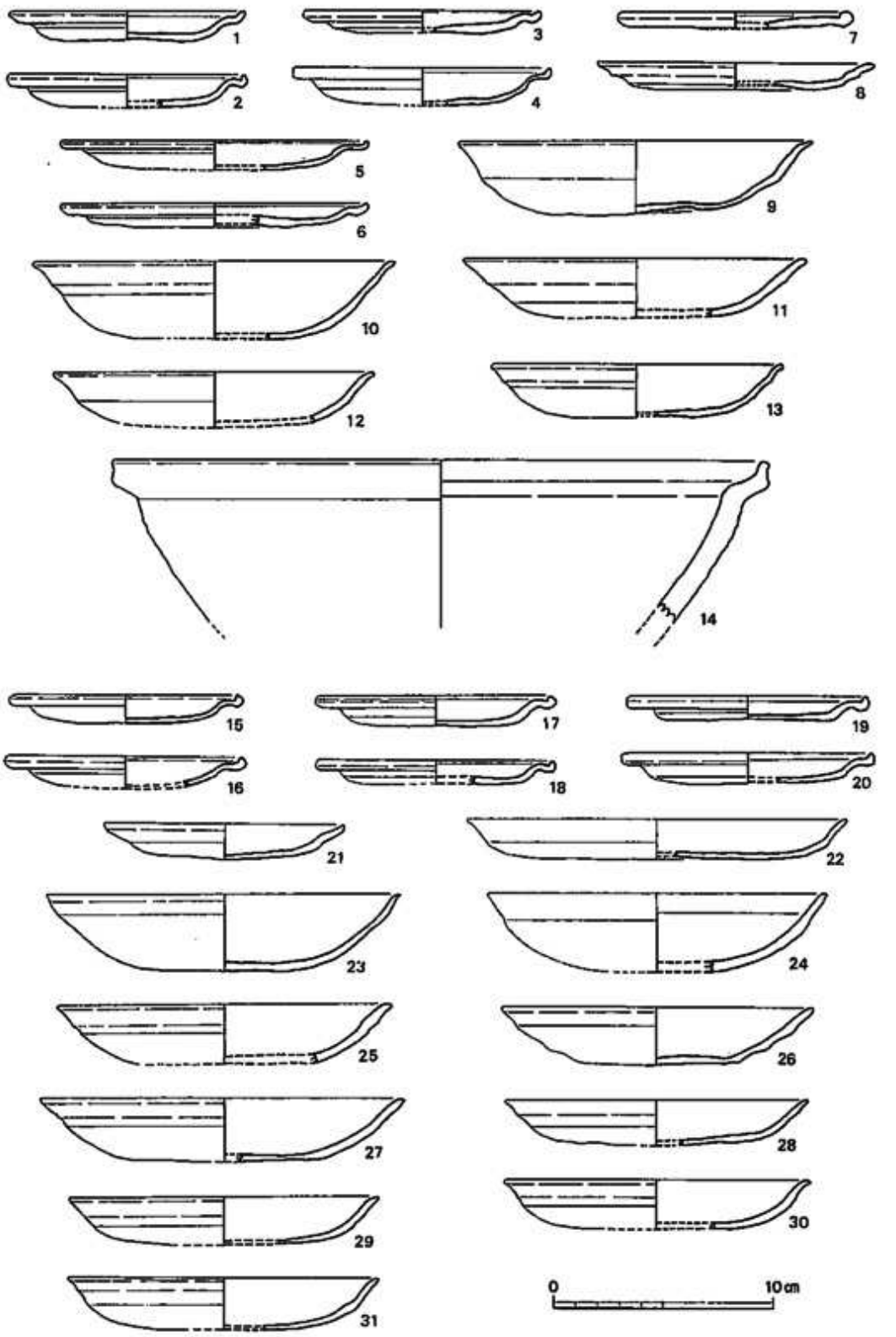
〔土師器〕 15～21は『て』字状口縁の皿で，口径10.6～11.4cm。 22～31は口縁部が外反する皿で， 2 段ナデ手法が主なものである。

Ⅲ層出土遺物（第26図，図版第28）

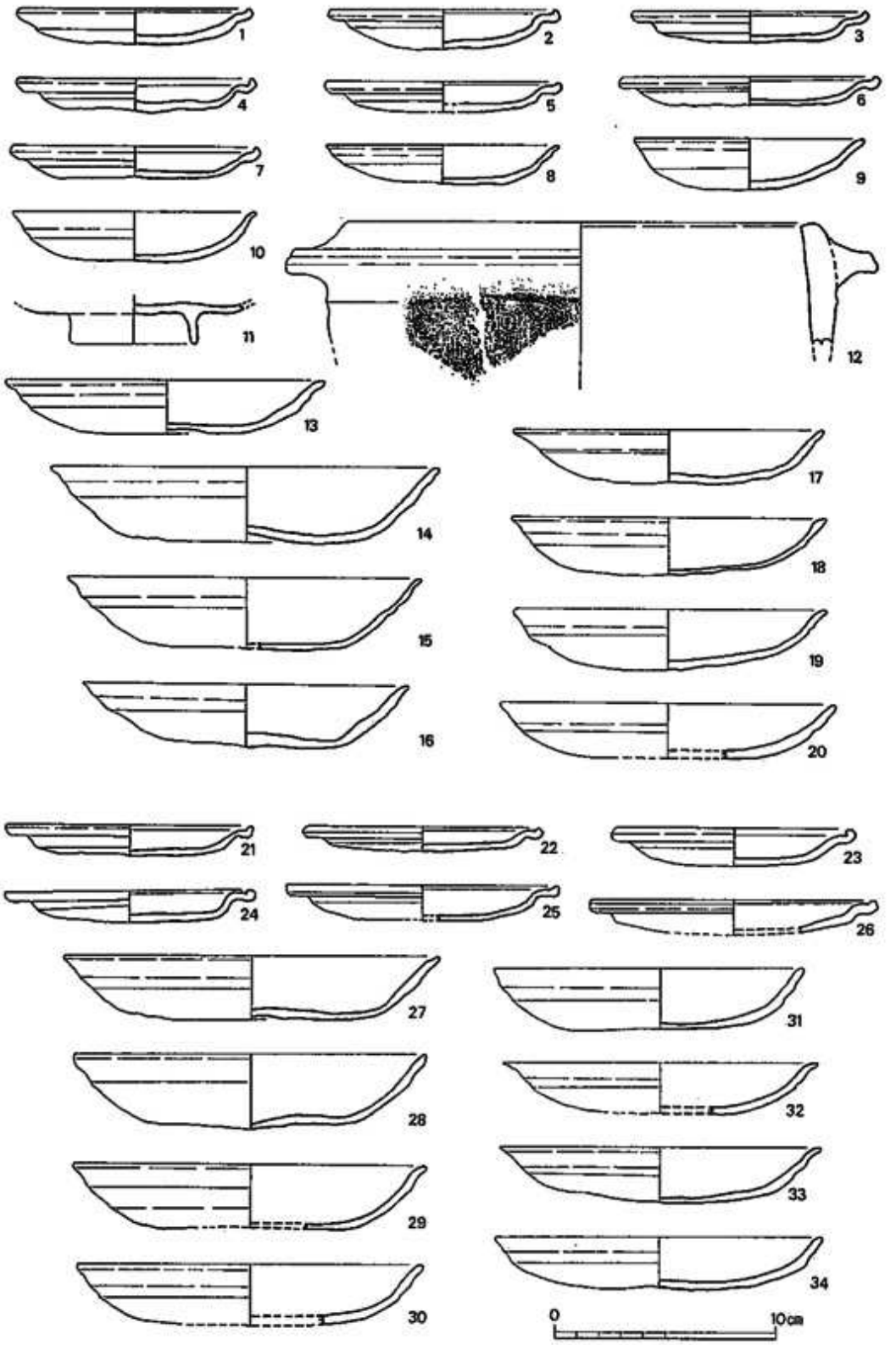
〔土師器〕 1 ～ 7 は『て』字状口縁の皿で，口径10.7～11.3cm。 8 ～10， 13～20は口縁部外反の皿で，総て 2 段ナデ手法である。 11は高台付椀底部片である。 12は復原口径21cmの羽釜で赤



第24図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (1)



第25図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図(2)



第26図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (8)

色粒を多量に含んでいる。

Ⅱ層出土遺物（第26図，図版第29）

〔土師器〕21～26は『て』字状口縁の皿で，口径11cm前後のものが多い。27～34は口縁部外反の２段ナデ手法の皿である。

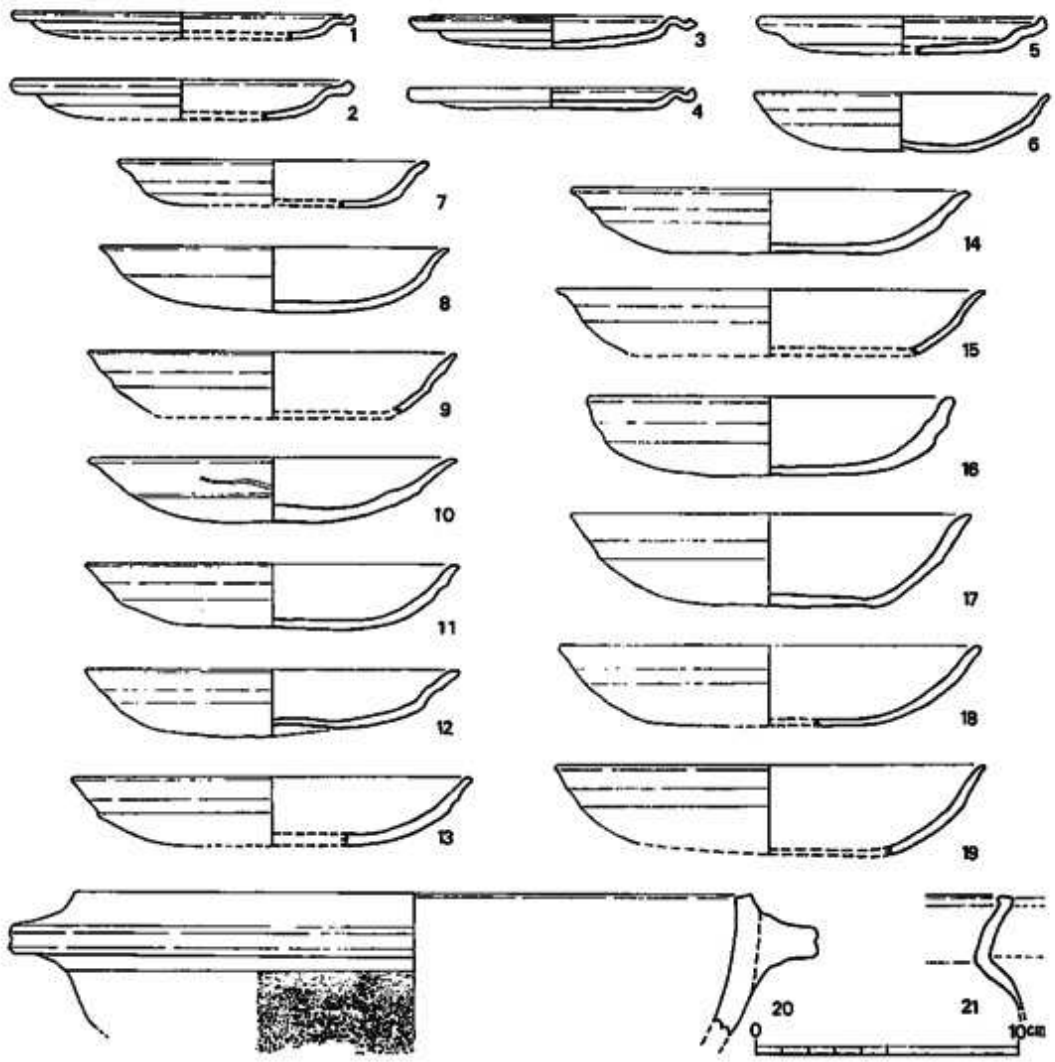
Ⅰ層出土遺物（第27図，図版第29）

〔土師器〕１～５は『て』字状口縁の皿である。６～19は口縁部が外反する皿で，２段ナデ手法のものであるが，16は口縁部が外反しない。20は復原口径26cmの羽釜で，Ⅲ層出土品と同様赤色粒を多量に含む。

〔黒色土器〕21は甕で，口縁部外面と内面に炭素吸着がみられる。

（c） 溝内出土遺物（第28～44図，図版第29～37）

上述した分層出土品とは別に溝内出土品として取りあげたものの中から，やや新しい傾向の



第27図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図（4）

土師皿や土師器以外のものを提示する。

〔土師器〕第28図1～10は『て』字状口縁の皿である。やや厚味があり，口縁部のシャープさが崩れているものが多く，口径も9cm代のものがある。11～12は口縁折り曲げの下皿。13～29は口縁部外反の2段ナデ手法の皿の系統をひくもので，ここではあまり外反しないものを選んだ。特に22・25・27・28は，口縁部が垂直にたつものである。32は口径12.8cmの三脚盤で，乳白色を呈する。33は高台付の椀になると思われ，淡褐色を呈す。30・31は高杯脚片で，白色を呈す。

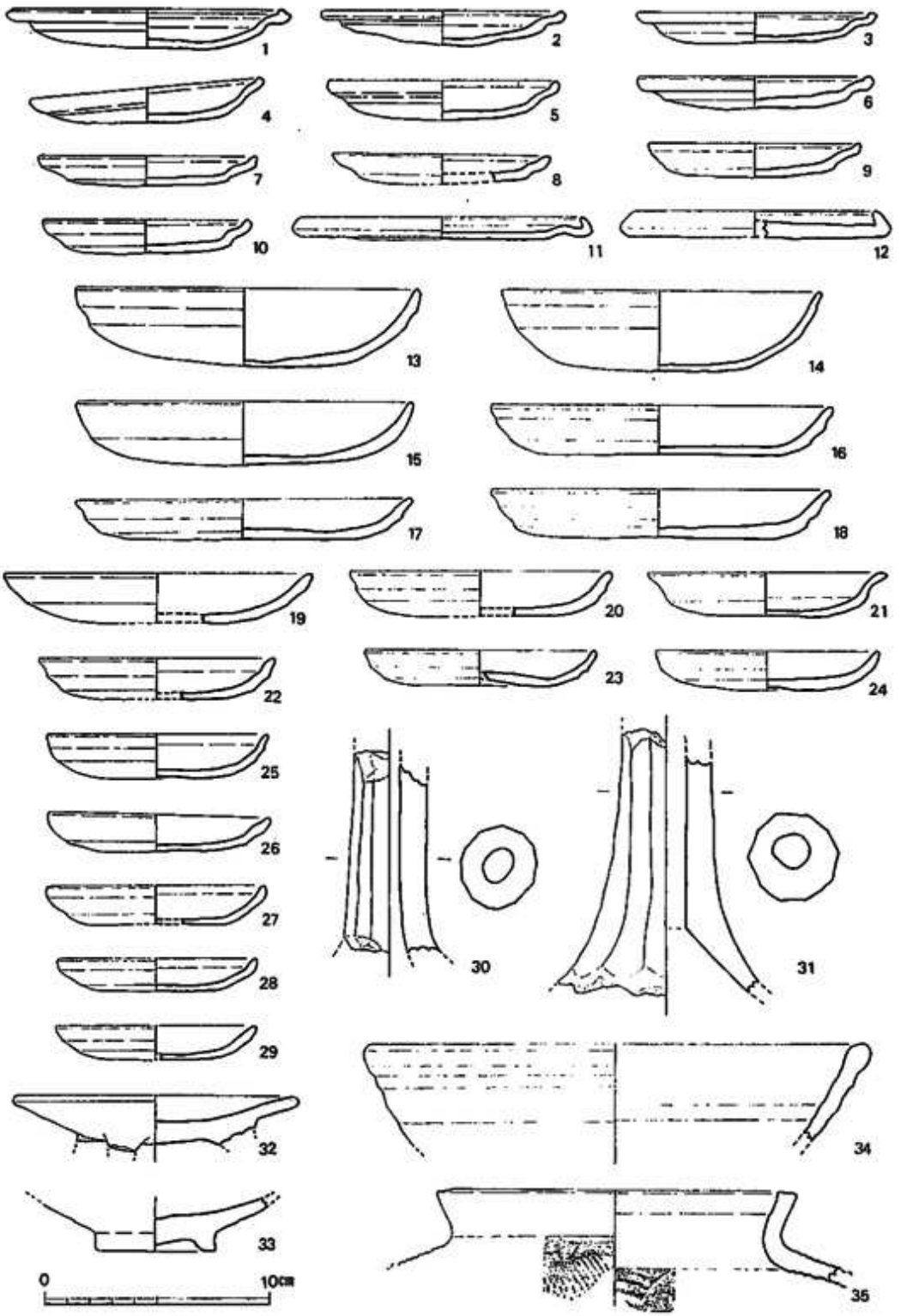
〔須恵器〕34は復原口径22cmの鉢で，暗青灰色を呈す。35は甕で，暗青灰色を呈し，外面は斜位の平行タタキ，内面には青海波が残る。

〔瓦器〕第29図1は口径9cmの小椀で，高台は欠失。内面に細かなヘラミガキを施し，底部内面に螺旋文を施す。口縁部内面に1条の凹線を廻らす。外面は高台のところまで強いヨコナデである。

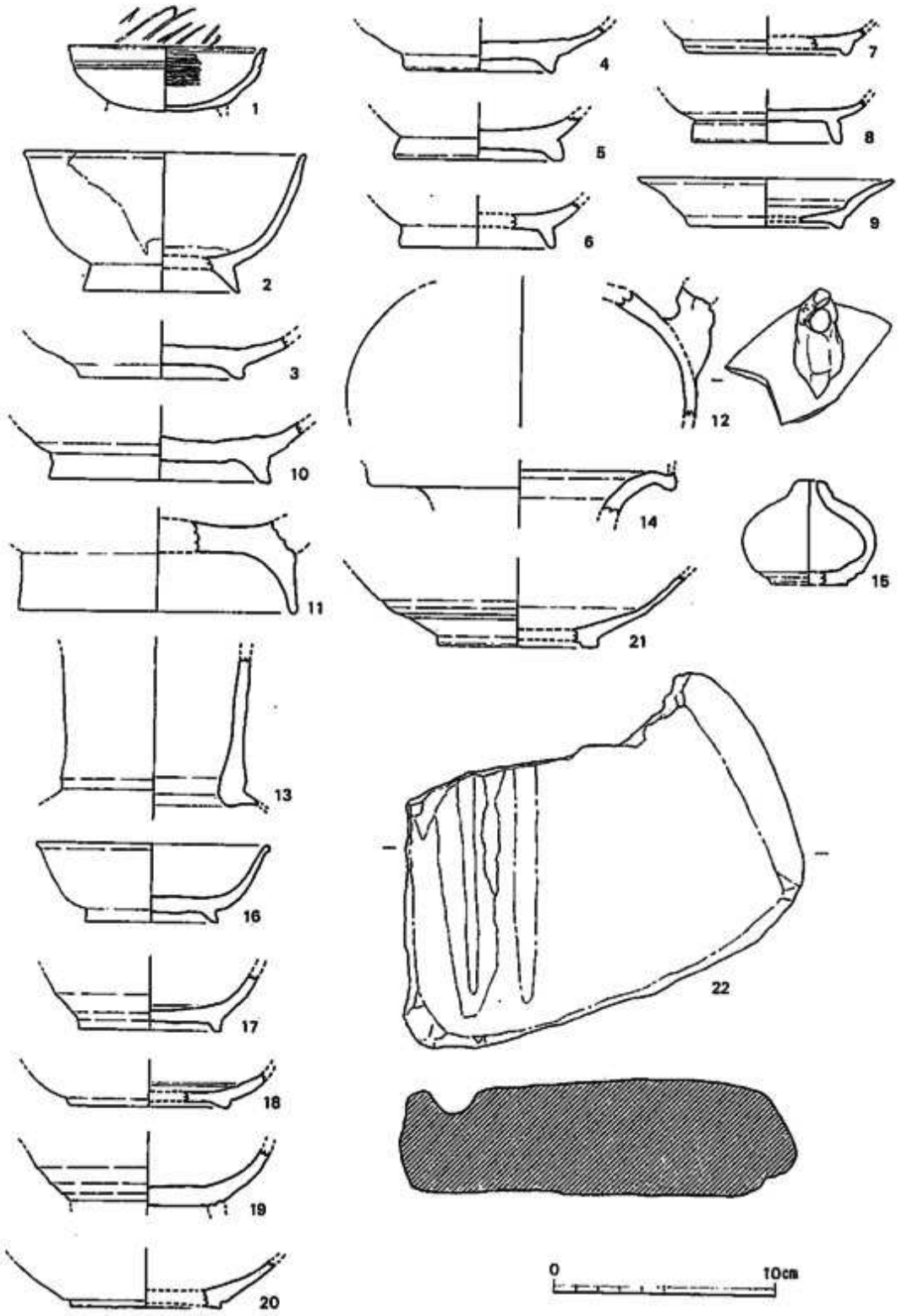
〔灰釉陶器〕2は口径12.7cm，器高6.4cmの椀で，淡灰色を呈し，胎土にはあまり砂粒を含まない。釉はつけ掛けである。底部から口縁部へのたちあがりが強い。東濃系である。3～8は総て胎土が淡白色で砂粒をあまり含まない。これらは東濃系のものと思われる。9は復原口径11.4cmの段皿で，淡灰色を呈し，これも東濃系と思われる。10・11は大平鉢の底部。12は縄状把手付水注で，縄状把手は3本縦捩りである。13・14は広口瓶で東濃系である。

〔緑釉陶器〕15は復原胴径6cmの瓶のミニチュアで，胎土は淡褐色軟質で，釉は黄緑色を呈す。釉は底部外面にまで施される。16は口径10.6cm，器高3.6cmの小椀で，暗灰色硬質の焼きである。釉は正に緑色を呈し，高台内底部には糸切り痕が残り，そこには釉が施されない。17は茶褐色のやや硬質の焼きで，高台内底部にも薄く釉がかかる。18は灰色のやや軟質の焼きで，高台内底部にも釉を施す。19は赤褐色軟質の焼きで，釉は褐色に変色し，近江系である。20・21は硬質の焼きで，釉は灰緑色を呈す。

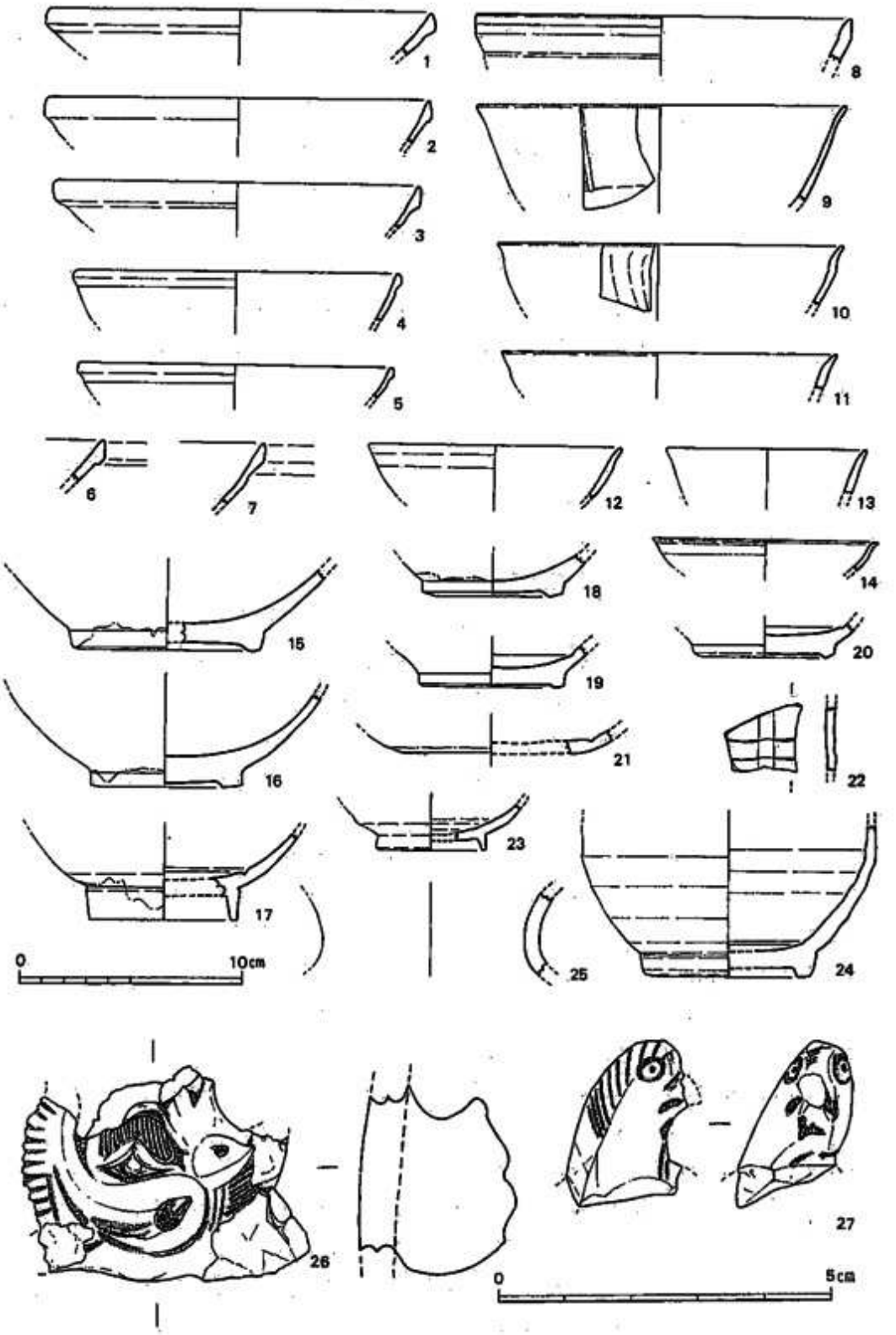
〔中国陶磁〕越州窯青磁(第30図23・24)は，23が皿で，垂直に削り出された輪高台に，下位で反転屈曲する体部がつく。底部直径5cm，内外全面に施釉され，暗黄緑色に発色している。胎土は灰色の細土。内面は無文で，貫入はない。外底畳付に白砂が付着。24は水注か壺の胴下半で，底部は輪高台に削り出されている。釉は内外の全面にかけられ，黄緑色に発している。胎土は黄灰色の細土で貫入はない。白磁(第30図1～22，26・27)は，1～20が椀で，1～7は玉縁口縁。4・5は丸味をもった小形の玉縁である。8～14は素縁の口縁で，10・12～14は口唇をわずかに外反させる。9・10は外面に縦方向の文様を付し，10には貫入がみられる。15～20は椀の底部で，輪高台をなす。17は高台が高い。この17と19は内面に圏線を施している。釉は内底から体部下半にかかっている。21は皿底部で，内面に圏線をもつ。22は縦に区画凹線，横に細沈線を入れた，厚さ0.3cmの薄胎品である。類品をみないが水注や壺の胴部破片か。27は鳥形，26は竜形の付属飾で，27は容器の頸胴部に付けられたもののようである。22・26・27は青白磁である。25は黄褐釉陶器で，壺の頸胴部である。灰色の粗い胎土に黄褐釉が外面と内面頸部まで施されている。



第28図 三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図(5)



第29図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (6)



第30図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (7)

〔石製品〕第29図22は扁平な石で一面に溝ができている。

〔瓦〕溝Ⅳ内からは平安時代前期より12世紀前半代頃の後期の瓦が多量に出土しており，特にB・C・Eに集中していた。

第31図1・2は9世紀前半代の軒丸瓦である。1は単弁16葉の蓮華文軒丸瓦で，珠文は花弁の先端に対応している。瓦当周囲はヘラケズリ調整，瓦当裏面の丸瓦との接合部は粗く指ナデされている。胎土にはあまり砂を含まず，硬質の焼成で，表面は灰褐色，内部は灰白色を呈している。2は8葉の複弁蓮華文の花弁の間から，それぞれ同じ形の複弁が覗いている状態を表している。珠文は花弁，間弁の先端に対応し，その間にも配されているため，かなり密な珠文帯になっている。瓦当の裏面と周囲はヘラケズリで，周縁は部分的にナデにより修整されている。胎土は緻密で砂をほとんど含まない。硬質の焼成で，表面は灰黒色，内部は灰白色を呈している。

3は平安時代中期の軒丸瓦で，瓦当は一本造りによっている。文様は5葉の大きな単弁蓮華文で，周囲に圏線を廻らせている。文様と瓦当の中心が一致せず，文様はやや左に偏している。瓦当部から丸瓦部にかけては粗いナデ調整で，瓦当裏面から丸瓦凹面には連続する粗い布目がある。丸瓦部分の断面は半円ではなく，かなり扁平になっている。胎土には砂を含むが多くはない。やや硬質の焼成で，表面黒色，内部灰白色を呈している。

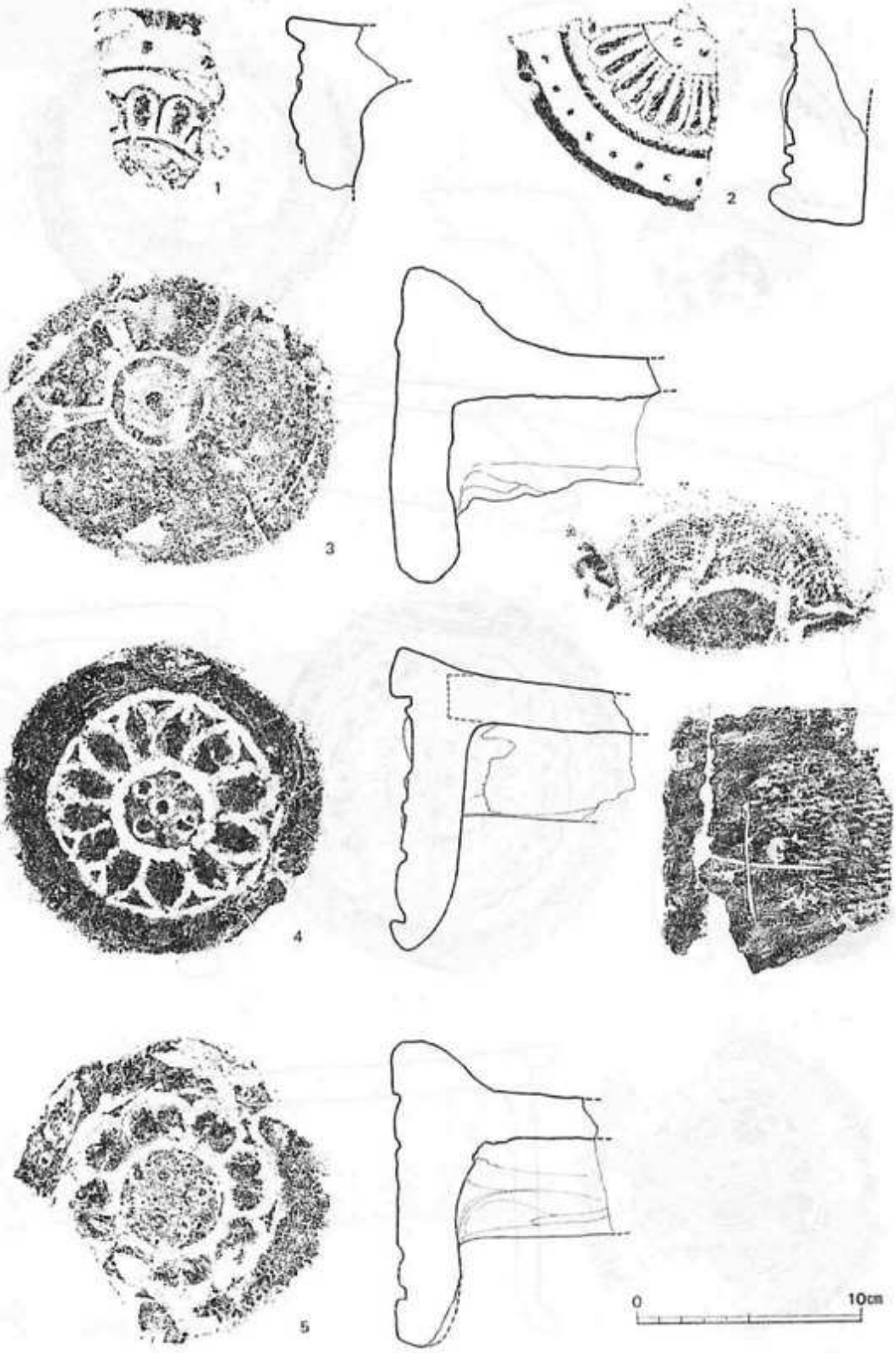
4・5は11世紀中葉頃と見られる軒丸瓦で，いずれも胎土や成形技法などがかなり似ている。4は単弁12葉の蓮華文で，周縁上に珠文を配するものである。丸瓦部凸面には十字のヘラ記号がある。5は複弁8葉の蓮華文であるが花弁の大きさはやや不揃いである。周縁上は不鮮明であるが，4と同様に珠文があるようにも見える。4・5とも胎土にはあまり砂を含まず，硬質の焼成で，黒～灰白色を呈している。また4の調整はやや丁寧であるが，両者とも全体の造りは粗雑な感じを受ける。

第32図は12世紀前葉頃と見られる軒丸瓦である。1は胎土や造り等から丹波系と見られる単弁6葉の蓮華文軒丸瓦で，同笵例によると中房には1＋6＋12の蓮子を入れたものである。瓦当上部には横方向の粗い縄目の叩きがなされている。胎土はほとんど砂を含まず緻密である。硬質の焼成で，灰白色を呈している。2は先の尖った剣頭文状の単弁蓮華文で，中房は小さく，珠文帯などはない。調整はナデを基調としている。胎土は1と同様緻密である。やや硬質の焼成で，表面黒色，内部灰白色を呈している。

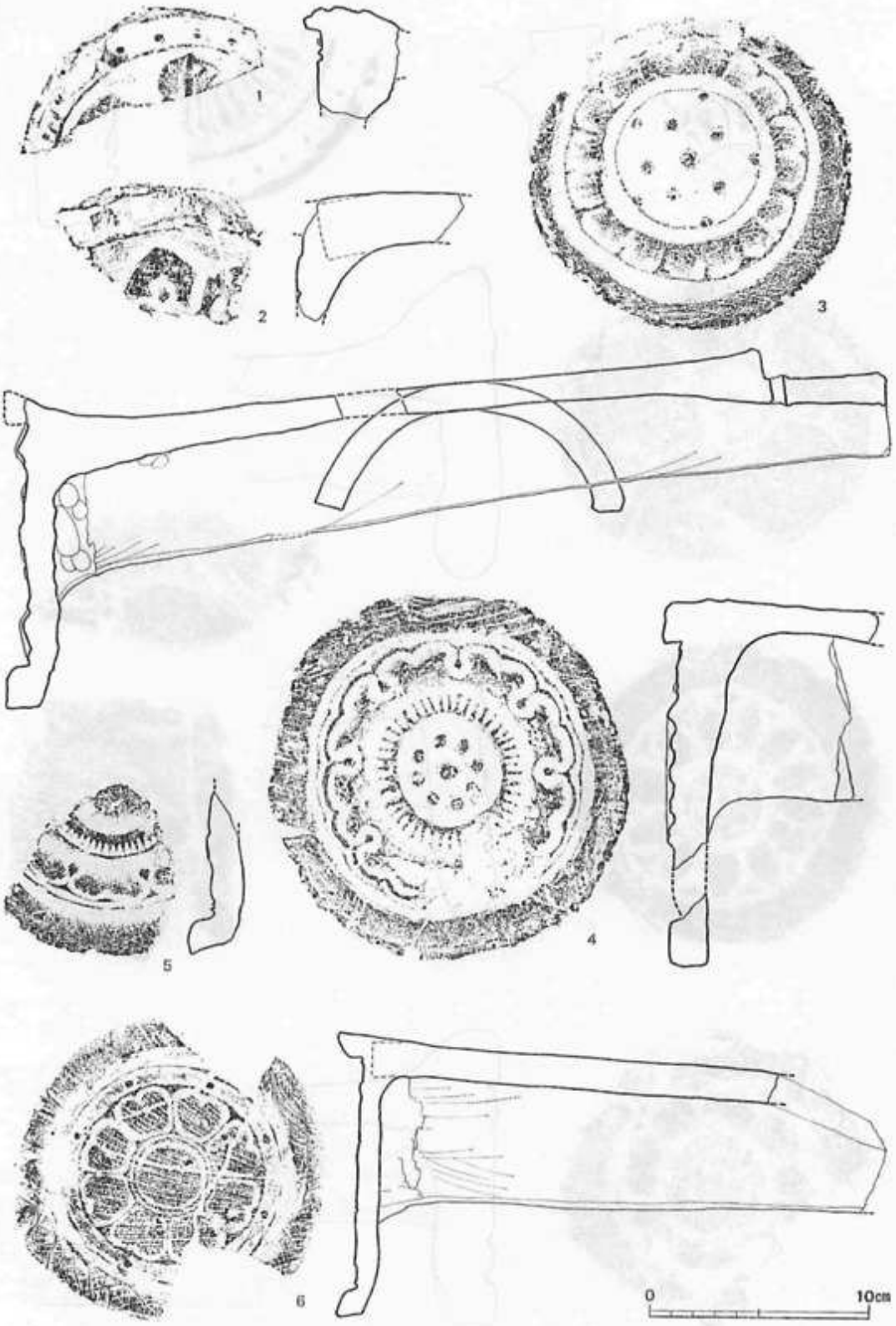
3～6は播磨系の軒丸瓦である。いずれも瓦当，丸瓦部ともに比較的薄手の造りで，調整はナデを基調とし，胎土には砂を混えているものが多い。

3は丸瓦部までほぼ完存している。瓦当裏面および丸瓦との接合部分には指頭圧痕が多数認められる。丸瓦部凹面は糸切り痕が顕著である。また丸瓦玉縁部に釘孔があけられているが，鉄サビなどは認められない。硬質の焼成で，灰色を呈している。

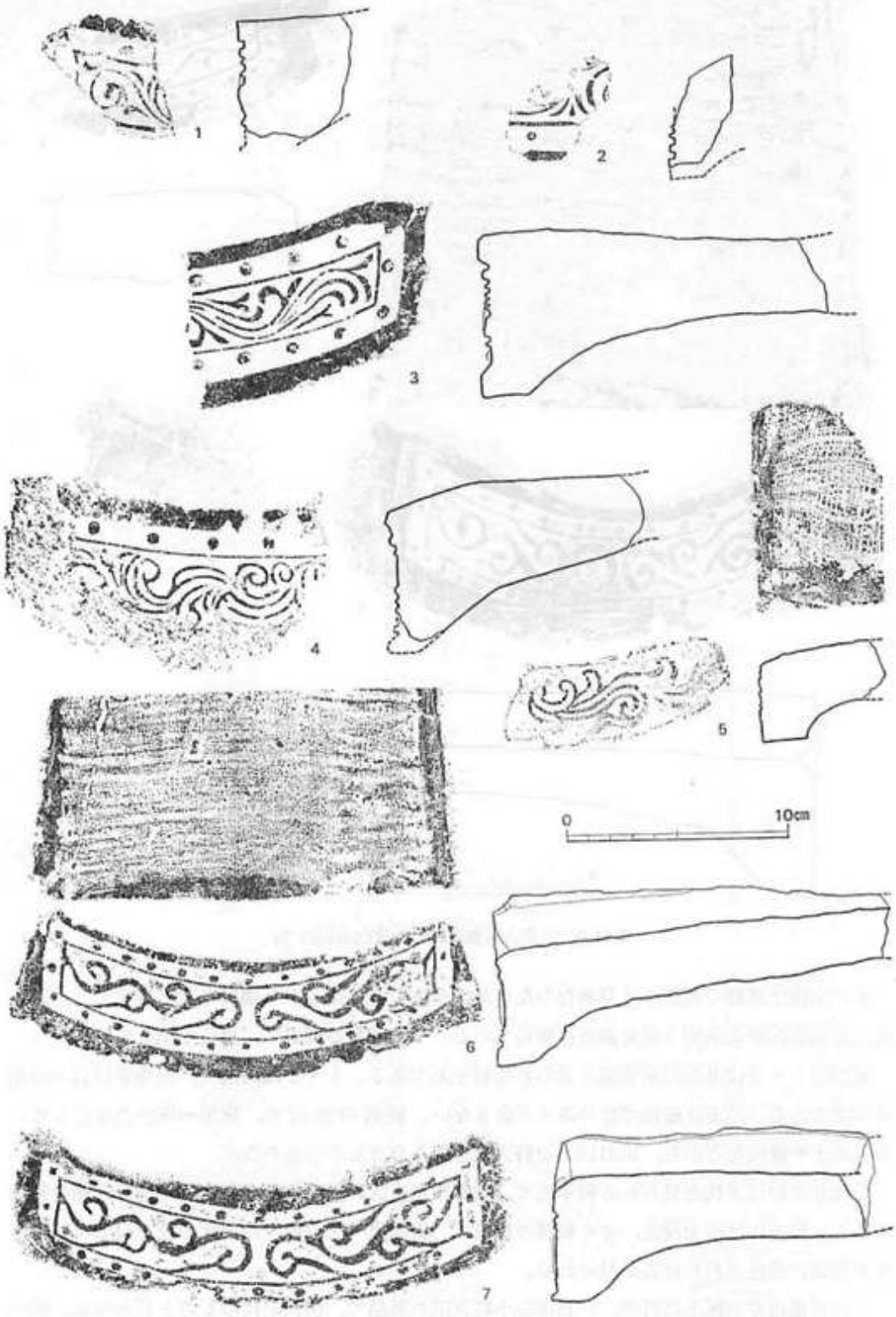
4・5はほぼ同文の蓮華文であるが，5の方が蕊も細かく，花弁の形も比較的整っている。4では丸瓦部凹面をナデ調整しており，布目はない。胎土にあまり砂を含まず，やや硬質の焼成で，表面黒色，内部灰白色を呈している。5は硬質の焼成で，灰色を呈している。



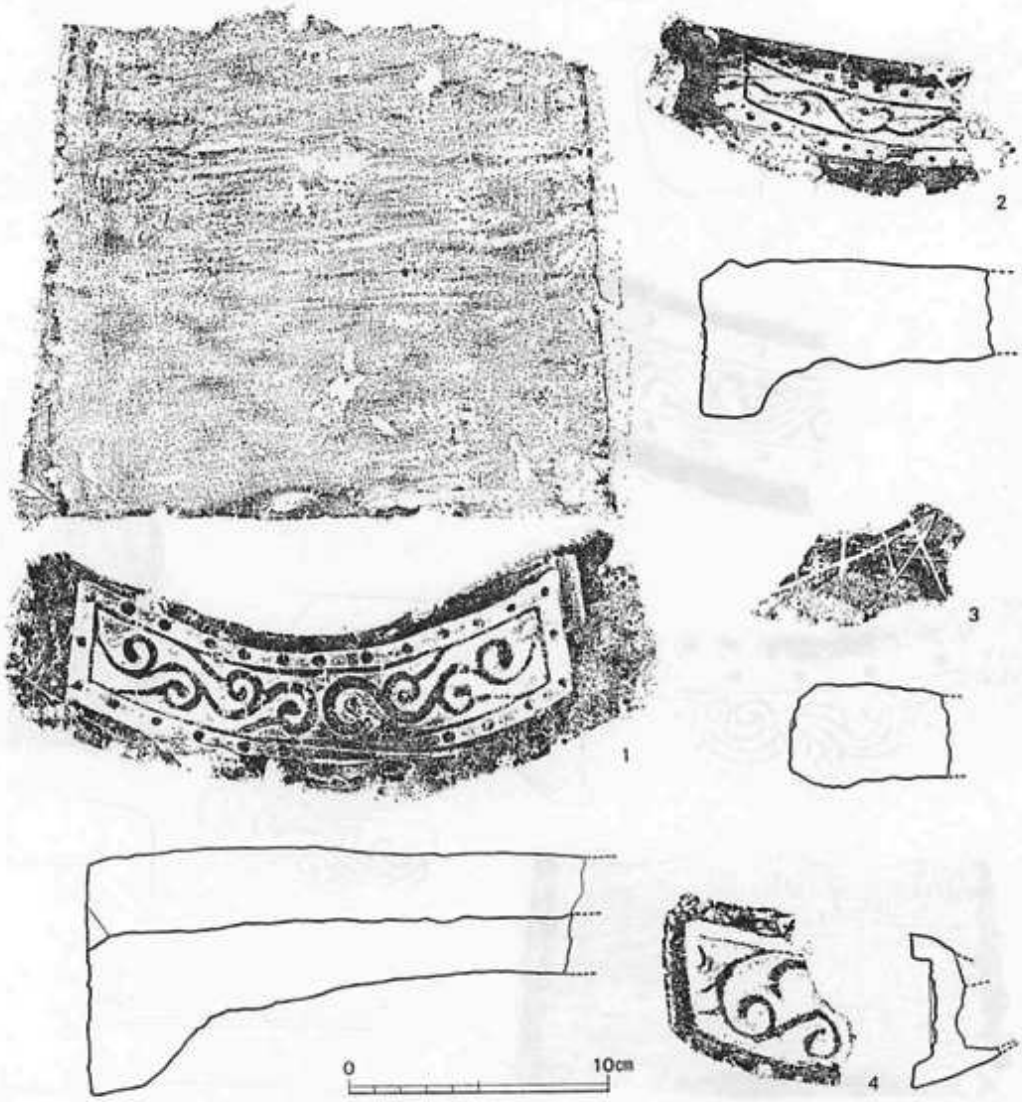
第31図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (8)



第32図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (9)



第33図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (1/3)



第34図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (1)

6の文様は播磨の系統には見あたらないが，全体の造りなどから播磨系瓦と推定した。瓦当面と丸瓦部凹面に糸切り痕を顕著に留めている。やや軟質の焼成で，黒色を呈している。

第33図1・2は9世紀前葉頃と見られる軒平瓦である。1・2は同笵で，西寺系様式の均整唐草文である。胎土は緻密で砂はあまり含まない。硬質の焼成で，灰黒～灰白色を呈している。胎土や焼成などから，第31図1の軒丸瓦と組み合うものであろう。

3は9世紀後半代と見られる軒平瓦で，京都市左京区岩倉幡枝のいわゆる栗栖野瓦屋の製品である。胎土には砂を混え，やや軟質の焼成で，表面黒～灰白色，内部灰白色を呈している。なお顎部に赤色塗料の付着が見られる。

4は京都市左京区上高野の，いわゆる小野瓦屋の製品で，10世紀代のものと見られる。胎土には砂を多く混え，やや軟質の焼成で，表面黒色，内部灰白色を呈している。5は平安時代中

期に多い，複線で表された唐草文の軒平瓦である。この文様は4の系統をひくものと見られる。小形の軒平瓦であるが，この大きさは本来の瓦笵の内区部分だけに当るものかとも思われる。調整は主にケズリであるが，顎部は指オサエによっている。胎土にはあまり砂を含まず，やや硬質の焼成で，灰褐色を呈している。

6・7は11世紀中葉頃のものと思われる。同笵であるが，乾燥・焼成時の状態によるものか，文様の幅で2㎝程度の差がある。文様は左右から中央に向う一見雲文とも見えるような唐草文である。瓦当下端や側面はヘラケズリ，顎部から平瓦部にかけては指オサエによっている。成形は全体にやや粗雑な感じを受ける。胎土には砂や小石を含み，6はかなり硬質の焼成で青灰色，7はやや軟質の焼成で，表面灰黒色，内部灰白色を呈している。

第34図1もこれらとほとんど同文の軒平瓦で，胎土や成形技法なども同様である。この3例は造りや出土状態から見て，第31図4・5の軒丸瓦に組み合うものと思われる。

2も左右から中央に向う唐草文の軒平瓦で周囲に密に配された珠文帯を廻らせている。顎部から平瓦部にかけては指オサエによる。胎土にはあまり砂を含まず，やや硬質の焼成で，灰白色を呈している。

3は瓦当右端部の破片で，瓦当面をヘラケズリにより平にした後，ヘラ描きによる斜格子文を表したものである。胎土にはあまり砂を含まず，やや軟質の焼成で，灰褐色を呈している。平安宮跡出土の類例などから11世紀代のものと思われる。

4は播磨系の軒平瓦で，神戸市垂水区の神出窯跡の製品である。胎土には砂を混え，硬質の焼成で，黒色を呈している。

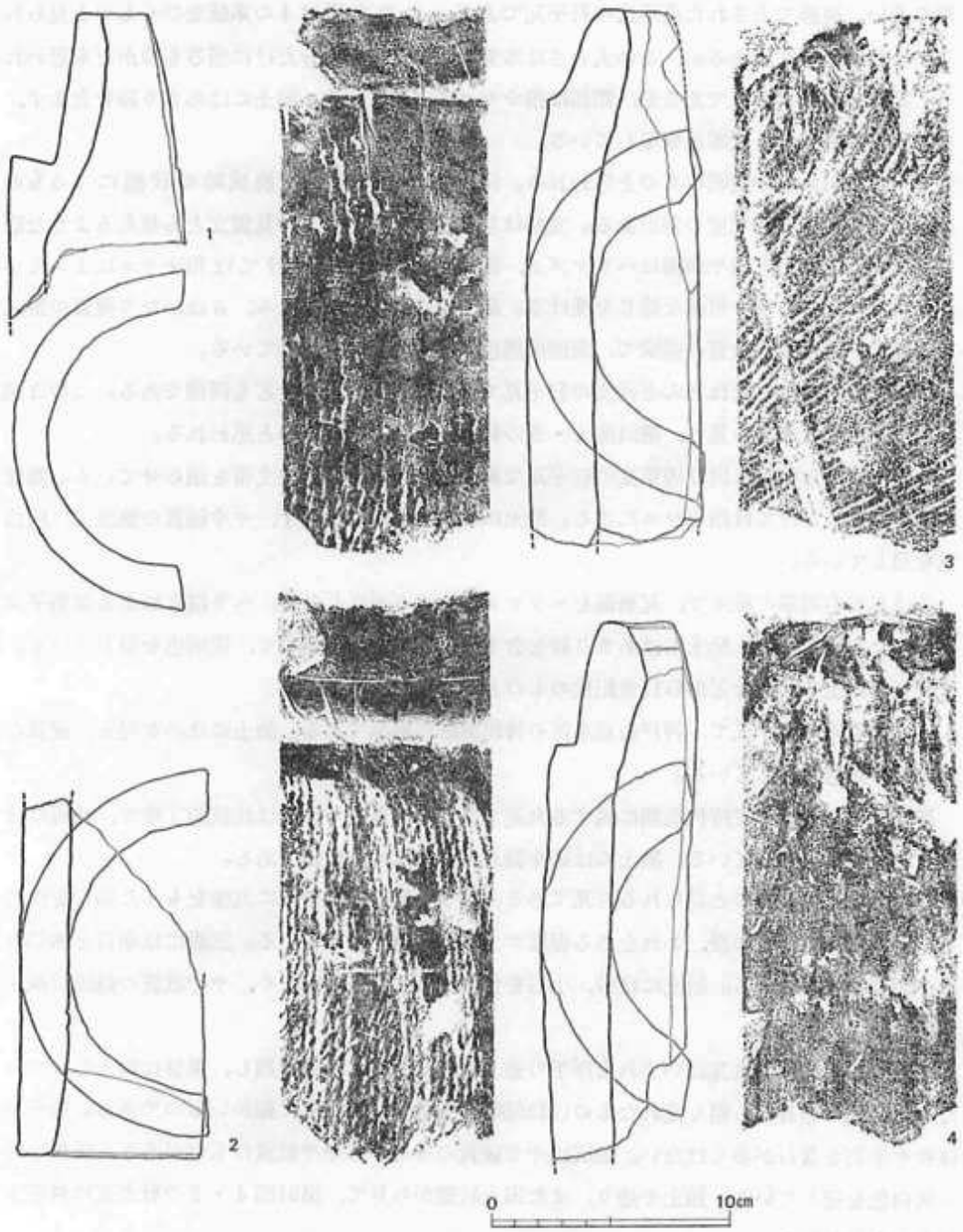
第35図1・2は平安時代前期に属する丸瓦である。両者とも整形は比較的丁寧で，凸面にはかすかに縄目が残っている。胎土には砂を混え，焼成はやや軟質である。

3は11世紀代のものと見られる丸瓦である。厚手の造りで，全体に丸味をもった感じを受ける。凸面は縄目叩きの後，これをある程度ナデにより磨り消している。凹面には布目と糸切り痕が顕著に残っている。胎土には砂，小石を含むがあまり多くはなく，やや軟質の焼成で淡灰褐色を呈している。

4および第36図の丸瓦はいずれも厚手の造りで，凸面には縄目を残し，調整は加えられていない。凹面の布目は，粗く乱れたもの(第36図1)もあるが，概して細かいものである。胎土には砂や小石を含むが多くはない。焼成はやや硬質のものからやや軟質のものがあり，灰黒ないし灰白色を呈している。胎土や造り，また出土状態から見て，第31図4・5の軒丸瓦に対応するものと思われる。

第37図1は播磨系軒丸瓦の丸瓦部分である。凹面，凸面とも縦方向にナデ調整され，叩き目，布目は認められない。玉縁部は横方向のナデ調整で，あまり明瞭な段は作られていない。釘孔があけられているが，第32図3と同様鉄サビは認められない。胎土にはあまり砂を含まず，やや軟質の焼成で，灰色を呈している。

2は小片であるが，讃岐産の丸瓦と思われる。端面と側面のなす角度が鋭角気味で，行基葺き式の丸瓦になるものと推定される。成形は粘土紐の巻きあげによるものらしい。胎土にはあ

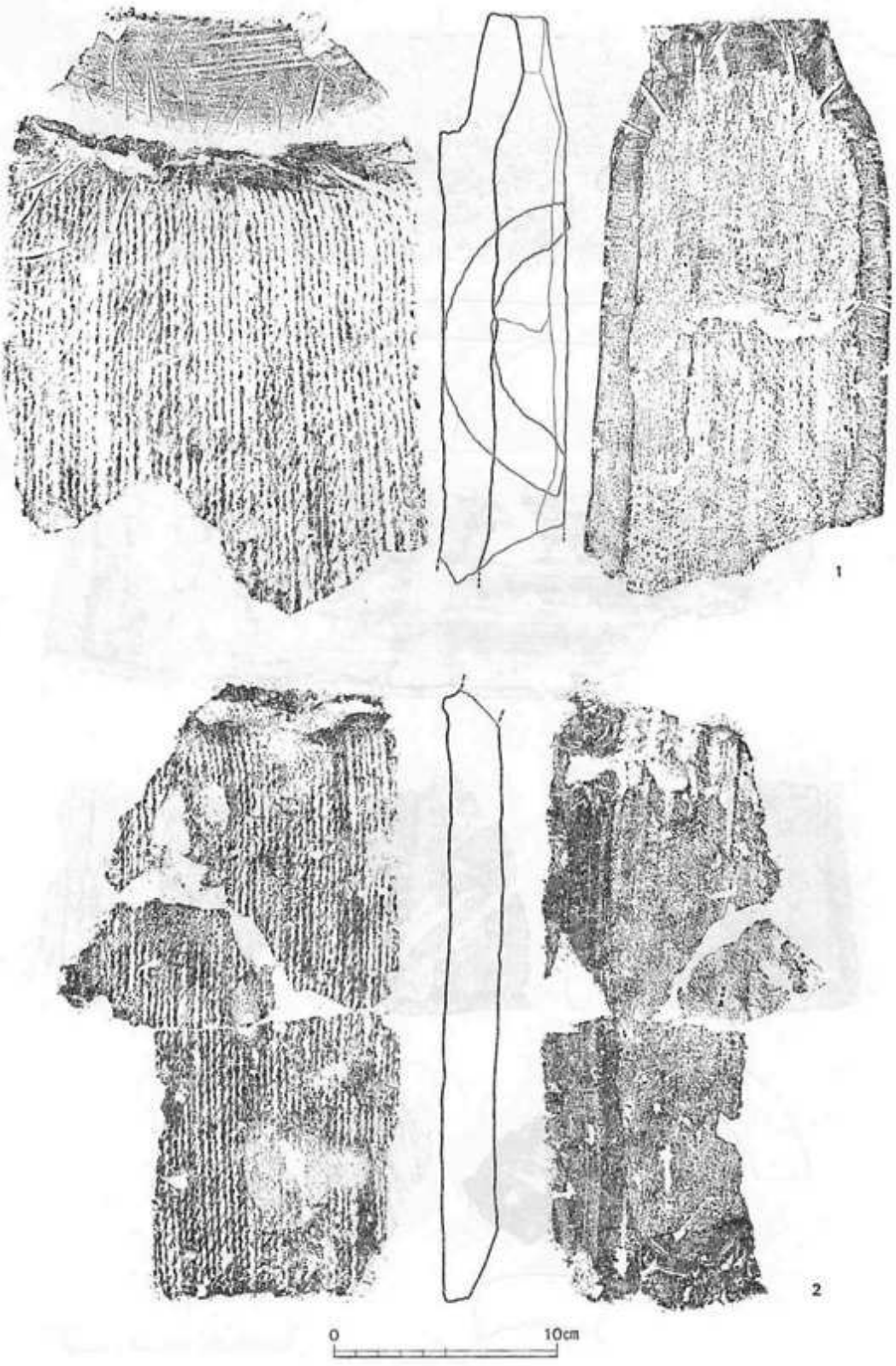


第35図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (1/3)

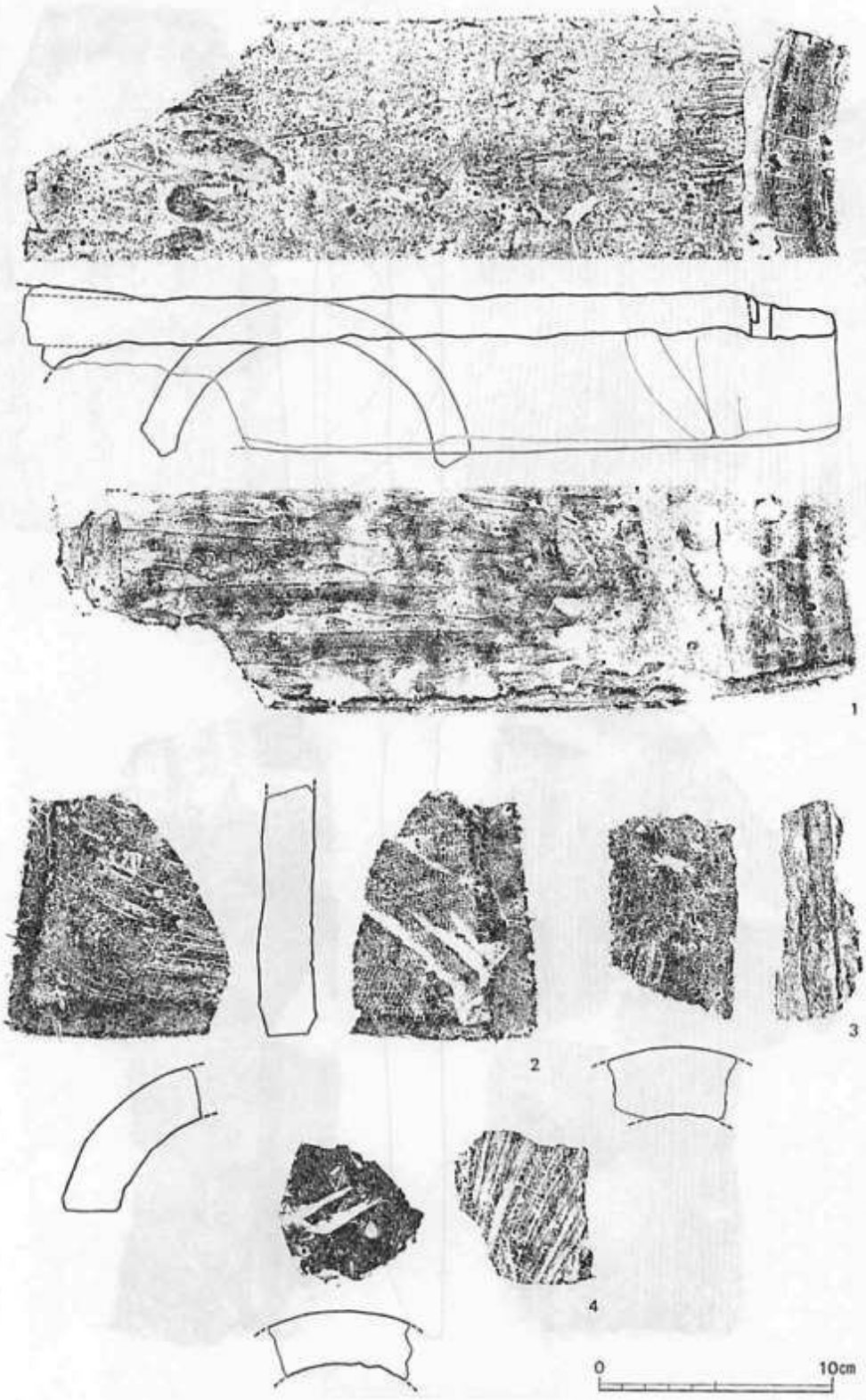
まり砂を含まず，やや軟質の焼成で，黒色を呈している。

3は胎土，焼成等が第36図の丸瓦に近いものであるが，凸面はナデ調整されており，細いヘラ書きの文字が認められる。ただし小片のため判読はできなかった。

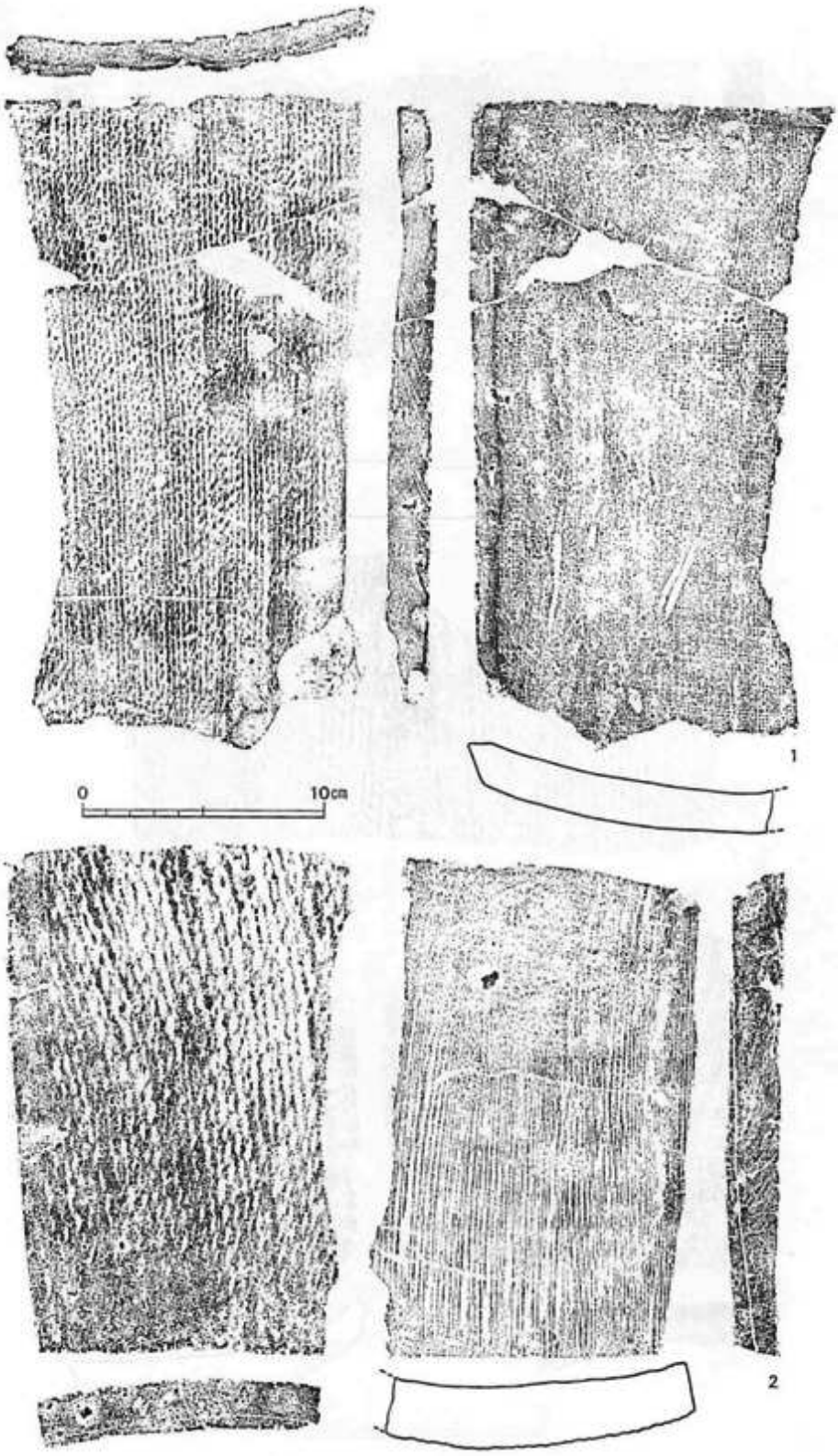
4は丹波系の丸瓦と見られる。凹面は粗い布目と糸切り痕が顕著である。胎土は緻密でほとんど砂を含んでいない。硬質の焼成で，灰褐色を呈している。なお凸面に短い2本の斜線があ



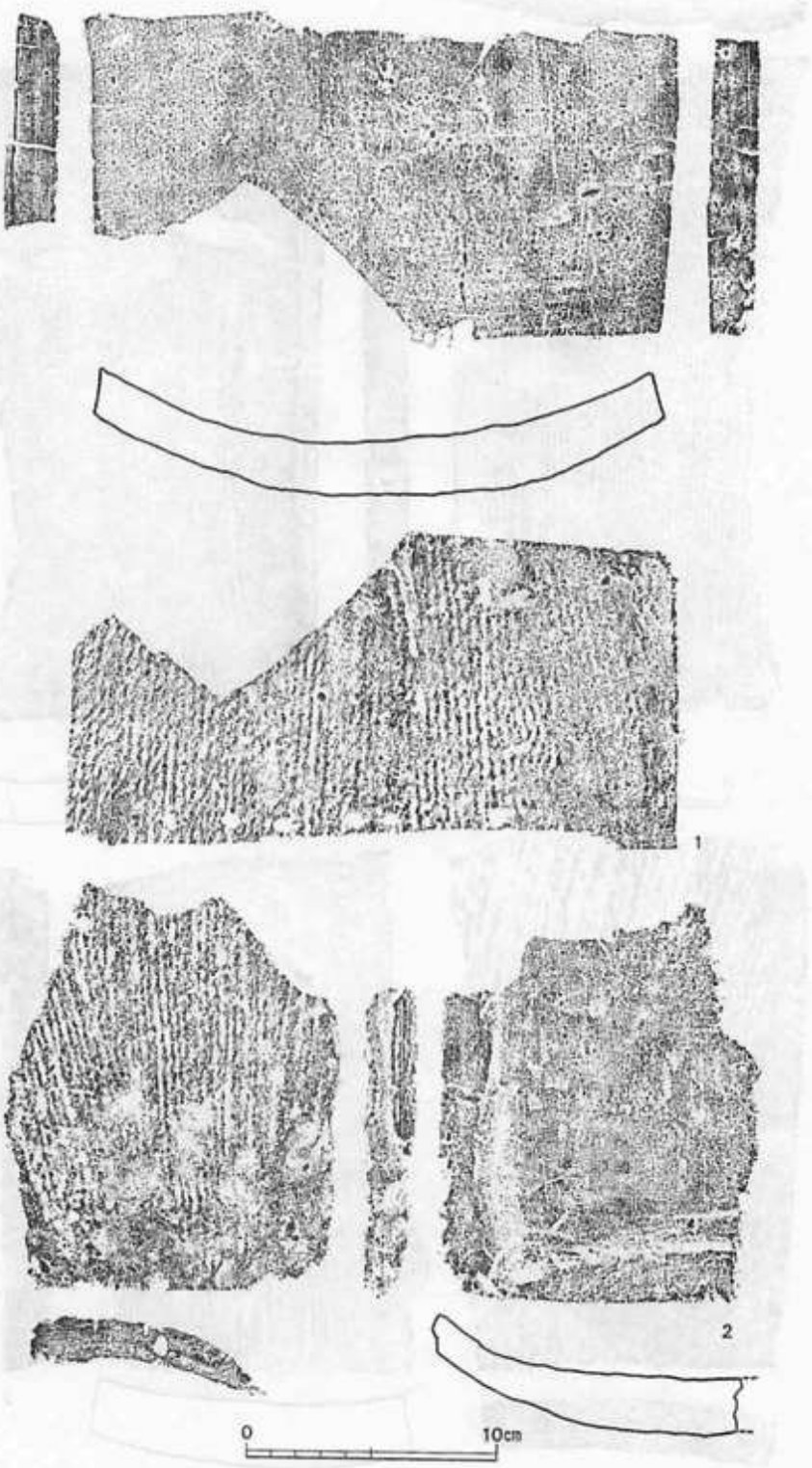
第36図 三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 03



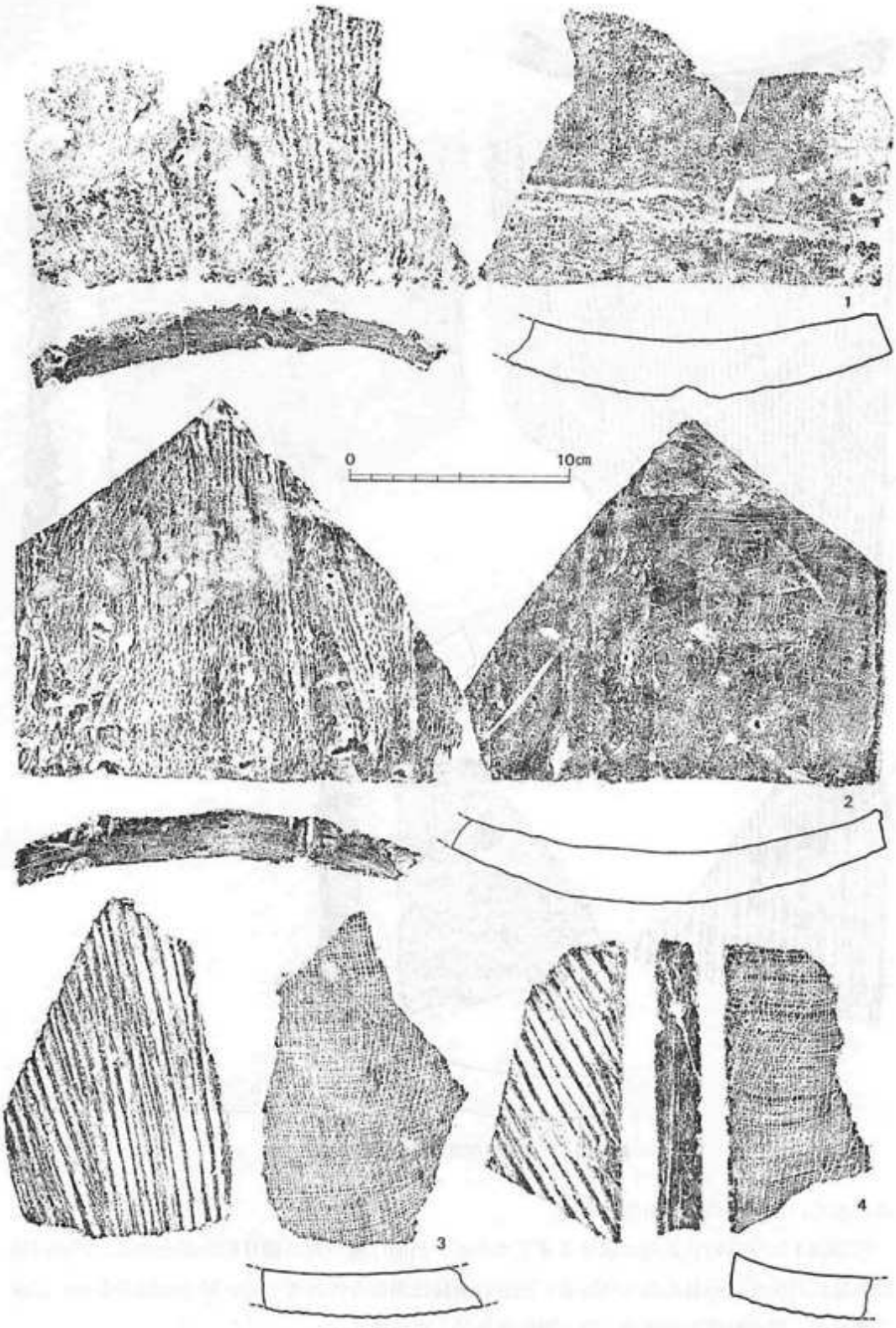
第37図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (4)



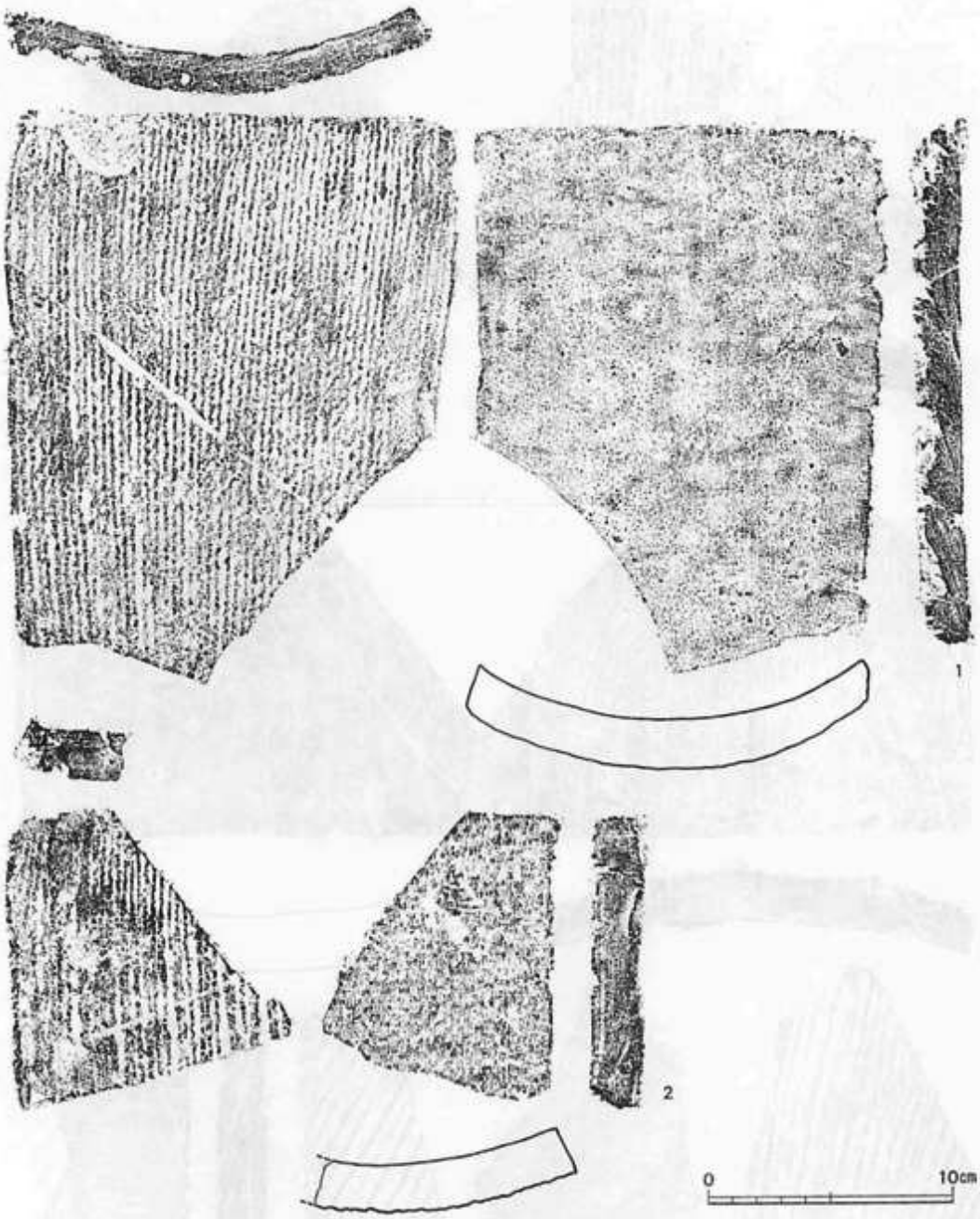
第38図 三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (1/3)



第39図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (1/6)



第40図 三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (7)

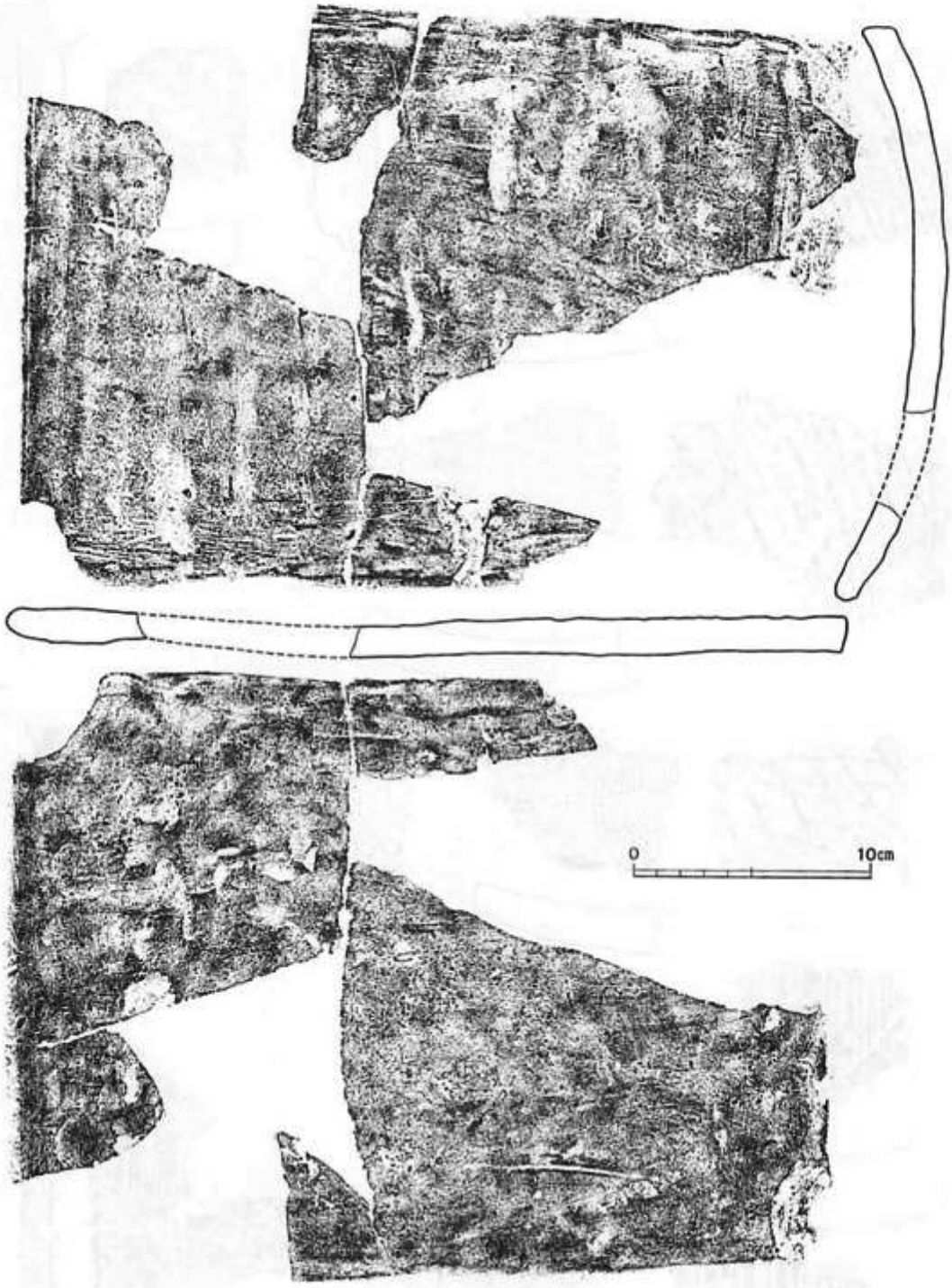


第41図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (8)

る。あるいは記号の類かも知れない。

第38図1は平安時代前期に属する平瓦である。凸面は縦方向の縄目叩きがなされ，凹面は比較的乱れの少ない布目になっている。凹面の側縁は面取りされている。胎土には砂を含むが多くはない。やや軟質の焼成で，灰～灰白色を呈している。

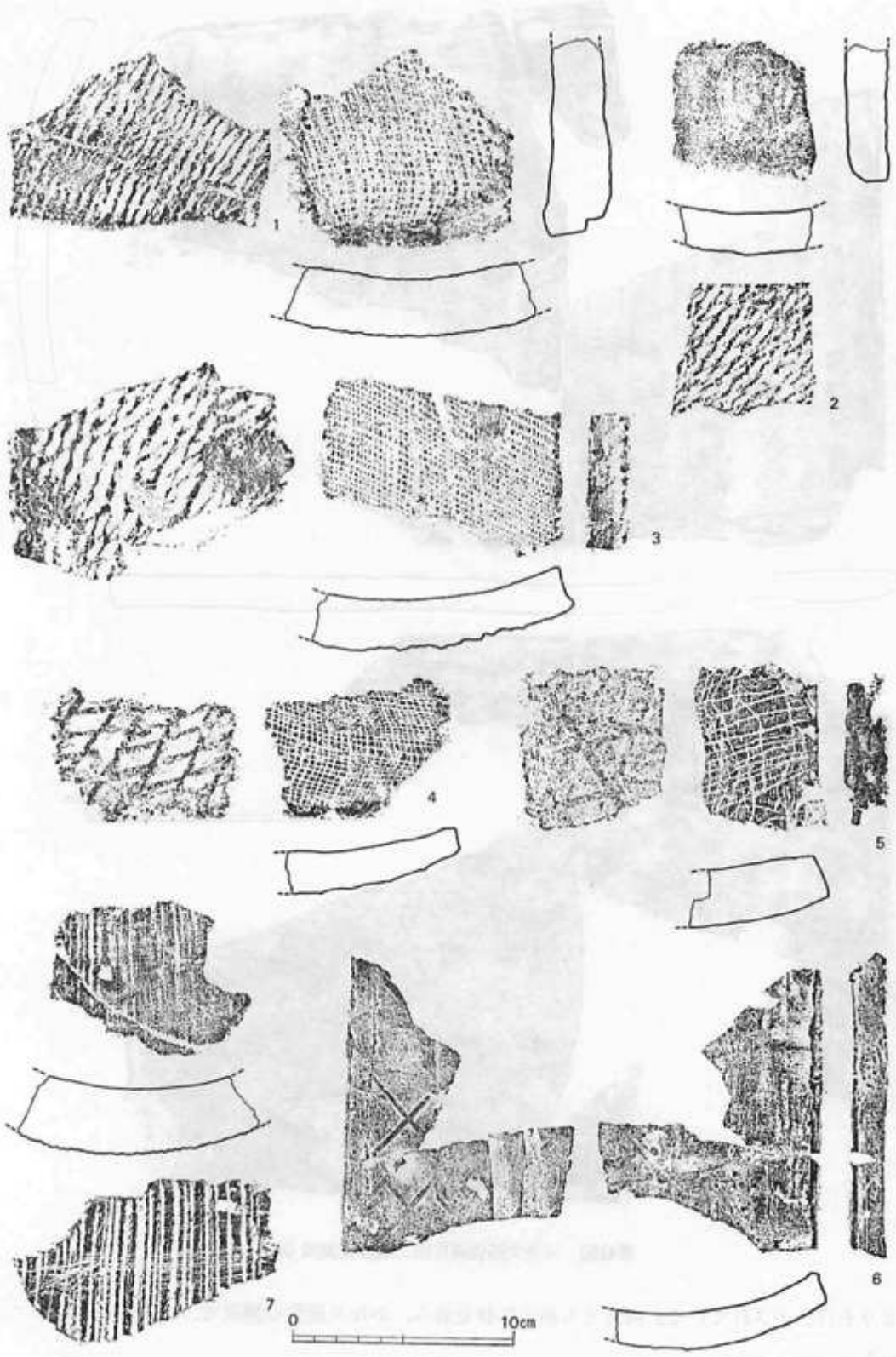
第38図2，第39図1は焼成や側面の成形などは同じであるが，第38図2の凹面はハケ調整に



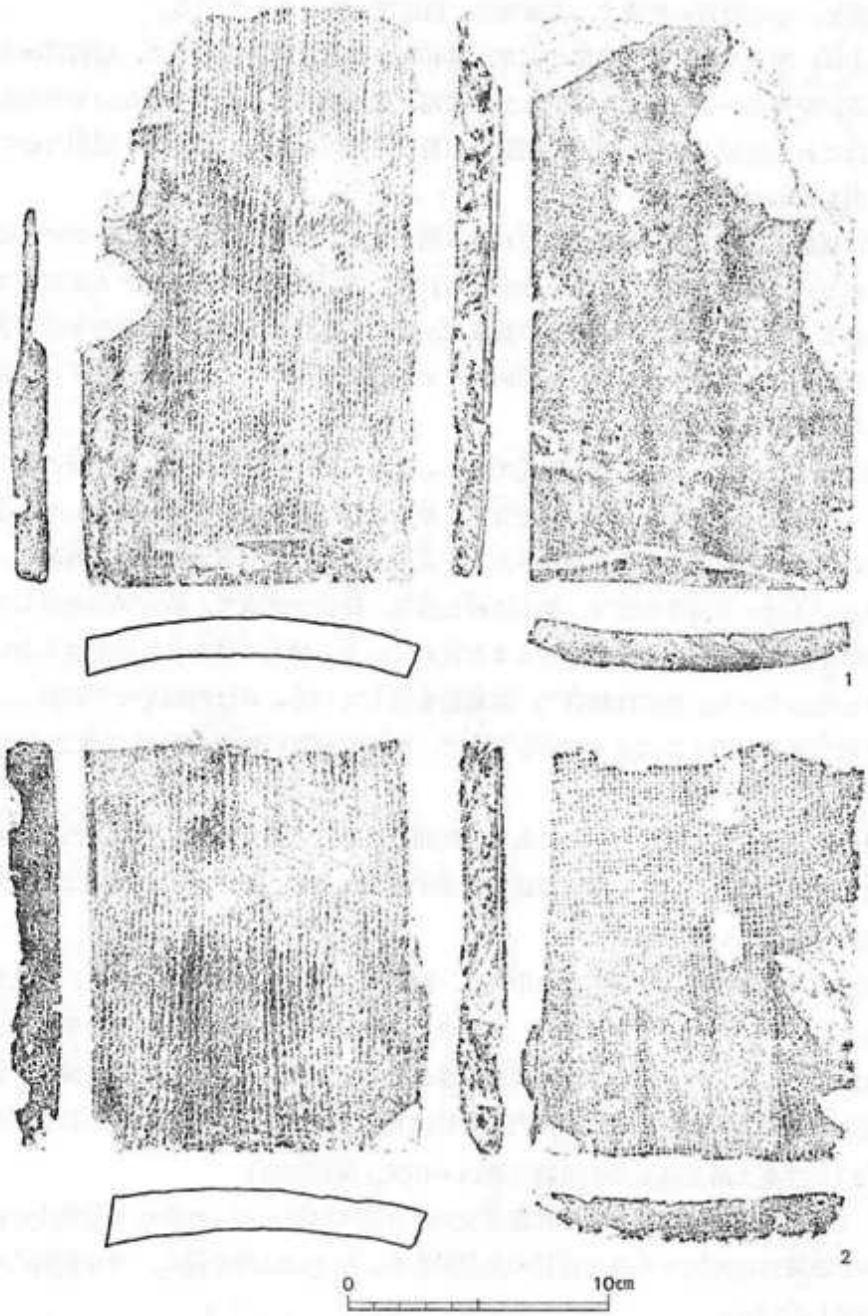
第42図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (1/3)

より布目が消されている。両者とも胎土に砂を含み，かなり硬質の焼成で，暗青灰色を呈している。

第39図2，第40図1は胎土や焼成等が第36図の丸瓦と同様で，造りが粗雑な感じを受けるこ



第43図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (2)



第44図　三条大路側溝Ⅳ出土遺物実測図 (2)

とも同じであるため，第33図6・7などの軒平瓦に対応するものと思われる。溝Ⅳ出土の平瓦の中では，この類が量的に最も多いものである。

第40図2の平瓦は凸面の縄目，凹面の布目とも細かいもので，布目の上は部分的にナデられている。胎土は緻密で砂をほとんど含んでいない。硬質の焼成で，表面黒色，内部灰白色を呈している。

3・4は凸面に平行条線文の叩きがなされた平瓦で，播磨産かとも思われる。いずれも胎土

には砂を混え，やや軟質の焼成で，表面黒色，内部灰白色を呈している。

第41図1は，胎土や造りなどが第39図2，第40図1の平瓦に近いもので，幅約17cmの小形の平瓦である。全形のわかる例はなかったが，狭端と広端の幅にあまり差のないものであろう。第41図2はこれと同類と見られるが，凹面の布目は平織ではなく，紋織で1辺約3mmの市松模様を織り出したものである。

第42図は播磨系の平瓦で，ほぼ全形のわかる例である。凹面，凸面とも指ナデによる調整がなされており，広端部も指ナデで丸く仕上げられている。狭端面と側面はケズリ調整である。胎土にはあまり砂を含まず，やや軟質の焼成で，灰色を呈している。播磨系の平瓦は溝内出土瓦の中ではある程度目立つもので，凹凸両面をナデ調整するものと，凸面はナデ，凹面は布目を残すものなどがある。

第43図1～3は讃岐産と見られる平瓦である。すなわち，凸面になされた扇状の縄目叩きが特徴となっている。胎土には大粒の砂を含み，やや軟質の焼成で，灰褐色を呈している。

4～6は凸面に斜格子文の叩きがなされた平瓦である。ただし産地はそれぞれ異なっていると思われる。4はやや薄手の瓦で，胎土に砂を含み，硬質の焼成で，暗青灰色を呈している。5はやや厚手の瓦で，凹面の布目は粗くまた乱れている。胎土にはあまり砂を含まないが，粘土は層状になっている。焼成は軟質で，暗褐色を呈している。6は凹面をナデ調整し，布目を消したものである。胎土にはあまり砂を含まず，かなり硬質の焼成で，暗青灰色を呈している。

7は丹波産と見られる厚手の平瓦である。凹面には布目と糸切り痕が残り，凸面は粗い縦方向の縄目叩きがなされている。胎土は砂を含まず緻密である。やや硬質の焼成で，表面灰色，内部灰白色を呈している。

第44図は熨斗瓦である。平瓦凹面の中央に，縦に深さ1～2mmの刻線を入れ，焼成後に半截して作られている。ただし平瓦は狭端，広端の差がないもののようで，凹面の側縁も面取りされていないため，はじめから熨斗瓦用に成形されたものと思われる。胎土や焼成などは第38図1の平瓦と同様である。熨斗瓦は溝Ⅳ内でも特にE・Fで出土した瓦類の中に目立った。

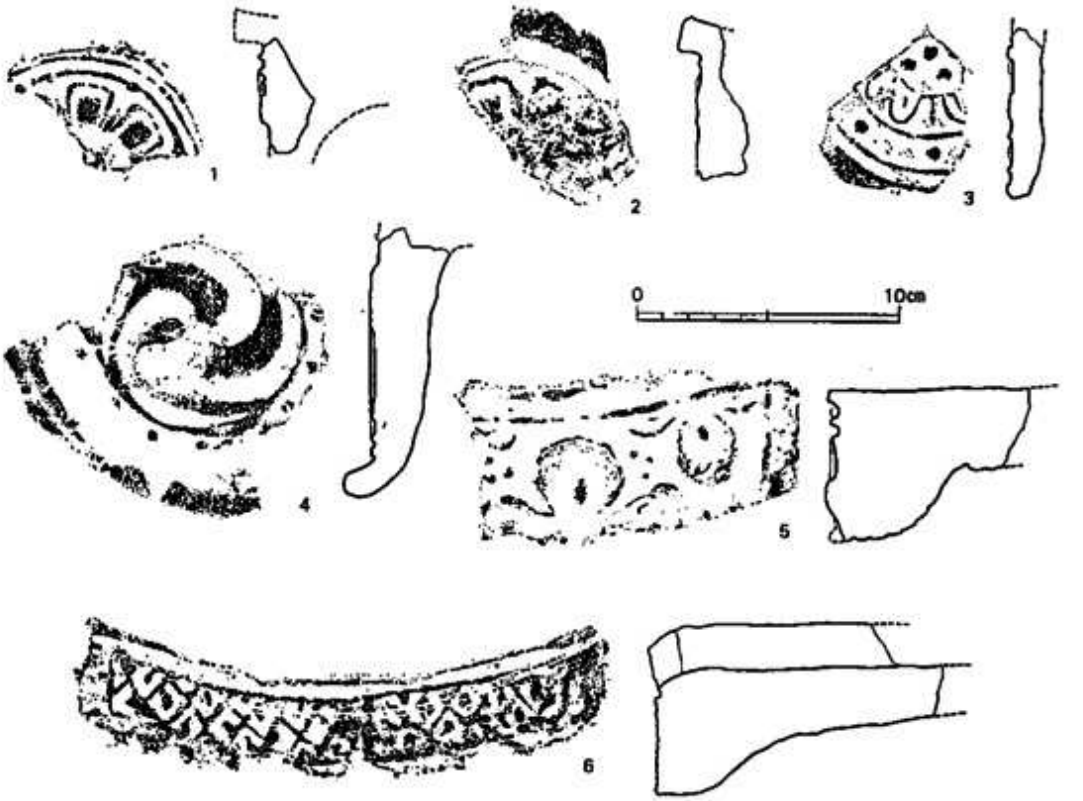
（2）　三条大路道路上出土遺物（第45・46図，図版第37）

〔瓦〕1はやや角ばった花弁の単弁蓮華文で，弁間には短く尖った棒状の弁間文を配し，花弁の周囲の圏線には弁間で小さな楔状の突起がある。胎土には砂を混え，やや硬質の焼成で，灰褐色を呈している。

2の文様は1とよく似たものであるが，少し花弁が不揃いになっている。胎土や焼成は1と同様である。

3は複弁5葉の蓮華文に復原できる。瓦当がかなり薄く造られた小形の軒丸瓦で，瓦当の外形は楕円形を呈すると見られる。瓦当裏面は指頭圧痕が顕著である。胎土にはあまり砂を含まず，やや軟質の焼成で，黒色を呈している。

4は右巻きの三つ巴文で，周囲に小粒の珠文を廻らせている。瓦当の周囲，裏面は指オサエ，ナデ調整がなされている。胎土，焼成などは1・2と同じである。



第45図　三条大路道路上出土遺物実測図（1）

5は京都府亀岡市の王子瓦窯産の丹波系宝相華文軒平瓦である。瓦当下端から平瓦部にかけて粗い縄目の叩きがなされている。胎土は緻密で，焼成はやや硬質，灰白色を呈している。

6は細かい斜格子の中にやや細長い珠点を入れたような幾何学文軒平瓦で，周囲には疎に小さな珠文を配している。成形はやや粗雑で，凸面には指オサエによる凹凸が目立つ。胎土，焼成などは1・2・4と同様である。他の遺跡からも2と6の同笵が伴出することが多く，これが組み合うものと思われる。

第46図1は上記の1・2・4に対応すると思われるやや小形の丸瓦である。凸面は縄目叩きがなされ，調整は加えられていない。凹面の布目は細かいものである。胎土には砂，小石を含んでいる。火を受けたらしく，赤褐色を呈している。

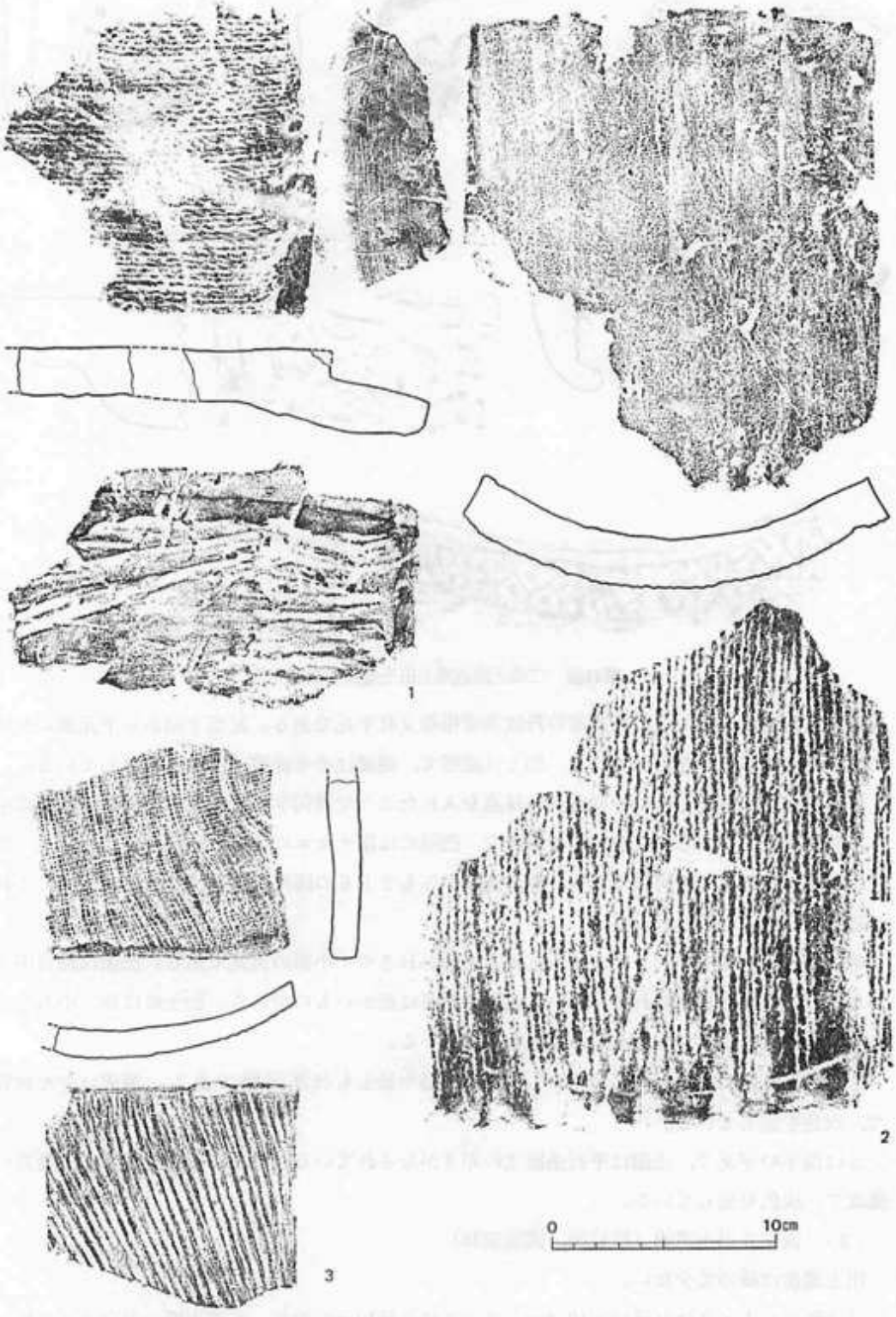
2の平瓦は第41図1と同じ規格のもので，整形や胎土もほぼ同様である。焼成はやや軟質で，灰色を呈している。

3は薄手の平瓦で，凸面は平行条線文の叩きがなされている。胎土には砂を含まず，硬質の焼成で，灰色を呈している。

（3）　溝東Ⅱ出土遺物（第47図，図版第38）

出土遺物は極めて少ない。

〔土師器〕1・2は口径12・10.8cm，3～5は口径10cmの皿で，底部内面一方向ナデの後，ヨコナデ。6は口径8.4cmの皿で，底部内面中心からナデアゲ。7・8は口径8・7.6cm，9～



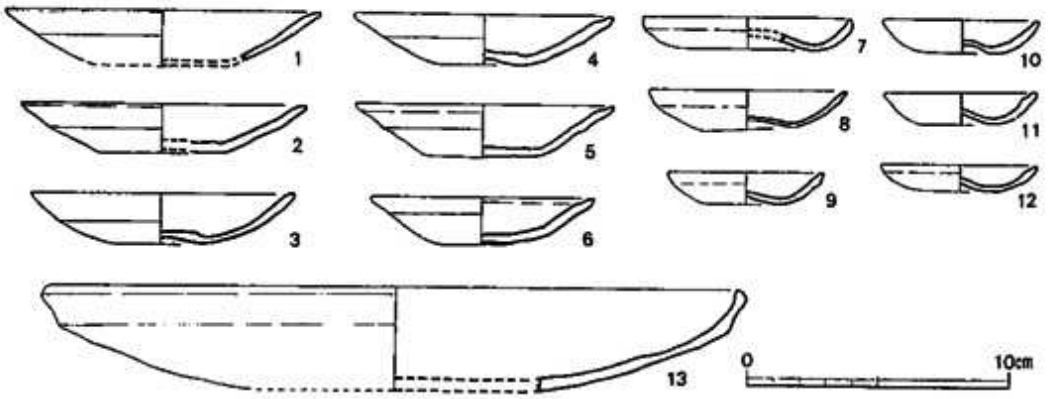
第46図　三条大路道路上出土遺物実測図 (2)

12は口径６cm前後の手捏の皿で，底部は上げ底。13は復原口径30cmで外面にススが付着していて，いわゆる焙烙の機能を有したものであろう。

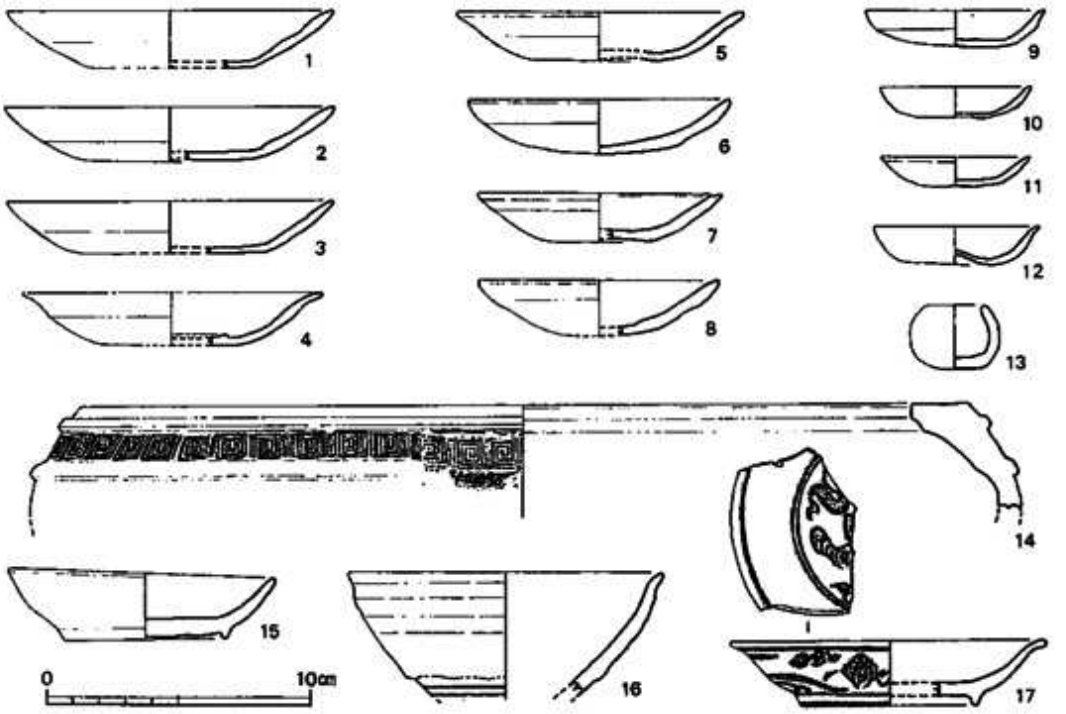
（４） 溝東Ⅰ出土遺物（第48・49図，図版第38）

出土遺物は極めて少ない。

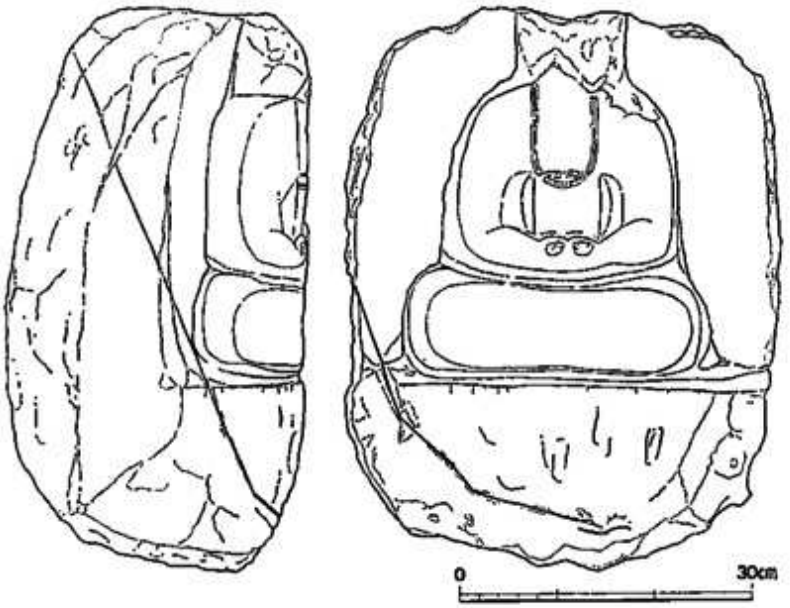
〔土師器〕１～３は口径12.4cm，器高２cm前後の皿で，口縁部がやや内傾気味のもの。４・５は口径11.5cmの皿で，口縁部が外反するもの。以上は底部内面一方向ナデの後，ヨコナデ。６～８は口径9.2～10cmの皿で，底部内面中心からナデアゲ。９～12は口径5.8～6.8cmの手捏の皿。13はミニチュア壺。



第47図　三条大路側溝東Ⅱ出土遺物実測図



第48図　三条大路側溝東Ⅰ出土遺物実測図



第49図　三条大路側溝東Ⅰ石組使用石仏実測図

〔瓦器〕14は復原口径34cmの火鉢で，口縁部に上下を凸帯で画した雷文を押捺する。

〔陶器〕15は美濃の灰釉小皿。16は美濃の天目茶椀で，底部素地に化粧掛けを施す。

〔中国陶磁〕染付(第48図17)は端反りの皿で，外面は口縁下と腰部に界線，胴部に唐草文が，内面は内口縁に界線，見込みに玉取獅子が描かれている。

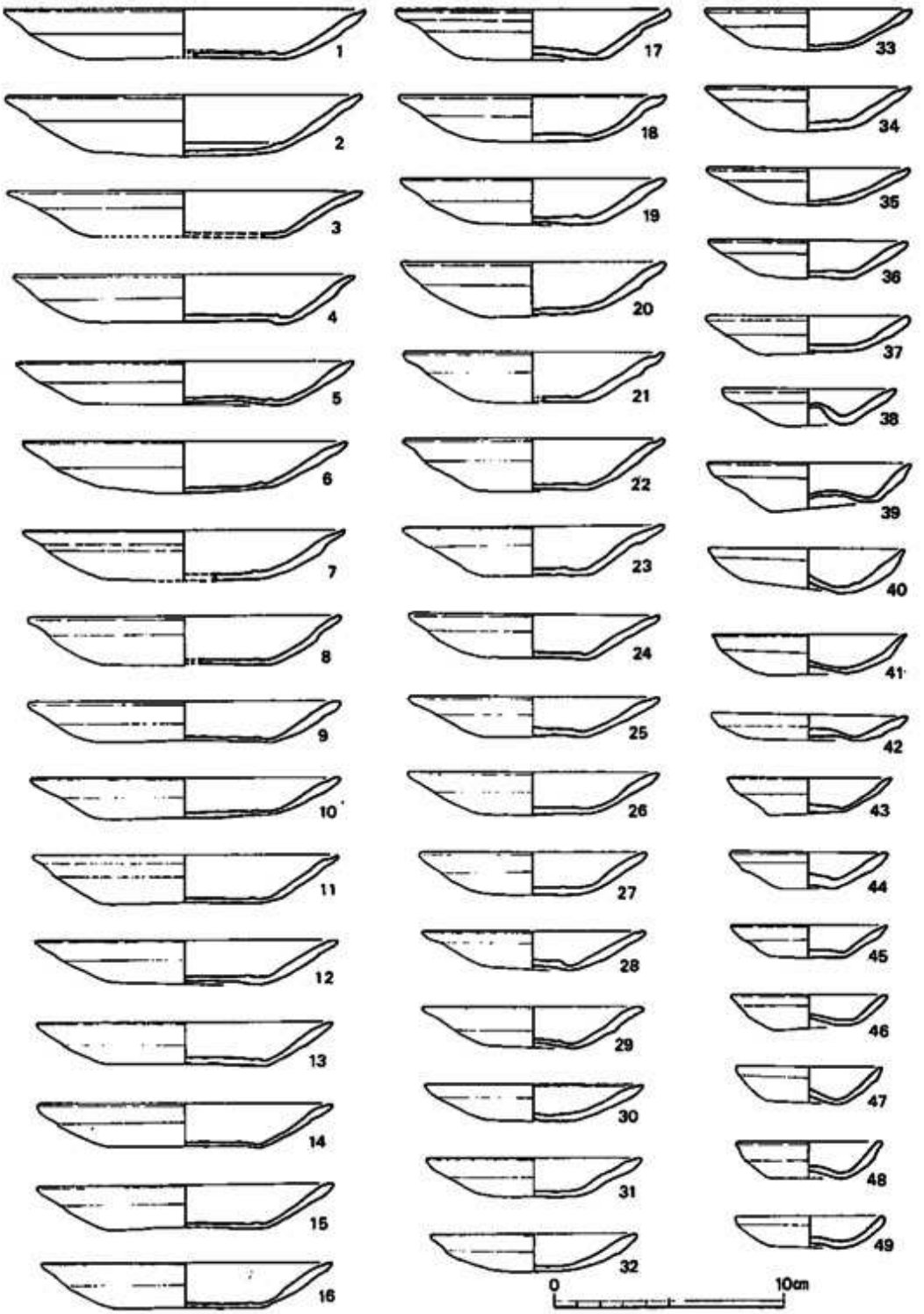
畳付は露胎で砂が付着している。

〔石製品〕第49図は溝の石組に使用されていた花崗岩製の定印を結ぶ如来形の石仏。頭部が欠け，背面には火を受けた痕跡がある。

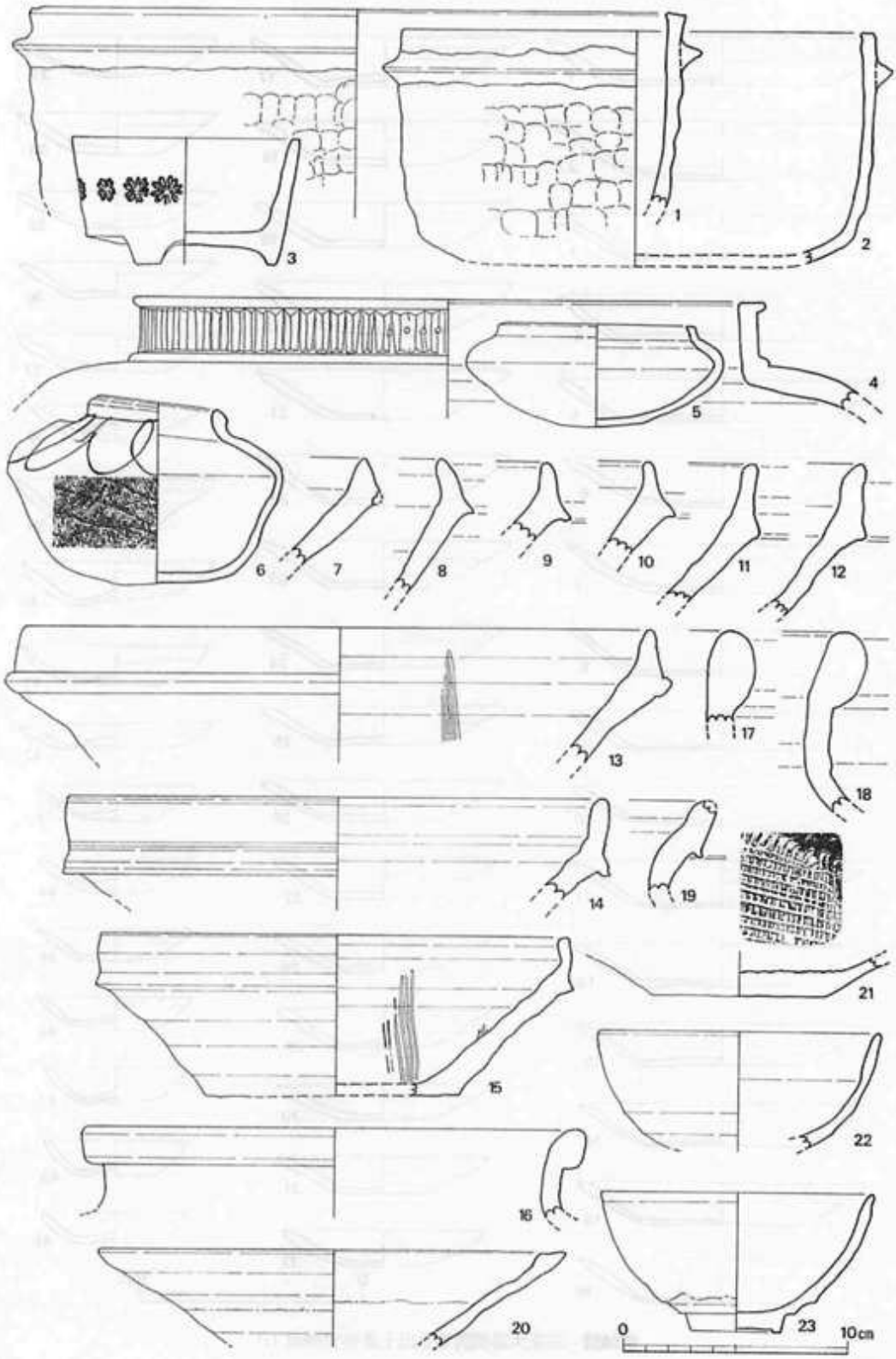
（5） 溝Ⅲ B出土遺物（第50～58図，図版第39～43・61）

〔土師器〕第50図１～16は大形の皿で，底部内面一方向ナデの後，ヨコナデ。このヨコナデによって内面に若干の隆起線が円形に，それも底部と体部との境に近いところに廻る。これらの皿は灰色ないしクリーム色を呈し，大きな砂粒を若干混えるものもあるが，胎土は極めて精良なものが多い。また，そのほとんどはスリップ掛けを行っているようである(この傾向は，手捏品以外の皿に認められる)。器高は1.8～2.2cmに収まるが，口径によってさらに大きく４つに分けられる。１～３は15.4～15.8cm，４～７は14～14.6cm，８～10は13.5cm前後，11～16は13cm前後のものである。17～29は前者と色調・胎土・製作手法は同じであるが，やや小形で，ヨコナデによる隆起線が底部の中心寄りにあるもの。これらの皿の口縁部には焦げ痕のあるものが多い。これは口径の違いによってさらに大きく３つに分けられる。17～23は11.4～12cm，24～26は11cm，27～29は9.6～10cmである。30～37は，胎土・色調は前２者と似ているが，製作手法が若干異なる。底部内面の中心からナデアゲて，内面中心を指先で少々ナデたものである。口縁部に焦げ痕をもつものが多い。口径8.9～9.4cm，器高1.6～２cm。38はヘソ皿。39～49は，以上の皿と色調や胎土が異なり，色調は褐色を呈し，作りが粗雑で，口縁部のゆがみが著しい。底部が上げ底のものがほとんどである。これは口径によって大きく２つに分けられ，39～42は口径8.5cm前後，43～49は口径6.4～７cm。

〔瓦器〕第51図１・２は羽釜で，鍔は断面三角形で粗雑な付け方となっている。外面指オサエ，内面ハケ調整。３は香炉で菊花文を押捺している。４は復原口径28cmの火鉢で，胎土は淡



第50図　三条大路側溝ⅡB出土遺物実測図 (1)

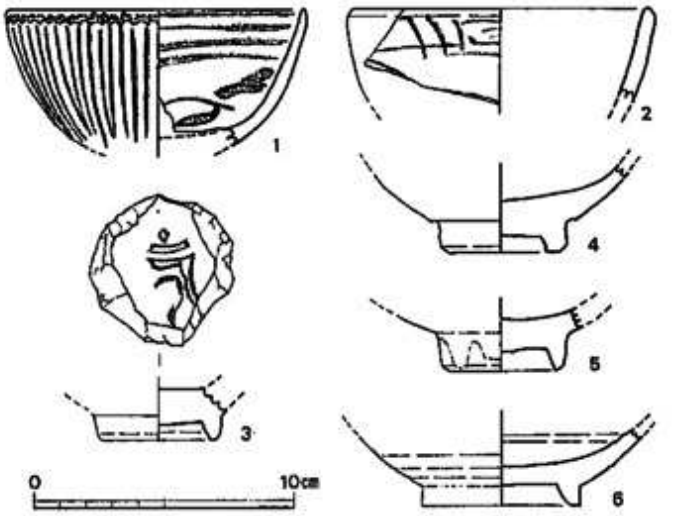


第51図　三条大路側溝ⅢB出土遺物実測図 (2)

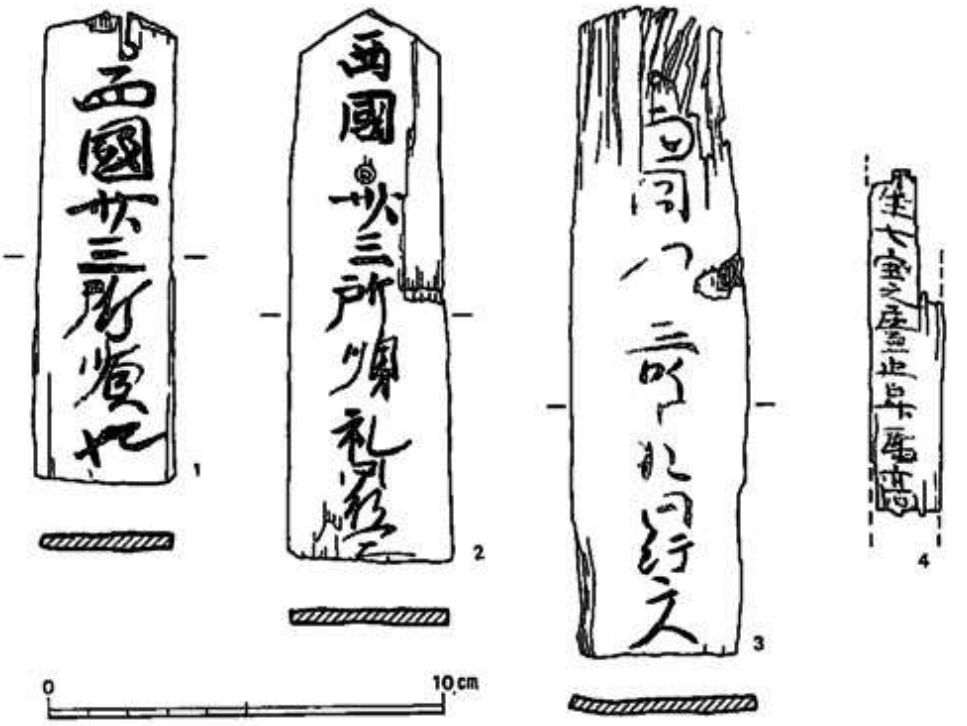
褐色のやや堵質のもので，蓮子状の立体的な文様をヘラで作出。胴部に穴があいていたようである。5・6は小壺で，5は土師質の焼きのもので，炭素の吸着は行われていない。6は肩部に細い螺旋文を入れていて，胴部には掌紋圧痕が残る。

〔陶器〕7～15は備前擂鉢で，口縁部形態には種々のものがある。16は備前壺。17・18は備前大甕で，玉縁口縁はやや扁平なものである。19は口縁部が常滑風であるが，内外面とも赤褐色を呈し，石英粒を多く含む。20は美濃の灰釉平鉢，21は美濃のおろし皿，22は美濃の灰釉丸椀，23は美濃の天目茶椀で，底部素地には化粧掛けを施す。全体に丸味があり，口縁部の屈曲が少ない。

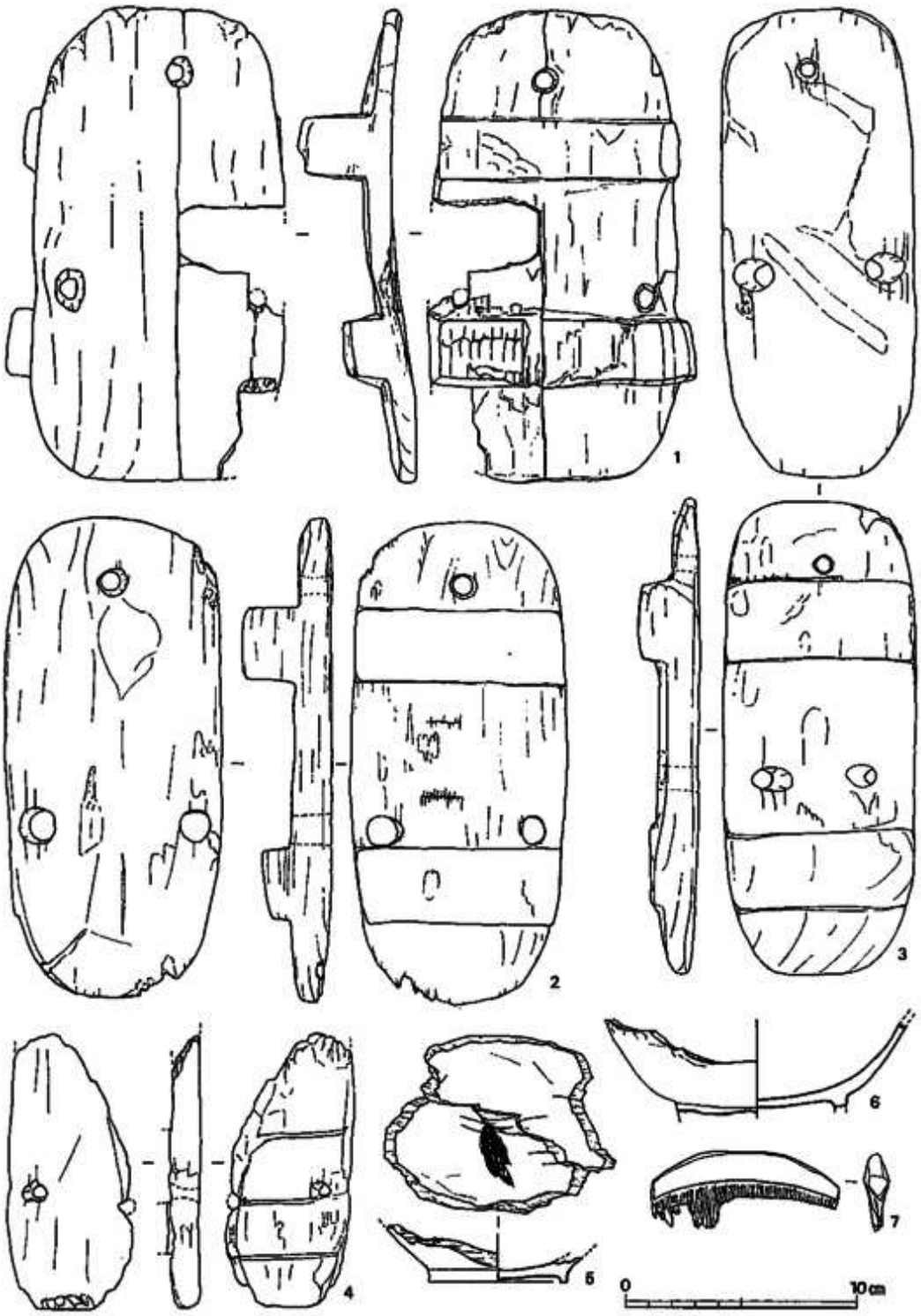
〔中国陶磁〕青磁(第52図1～5)はいずれも椀で，1は丸味を持った体部に緑色の厚い釉がかけられている。外面には線描きの細蓮弁が，内面には花文が表わされている。亀井氏のい



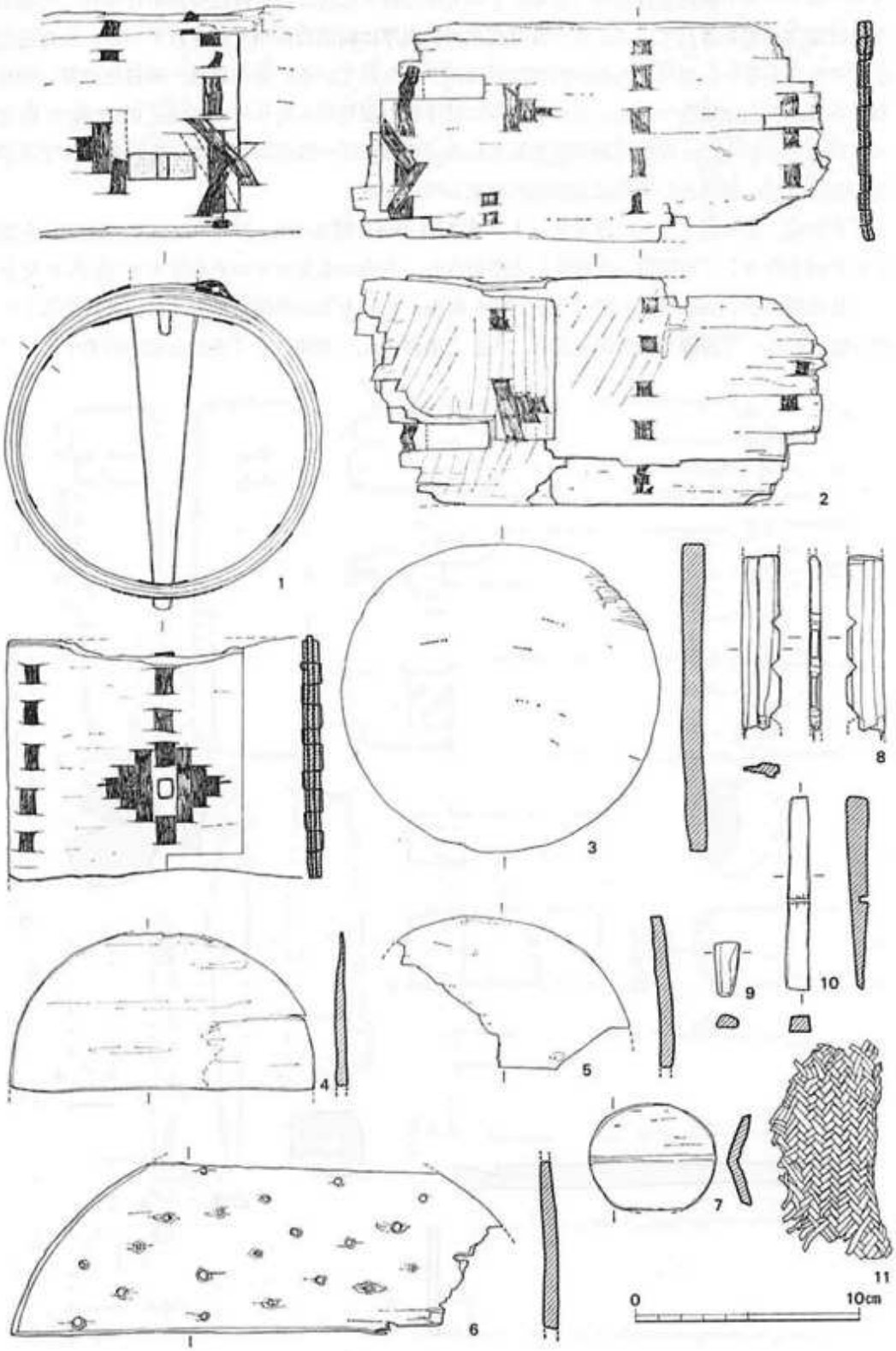
第52図　三条大路側溝ⅢB出土遺物実測図 (3)



第53図　三条大路側溝ⅢB出土遺物実測図 (4)



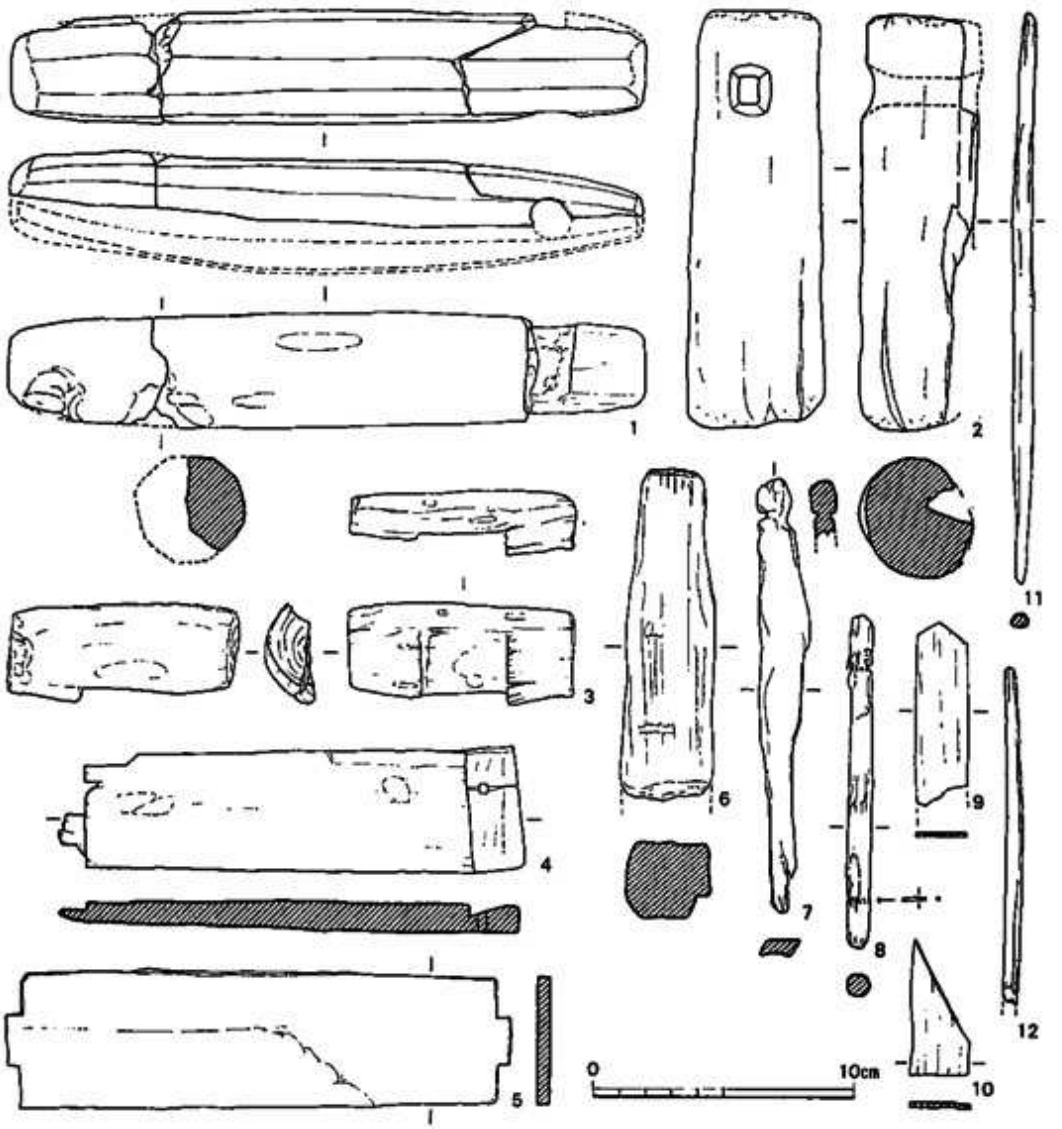
第54図　三条大路側溝ⅢB出土遺物実測図 (5)



第55図　三条大路側溝ⅢB出土遺物実測図 (6)

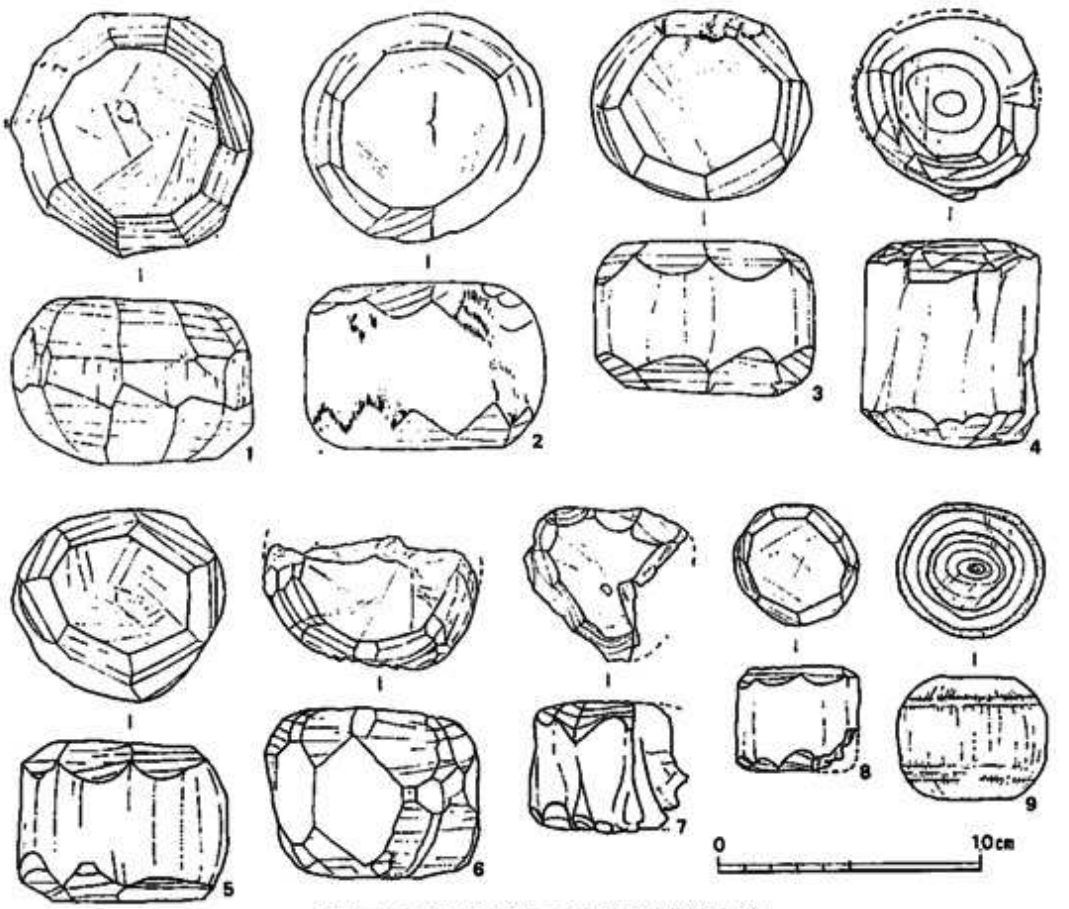
うB—Ⅱタイプの細蓮弁青磁椀である。2は丸味を持った体部に青緑色の釉が付され，外面上部には蓮文が廻らされている。3～5は底部で，肉厚に輪高台が削りだされている。また底部付近の器肉も厚い。畳付から高台内部の釉は削りとられている。淡黄緑色～灰緑色の厚い釉がかけられ，胎土は灰色である。3は見込みに梵字風の記号がみられる。白磁(6)は椀の底部で，灰白色の胎土に，同色の釉が発色している。内面には一段が画されている。釉は体下半部までに付され，露胎との境目は赤褐色に発色している。

〔木製品〕第53図1～3は巡礼札。1は長さ11.9cm，幅3.4cm，厚さ0.4cmで，上方は圭頭状に作出される。『西國卅三所順礼』と墨書され，上方に中央よりやや右寄りに孔が穿たれる。2は長さ14.1cm，幅(下端)4.3cm，厚さ0.5cmで，上方は両側から斜めに切られ尖るように作出される。『西國卅三所順礼同行二人』と墨書され，『國』と『卅』との間が若干あいて

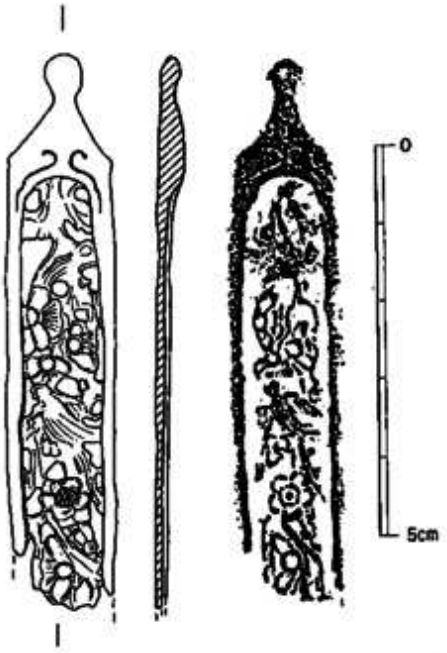


第56図　三条大路側溝ⅢB出土遺物実測図(7)

いて，ここに裏から孔が穿たれる。3は長さ16.6cm，幅(最大)4.5cm，厚さ0.4cmで，上方は尖り気味に作出される。墨書は大分かすれているが，2と同じく『西國卅三所順礼同行二人』とある。これは上方の中央に孔が穿たれる。4は柿経の断片で，現長8.9cm，現幅1.9cm，厚さ0.5mm。『[身]生七宝之臺上昇虚高』の墨書がみられ，これは『法華経』巻二十四，妙音菩薩品の中にある。第54図1～4は下駄で，総て連歯式のものである。4は小児用。5・6は漆器椀で，5は内外面黒漆で，見込みの文様は朱漆。6は内面朱漆，外面黒漆。7は櫛。第55図1は柄杓で，口径14cmである。1枚の板材で3重に巻き，柄のさしこみ部を桜皮で補強し，他に4ヶ所を桜皮で縫い合わす。2は曲物片，3～5は曲物底で，6は穴があけられているので，桶の底部と思われる。7は小形の曲物底か。8は三角形の切り込みが入れられているが，えぶり形木製品にしてはその間隔が密でない。9は栓，10は楔形木製品。11は編物の一部，第56図1は面取りして両端をやや幅狭にし，一端に穿孔している。2は円柱状の一端に方形の穴をあけていて，1とともに織物用の重りか。3は木槌。4は両端が加工された長方形板で，5は柄を作出している。6はほぼ方形の棒状のもので，一端はすぼまっている。7は一端に抉りが入る。8は円柱状で一端寄りに極細の木釘がうたれている。9・10は薄板の加工材，11・12は箸。第57図は木球で，1～6は大形，7は楕円形のもの。8・9は小形。技法的には，9は



第57図　三条大路側溝ⅢB出土遺物実測図 (8)



第58図　三条大路側溝ⅢB出土遺物実測図(9)

回転ケズリによっているが，他はノミで面取りしている。

〔金属器〕第58図は銀製のかんざし頭部で，花鳥文を彫金している。

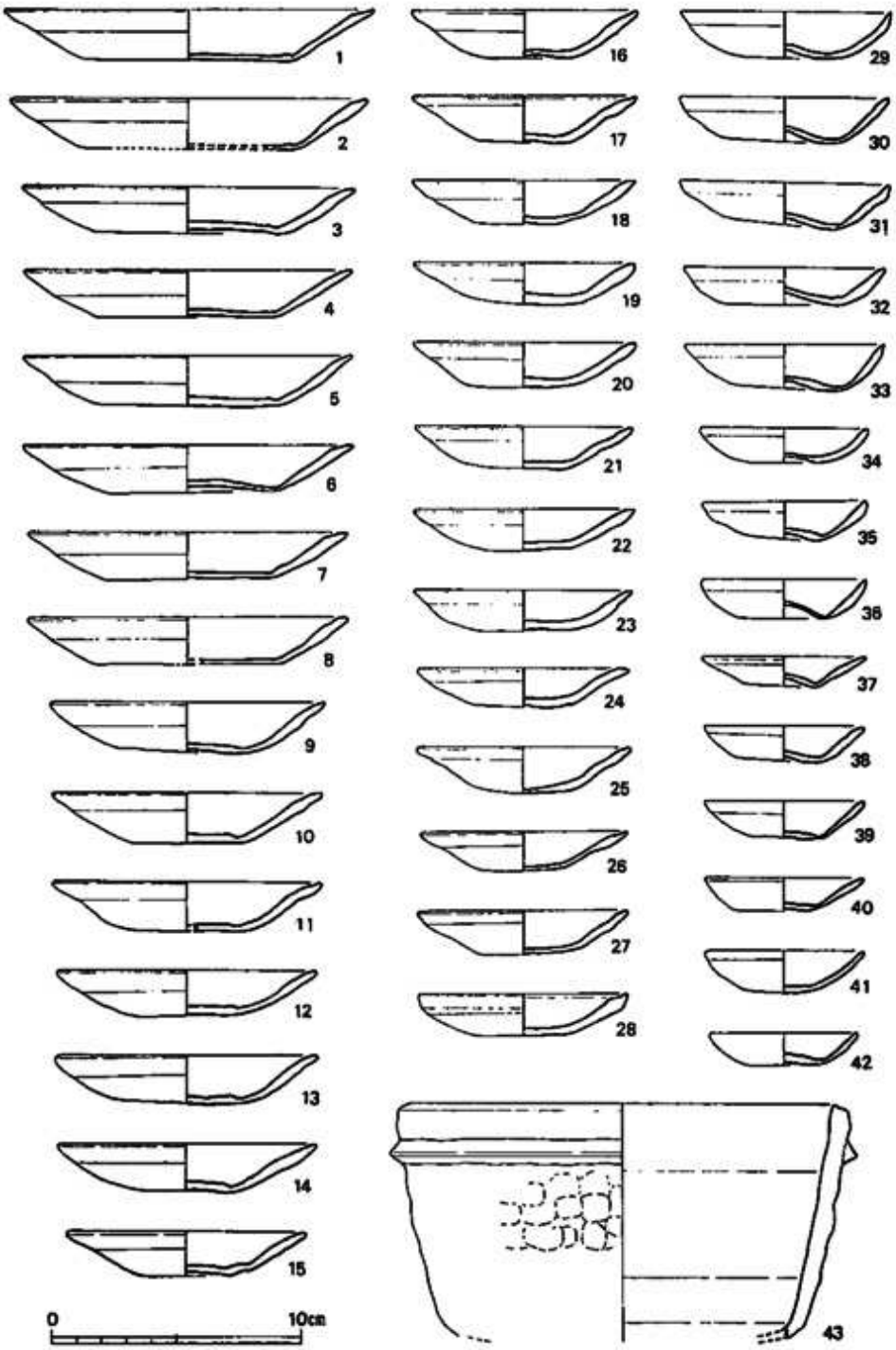
（6）溝ⅢA出土遺物（第59～61図，図版第44・45）

〔土師器〕第59図1～8は大形の皿で，底部内面一方向ナデの後，ヨコナデ。溝ⅢB出土の大形の皿と比べると，まずスリップ掛けはしないようで，そして底部内面に生ずる隆起線は小さく，底部と体部の境近くにあるものが多い。口径によって大きく2つに分けられる。1・2は14.4～15.8cm，3～8は12.8～13.4cm。9～17は前者と色調・胎土・製作手法は同じであるが，やや小形で，底部と体部の境付近が凹むものが多く，スリップ掛けもしないようである。口径により大きく2つに分けられる。9～14は口径10.4～10.8cm，15～17は口径9～9.6cm。18～28は底部内面の中心からナデアゲて，内面中心を指先で少々ナデたもの。口径8.4～9cmで，口縁部に焦げ痕のあるものが多い。29～42は手捏の皿で，口径によって大きく2つに分けられる。29～33は口径8～8.5cm，34～42は口径6～6.8cmで，上げ底のものが多い。溝ⅢBのものと比べると，溝ⅢBのものはまだ口縁部肥厚の残滓を残しているが，溝ⅢAのものはそれから脱皮しつつある傾向がみられる。

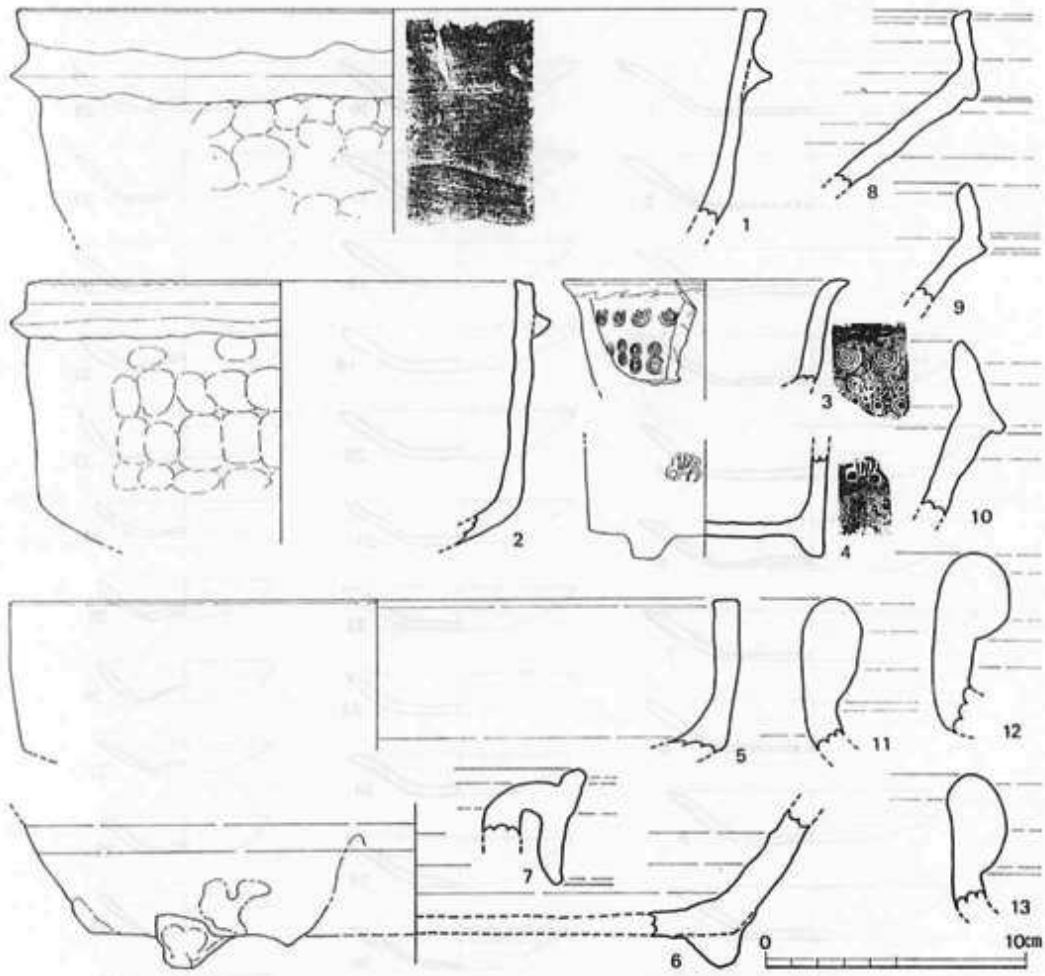
〔瓦器〕第59図43，第60図1・2は羽釜で，外面指オサエ，内面ハケ調整。3・4は香炉。5は盤。

〔陶器〕8～10は備前擂鉢の口縁部で，溝ⅢBよりは新しい傾向のものが多い。11～13は備前大甕口縁部で，玉縁口縁は扁平になる。7は常滑大甕，6は胎土茶褐色のやや軟質の焼きで，鉄釉をかける。美濃か。

〔中国陶磁〕青磁(第61図1～10)は，1・2が丸味を持った厚手の体部に，丈のやや高い輪高台がつく椀。釉は青緑色で，全面にかけられているが，高台内面は中央を残して，周囲を環状に削っている。外面は口縁下に丸味を持った波状の沈線を入れ，その谷や山から下方に縦沈線を下ろし，B－Ⅱ[1]の細蓮弁を表現している。1の見込みには印字があり，そこから外方に向かって箆描きの捩り花文が表現されている。この蓮弁は4本の長線と3本の短線が交互に組み合わされている。4～9は椀の底部で高台は厚めの器肉になっている。高台の高さには，高(3・4・6～8)，低(5・9)の2種類があり，釉を高台内面全部を削るもの(3・7・9)と中央を円点状に残すもの(4・5・6・8)とがある。7には『文』，『処』，『久』などと読める後刻の字がある。見込みには印花，印字を持つものがある。3には『玉』，4には『願氏』とあり，5にも文字があるが読みとれない。10は腰折の稜花劃花文皿である。灰色胎土に緑色の



第59図　三条大路側溝ⅢA出土遺物実測図 (1)



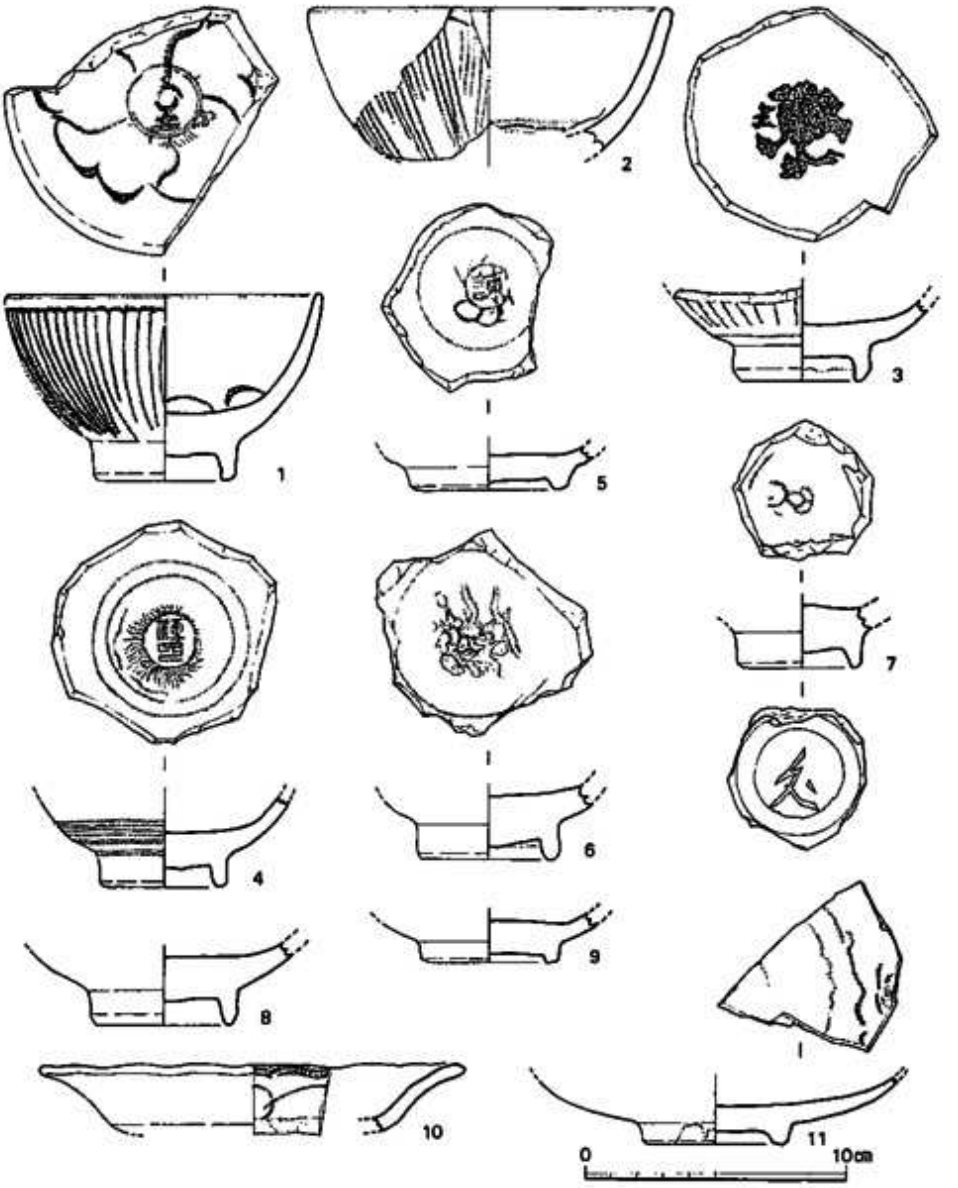
第60図　三条大路側溝ⅢA出土遺物実測図 (2)

厚釉がかかり，貫入がみられる。第61図1は白磁。

（7） 溝西Ⅱ出土遺物（第62～66図，図版第46～48）

〔土師器〕第62図1～3は，底部内面一方向ナデの後，ヨコナデで，底部から体部への屈曲の強いもの。口径は各々14.8・13・12cm。4～10は前者と同じ手法であるが，底部からわりと丸く登っていくもの。口径により大きく2つに分けられる。4～6は11.4～11.8cm，7～10は9.6～10.6cm。また4・6・10の底部から体部への屈曲部は5mm幅の棒様のものでナデあげたかにみえる。11～16は底部内面中心からナデあげ，中心を指先で少々ナデた皿で，口径8.8～9.3cm。17～28は手捏で，口径により大きく2つに分けられる。17・18は8cm前後，19～28は5.4～6.8cm。29はミニチュア壺。30は焙烙で，体部外面はケズリ。

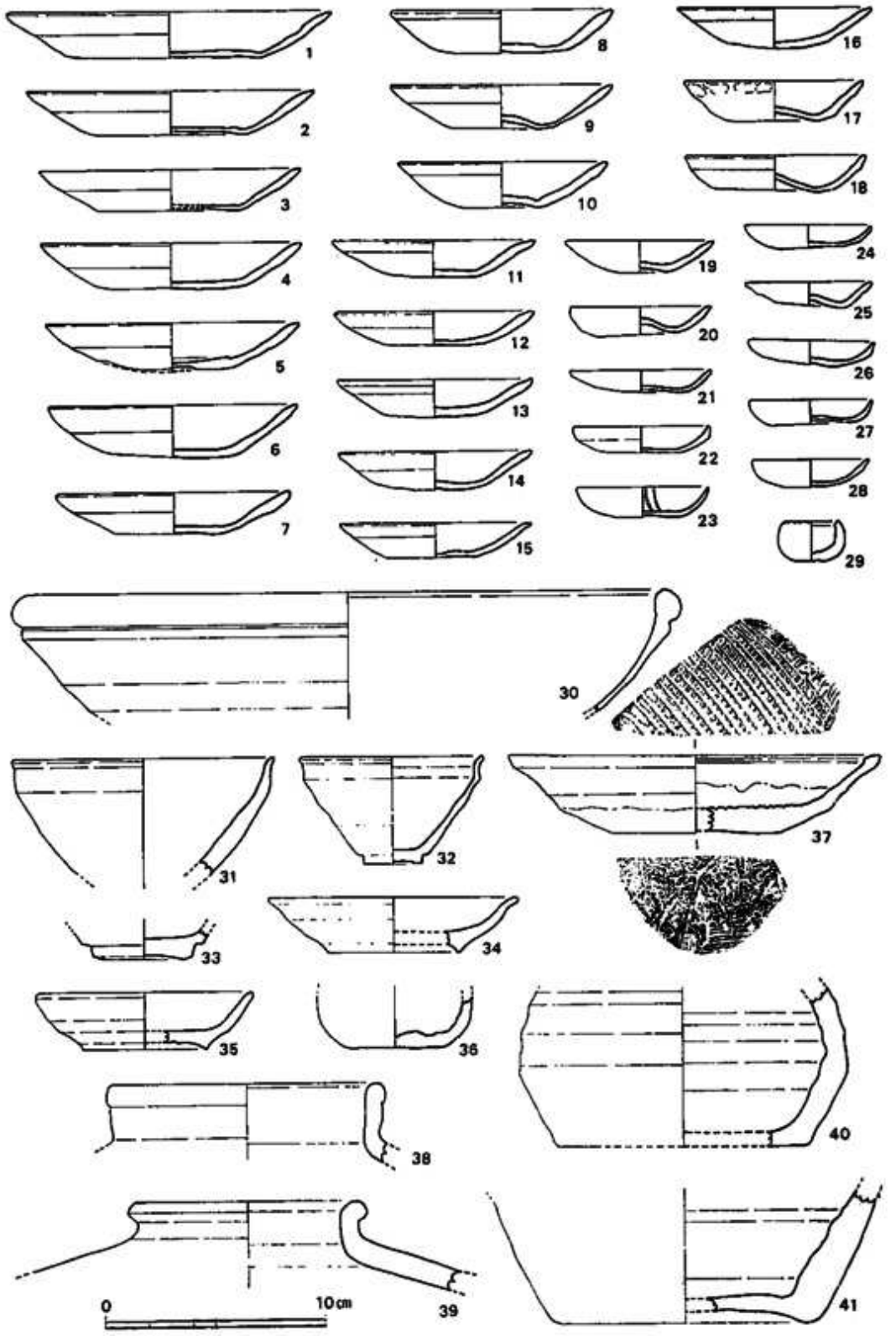
〔陶器〕31・33は美濃天目茶椀。底部に酸化鉄の化粧掛けを行う。32は美濃小天目茶椀で，底部に酸化鉄の化粧掛けを行う。口縁部の屈曲は強い。34・35は美濃の灰釉皿。36は美濃の灰釉小壺か。37は美濃の灰釉おろし皿で，底部に糸切り痕が残る。38・39は備前の壺。40・41は備前の壺底部。第63図1～4は備前擂鉢。5～8は備前甕。9は備前の水甕か水指。10は常滑



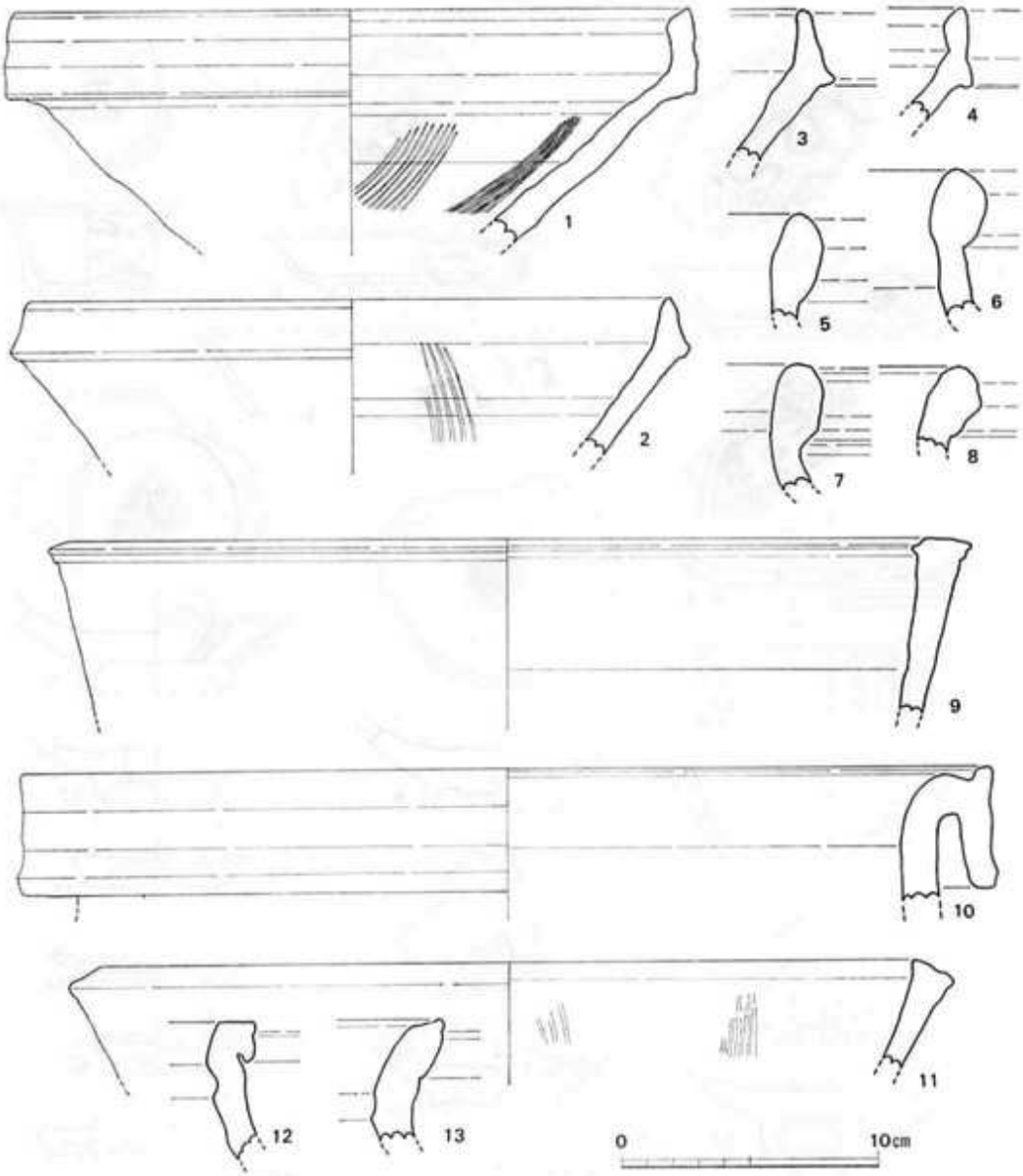
第61図　三条大路側溝ⅡA出土遺物実測図 (3)

大甕。12は胎土は淡灰褐色，外面淡赤褐色で，石英粒を多く含み，信楽か。13は胎土は褐色で，内外面とも褐色。11は胎土は灰色で，外面褐色，内面赤褐色。

〔中国陶磁〕青磁(第64図6～12・15～17)は，6・7・11が細蓮弁文B—Ⅱの椀。8～12は椀の底部で，釉は畳付内側まで施されている。高台内面は釉を完全に削りとるもの(8)と中心を残すもの(9・10)とがある。高台は器肉が厚く，高い。見込みには印花を刻すものがある(8・9・10・11)。15は高台幅4.0cmと狭く，底部や高台も肉薄である。皿か。16は花瓶形をなしている。灰白色の胎土に厚い濁緑色の釉がつく。畳付は露胎になっている。17は鎬文有蓋壺の脚部で，釉着した嵌め込み式の底の一部が残っている。脚端の釉は欠きとられ，その部分は茶褐色になっている。白磁(第64図13・14・18～20)は，13が椀の底部で，見込みを中におい

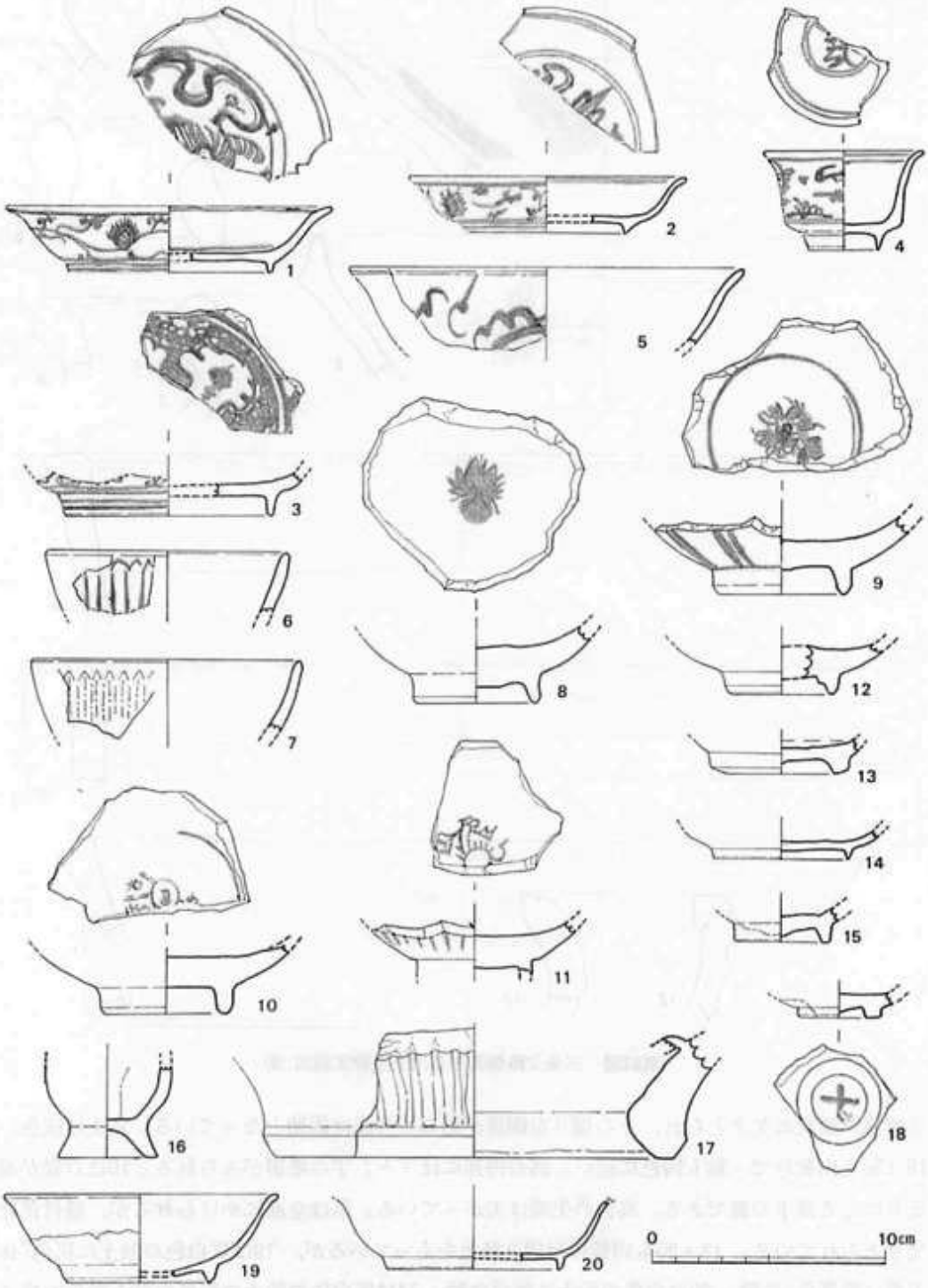


第62図　三条大路側溝西Ⅱ出土遺物実測図 (1)

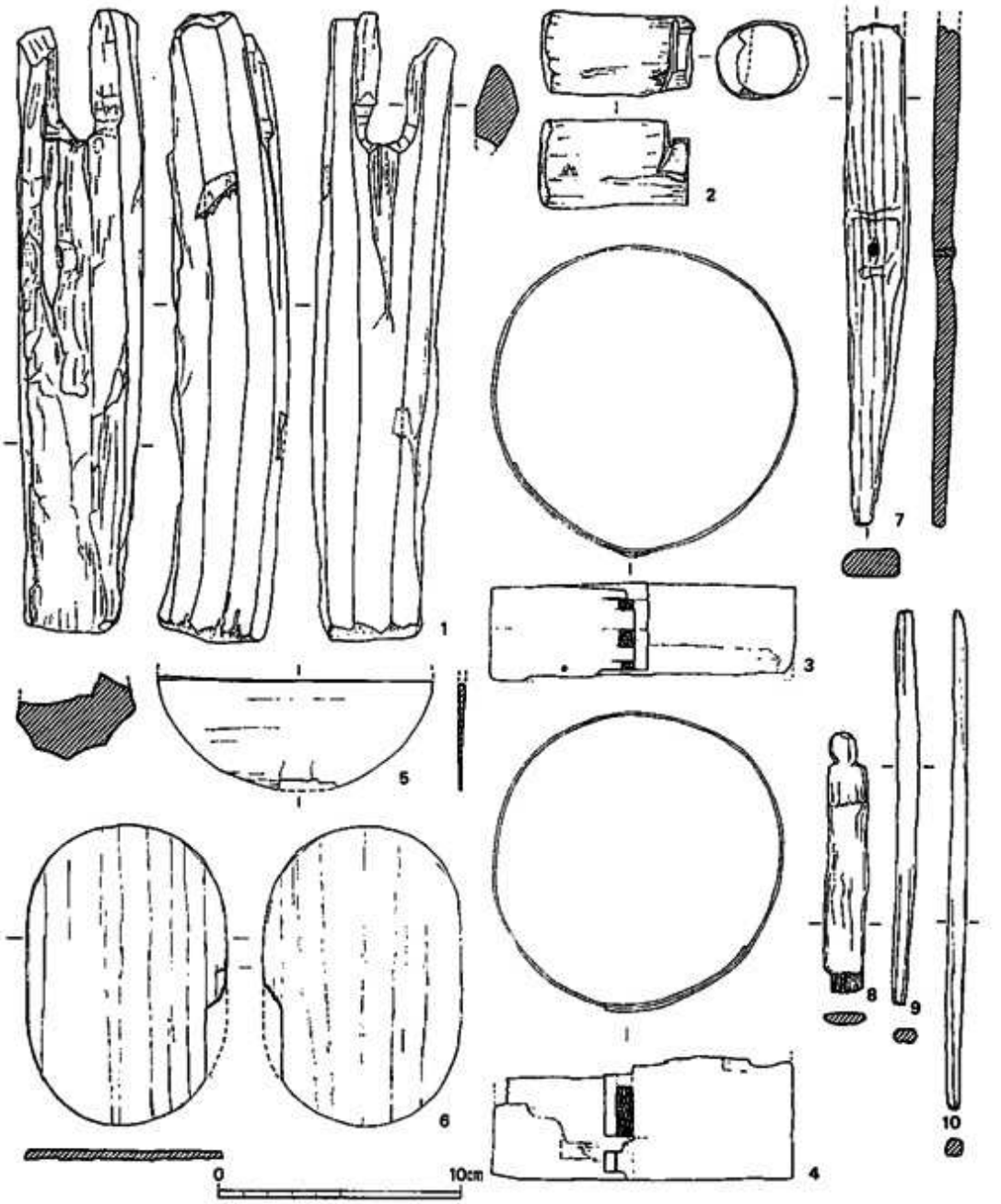


第63図　三条大路側溝西Ⅱ出土遺物実測図 (2)

て周囲が輪状に欠きとられ，その周りを圏線が廻る。外面は露胎となっている。胎土は灰色。18は胎土白黄色で，釉も同色に近い。高台内部には『＋』字の墨書がみられる。19は口縁が端反りになる薄手の皿である。高台の先端は尖がっている。釉は全面にかけられるが，畳付部は欠きとられている。13・20も同様の形態と特色をもっているが，19は灰白色の胎土に灰色(体下半は淡褐色)の釉，20は白色の胎土に純白の釉，14は灰白色の胎土に緑色の釉と釉色を異にしている。14は青磁と呼ぶべきものか。染付(第64図１～４)は，１～３が皿で端反り口縁をなす。２は外面の上(口縁下)下(腰部)に界線を廻らし，その間に唐草文を配す。内面は口縁内側に界線をまわし，見込みには圏線の内側に十字花文を描いている。直径12.2cm。１は外面には

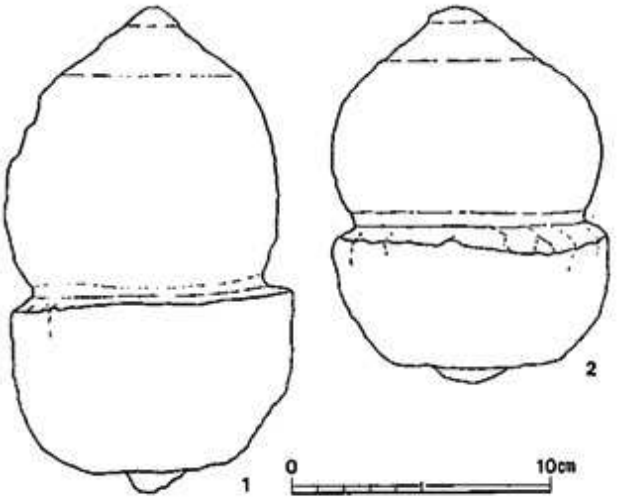


第64図　三条大路側溝西Ⅱ出土遺物実測図 (3)



第66図　三条大路側溝西Ⅱ出土遺物実測図 (4)

2と同様，上下の界線とその間に唐草文があり，内面には，口縁に界線，見込みには玉取獅子が配されている。直径14.3cm。3は底部で，外面には渦状の密な唐草文，内面見込みにはアラベスクが配されている。3の胎土は淡褐色軟調の粗胎で焼きしまりが悪く，釉着も悪い。各所に釉ぶくれや，剝落がみられる。これらの皿は小野正敏氏が染付皿B1群としたもので[2]，2はⅥ，1はⅦ，3はⅧ類にそれぞれ相当する。4は杯で，口縁が外反し，胴下部が腰折になっている。畳付は釉が欠きとられ露胎になっている。外面は口縁と胴下部に界線を廻し，その間



第66図　三条大路側溝西Ⅱ出土遺物実測図 (5)

には花樹が描かれ，内面には内口縁に界線，見込みに梵字が表わされている。

〔木製品〕第65図1は面取りした棒状のもので，片方に穿孔する。2は木樋様の製品。3・4は曲物で，3は4の中に入って出土しているので，2段重ねの曲物と思われる。5・6は曲物底板。7は中央に釘がうたれる。8は一端にえぐりがある。9・10は箸。

〔石製品〕第66図は五輪塔の空風輪で，花崗岩製。

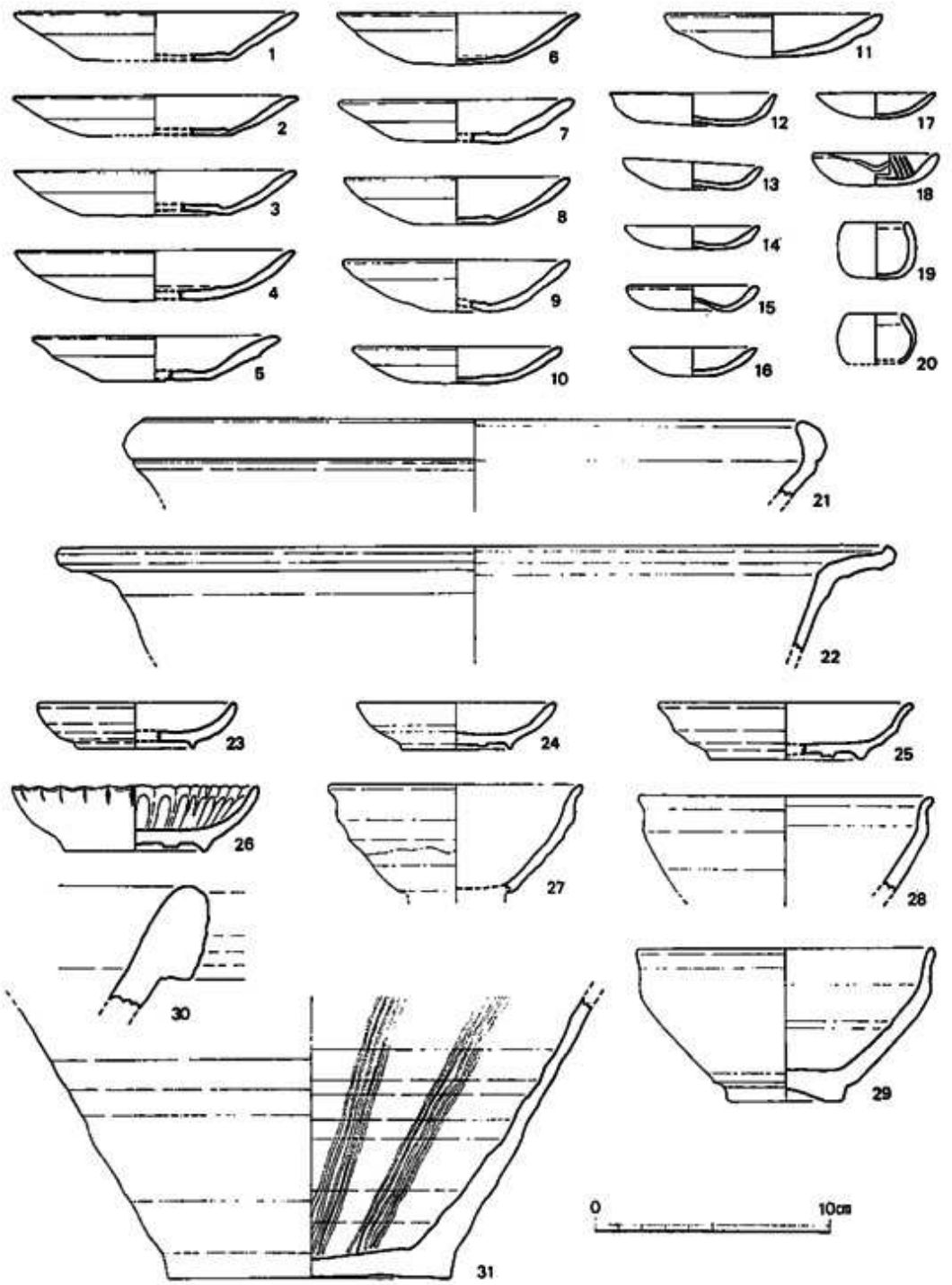
（8） 溝西Ⅰ出土遺物（第67～69図，図版第49）

〔土師器〕第67図1～4は，底部内面一方向ナデの後，ヨコナデの皿で，口径11.8～12.1cm。3は口縁部に焦げ痕があり，4は内面に沈線が廻る。5～9は前者と同じ手法で，口径9.8～10.4cm。10・11は底部内面中心からナデアゲ，中心を指先で少々ナデた皿で，口径9cm前後。12～18は手捏の皿で，12は口径7cm，13～18は口径5～6cm。18は片口で，櫛目を内面に入れる。19・20はミニチュア壺。21・22は焙烙で，21は体部外面ケズリ。

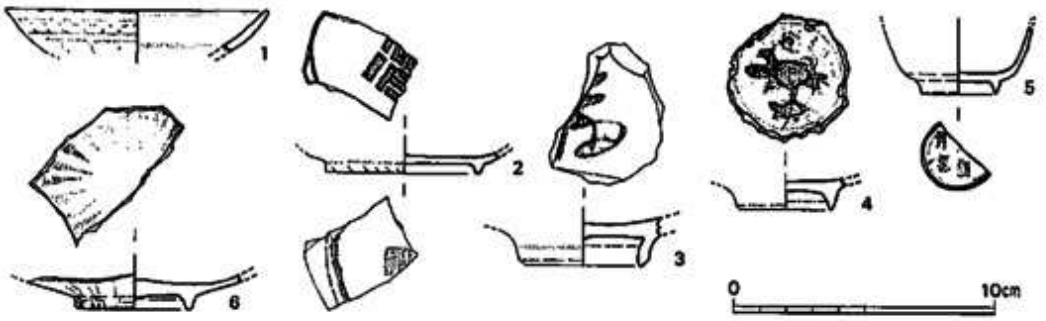
〔陶器〕23～25は美濃灰釉皿。24・25はトチが付着。26は美濃の灰釉輪花皿で，トチが付着。27～29は美濃の天目茶椀で，27・29の底部外面は化粧掛けを行う。30は備前大甕口縁部で，断面赤褐色，外面は暗褐色。31は擂鉢で，淡褐色で，石英粒を多く含む。

〔中国陶磁〕染付(第68図1～5)は1・2が皿で，1は口縁が内湾し，口縁下に波濤文帯が廻っている。その下方には芭蕉葉文か何かの先端部が残っている。底部は『蛇ノ目底』をなすものであろう。2は輪高台を持った皿で，見込みと高台内面に『福』字がみられる。畳付周辺には多量の砂が付着している。3・4は椀で，3は見込みに『福』字があり，外底は畳付より内側は露胎となっている。4は見込みに花文がみられる。5は杯。高台に『大明祥[年]造の』銘がみられる。

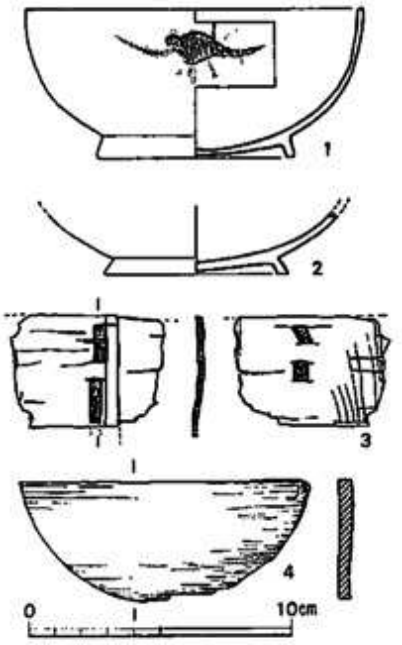
〔木製品〕第69図1・2は漆器椀で，両者とも内面朱漆，外面黒漆。1の外面には朱漆で扇子を描く。3は曲物片。4は曲物底板。



第67図　三条大路側溝西Ⅰ出土遺物実測図 (1)



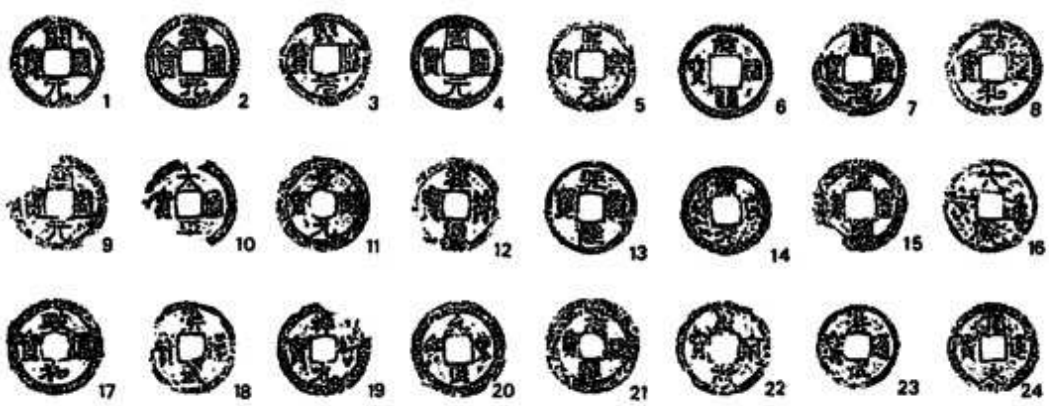
第68図　三条大路側溝西Ⅰ出土遺物実測図 (2)



第69図
三条大路側溝西Ⅰ出土遺物実測図 (3)

第1表　三条大路側溝出土古銭一覧表

第70図	古銭名	出土遺構	第70図	古銭名	出土遺構
1	開元通宝	溝 Ⅱ B	13	天聖元宝	溝 東 Ⅱ
2	宋元通宝	〃	14	熙寧元宝	〃
3	熙寧元宝	〃	15	元豊通宝	〃
4	周通元宝	溝 西 Ⅱ	16	大観通宝	〃
5	熙寧元宝	〃	17	政和通宝	〃
6	元祐通宝	〃	18	洪武通宝	〃
7	紹聖元宝	〃	19	祥符元宝	溝 東 Ⅰ
8	政和通宝	〃	20	元豊通宝	〃
9	開元通宝	溝 東 Ⅱ	21	元祐通宝	〃
10	太平通宝	〃	22	聖宋元宝	〃
11	景徳元宝	〃	23	洪武通宝	〃
12	祥符通宝	〃	24	寛永通宝	〃



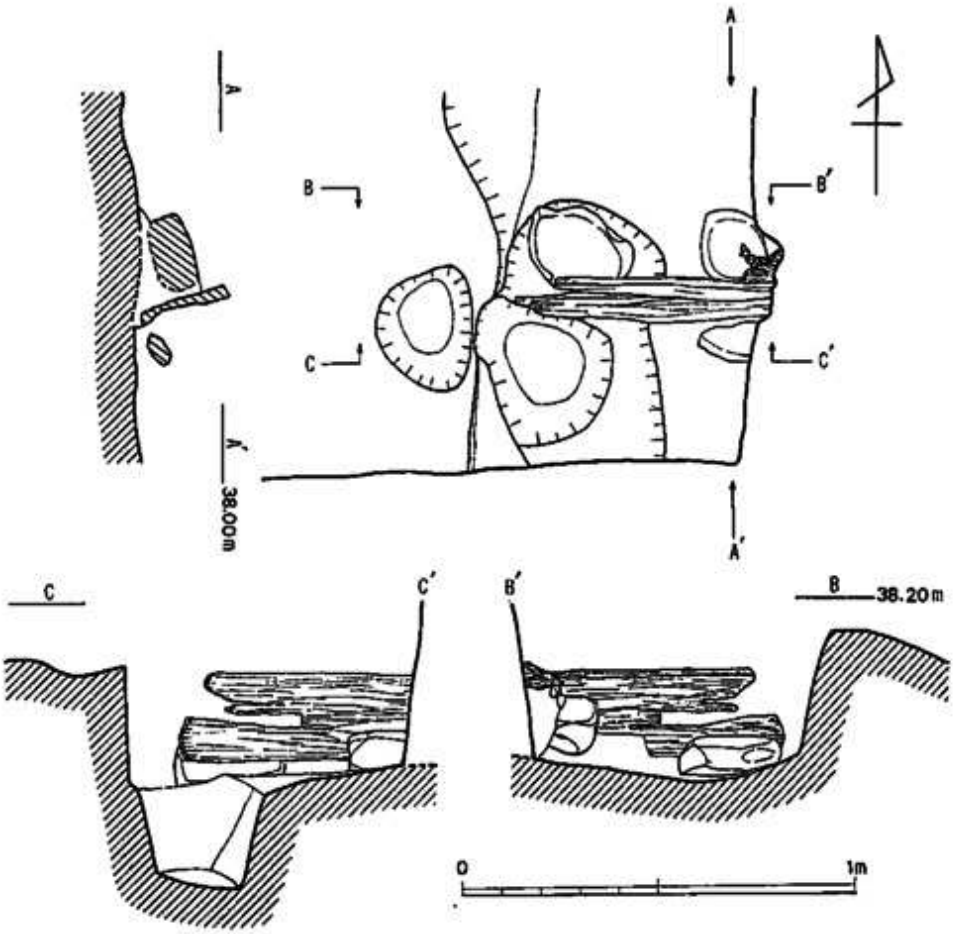
第70図　三条大路側溝出土古銭拓影(縮尺：½)

3. 烏丸小路西側側溝と出土遺物

1) 遺構（付図第2，第71図，図版第15・16）

発掘区東辺際ぎりぎりのところで検出した素掘りの溝で，烏丸小路西側側溝と推定される。A3・4においては幅60～80cmであるが，A4で一段低くなりかつ東側へ30cmほどずれてやや東側へ振れる。ここで，どのように屈曲するのかは，後の掘り込みによって破壊されていて，明確にできなかった。また，この一段低くなった溝の東側たちあがりの検出は，作業安全上不可能であったので，溝幅に関しては明確にできなかった。この溝の北への延長は若干検出したが，土壙・井戸で破壊されていたし，南への延長はA5で検出したが，それ以南は破壊されていた。溝底の標高はA3・4の北端で37.93m，南端で37.91mとほとんど比高差はない。1段低くなった溝の北端は37.73mで，残存溝の最南端は37.81mで，ここは北側の方が低いが，このことは次に述べる堰との関連が考えられる。A4の一段低くなった溝内で，堰と考えられる遺構(第71図，図版第16)を検出した。なお，溝内の層位は判然としなかった。

一方，この溝内にはほぼ1m間隔で大きな石があったが，柱穴らしき掘り込みは検出できな



第71図　烏丸小路側溝堰実測図

かった。第73図４の朝鮮通宝はこの大石の下から出土している。朝鮮通宝は，初鋳が李氏朝鮮太宗の時(1415年)なので，15世紀初頭となる。しかし，後述する土師器等の年代と合わず，約100年ほど新しくなり，この大石の存在が問題となるが，解明する手掛りは得られなかった。

また，Ａ３において，東側のたちあがりが地山ではなかったので，幅50cmほどで東側へ截ち割ったところ，幅50cmで両側に板をたてた遺構が検出されたが，これを溝と断定するにはあまりにも小規模な截ち割りのため，そのような遺構の存在のみの指摘に留めておく。この截ち割り出土遺物は，次項で紹介しておく。

さて，この素掘り溝の年代であるが，遺物の主体は13世紀代～14世紀初にかけてのものと思われる。溝の地山肩部より上の埋土出土瀬戸魚文瓶子(第72図16)は14世紀前半代と考えられるので，以上の年代が妥当と考えられる。

2)　遺物

（1）　溝内出土遺物（第72図，図版第51)

〔土師器〕１～４は褐色系，５～11は白色系。１・３は口径12.2cm，器高２cm，２は口径11.4cm，器高1.9cmで，以上は口縁端部をつまみあげる。５・６は口径13cm前後，器高3.5cm前後，７は口径10.4cm，器高3.2cmの椀タイプの皿。８～11は口径7.6～８cm，器高２cmの小形の皿。

〔瓦器〕15は復原口径42.6cmの三足付火鉢で，外面湾曲部以下はタテミガキで，上には菊花文を押捺する。

〔中国陶磁〕14は尖がり気味の口縁をなす青磁椀。灰白色の胎土に，厚い釉がかかる。内面には篦と櫛による花文がみられる。12は白磁皿の底部。底部は平坦で，器肉は薄い。高台の内側はやや厚い。高台は断面逆台形をなし，釉は高台の内面が削られているため，外面にまで残っている。削られた部位は茶褐色に発色している。13は白磁皿の底部。

〔陶器〕16は溝内出土品ではなく，溝の１段低くなったところの地山肩部を検出する際，その上の埋土から出土したものである。瀬戸灰釉瓶子で，肩部に陰刻で波と魚文を描いている。この種の魚文瓶子は伝世品にはあるものの，遺跡から出土するのは非常に珍しい。

〔古銭〕第73図１は至道元宝，２は景徳元宝，３は皇宋通宝，４は朝鮮通宝。

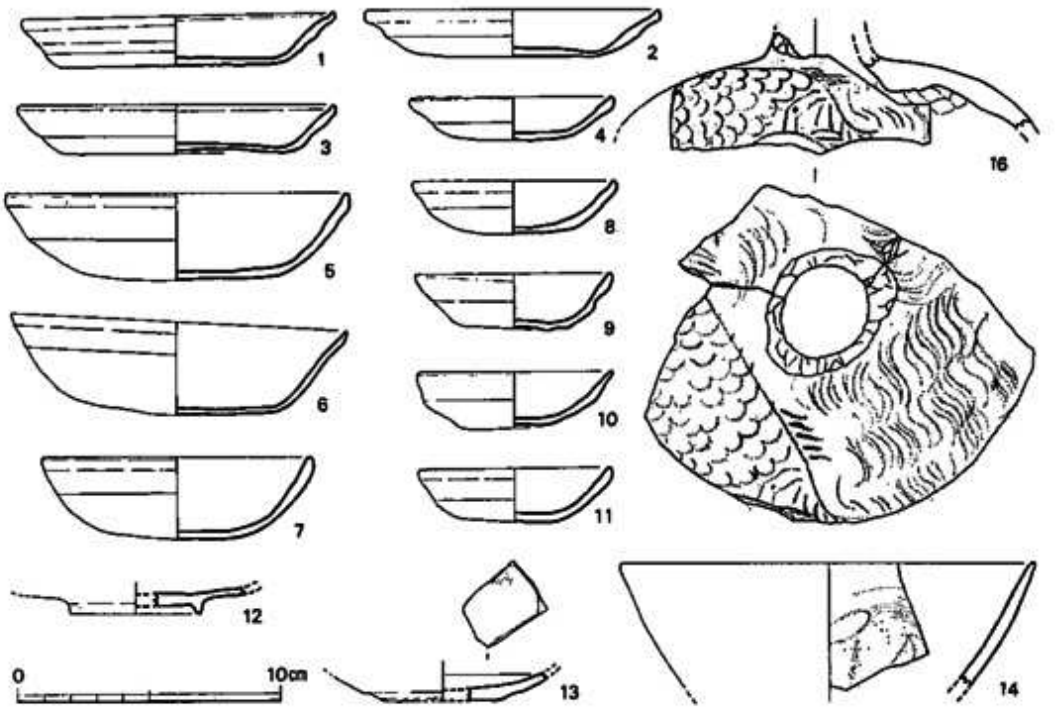
（2）　截ち割り出土遺物（第74・75図，図版第52)

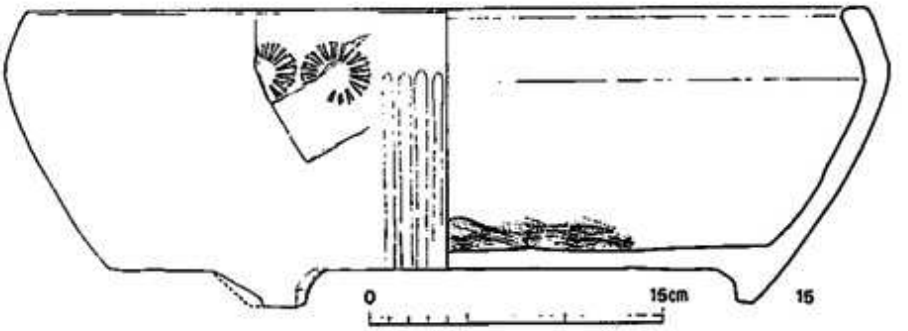
〔土師器〕１～10は褐色系，11～20は白色系の皿。１～５は口径12～12.8cm，器高2.3～2.9cmの皿。底部から急にたちあがり，外反して口縁部に至る。６・７は口径11cm前後。８～10は小形の皿。11～17は口径11.2～12.6cm，器高３cm前後の椀タイプの皿。18は口径10.6cmで，やや厚手の皿。19・20は小形の皿。

〔瓦器〕21は，口径26cmの鍋で，外面指オサエ，内面ハケ調整。口縁部の屈曲は暗灰色土１のものより灰黒色土のものに近い。

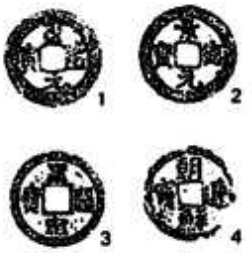
〔陶器〕22は瀬戸の灰釉水注で，粘土紐の継ぎ目と，内面の指オサエが明瞭に残る。

〔中国陶磁〕23は白磁椀の底部で，高台は逆台形に近い。釉は乳白色で，外体部下端にまでかけられている。灰白色の胎土で，内外面に貫入が見られる。





第72図　烏丸小路側溝出土遺物実測図

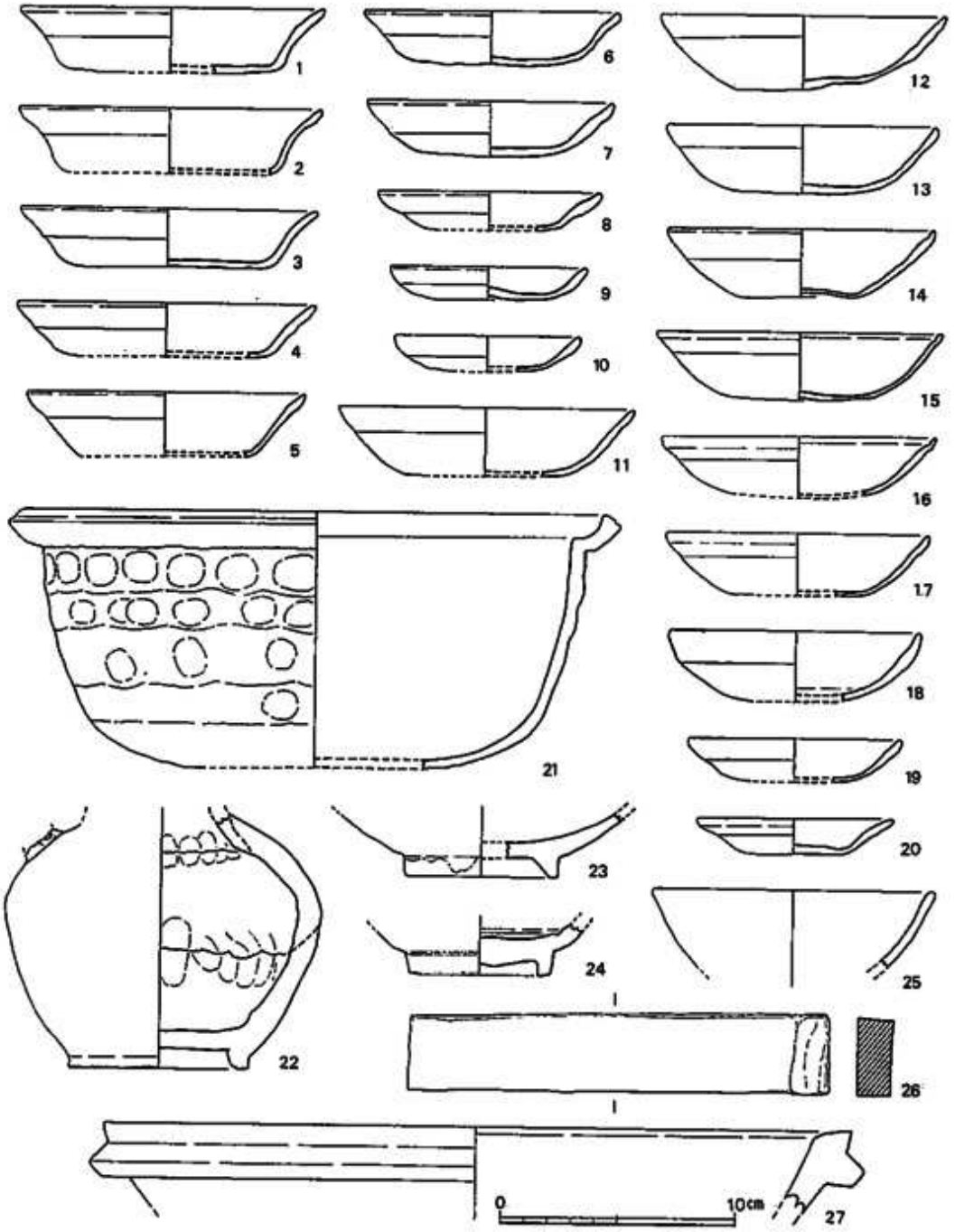


第73図
烏丸小路側溝出土古銭拓影
（縮尺：½）

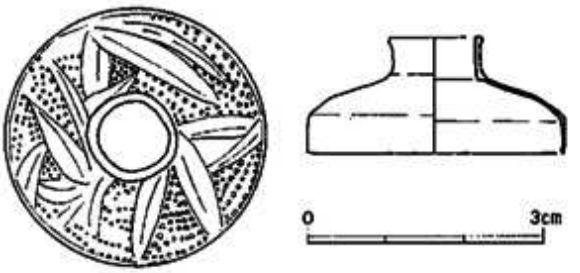
〔石製品〕26は砥石，27は石鍋。

〔金属器〕第75図は，金銅製の装飾金具で，上面には毛彫りがある。

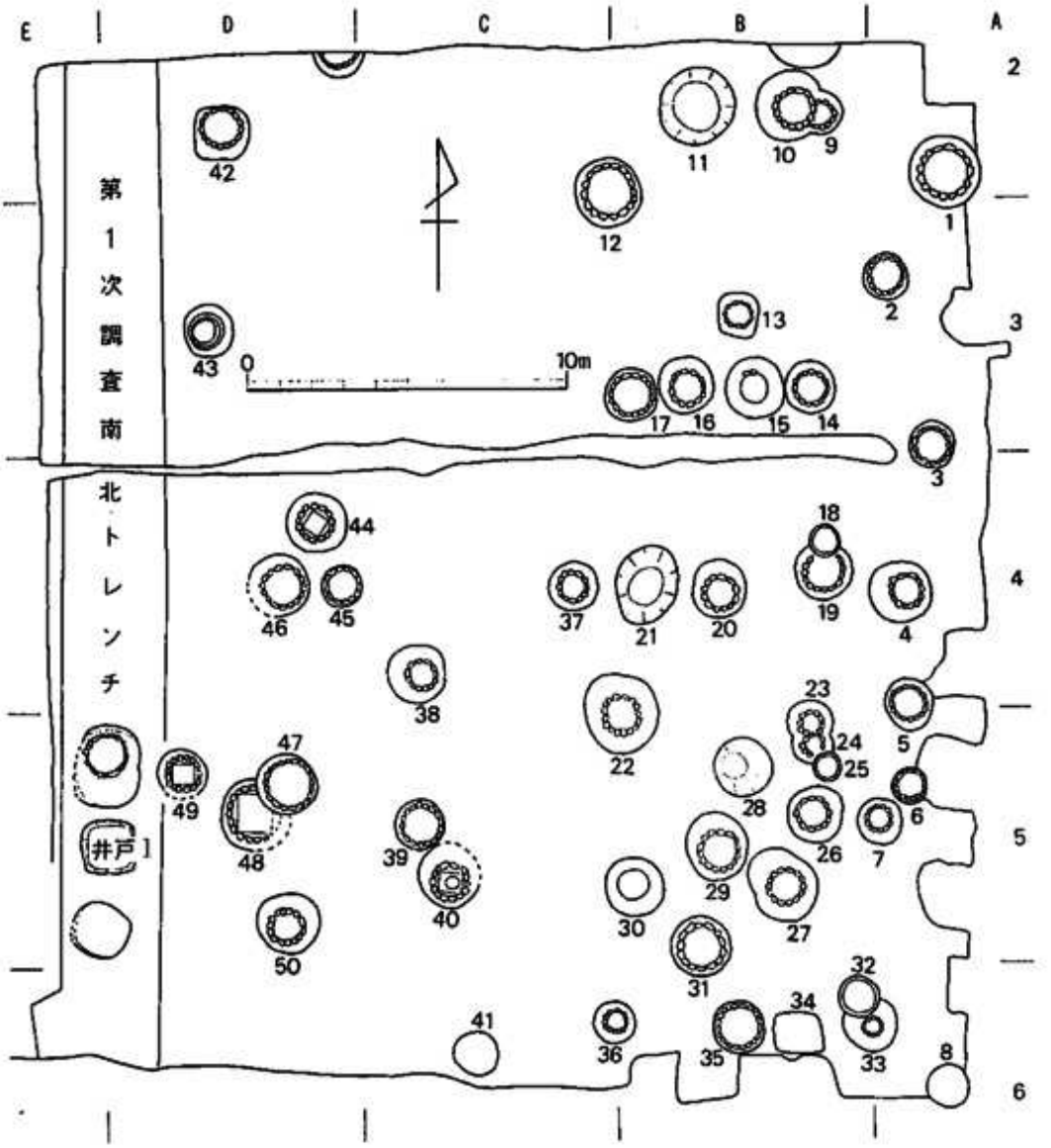
灰釉水注は13世紀後半代のものと思われ，また瓦器鍋や白色系土師皿は灰黒色土出土のものより若干古いので，13世紀後半代の年代を考えておきたい。



第74図　鳥丸小路側溝東側掘ち割り出土遺物実測図 (1)



第75図　鳥丸小路側溝東側截ち割り出土遺物実測図 (2)

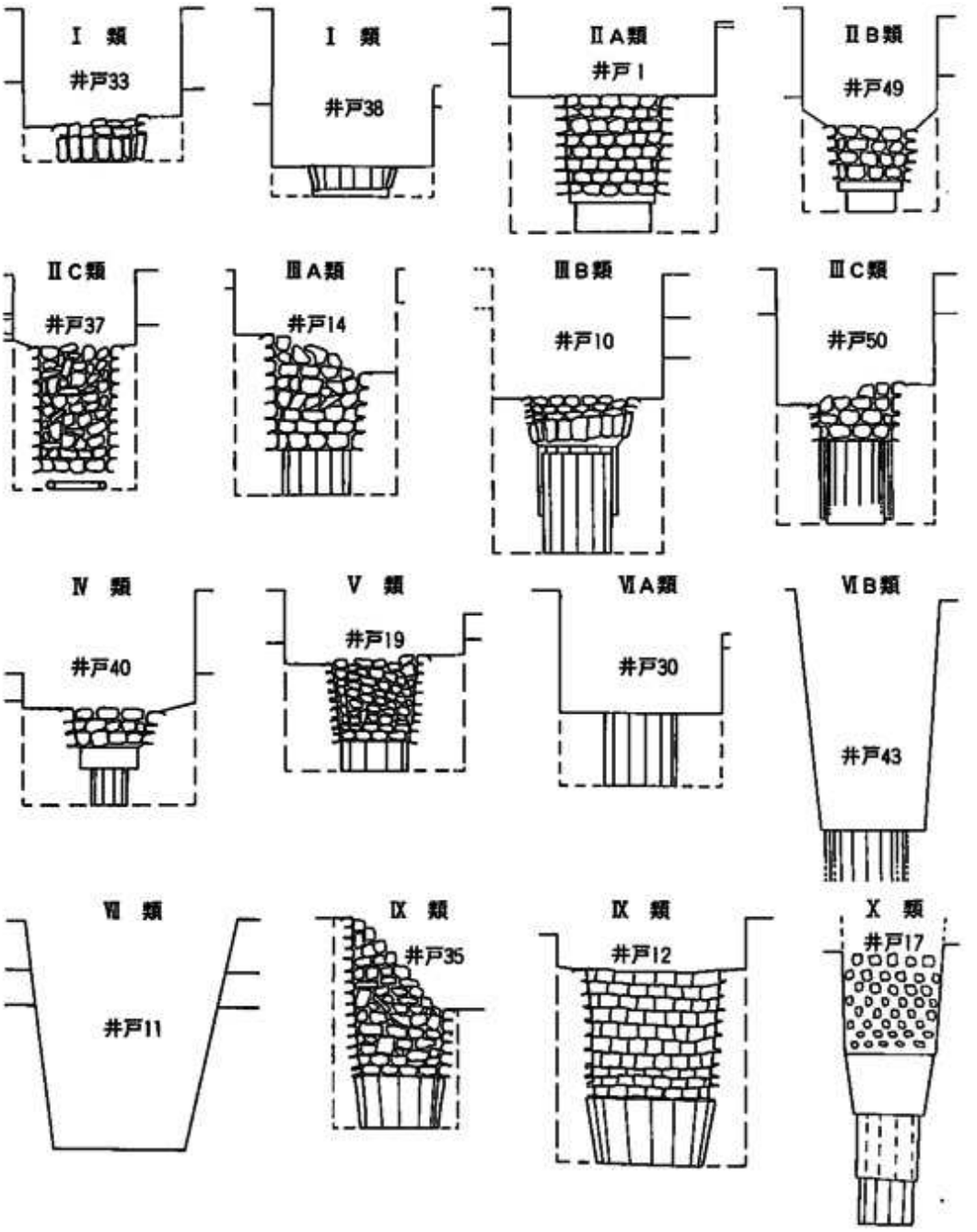


第76図　井戸配置図

4. 井戸と出土遺物

1) 井戸の概要

今回の調査では，発掘区全体で50基を検出した。その他に，壁面にかかったもの２基，第１次調査の際に検出された３基も合わせて，約1,000㎡の区域の中にこれらが密集していたと言



第77図　井戸類型模式図

っても過言ではない(第76図)。

井戸はその形態によって10類に分類することができた(第77図参照。ただし，平安時代の井戸34は除外する)。

Ⅰ類　円形石組（最下段は長方形の扁平な割石を縦に置く）……3基

Ⅱ類　円形石組＋方形木枠の構造で，底部構造の相違により3つに細分できる。

ⅡA類：円形石組＋方形木枠1段……17基

ⅡB類：円形石組＋方形木枠2段……1基

ⅡC類：円形石組＋方形木枠（棒状のもので構成）……2基

Ⅲ類　円形石組＋円形木桶の構造で，底部構造の相違により3つに細分できる。

ⅢA類：円形石組＋円形木桶1重……6基

ⅢB類：円形石組＋円形木桶2重……2基

ⅢC類：円形石組＋円形木桶3重……1基（井戸50，図版第20）

Ⅳ類　円形石組＋方形木枠＋円形木桶……1基（井戸40，図版第18）

Ⅴ類　円形石組＋瓦……1基

Ⅵ類　円形木桶が底部にあるだけのもので，2つに細分できる。

ⅥA類：円形木桶1重……1基

ⅥB類：円形木桶2重……1基

Ⅶ類　素掘り井戸……3基

Ⅷ類　漆喰井戸……3基

Ⅸ類　円形石組（花崗岩切石使用）……3基

Ⅹ類　コンクリート井戸……1基

このうち，Ⅱ類とⅢ類が主体をなし，中でもⅡA類とⅢA類が多かった。注意されることは，ⅡA類は中世に多く，Ⅲ類は江戸時代に多いことである。このことは，井戸底部の構造が，基本的には近世初頭前後に方形木枠から円形木桶へと変化していったことを示していると思われる。

また，江戸時代以降の井戸に関して注意しておきたいことは，東西方向，南北方向に井戸が数基並ぶことである。井戸10と11，井戸14と15と17は，それぞれ東西方向に並んでいる。一方，A・B−5・6の地区ではかなり集中し，やや乱れてはいるが，ほぼ南北方向に並ぶと思われる。井戸38と39，井戸47と50は南北方向に並んでいる。第1次調査南北トレンチにおいても，時期不明ながら3基が南北方向に並んでいた。このことは，江戸時代における家屋の配置ないしは町割りとも関連すると思われるが，井戸底部構造の変化とともに注意しておくべき点として指摘するにとどめておく。

なお，井戸の底部レベルその他は第2表に，井戸出土古銭は第3表と第83図にまとめた。

第2表　井戸一覧表（底レベル＝標高(m)）

番号	底レベル	時代	類別	番号	底レベル	時代	類別
1	35.555	室町	II A	26	35.748	江戸	III B
2	35.402	〃	〃	27	未記録	〃	I
3	35.666	〃	〃	28	35.410	〃	VII
4	35.359	江戸	〃	29	35.166	〃	III A
5	35.679	鎌倉	〃	30	35.672	〃	VI A
6	35.724	室町	〃	31	35.433	中世	II A
7	35.969	〃	〃	32	未記録	?	VII
8	未完掘	江戸	?	33	36.324	江戸	I
9	35.946	室町	II A	34	36.312	平安	未分類
10	35.297	江戸	III B	35	35.319	江戸	IX
11	35.823	〃	VII	36	35.585	〃	III A
12	35.102	近代	IX	37	35.805	室町	II C
13	35.484	室町	II A	38	36.166	江戸	I
14	35.576	江戸	III A	39	未記録	?	?
15	35.368	〃	〃	40	35.747	室町	IV
16	35.488	室町	II A	41	未完掘	江戸	?
17	34.694	近代	IX	42	35.499	室町	II A
18	未完掘	?	VII	43	35.774	近代	VI B
19	36.038	江戸	V	44	35.498	室町	II A
20	35.737	室町	II A	45	37.121	江戸	II C
21	未記録	鎌倉	VII	46	35.672	鎌倉	II A
22	35.390	室町	II A	47	未記録	?	?
23	35.134	江戸	III A	48	35.726	室町	II A
24	35.748	〃	〃	49	35.723	〃	II B
25	未完掘	?	VII	50	34.795	江戸	III C

2)　井戸34（図版第17）

掘方は方形で，一辺約1.5m。縦板組みの方形井戸であるが，その残存状態は極めて悪かった。ただ，西側壁面に側板と横桟の痕跡が若干残存し，また南側壁面にも側板の痕跡が若干残存していた。

出土遺物（第78図，図版第53）

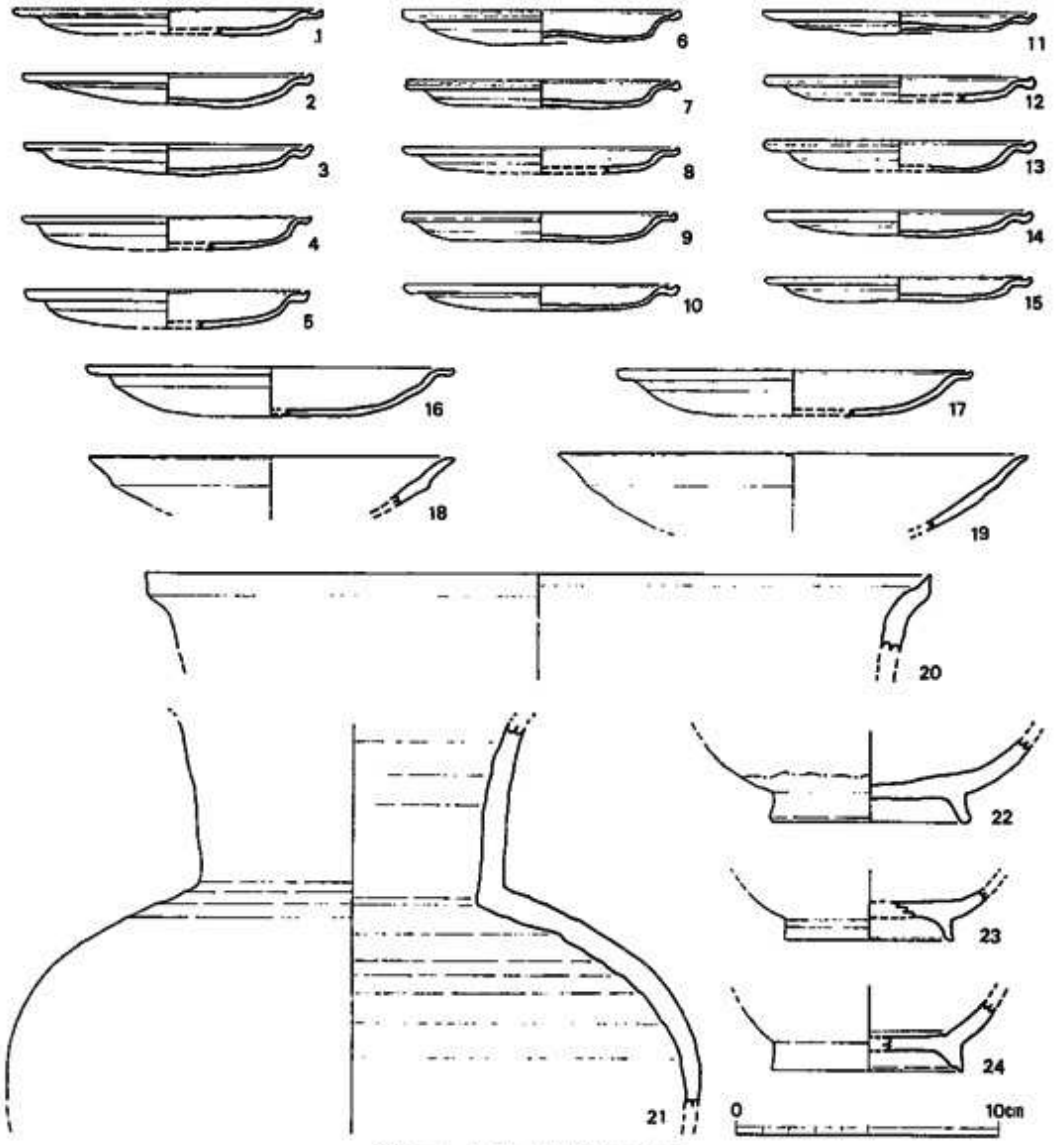
〔土師器〕1～17は『て』字状口縁の皿。そのうちの1～15は口径10.2～11cm。器高0.9～1.3cmの小形の皿。16・17は口径13.6～14cm，器高1.8cmの中形の皿。この井戸34からは口径18cm前後の大形の皿が出土していない。以上の『て』字状口縁の皿は，厚さ2mm前後の薄手のものである。色調は褐色系と乳白色系とがみられる。18・19は口径14・18cmで，『て』字状口縁の中・大形の皿に対応する。褐色系で，黒色粒を含む。1段ナデ手法で，ナデが強いために口縁部下方に明瞭な稜が生じ，口縁部はやや外反気味になる。20は復原口径30cmの直胴の甕になると思われる。端部をつまみあげる。

〔灰釉陶器〕21は広口瓶で，色調はやや褐色味のある灰白色を呈し，砂粒をあまり含まない。肩部はヨコナデ，胴部はヘラケズリ。東濃系である。22は椀で，色調は灰褐色を呈し，砂

粒をあまり含まない。灰釉はつけ掛けで，釉は白っぽく発色する。高台は断面長方形に近く，やや外方にふんばる。高台内底部にはヘラ切り痕が残り，内面には重ね焼きの痕跡が残る。美濃須衛系と思われる。

〔緑釉陶器〕23は暗青灰色硬質の焼きで，釉は濃緑色。高台内底部にも釉がかかる。内面に圏画文の一部が認められる。24は淡灰褐色軟質の焼きで，高台内底部の一部には釉がかからない。

『て』字状口縁の土師皿は薄手で，左京内膳町ＳＫ19出土の皿に近い形態をし，それらは10世紀後葉を中心とする時期とされている[3]。また，灰釉陶器の広口瓶は10世紀後半，椀は11世紀の中頃まで下らないものなので，ほぼ10世紀後葉頃から11世紀前葉頃まで使用されたものと推察される。この井戸34は，今回の調査では最も古い遺構・遺物である。



第78図　井戸34出土遺物実測図

3) 井戸42（図版第19）

掘方は方形で，一辺約1.5m。底部に方形に組んだ木枠があり，残存状態は悪かったが，推定で一辺70cmであった。円形の石組は，河原石を積み上げ，下端直径約0.88m，上端直径約1.08m。

出土遺物（第79図，図版第54）

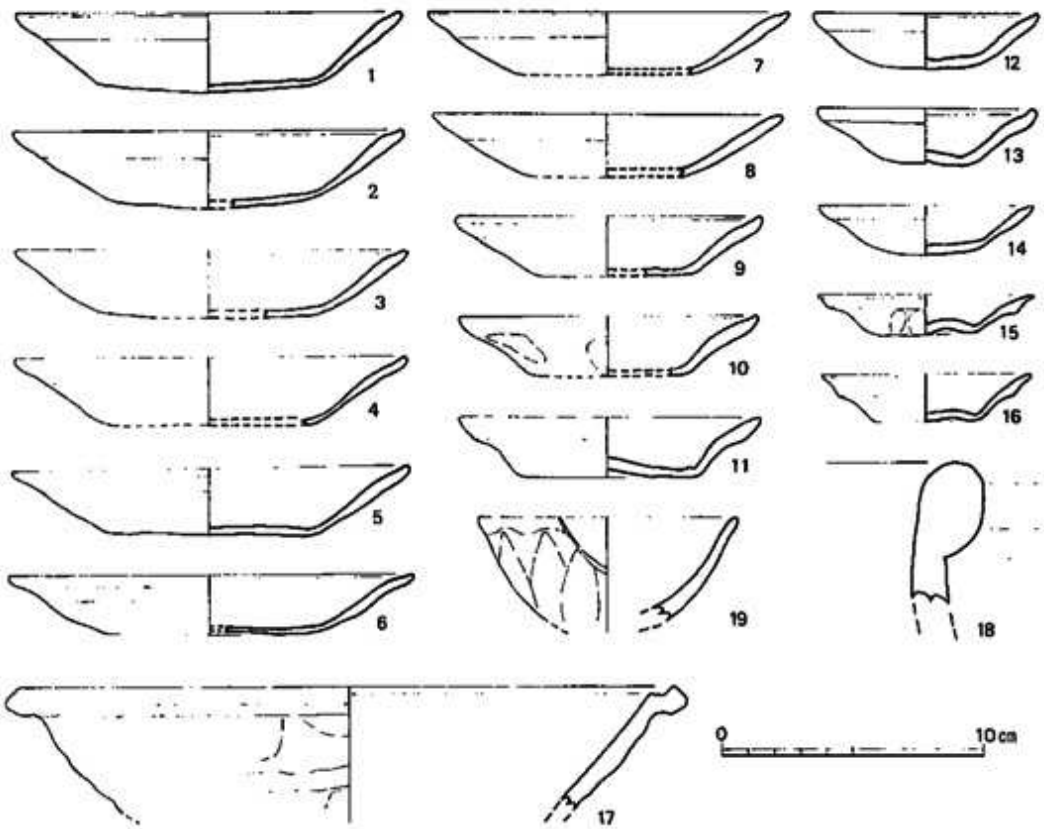
〔土師器〕1～6は平均口径15cm，器高3cm弱の皿で，底部内面一方向ナデの後，ヨコナデを施し，口縁端部内面が若干凹むものが多い。7・8は口径14cm前後の皿。9・10は口径11.6～11.8cm，器高2.3cmの皿。12～14は口径8.5cm前後，器高2cm前後の皿で，13・14は底部内面中央からナデあげる。11は口径11.6cmの口縁部肥厚の皿。15・16は11と同じ手法の口径8cm前後の小形の皿。

〔瓦器〕17は鍋で，口縁部の屈曲が少なく，胴部がわりと浅い。

〔陶器〕18は備前大甕の口縁部。玉縁口縁はやや幅がある。

〔中国陶磁〕青磁(21)は椀で，灰白色の胎土に青緑色の厚い釉が付されている。外面に蓮弁が廻るが，描出はぼやけている。

大形の土師皿は後述する井戸40やD2土壙6よりも深く，また瓦器鍋の口縁部も井戸40・D



第79図　井戸42出土遺物実測図

2土壙6のものよりまだ屈曲が残っているので，それらより先行するものと思われる。したがって，15世紀前半代と考えられるが，初頭までは上らないものであろう。

4) 井戸40（第80図，図版第18）

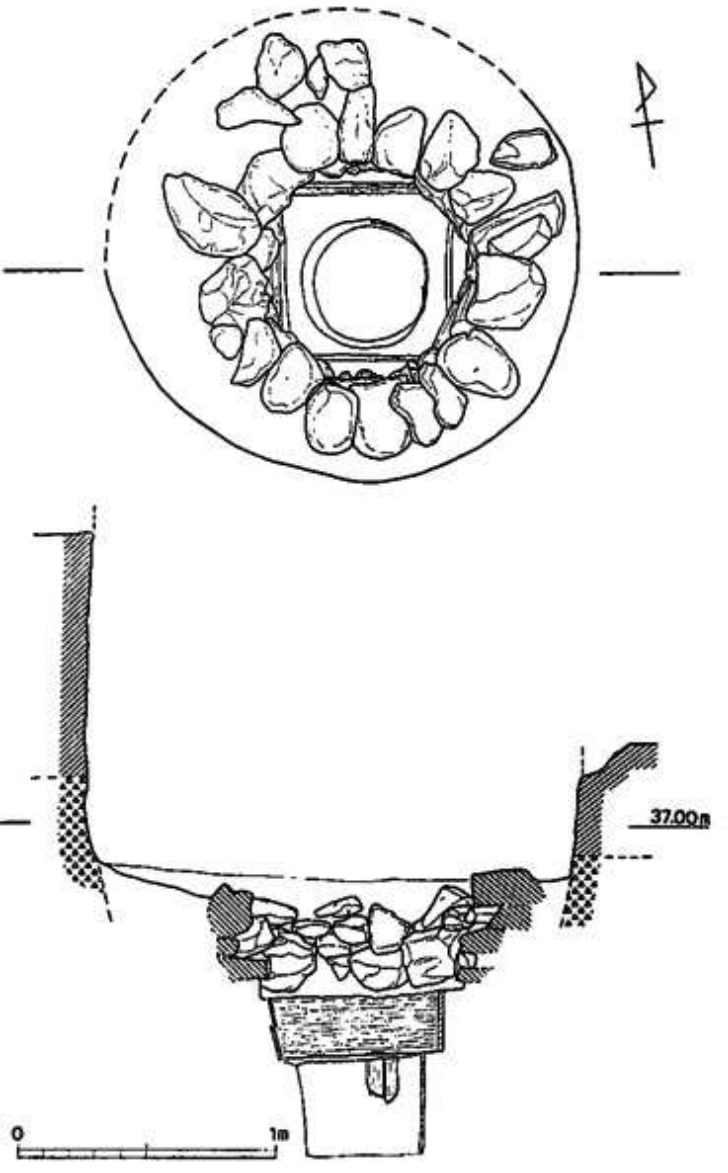
残存状態が比較的に良い井戸であった。直径約1.9mの円形掘方で，底部の木枠は2重構造であった。下段には直径約50cmの桶形木枠を施設していたが，この残存状態は悪く，1枚の幅が6～7cmの長方板を使用していた。上段には一辺約65cmの方形木枠を設置していた。これは南北側板両辺が凹字形，東西側板両辺が凸字形をし，これで組み合わせていた。その上に割石で直径約85cmの円形石組を構築していた。

出土遺物

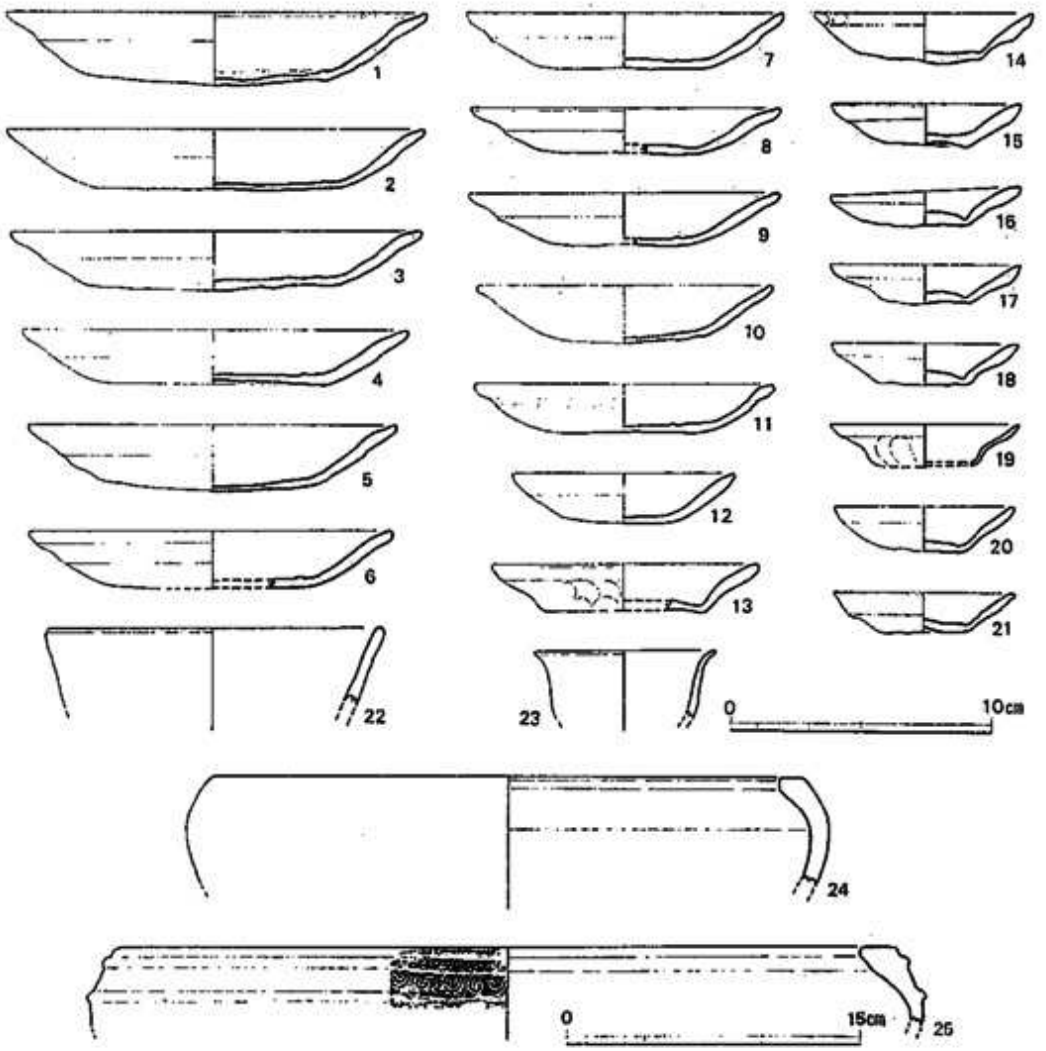
（第81図，図版第54）

〔土師器〕1～11は，底部内面一方向ナデの後，ヨコナデを施すため，底部内面外周に隆起線ができる。大きさによって，大きく3つに分けられる。1～3は口径16cm前後，4～6は口径14～14.8cm，7～11は口径11.4～12.4cm。12は口径8.4cmの皿で，底部内面中心からナデあげる。13～21は基本的には口縁部を肥厚させ，体部に指オサエがみられる皿で，大きさによってほぼ2つに分けられる。13は口径10.4cm，器高1.8cm，14～21は口径7～7.4cm，器高1.5～1.7cm。

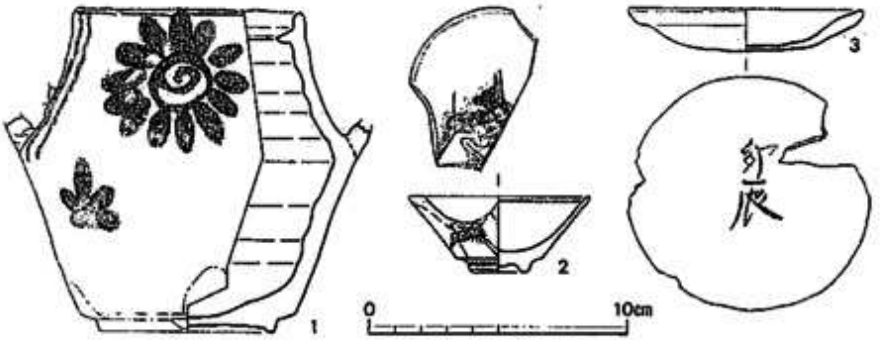
〔瓦器〕24・25は火鉢で，25の外面には凸



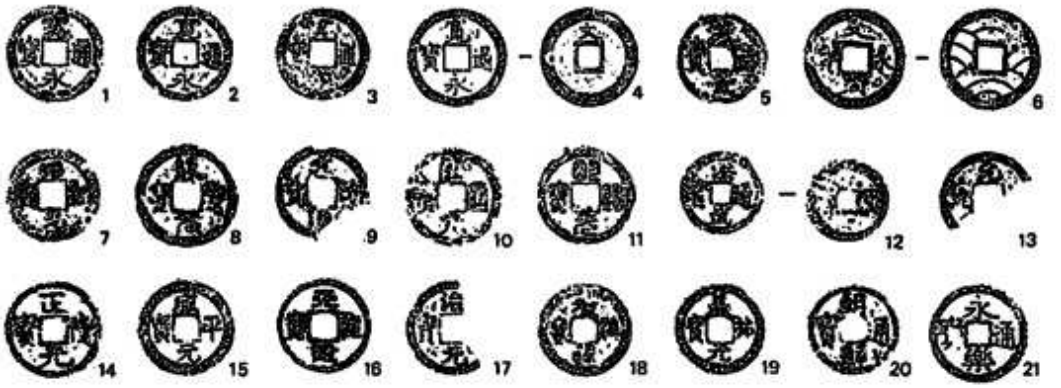
第80図　井戸40実測図



第81図　井戸40出土遺物実測図



第82図　その他の井戸出土遺物実測図



第83図　井戸出土古銭拓影（縮尺：½）

帯で上下を画した巴文を押捺している。

〔中国陶磁〕青磁(22)は椀で，口縁を直口気味に丸く収めている。灰白色の胎土に，やや厚めの釉がかかり，貫入が認められる。白磁(23)は椀で，青味を帯びた薄い器肉のものである。直立に近い胴部に外反する口縁が続く。

後述のＤ２土壙６と大差ない時期とみられるので，15世紀後半代と考えられる。

5)　その他の井戸出土品（第82図，図版第53）

１は井戸４上部の焼土層(近世陶器・瓦がつまる)から出土した瀬戸の志野釉鉄絵双耳壺。２は井戸29出土の染付猪口で，外面に鶴を描き，内面には男女の交合を描いている。３は井戸49から出土した土師皿で，底部に『卯辰』と墨書されていて，これは方向を示したものであろうか。

第３表　井戸出土古銭一覧表

第83図	古　銭　名	出土遺構
1	寛永通宝	井戸　14
2	〃	〃
3	〃	〃
4	〃	〃
5	洪武通宝	井戸　15
6	文久永宝	井戸　16
7	紹聖元宝	井戸　21
8	紹聖元宝？	井戸　22
9	承和昌宝？	井戸　34
10	開元通宝	井戸　39
11	明道元宝	〃
12	洪武通宝	井戸　40
13	元□□宝	〃
14	正隆元宝	井戸　46
15	咸平元宝	井戸　48
16	元□元宝	〃
17	治□元宝	〃
18	元祐通宝？	〃
19	喜祐元宝	〃
20	朝鮮通宝	〃
21	永楽通宝	〃

5.　土壙と出土遺物

1)　土壙の概要

発掘区全域にわたって各時代の土壙が多数検出されたが，鎌倉時代～安土・桃山時代の時期の土壙が最も多かった。しかし，切り合い等により，掘方ラインが明瞭でないものが多く，特にＣ５を中心としたところでは不定形土壙が錯綜としていた。ここでは，出土遺物に一括性があると思われるいくつかの土壙を選び，その出土遺物を紹介することにする。

2)　A 3 土壙 3

直径約1.75mの円形土壙。地山面からの深さ1.65mで，礫層にまで掘り込まれていた。

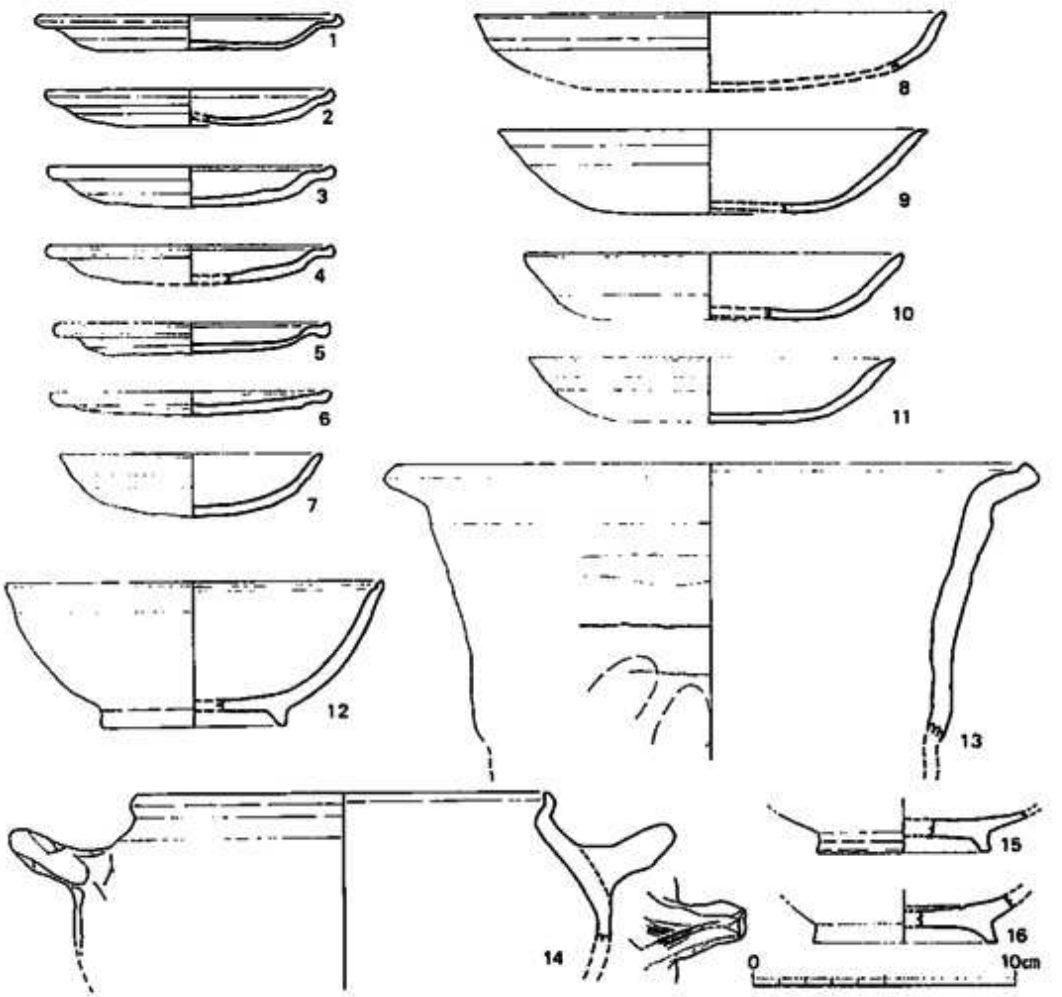
出土遺物（第84図）

〔土師器〕1～6は『て』字状口縁の皿。1は口径11.9cm，薄手で口縁部の作りが整っている。2～6は口径11cm前後で，1より厚手である。7は口径10cmの2段ナデ手法の小形の皿。8～11は，10が1段ナデ手法で，他は2段ナデ手法の大形の皿。以上の皿は総て褐色系である。13は復原口径24.2cmの大形の鉢形土器で，粘土紐巻上げ痕が明瞭に認められ，胴部外面は指オサエ。14は口径16cmの把手2個が対称に付けられた甕。

〔黒色土器〕12は口径14.6cm，器高5.6cmのいわゆる内黒（黒色土器A類）椀で，口縁内面に1条の凹線が廻る。

〔緑釉陶器〕15は暗灰色硬質の焼き。釉は濃緑色で，高台内底部にも施釉。16は淡褐色軟質の焼き。釉は濃緑色で，高台内底部にも釉が若干かかる。底部内面に1条の凹線が廻る。

『て』字状口縁の土師皿は，1が古い形態をしているものの，他のものは寛治5年（1091）銘



第84図　A 3 土壙 3 出土遺物実測図

須恵器共伴土師器より古い形態をみせているので，11世紀中頃の年代が考えられる。

3)　C４土壙11

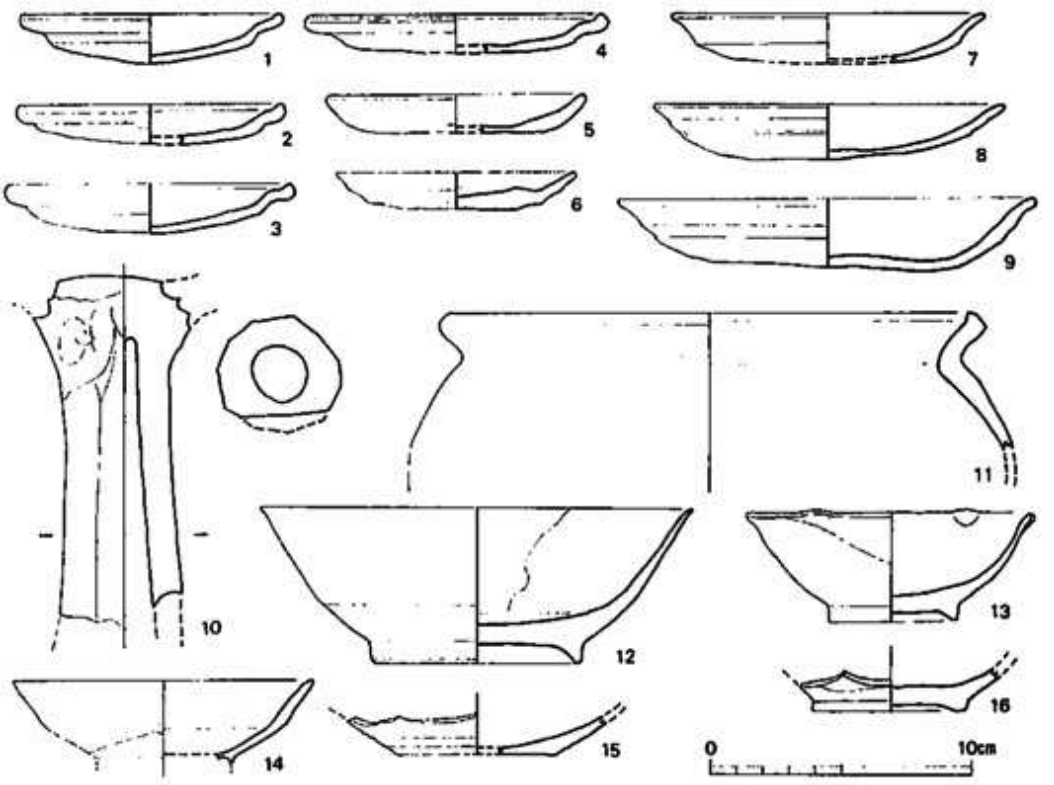
東西約2.5mのほぼ方形土壙で，北側はセクションにかかる。深さは地山面から約1.2mであった。

出土遺物（第85図，図版第56）

〔土師器〕１～４は『て』字状口縁の皿で，口径10.2～11cm，器高1.5～1.9cm。厚手で，口縁端部の作りは丸味をもつ。５・６は口径9.2～10cm，器高1.5cmの小形の皿。乳白色を呈し，底部ヘラ切り。７は１段ナデ手法。８・９は２段ナデ手法の皿。10は高杯脚片で，ケズリで11面を取り，灰白色を呈す。11は復原口径29.8cmの甕。口縁端部をつまみあげる。胴部外面粗いケズリ，内面ヨコナデ。

〔灰釉陶器〕12は口径17.6cm，器高5.9cmの椀。胎土は淡灰褐色で，灰釉は口縁部周辺に限られる。高台内底部には糸切り痕が残る。底部が厚く，口縁部に至るほど薄くなる。輪花椀になると思われる。13は口径11.2cm，器高4.2cmの輪花小椀。胎土は灰色で，灰釉は内面全面と口縁部外面にかかる。高台内底部には糸切り痕が残る。12と同様，底部が厚く口縁部に至るほど薄くなる。

〔中国陶磁〕白磁(14～16)は，14・15が皿で，16は椀である。14は高台を持ち，体中央で腰折となり，内面には圏線が廻っている。胎土は白色で，釉は青味がかった白色に発色してい



第85図　C４土壙11出土遺物実測図

る。体下半にまで施釉されている。15は無高台で，外底を除き全面に施釉されている。胎土は灰白色，釉調はやや黄味を帯びている。16は椀底部で浅い高台が付いている。胎土は灰白色，釉も同色で，体下半にまで施釉されている。

『て』字状口縁の土師皿は器壁が厚く，口縁端部が丸味をもち，寛治5年(1091)銘須恵器に共伴する土師皿[4]に近い形態である。灰釉陶器は最末期のもので，11世紀末～12世紀初と思われる。したがって，11世紀末～12世紀初の年代が考えられる。

4)　D5土壙5

直径45cmの円形小ピットで，深さも浅い。

出土遺物（第86図）

〔土師器〕総て褐色系の皿。1・2は復原口径15.4cm，3は13cm。4は復原口径13cmで，やや浅い皿である。以上は2段ナデ手法で，口縁端部が垂直にのぼる。5は口径9cmの口縁折り曲げの下皿。

土師皿は口縁部が垂直にやや長く立ちあがり，2段ナデが施されているので，12世紀中頃を中心とした年代と考えられる。

5)　D3小土壙群No.14

約70cm四方のほぼ方形の土壙。

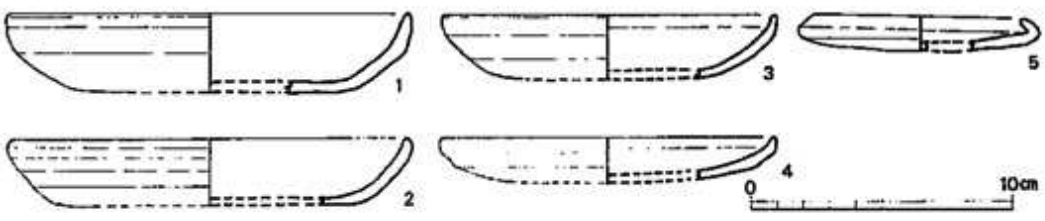
出土遺物（第87図，図版第56）

〔土師器〕1～9は口径14cm前後，器高2.5cm前後の大形の皿。5・9は1段ナデ手法であるが，他は2段ナデ手法で，口縁端部外面を面取りするものが多い。総て褐色系である。10～22は口径9cm前後，器高1.5cm前後の小形の皿で，口縁端部を丸く収めるものと外面を面取りするものがあるが，後者が多い。また底部が上げ底になるものも多い。17の口縁部には焦げ痕がある。総て褐色系のものである。23は口径8.6cm，器高1.2cmの口縁折り曲げの下皿で，乳白色を呈す。

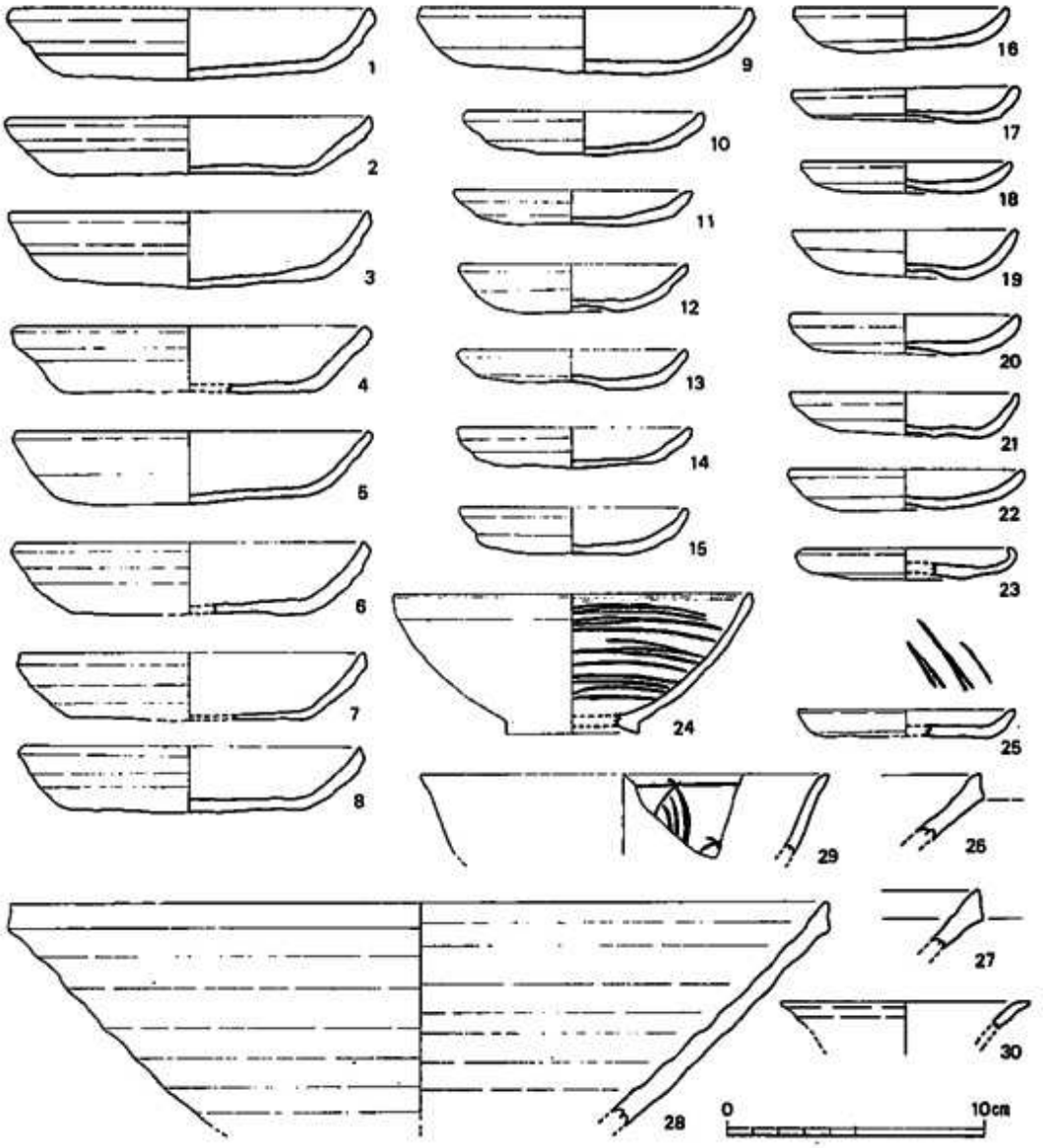
〔瓦器〕24は口径14cm，器高5.5cmの椀。胎土は暗灰色で，炭素吸着は弱い。内面に粗いヘラミガキ，底部内面に粗い螺旋文を施す。口縁内面に1条の凹線を廻らす。外面は指オサエで，口縁部はヨコナデ，器高指数37.14。25は小皿で，内面に粗い螺旋文を施す。

〔須恵器〕26～28は東播系の大平鉢で，胎土は26・28が暗灰色，27は淡灰色を呈す。口縁部はほとんど肥厚しない。

〔中国陶磁〕青磁(29，30)は，29が椀口縁部で，内面に片彫りによる劃花文が描かれている。竜泉窯系青磁。灰白色の胎土に，灰緑色の厚い釉がかかっている。30は口唇が外方に反



第86図　D5土壙5出土遺物実測図



第87図　D３小土壙群№14出土遺物実測図

り，平坦となる。灰白色の胎土に淡灰緑色の釉がかかる。小形の容器。

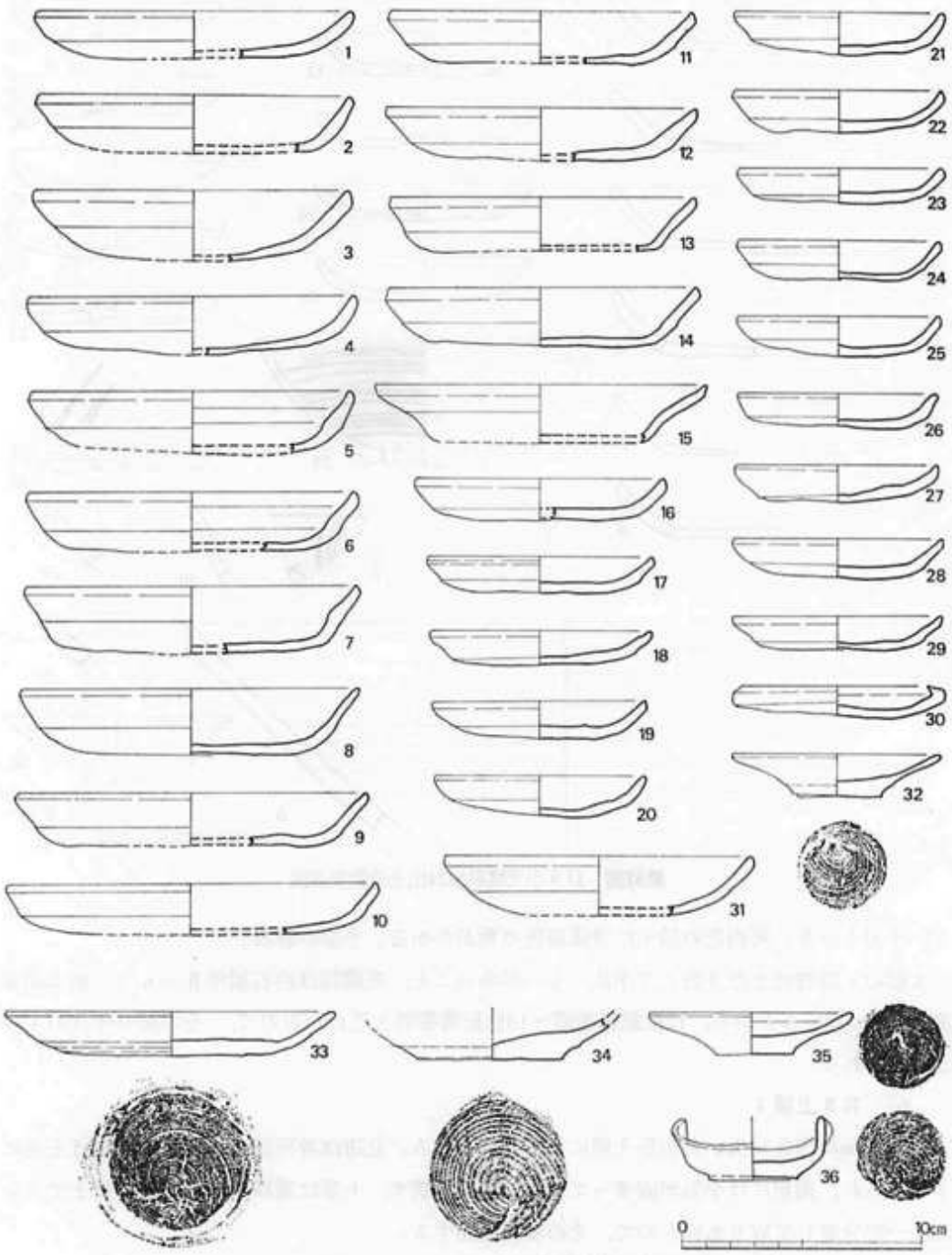
大形の土師皿はまだ２段ナデ手法のものが多いこと，瓦器椀は白石編年Ⅱ－６[5]，橋本編年Ⅲ期１[6]に近いことから，12世紀後葉頃～13世紀前葉頃と思われるので，その間の年代の１点と考えられる。

6)　B５土壙１

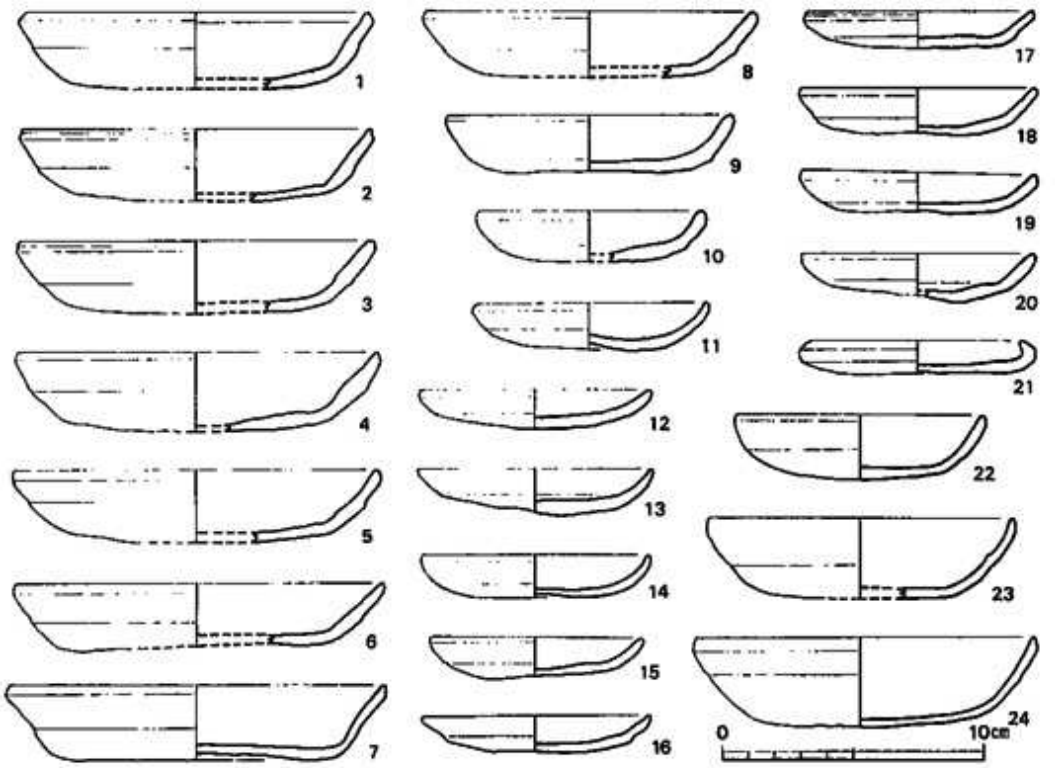
幅約90cmの南北に長い長方形土壙になると思われる。北辺は井戸22で切られ，南西は土壙により切られ，南東には小石が固まっていた。浅い遺構で，上層は荒砂で，下層は粘質土であった。一応分層して取りあげたので，その順に記述する。

下層出土遺物（第88図，図版第57）

〔土師器〕1～8・11～14は口径13～14cm，器高2～3cm，9は口径15cm，10は口径15.8cmで，1段ナデ手法で，口縁端部外面を面取りするものが多い。15は口径14cm，器高2.5cmで，底部から外反気味にのぼる。16は口径10.6cmの皿。17～29は口径8.6～9.6cm，器高1.4～1.8cmの小形の皿。30は口縁折り曲げの下皿。31は白色系の皿。32は口径8.8cmの白色を呈するもので，底部は糸切り。



第88図　B5土壙1出土遺物実測図 (1)



第89図　B５土壙１出土遺物実測図 (2)

上層出土遺物（第89図，図版第57）

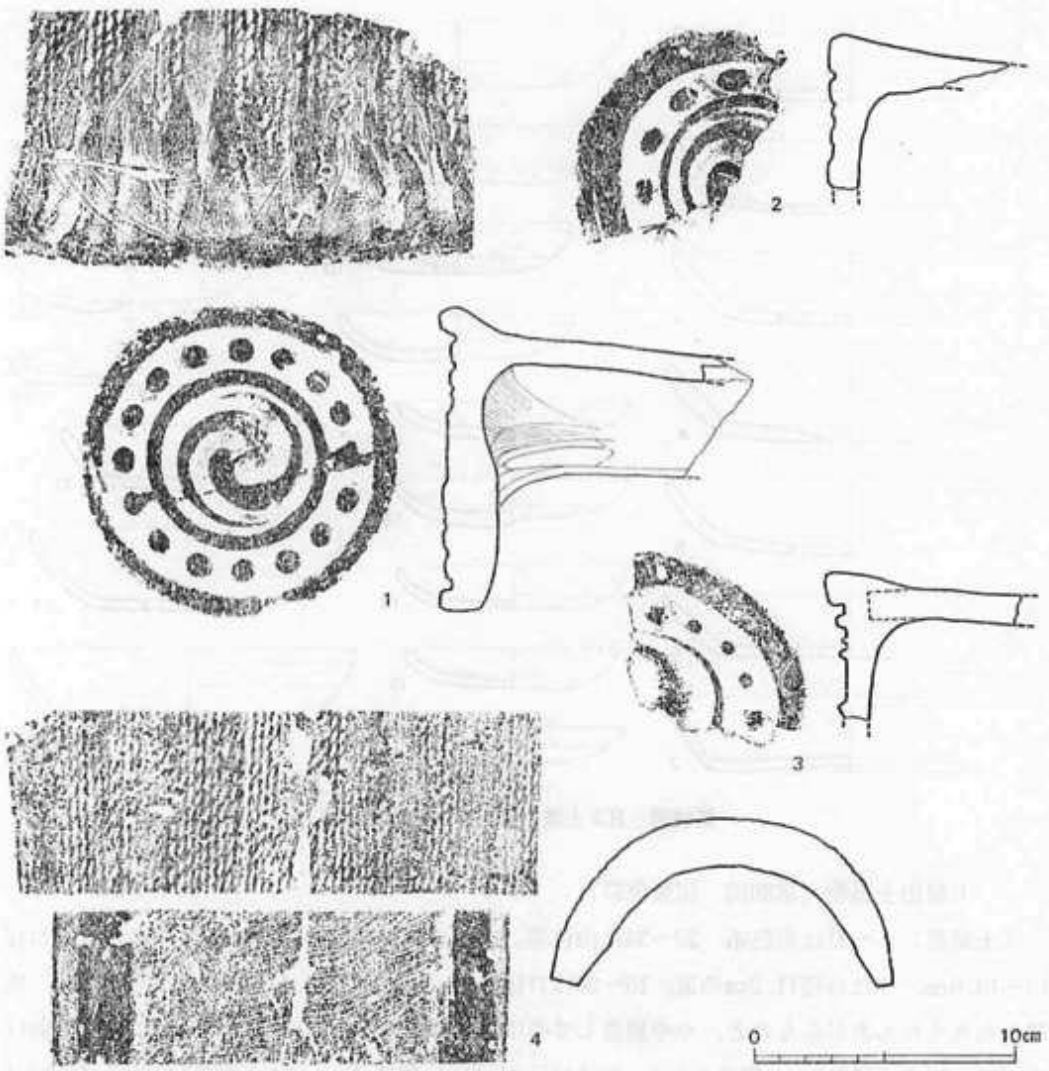
〔土師器〕１～21は褐色系，22～24は白色系。４～６は口径14～14.2cm，１～３・８は口径13～13.6cm，９は口径11.2cmの皿。10～20は口径8.3～９cm，器高1.5cm前後の小形の皿で，底部から丸くたちあがるものと，やや屈曲してのぼるものがある。21は口径９cmの口縁折り曲げの下皿。22は口径9.6cm，器高2.5cm，23は口径11.9cm，器高３cm，24は口径13.2cm，器高3.5cmの椀タイプの皿である。

一括出土遺物（第88・90～92図，図版第57・58）

〔土師器〕第88図33～36は一括してとりあげたもので，33は口径13.6cm，器高1.9cmで，底部糸切り。34・35は底部糸切り。36は耳皿で，底部糸切り。以上は総て白色を呈す。

〔瓦〕第90図１～３はいずれも右巻き二つ巴文のやや小形の軒丸瓦で，整形は指オサエと指ナデ調整によっている。１は丸瓦部凸面に１本の刻線のヘラ記号をもつ。１・２は胎土に小石を含むが砂は多くない。やや軟質の焼成で，１は灰褐色，２は灰黒色を呈している。３は胎土に砂を混え，やや軟質の焼成で，黒色を呈している。４はやや小形の丸瓦で，凸面は縄目叩きがなされ，調整は加えられていない。凹面側の側縁は幅広に面取りされている。胎土には砂を混え，やや軟質の焼成で，灰白色を呈している。

第91図は凸面に斜格子文の叩きがなされたほぼ完存する平瓦である。格子目には木理痕が多数認められる。叩き板の幅は少なくとも６cmである。狭端，広端の差は少なく，また瓦の反り



第90図　B５土壙１出土遺物実測図 (3)

が強い。胎土は小石などを含み，縞状に見えるものである。かなり硬質の焼成で，黒褐色を呈している。

第92図１・２は薄手で小形の平瓦である。凹凸両面に糸切り痕が認められ，布目は不鮮明である。胎土には砂を多く混え，軟質の焼成で，灰色を呈している。３は１・２同様薄手の平瓦である。凸面は指オサエ，ナデにより整形されている。胎土にはあまり砂を含まず，やや硬質の焼成で，灰黒色を呈している。

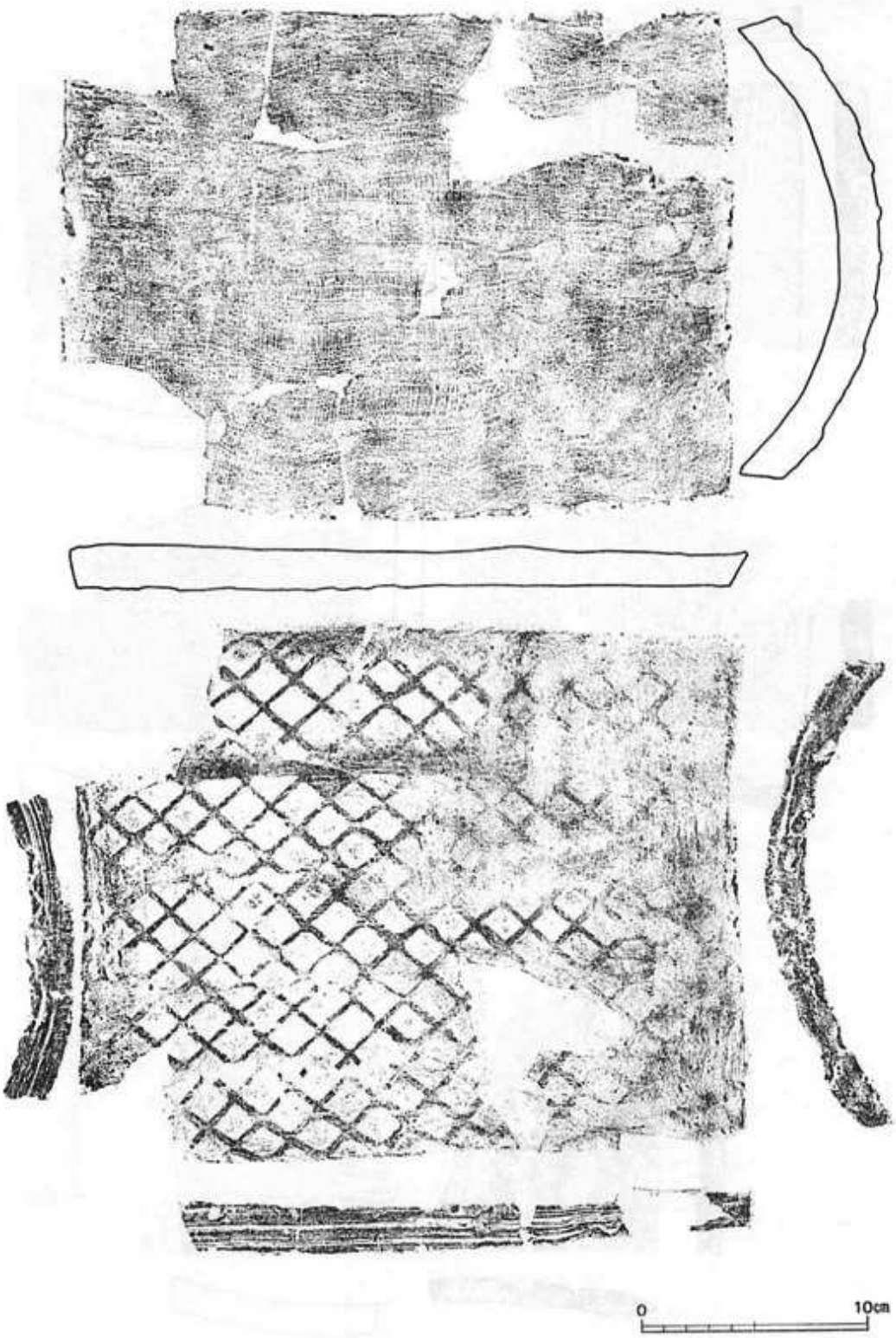
土壙の年代は土師皿からみて，13世紀中頃～後半のものと考えられる。

7)　**D２土壙６**

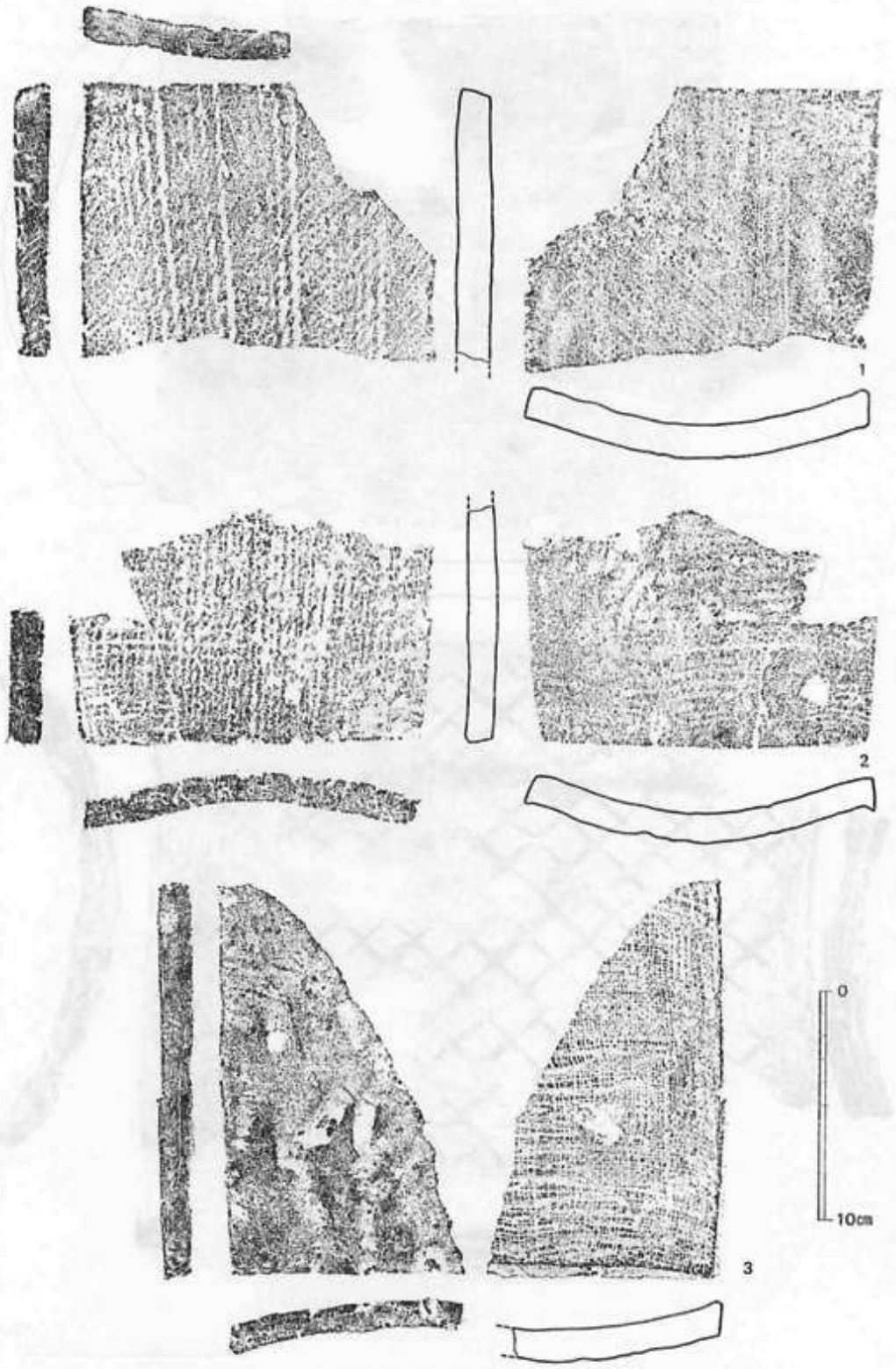
井戸42の北側にある不定形の深さ30cmほどの土壙で，土師器が多く出土した。

出土遺物（第93図，図版第59）

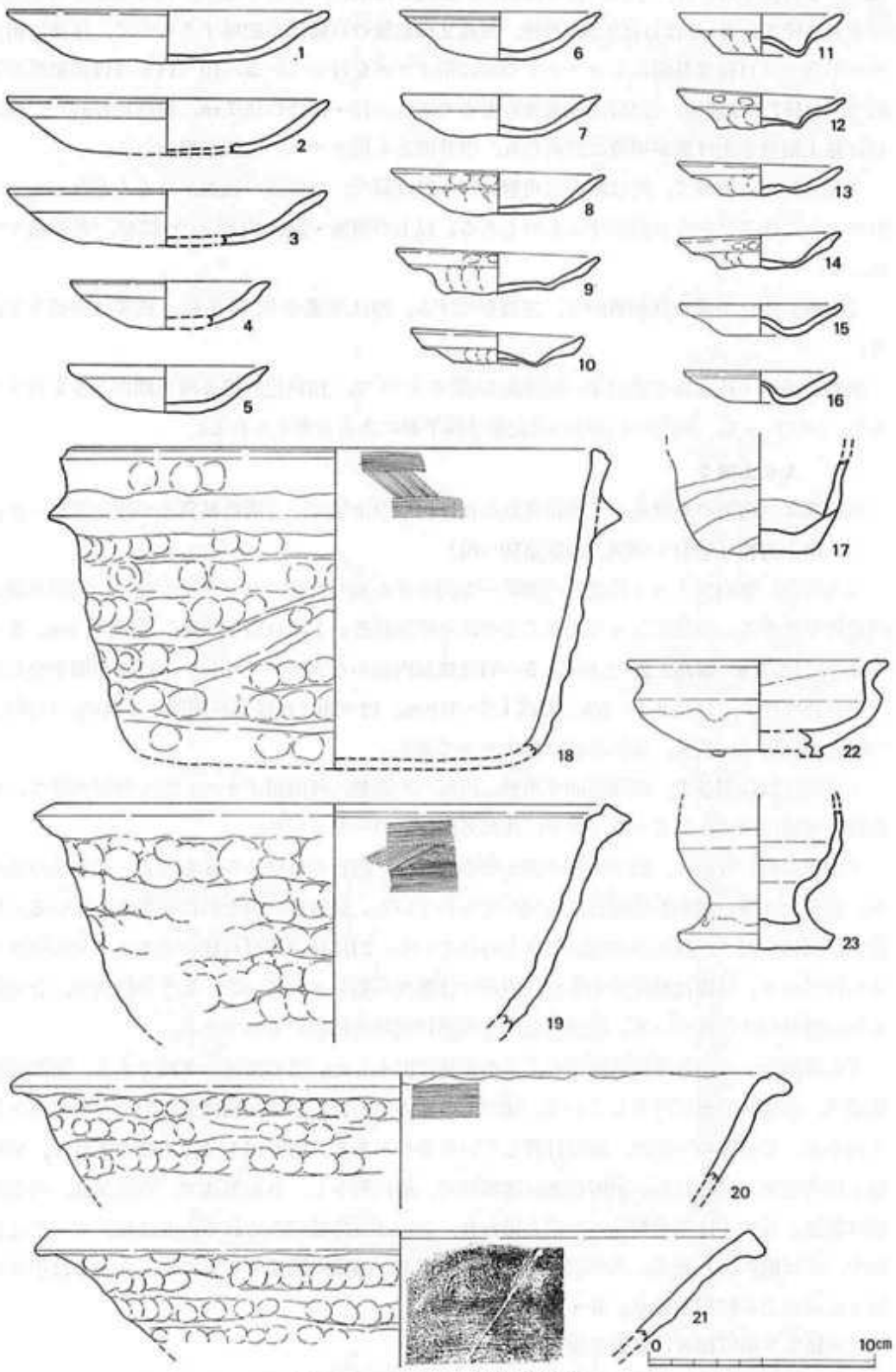
〔土師器〕１～３は口径14～14.3cm，器高2.5cm前後の皿。底部からゆるやかに上り，口縁



第91図　B５土壙１出土遺物実測図（4）



第92図　B 5 土壙 1 出土遺物実測図 (5)



第93図　D２土壙６出土遺物実測図

部がやや外反する。4～7は口径9cm前後，器高2cm前後の小形の皿で，口縁端部を斜上方につまみあげる。8・9は口径9.5cm前後，器高2cm前後の口縁部が肥厚するもので，体部に指オサエが残り，口縁部外面にもヨコナデの前に指オサエを行っている。10～14も口縁部肥厚の手法で，口径7.5cm前後，器高1.5cm前後のものである。15・16は口径7cm，器高1.4cmのヘソ皿。17は粘土紐巻き上げ痕が明瞭に認められ，内外面とも指オサエ。塩壺と思われる。

〔瓦器〕18は羽釜で，鍔は断面三角形。19～21は鍋で，口縁部の屈曲がほとんどなくなり，21のように体部がかなり傾斜するものもある。以上の羽釜・鍋は内面ハケ調整，外面指オサエ。

〔陶器〕22は美濃の鉄釉香炉で，三脚をつける。23は美濃の灰釉花瓶。底部は糸切りである。

美濃の香炉・花瓶は美濃編年の施釉陶Ⅳ期のもので，15世紀の第3四半期に上るものである[7]。したがって，年代の1点は15世紀第3四半期にあると考えられる。

8)　A6土壙2

石組溝より南方の東壁近くで検出されたほぼ円形の土壙で，青灰色粘質土が埋土であった。

出土遺物（第94～98図，図版第59～61）

〔土師器〕第94図1～4は底部内面に一方向ナデを施した後，ヨコナデを施し，内面外周に隆起線を生ずる。口径によって大きく2つに分けられる。1は口径15.6cm，器高2.4cm，2～4は口径14.2cm，器高2.2～2.6cm。5～11は底部内面からヨコナデを行い，底部内面中央に指ナデを施す皿で，口径8.1～9cm，器高1.7～1.9cm。12～20は口縁部が肥厚する皿で，口径7.2～8cm，器高1.5cm前後，体部外面は指オサエである。

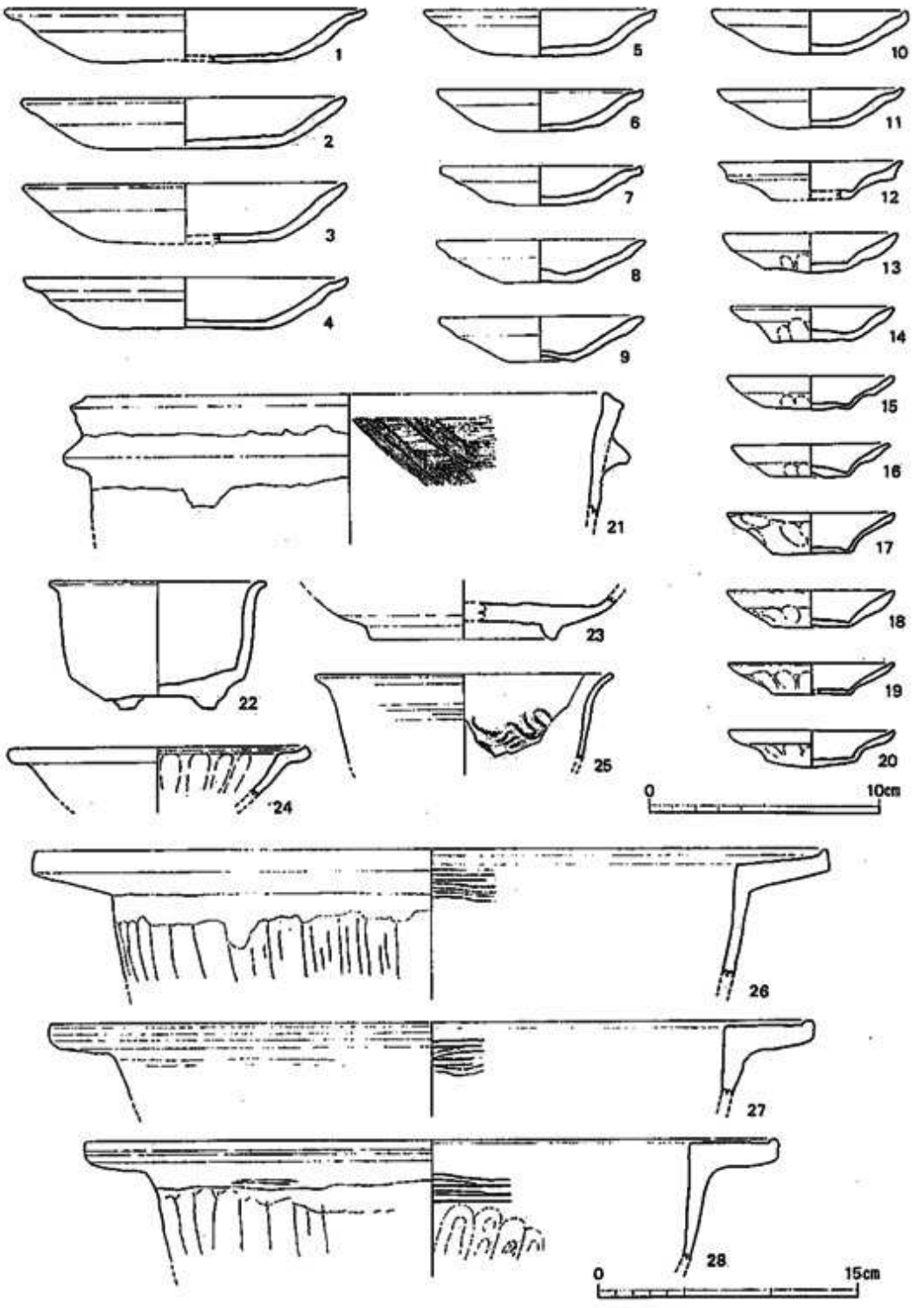
〔瓦器〕21は羽釜で，鍔は断面三角形。内面ハケ調整，外面指オサエ。26～28は火鉢で，口縁部～体部内面にかけてヘラミガキ，体部外面は縦のヘラミガキ。

〔中国陶磁〕青磁は，23が大形の椀か盤の底部で，高台の直径8.5cmを測る。灰白色の胎土に，黄緑色の厚い釉が外底畳付にまでかけられている。高台は内面を斜に面取りしている。内面には圏線が廻り，見込部の釉は欠きとられている。24は杯で外反口縁の先端が上方に引き上げられている。外面は無文であるが，内面には蓮弁が廻らされている。胎土は灰色で，青緑色の厚い釉がかけられている。灰黒色土出土の第12図36と同形のものである。

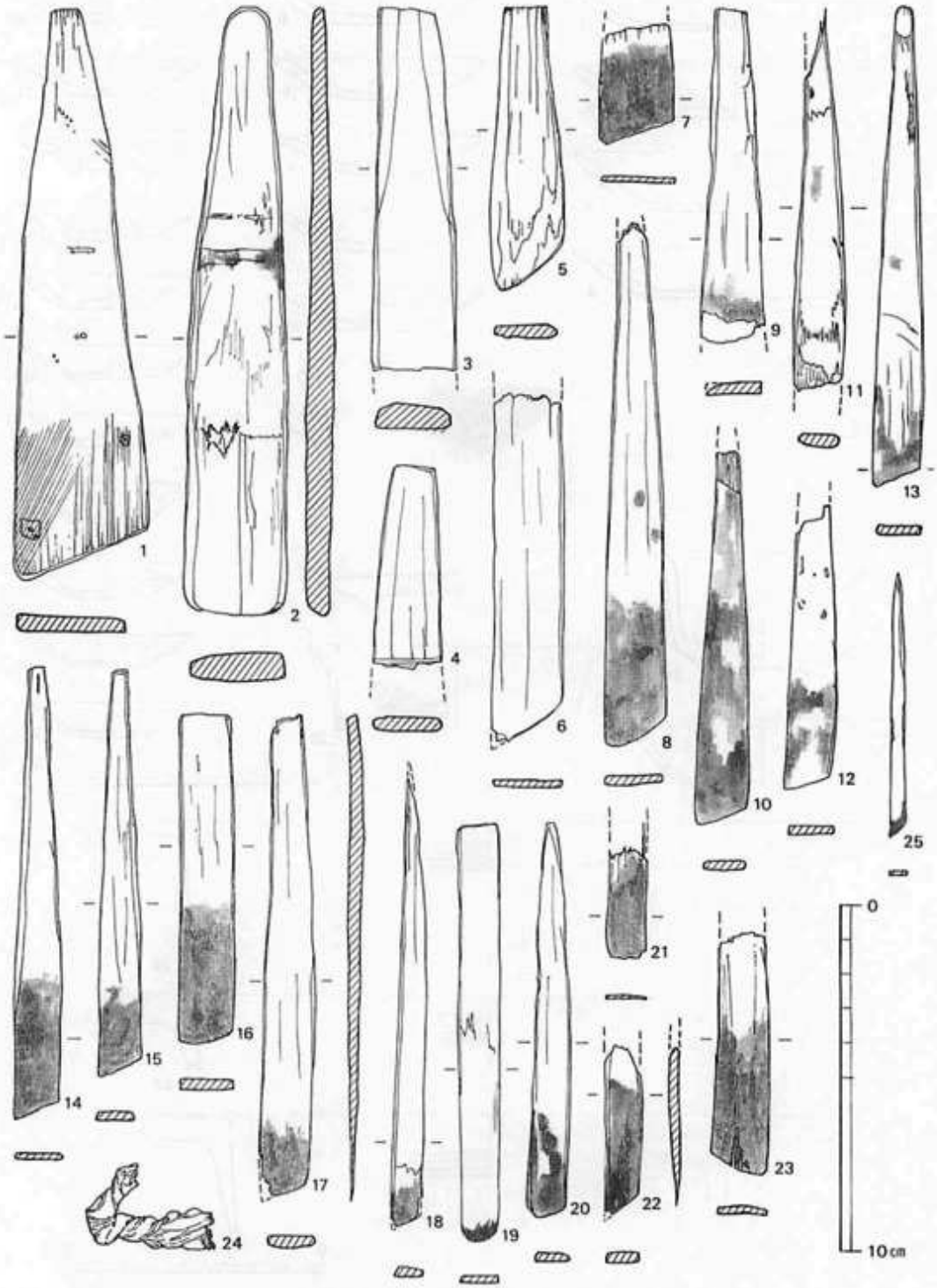
〔木製品〕ここからは漆器関係の工具が多量に出土した。第95図はヘラ類である。第95図24は布で，朱漆が全面に付着していて，漆ごしの布と思われる。第96図は先端の尖った工具と箸であるが，この箸の一部は，漆の付着しているものがある。第97図1は差歯式の下駄で，第98図1はその歯と思われる。第97図2は漆器椀で，楕円形をし，外面黒漆で，内面朱漆，外面文様は朱漆。3・4は漆塗製品の一部と思われ，3には金蒔絵がみられる。5は櫛，6・7は折敷で，6は組み合わせ式。第98図2・3は不明だが，漆塗に関係するものか。4・5は中央に切りこみのある楔形木製品。6・7は加工品。

〔金属器〕第97図8は鉄製毛抜き。

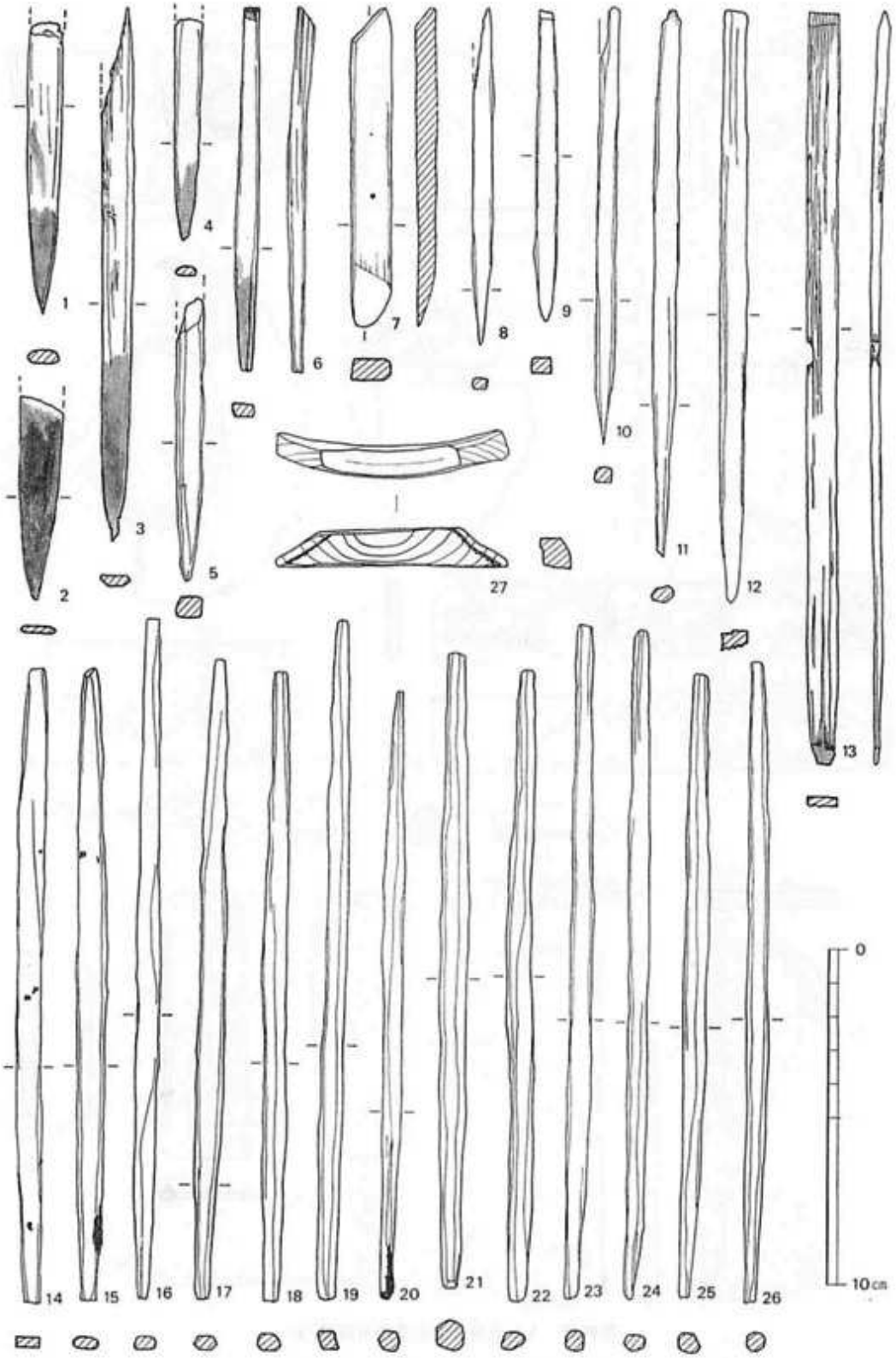
土師皿の形態はD2土壙6に近いので，15世紀第3四半期と考えておけよう。



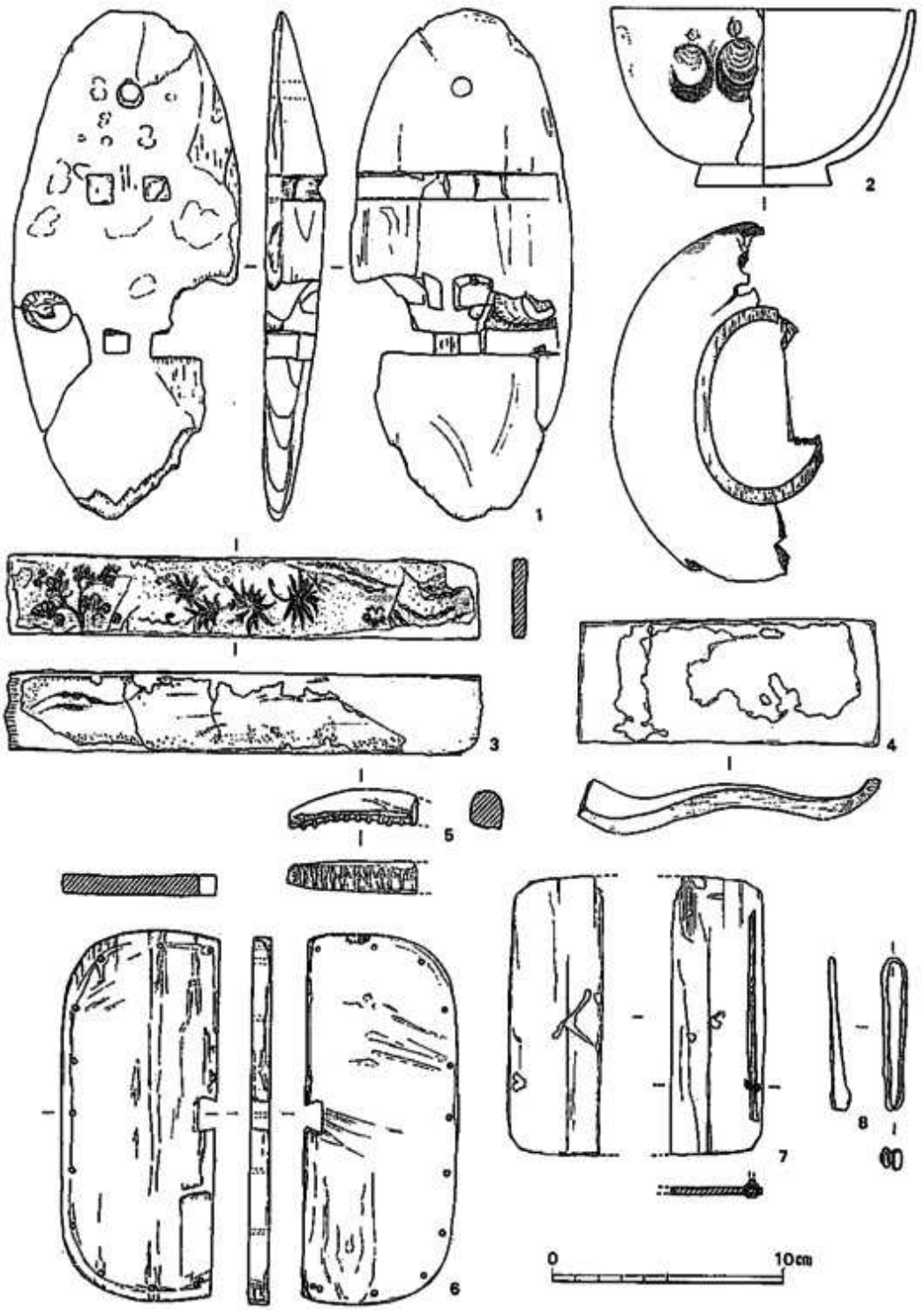
第94図　A６土坡２出土遺物実測図 (1)



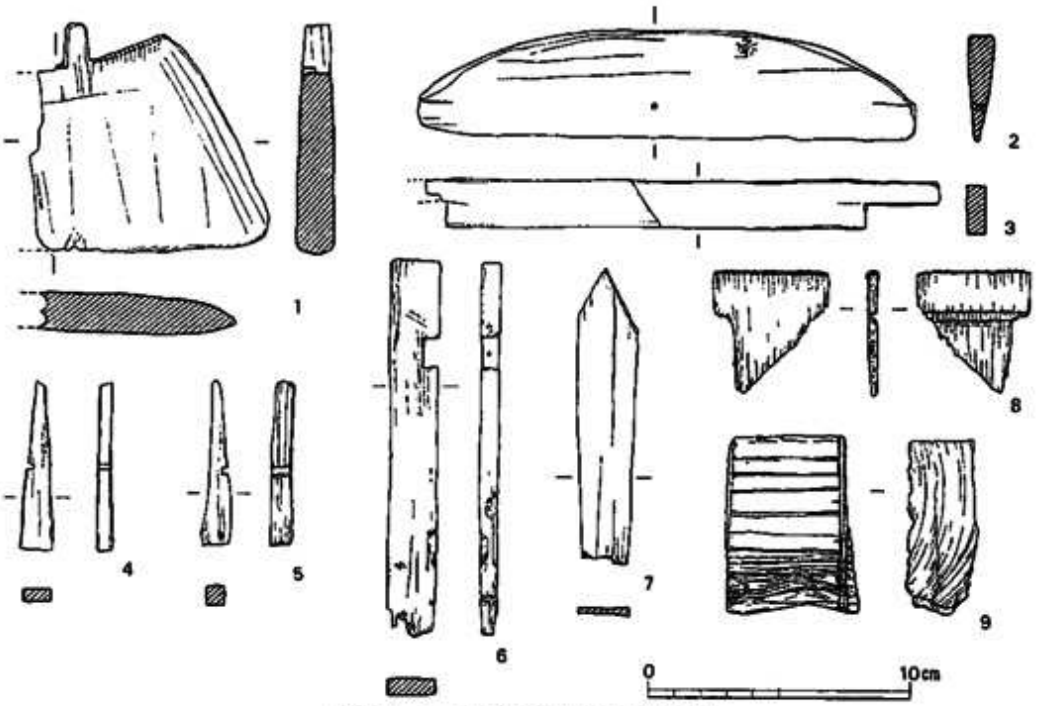
第95図　A 6 土壙 2 出土遺物実測図 (2)



第96図 A6土壙2出土遺物実測図 (3)



第97図　A６土壙２出土遺物実測図 (4)



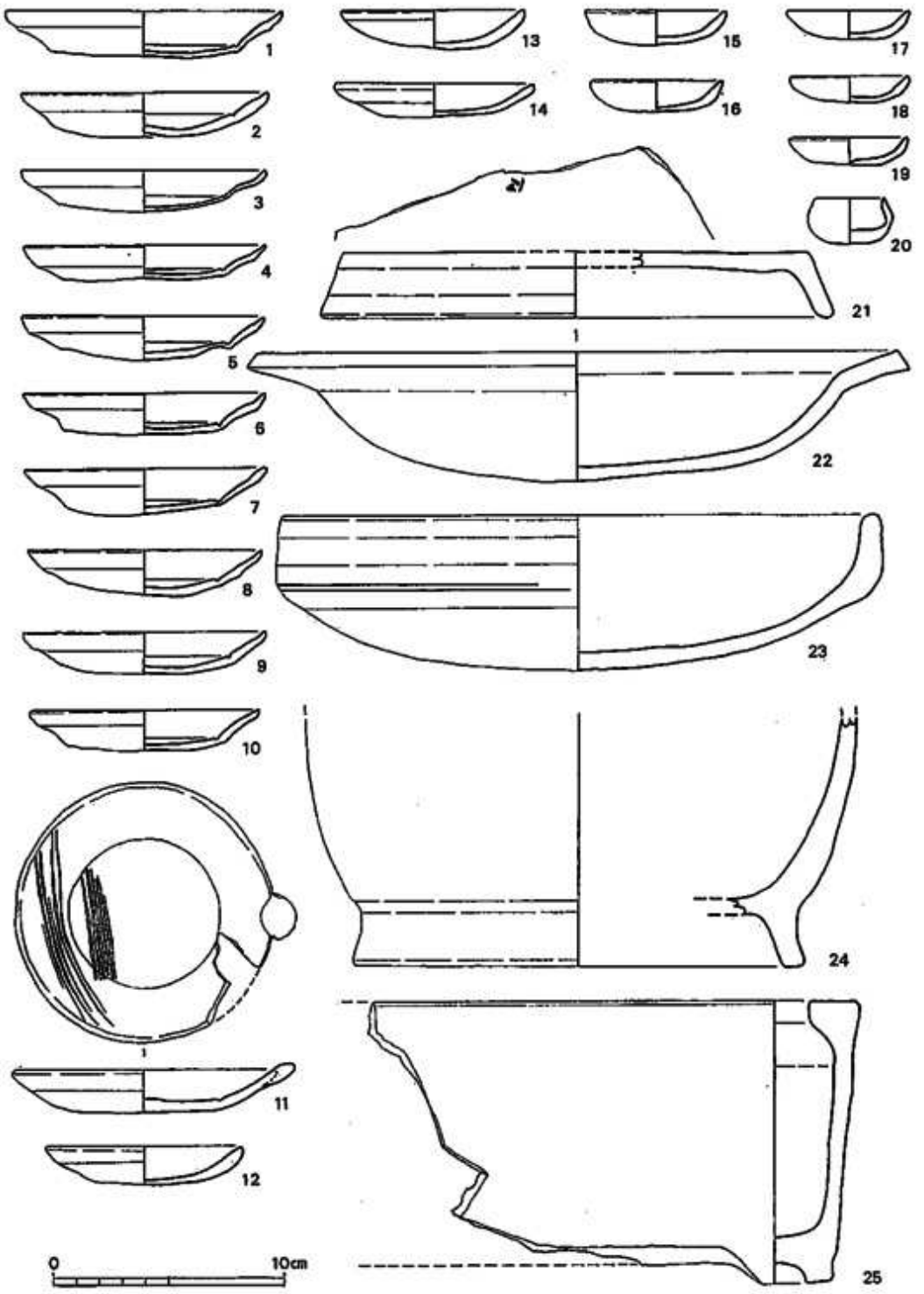
第98図 A6土壙2出土遺物実測図 (5)

9) B4土壙1 (図版第21上)

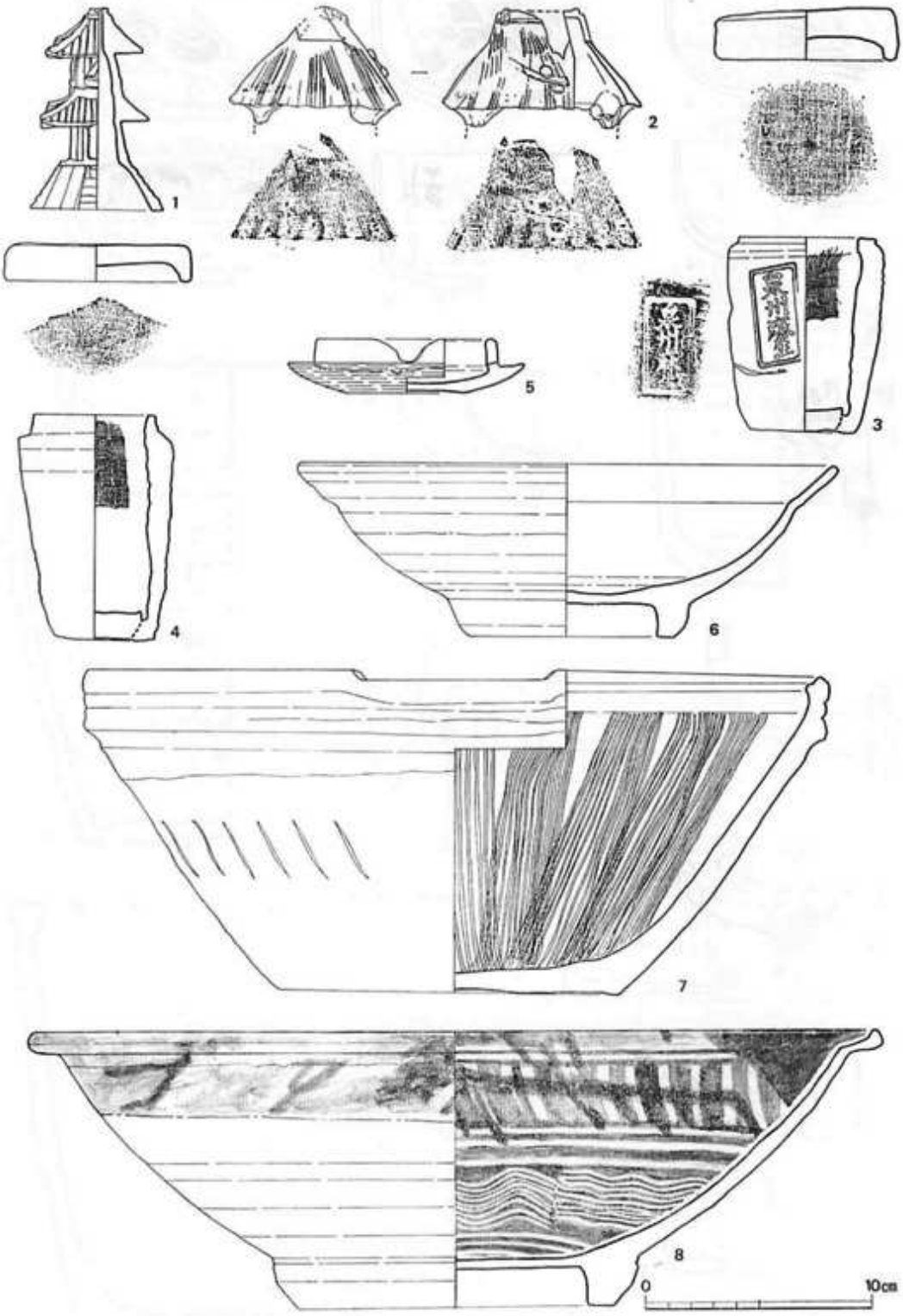
一辺約2.7m，深さ0.6mのほぼ方形の土壙中央に，直径約1.9m，深さ約1mの円形の土壙が掘り込まれた二重構造をしていて，方形土壙内の南辺と東辺一部に石列が認められた。円形土壙は地山の黄褐色粘質土まで掘り込まれていたが，その下の礫層にまでは達していなかった。方形と円形の二重構造や底部が礫層まで達していないこと，方形土壙周辺の石列などからみて，単なるゴミ捨て用の土壙とは考えられず，当初は何らかの機能を有していた遺構ではないかと思われる。多種多量の遺物が出土したが，そのうちの主なものを提示する。

出土遺物 (第99～102図，図版第62～64)

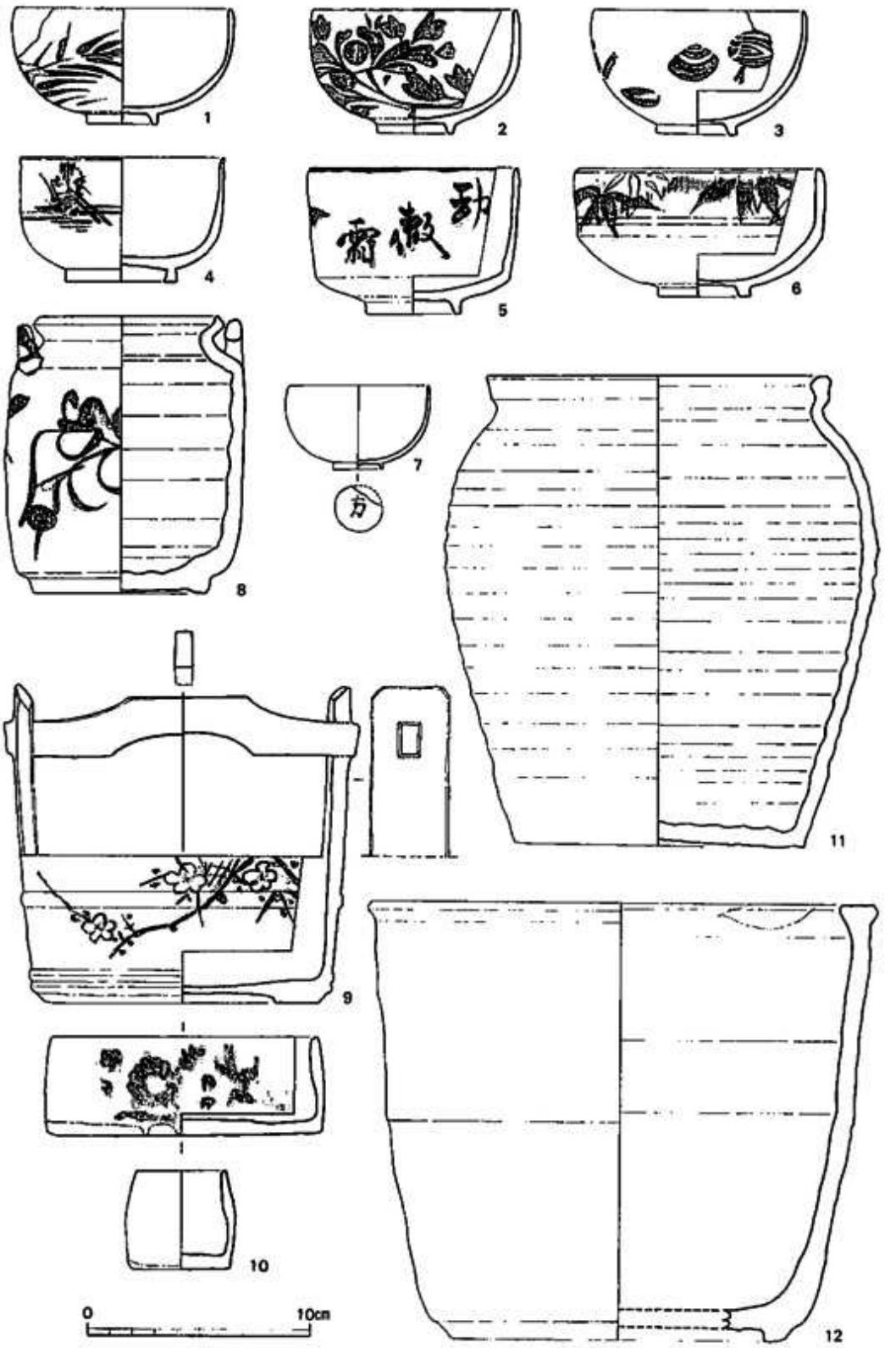
〔土師器〕第99図1～19は皿で，1は口径12cm，器高2cm，2～10は口径10.2～10.8cm，器高1.6～2cm。これらの内面外周には1条の沈線が廻り，薄手のものが多く，丁寧な作りで，焼きも良い。また，口縁部が黒く焦げているものが多い。11は口径11.4cm，器高2cmの灯明皿で，全面に赤色の釉薬を塗っている。内面外周に1条の沈線を廻らし，口縁には小円形の把手を付け，その反対側は櫛目条線を入れる。この条線のある口縁部には焦げ痕が認められる。12～14は口径8.1～8.8cm，器高1.6cm前後の皿で，15～19は口径5.2～6.2cm，器高1.3cm前後の手捏の小皿である。20はミニチュア壺。21は蓋と思われ，内面に『に』と読める墨書がある。22・23は焙烙で，22の内面には墨のようなものが全面に付いている。24は台付の壺になるか。25は平面長方形の火鉢か香炉になると思われる。第100図1は二重塔のミニチュアで，外面全面に濃緑色の緑釉がかけられている。2は屋根のミニチュアで，入母屋式のかや葺きを表現する櫛目様の条線が入る。四隅に小突起があり，下の家にかぶせたものであろう。3・4は焼塩



第99図　B 4 土壙 1 出土遺物実測図 (1)

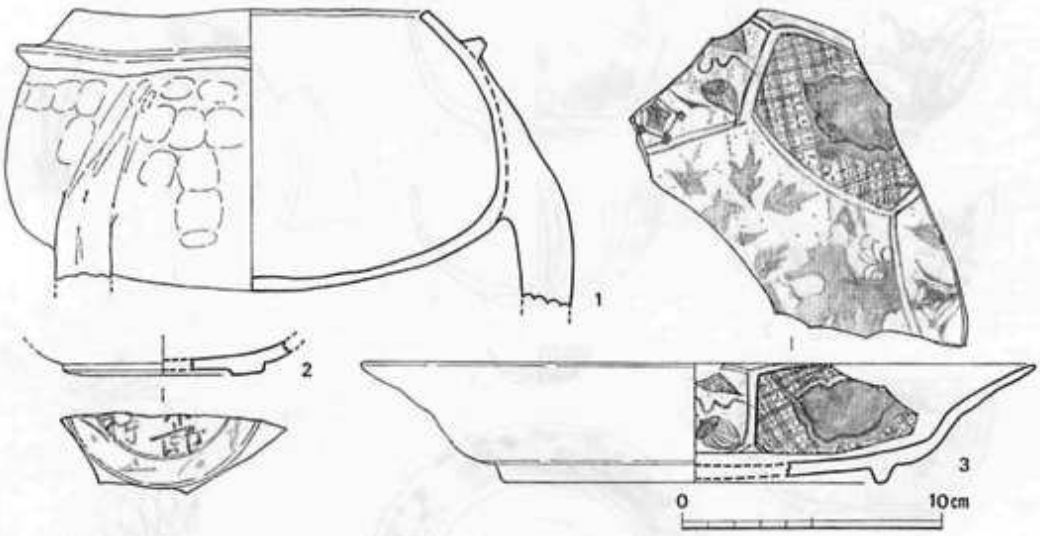


第100図 B 4 土壙 1 出土遺物実測図 (2)



第101図　B 4 土壙 1 出土遺物実測図 (3)

第102図　B 4 土壙 1 出土遺物実測図 (4)



第103図　その他の土壙出土遺物実測図

壺で，3には『泉州麻生』の印が押捺してある。

〔陶器〕第100図7は備前擂鉢。第101図1～7は京焼の茶椀で，5には『新興動徹霜』の字が書かれている。8は美濃の志野織部の双耳壺。9は京焼の手桶形鉢。10は美濃の御深井鬢盥。11は鉄釉甕で，後述のムロ埋甕と同じ系統のものと思われ，口縁部の形態はまだ丸味が残っている。この種の甕の口縁部はB4土壙1→B5ムロ→A2ムロの順に変化をみせるのかもしれない。12は外面赤褐色，内面黄緑色で，丹波水甕であろう。

〔磁器〕第102図1・2・4・5は典型的なくらわんか茶椀。7は紅皿。8は高台の作りや染付の色から初期伊万里の可能性もあろう。9～11はくらわんか皿で，内面の桐文はコンニャク版による。

〔石製品〕第102図13は長方硯。

焼塩壺の『泉州麻生』の印は17世紀後葉から18世紀前葉に限定される[8]こと，コンニャク版の使用は18世紀に入ってから[9]とされていることから，18世紀前葉頃の年代が考えられる。

10)　**その他の土壙出土遺物**（第103図，図版第64）

1はB3土壙1から出土した三脚付羽釜で，口径14.6cm，内面ヨコナデ，外面指オサエ。外面(底部中心は除く)にススが全面に付着している。2はD3土壙3から出土した墨書のある中国陶磁(白磁)で，高台畳付にも墨書し，高台内底部の文字のうち，『郎』が読める。3はD4土壙3から出土した復原口径26.2cm，器高4.6cmの中国陶磁で，呉須赤絵の扶葉手の大皿である。畳付には砂粒が付着する。

6.　ムロと出土遺物

1)　ムロの概要

第1次調査の際，南北トレンチで1基検出されているが，今回は2基を検出した。B5ムロ

とＡ２ムロである。Ｂ５ムロ(図版第22)は一辺が約1.8mのほぼ正方形で，床面レベルは標高約38m。人頭大の河原石を１段ずつ漆喰で固定しながら積み上げ，また内面の石と石との間には更に漆喰で目張りしていた。床面の漆喰は厚さ３cm。西北に階段が付けられていて，この床面も漆喰が敷かれていた。西南隅には甕が埋めこまれていた。

Ａ２ムロは東西２m，南北1.5mで，床面レベルは標高約37.9m。残存した部分をみると，花崗岩割石・切石の平坦面を内側に向けた石積であるが，その積み上げ工法はＢ５ムロと同じ方法と思われる。そして内側には厚さ５cmの漆喰を塗り，石は全くみえなくなっている。この内壁には最終仕上げのハケ痕が明瞭に認められた。また，南東隅に石がおかれていて，これは階段の一部と考えられる。東北隅に甕が埋めこまれていた。

両者とも，一隅に甕を埋設しているが，床面のレベルを測ってみたところ，この埋甕に向かって床全体が少しずつ傾斜するように作られていた。したがって，この埋甕は水溜の機能を有していたものと考えられる。

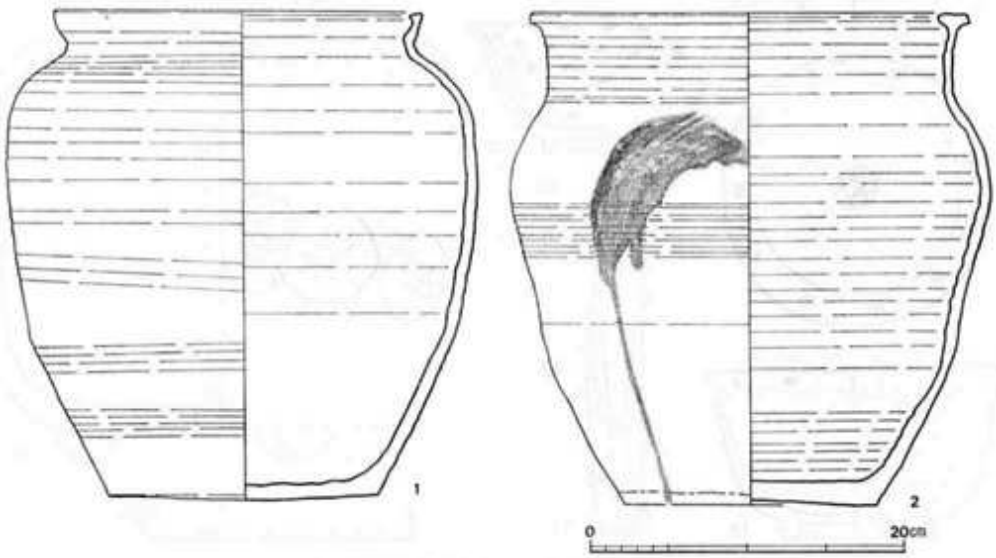
ムロ埋甕は陶器である。第104図１はＢ５ムロの埋甕で，口径23cm，器高31.2cm。鉄釉を底部外面を除いて全面にかける。２はＡ２ムロの埋甕で，口径28cm，器高31.7cm。１と同様の施釉法で，肩部に黒色の流し釉がかかる。また底部内面に小石が円状に付着する。

2) **Ｂ５ムロ出土遺物**（第105・106図，図版第65）

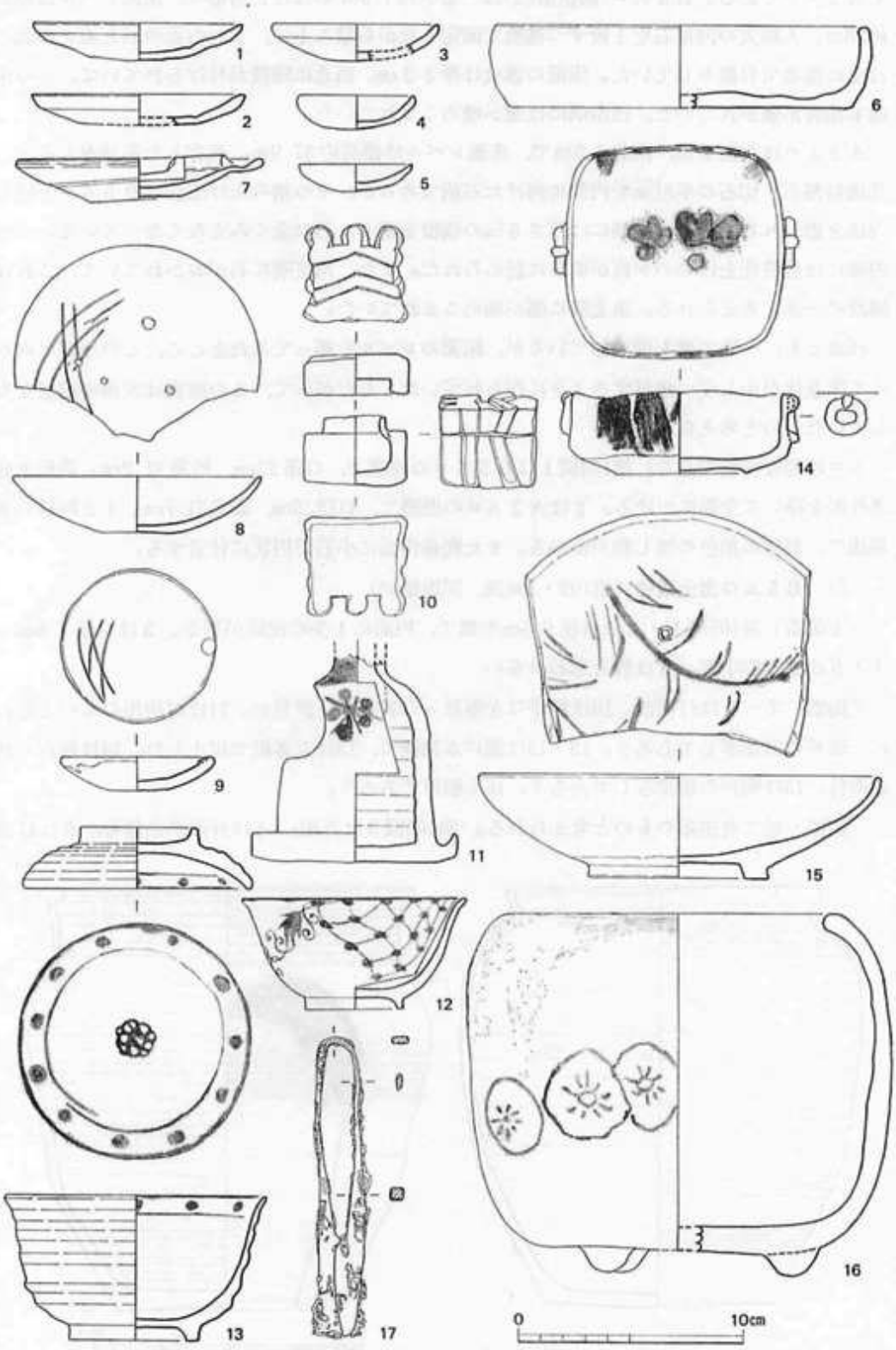
〔土師器〕第105図１・２は口径9.5cmの皿で，内面に１条の沈線が廻る。３は口径7.8cm。４・５は手捏の小皿。６は盤と思われる。

〔陶器〕７～９は灯明皿。10は獅子口を形取った香合で，伊賀か。11は灯明用のものと思われ，瀬戸の織部写しであろう。12・13は瀬戸本業焼で，13は五客組で出土した。14は瀬戸の鉄絵向付，15は瀬戸の唐津写しであろう。16も瀬戸であろう。

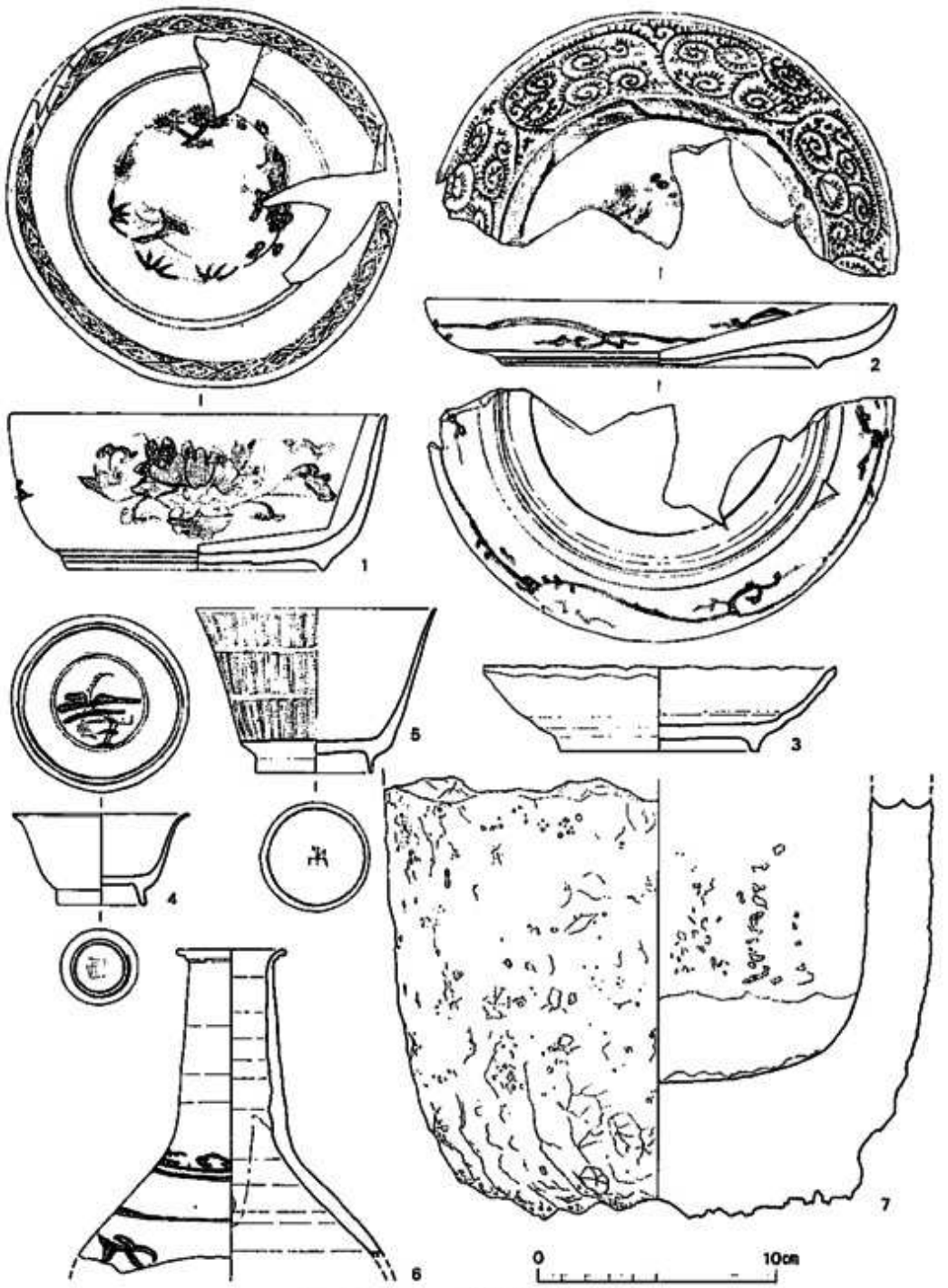
〔磁器〕総て有田系のものと考えられる。第106図３は青磁。４は外面が金錆釉。６は紅染



第104図 ムロ埋甕実測図



第105図　B５ムロ出土遺物実測図 (1)



第106図　B５ムロ出土遺物実測図 (2)

付。

〔金属器〕第105図17は，鉄製はさみ。

〔るつぼ〕第106図７は内面に緑青が付着しているので，銅を溶かしたとみられる。

第105図12・13が瀬戸本業焼のものなので，江戸時代後期に属し，それも19世紀に入ってからのものであろう。したがって19世紀前～中葉にかけてのものと思われる。

7.　瓦溜と出土遺物

1)　瓦溜の概要

発掘区全域で江戸時代の瓦溜を13ヶ所検出した。南区北壁ラインに東西方向に３つ，Ｄラインで南北方向に２つ並んで存在していたのが注意される。これは，あるいは井戸の項で述べたように，江戸時代の町割りとも関連するものかもしれない。すなわち，ゴミ溜としての穴を掘るのは自己所有の土地という規制が働いていたとも考えられなくもないが，ここではこの程度の注意にとどめておく。

2)　瓦溜13出土遺物（第107図，図版第66）

〔土師器〕１は『御壺塩師堺湊伊織』の印が押捺された焼塩壺。

〔陶器〕７は美濃御深井水甕。胎土は淡白褐色，釉は淡黄灰色。外面に幅広の凹状文様を描く。

〔磁器〕２は復原口径20cmの輪花染付鉢。外面に山水画，内面に魚文を描く。３は外面上部に雷文，その下に，間に２つの凹みを作り，その両側に竜を上下反対に交互配置する。畳付は露胎。以上の１・２は中国製染付の可能性も考えられる。４・５は蓋付椀。６は復原高台径10cm，高台高1.8cmの鍋島染付皿。内面に花文，外面に七宝繋文を描く。櫛高台は端正で，櫛文は輪郭線を描き，その中に絵付けする。鍋島染付は，左京五条三坊十五町の調査で出土していて[10]，京都ではこれが２例目である。

〔金属器〕８は引手。

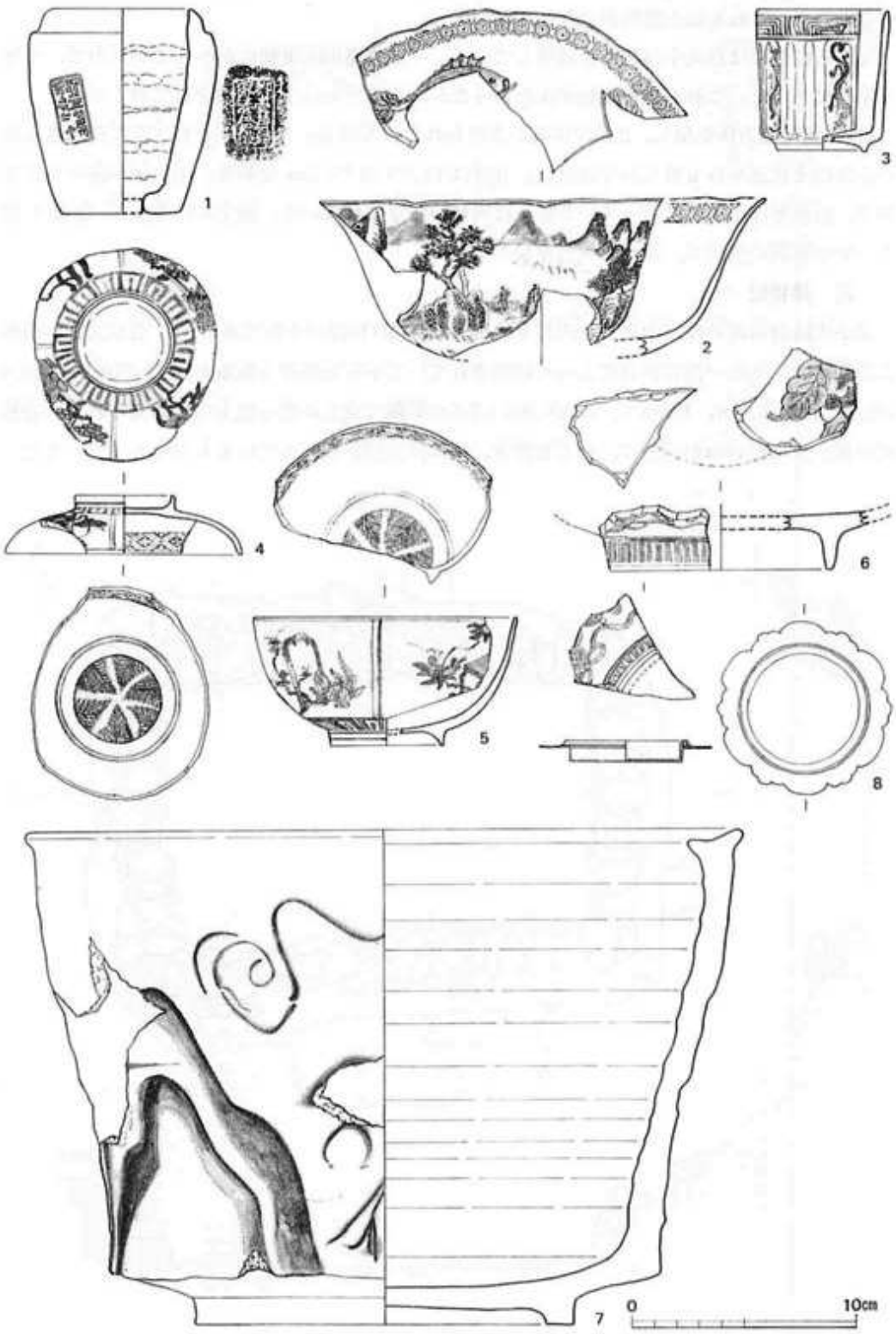
鍋島染付皿の櫛高台は端正で，盛期のものと思われ，この鍋島盛期様式の確立は17世紀末に始まると考えられている[11]こと，焼塩壺の『御壺塩師堺湊伊織』の押印は17世紀後葉から18世紀前葉にかけて用いられたものである[12]ので，Ｂ４土壙１と近い年代で，18世紀前半代の年代が考えられる。

8.　その他の遺構と遺物

1)　石組遺構（図版第23）

Ｃ３石組遺構，Ｃ５石組遺構１・２，Ａ５石組遺構の４基を検出した。いずれも中世のものである。

Ｃ３石組遺構(第108図)は，東西約1.9m，南北は東側で約1.2m，西側で約1.1mのほぼ長方形を呈する。河原石・割石を積み上げたものであるが，一部に瓦片を使用していて，現高35cmである。出土遺物は少ないが，鎌倉時代のものと思われる。



第107図 瓦溜13出土遺物実測図

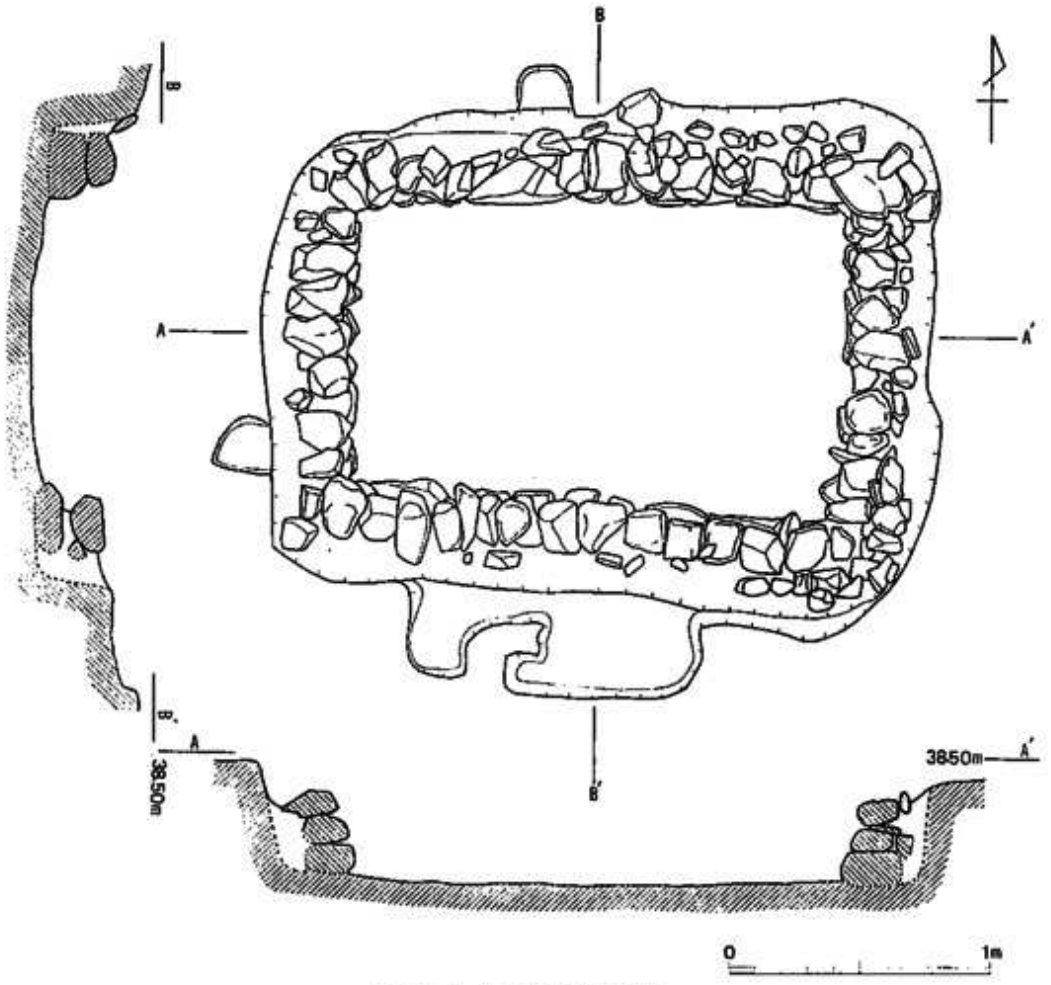
Ｃ５石組遺構１・２は近接してあり，１は一辺約0.6m，２は一辺約１mのほぼ正方形を呈するもので，これも出土遺物が少なかった。

Ａ５石組遺構は鳥丸小路側溝を破壊していて，一部は発掘区東壁にかかっていたので，全体は不明であった。これも出土遺物が少なかったが，そのうちの１点を紹介しておく。

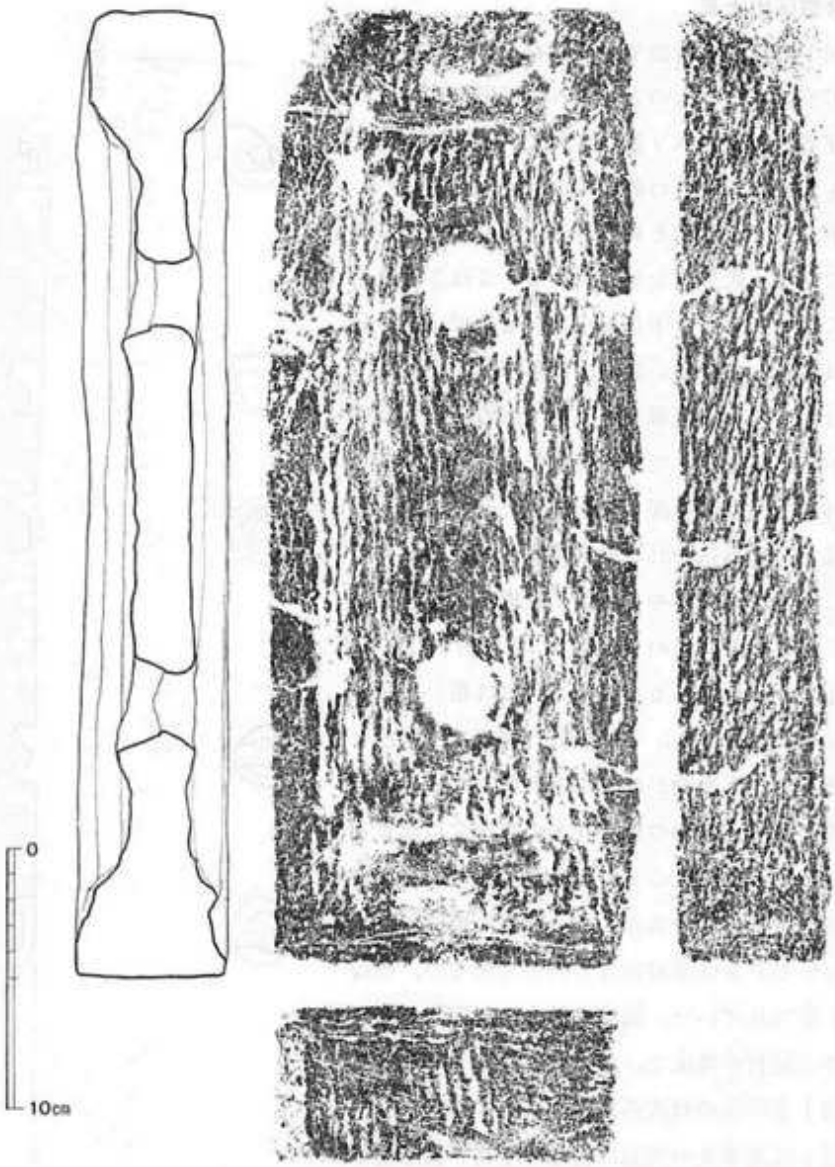
第109図は直方体を呈し，２個所に孔があけられた碑である。ただし，どのように使用されたのかは出土状態からも明らかではない。外形は13.6×13×5.5cmを測る。中央部が窪められており，断面形はＩ字状になっている。孔は両側から穿たれている。胎土には粗い砂を多く含み，やや軟質の焼成で，灰～灰褐色を呈している。

2)　建物址

三条大路側溝Ⅳのほぼ中央で柱穴列を検出した。第110図がそれであるが，各柱穴間の距離は不揃いで，また一部井戸31によって破壊されていて不明な部分もあるが，東から0.9m，(2.4m)，1.4m，0.9m，1.5mで，ほぼ0.9mと1.5m間隔で交互にあったものと考えられる。各柱穴の掘り方は約40cmの円形で，根石を置き，中には柱根が残存しているものもあった。また，



第108図　Ｃ３石組遺構実測図



第109図　A５石組遺構出土遺物実測図

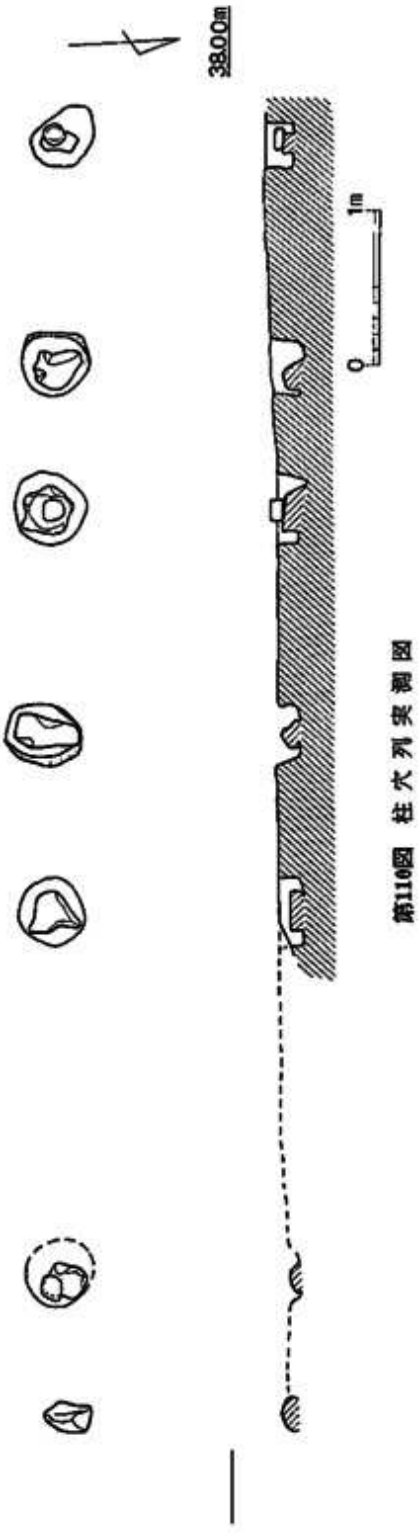
三条大路側溝西Ⅱの北側で柱穴３個を検出した(第15図)が，これが先の柱穴列の続きであるのか，あるいは，明確ではないが三条大路側溝Ⅳの層位図(第23図)中の柱穴及びその東西に存在していた石とつながるものか，どちらとも明らかにすることができなかった。この柱穴列からの出土遺物はほとんどなく，時期は溝Ⅳの廃絶以後とだけしか確認できなかった。

Ｂ３建物址(図版第24)は，掘り方が東西約3.2m，南北2.8mのほぼ方形で，南東に偏って，東西約2.1m，南北約1.2mの間隔で扁平な石があり，その南辺の中央にも石があった。また掘方北辺際のところは小石が約0.4m の間隔で２個あった。これらの上に木質が残存していて，何らかの建物の可能性が考えられる。時期は出土遺物から鎌倉時代と思われ，あるいはＣ３石組遺構と関連を有するかもしれない。

3)　発掘区出土瓦

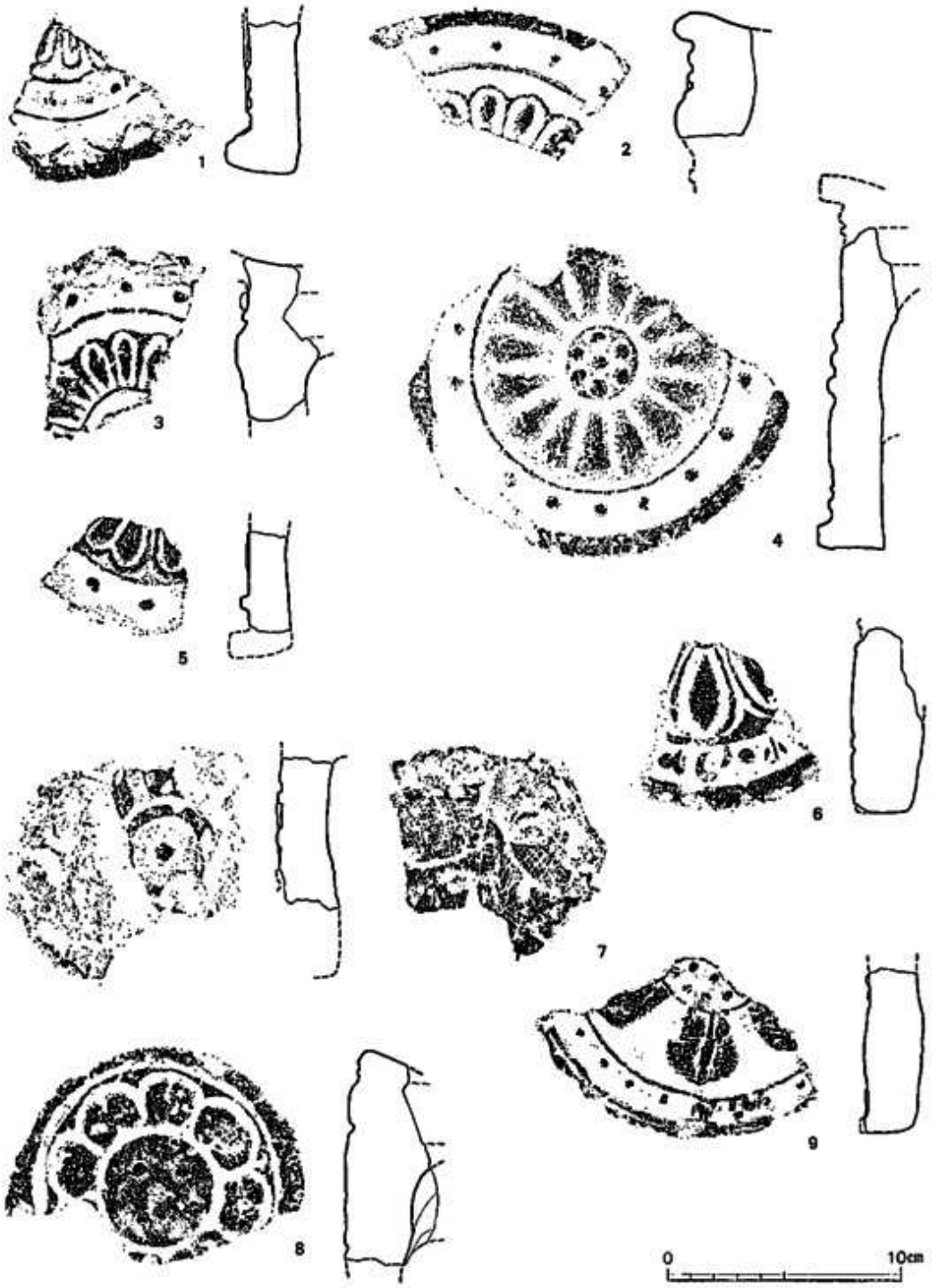
第111図1は花弁の特徴や鋸歯文をもつことなど，平城宮6307型式に近いものと思われるが同笵例は見当らない。瓦当裏面はケズリ調整されている。胎土にはあまり砂を含まず，硬質の焼成で，褐色を呈している。2は第31図1と同笵と見られる。調整や胎土，焼成は同様である。灰黒色を呈している。3は2とほとんど同文であるが2より中房が小さいもので，その分花弁が細長くなっている。胎土，調整等は2と同様である。4は単弁15葉の蓮華文軒丸瓦である。花弁は単に盛り上がっているだけで，輪郭線などはもっていない。瓦当外周に文様面の深さに対応した凸線が廻り，瓦笵は周縁まで包み込まれる形式であったことがわかる。胎土には砂を混え，やや軟質の焼成で，黒色を呈している。6は小野瓦屋の製品で，珠文帯に2つの『小』字が表わされている。瓦当裏面には粗い布目痕がある。胎土に砂を混え，やや硬質の焼成で，灰色を呈している。7は瓦当面がほとんど剝離しているが，第31図3のような，横幅の広い花弁の蓮華文になると思われる。一本造りによるもので瓦当裏面に布目を残している。胎土には砂を含み，やや硬質の焼成で，灰色を呈している。8は第31図5と同笵であるが，周縁部分が狭く作られている。調整や胎土は31図5と同様である。やや硬質の焼成で，淡灰褐色を呈している。7は第32図1と同笵の丹波系瓦である。

第112図1は蓮華文の周囲に密な珠文帯と唐草文様を廻らせたものである。左側面の瓦当よりに，唐草文軒平瓦の瓦笵の一部が押されている。この部分には第90図1のようにヘラ記号が付されていることがあり，この唐草文も一種の記号としたものかと考えられる。胎土には砂，小石を含み，やや軟質の焼成で灰色を呈している。2～6は播磨産の軒丸瓦と見られる。いずれも胎土には砂を含み，調整はナデを基調としている。2，3はやや軟質の焼成で灰色を呈している。4～6は同笵品で，周縁が特に高く作られている。総て，極めて硬質の焼成で，暗青灰色を呈している。7

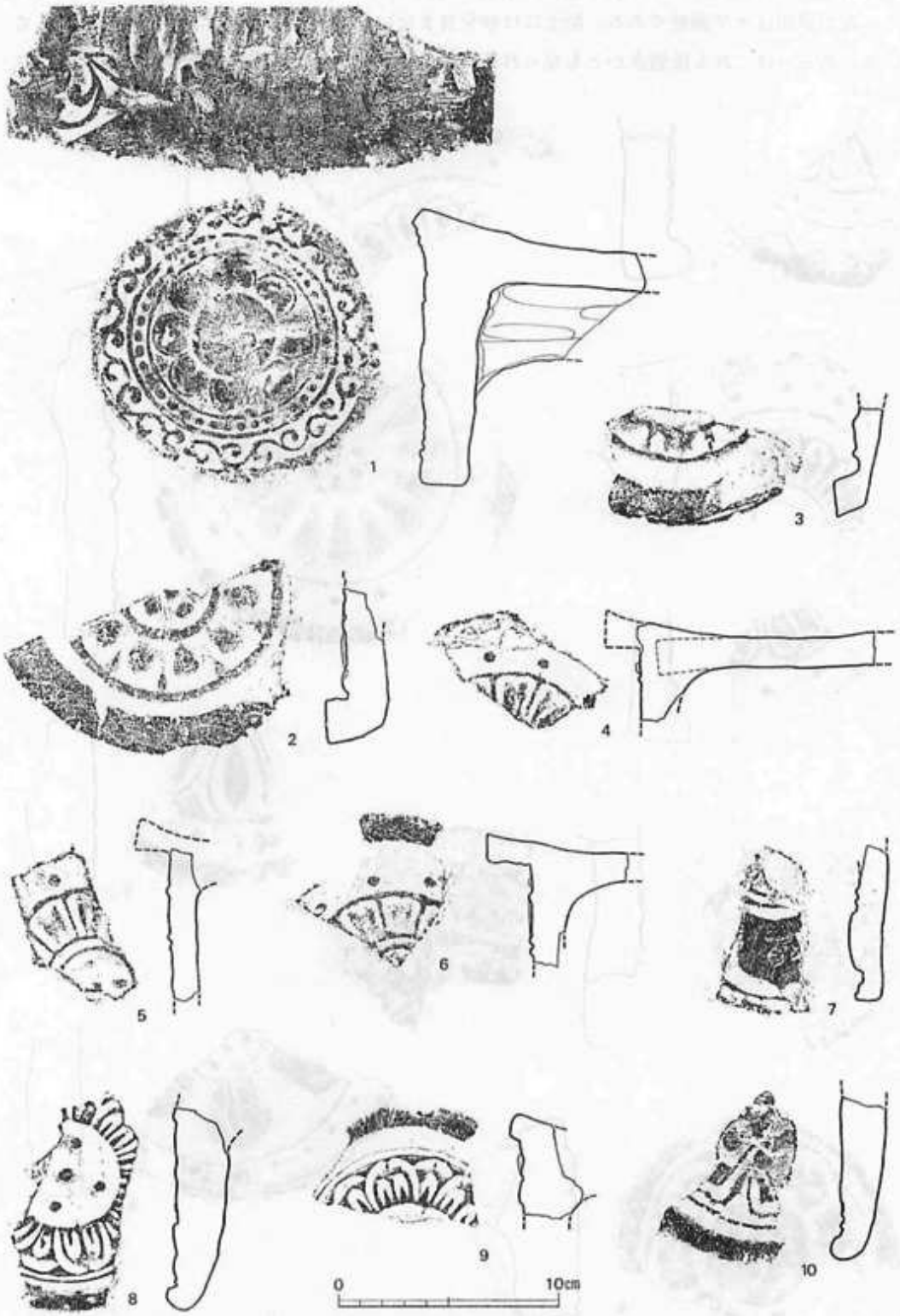


第116図　柱穴列実測図

は小片のため全形を復原できないが，第31図３の蓮華文に類似するものと思われる。瓦当は薄く，瓦当裏面はナデ調整である。胎土には砂を含まない。やや硬質の焼成で淡灰褐色を呈している。あるいはこれも播磨産かとも見られる。８，９は同笵品で，複弁６葉の花弁の間からさ



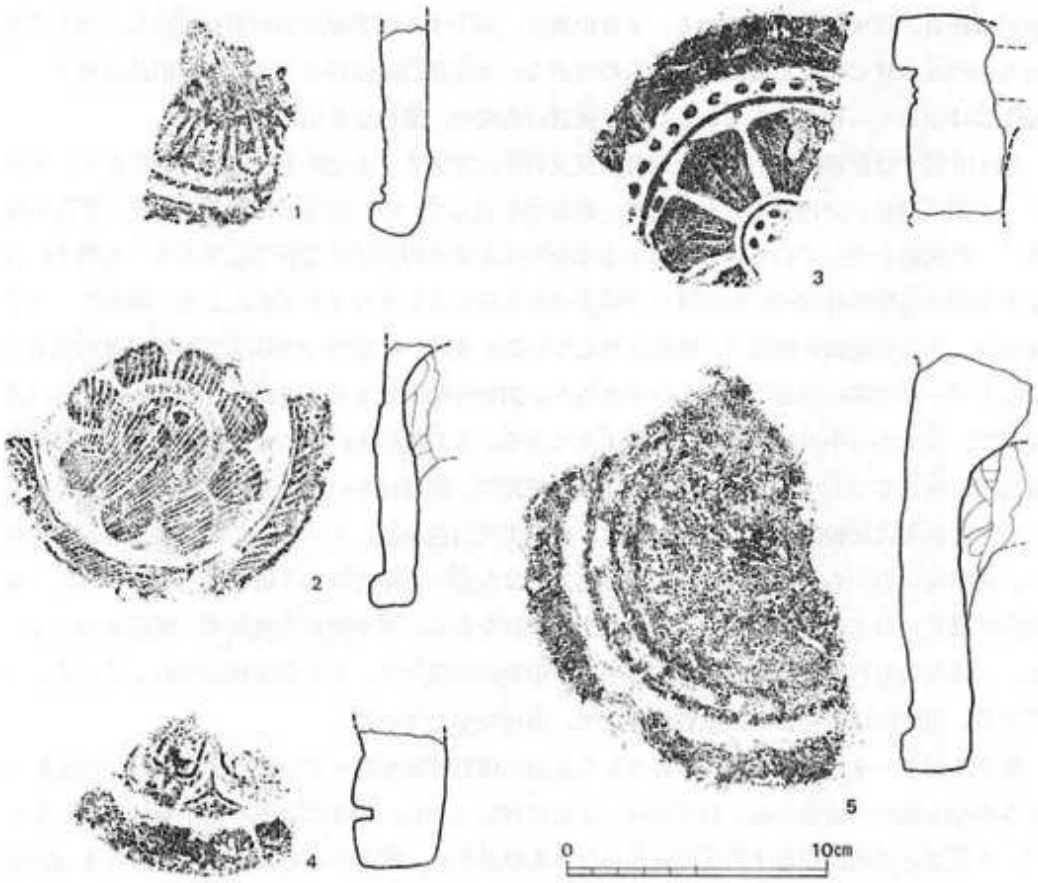
第111図　発掘区出土瓦実測図 (1)



第112図　発掘区出土瓦実測図 (2)

らに単弁が覗いている状態を表わしている。中房は花弁より一段低く，4個所で花弁より小さな突起が出ており，輪花状に作られている。瓦当の成形は指オサエによっており，瓦当裏面は丸味をもっている。胎土には砂を含み，やや硬質の焼成で，明るい褐色を呈している。10は第45図2と同笵である。瓦当文には笵傷が目立つ。成形や胎土などは8，9に同じである。

第113図1は剣頭文状の花弁の蓮華文軒丸瓦で，中房が大きく作られている。調整はナデと指オサエで，瓦当面に糸切痕が認められる。胎土には砂を混え，軟質の焼成で黒色を呈している。2は単弁8葉の蓮華文軒丸瓦で，瓦当面には糸切り痕が顕著に残り，瓦当裏面は指オサエされている。胎土には砂を含み，やや軟質の焼成で，灰褐色を呈している。3は擬宝珠状の花弁で，弁央に鎬状の突線が表わされている。瓦当はかなり厚く作られているが，丸瓦との接合部の補強粘土は少ない。胎土は緻密で，やや硬質の焼成で青灰色を呈している。4は白鳳期の蓮華文のように花弁が盛り上っており，弁間文も三角錘状に突出しているものであるが，瓦当の厚さや調整なども明らかに異なっており，後世に古式の文様を真似たものと思われる。胎土には砂を含み，硬質の焼成で暗赤褐色を呈する。一部に自然釉も認められる。5は2本の圏線にはさまれた珠文帯と花弁の一部が認められるが，全体に磨滅しており，細部は不明である。胎土は砂を含まず，緻状になっている。軟質の焼成で灰色を呈している。



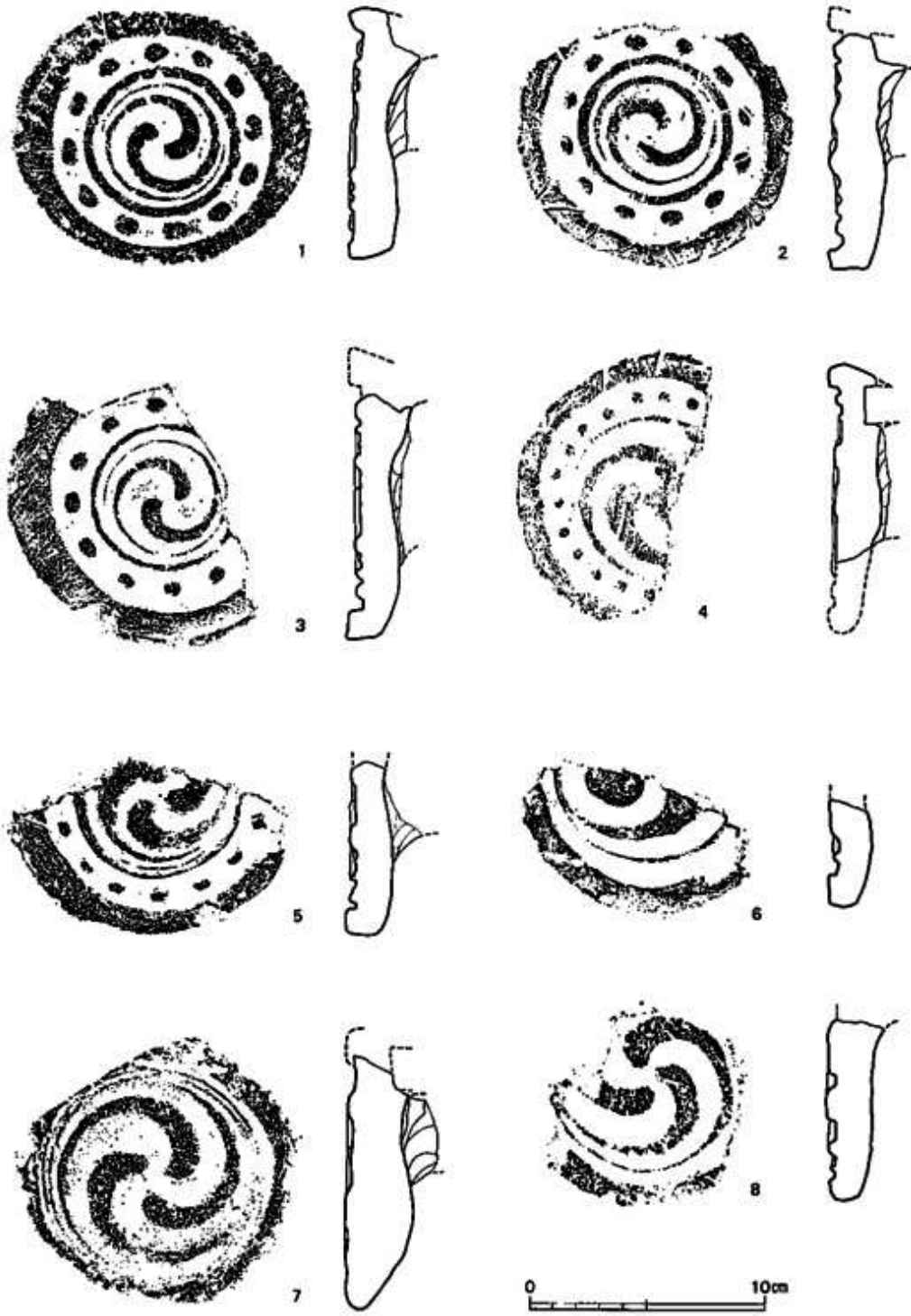
第113図　発掘区出土瓦実測図（3）

第114図は巴文の軒丸瓦で，複数の造瓦所の製品が含まれているかもしれないが，総てほぼ同一規格によったものと見られる。調整もナデと指オサエを基調としている。胎土もやや砂を含むもので，焼成はやや硬質～やや軟質程度である。瓦当の断面を見ると，7が他と少し異なり，裏面が丸く盛りあがっており，また7は瓦当面に離れ砂も認められる。

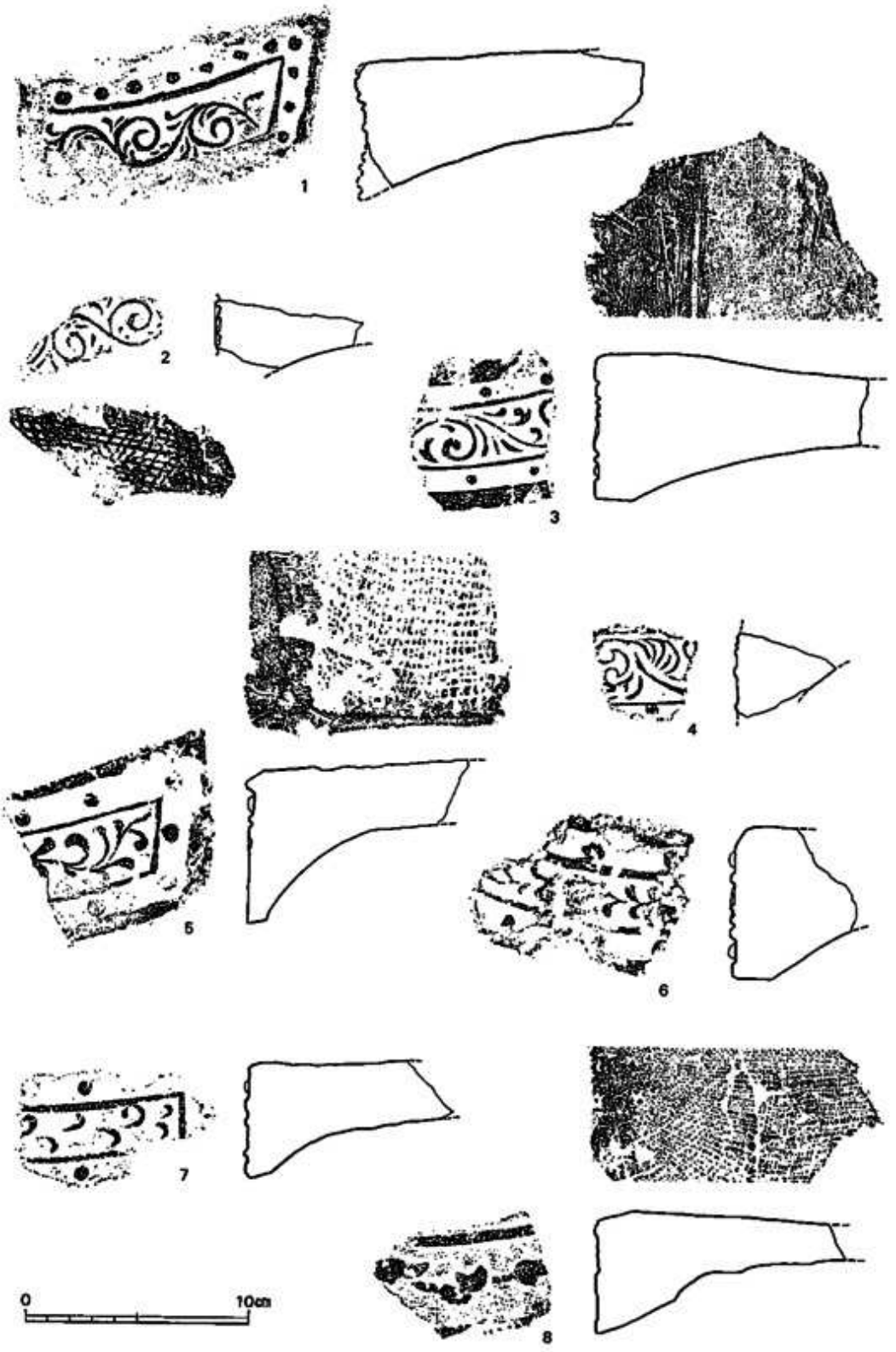
第115図1，2は平城宮6760B型式の軒平瓦である。左右から中央に向う唐草文で，珠文帯が一段高く作られることが特徴である。顎部はケズリ調整であるが，2には細かい格子の叩き目がある。1はやや軟質の焼成で褐色を呈し，2は硬質の焼成で，灰色を呈している。3は第33図1，2と同笵である。調整はヘラケズリにより，比較的丁寧になされている。胎土，焼成は第33図1，2と同様で，灰色を呈している。4は第33図4と同笵の小野瓦屋産の軒平瓦である。他の同笵品には，この破片で，珠文の上にある三角形の空間に小さく『小』字を入れた例がある。5は均整唐草文の中心に『左』字を入れるものである。顎部は大きくヘラケズリされ，瓦当部が薄くなっている。平瓦部凹面の布目はかなり粗い。胎土には砂を含み，やや軟質の焼成で，瓦当部は黒色，他は灰白色を呈している。6も5と同じ系統の唐草文で中心に小さく『上』字を入れるものである。胎土には砂をほとんど含んでいない。軟質の焼成で，灰褐色を呈している。7も5，6の文様の流れをひくとも見られるが，かなり簡略化されたものになっている。瓦当面は珠文帯までの厚さで周縁は作られていない。胎土は小石を含むが緻密で，焼成は硬質，青灰色を呈している。8は中央に，垂下する側面観の宝相華を表わし，左右に葉またはつぼみ状の単位を展開させるものである。平瓦部凸面は指オサエによる凹凸が目立つ。胎土には小石や砂粒を含んでいる。やや硬質の焼成で，黒褐色を呈している。

第116図1は複線で表わされた均整唐草文軒平瓦である。瓦笵が上方で強くおされているため，上側の周縁が突出するような特異な断面形を呈している。胎土には細砂を混え，硬質の焼成で，暗灰色を呈している。2は簇手2本を単位とする均整唐草文軒平瓦である。瓦当文には水平方向の笵傷が目立つ。顎部はナデ調整であるが主としてヘラケズリによる。胎土には砂粒を含み，かなり硬質の焼成で，灰色を呈している。3は一応偏行の唐草文であるが第33図6・7などの一群の系統に含まれるものであろう。調整や胎土等もそれに同じである。4，5は同笵品で，左右から中央に向う唐草文軒平瓦である。ともに胎土にはあまり砂を含まず，硬質の焼成で，灰色を呈している。6は丹波産の軒平瓦で，顎部はその特徴となる縄目叩きがなされている。胎土は比較的緻密であり，硬質の焼成で灰白色を呈している。7は軒平瓦右端の破片で，唐草文は右から左へ流れているが，あるいは左右から中央に向う唐草文とも思われる。瓦当面には瓦笵の木理痕が認められる。胎土には砂を含み，やや硬質の焼成で，灰色を呈している。8は左右から中央に向う唐草文軒平瓦の中央部の破片で，左右の唐草が交わっている部分である。胎土には砂を含み，軟質の焼成で，黒色を呈している。

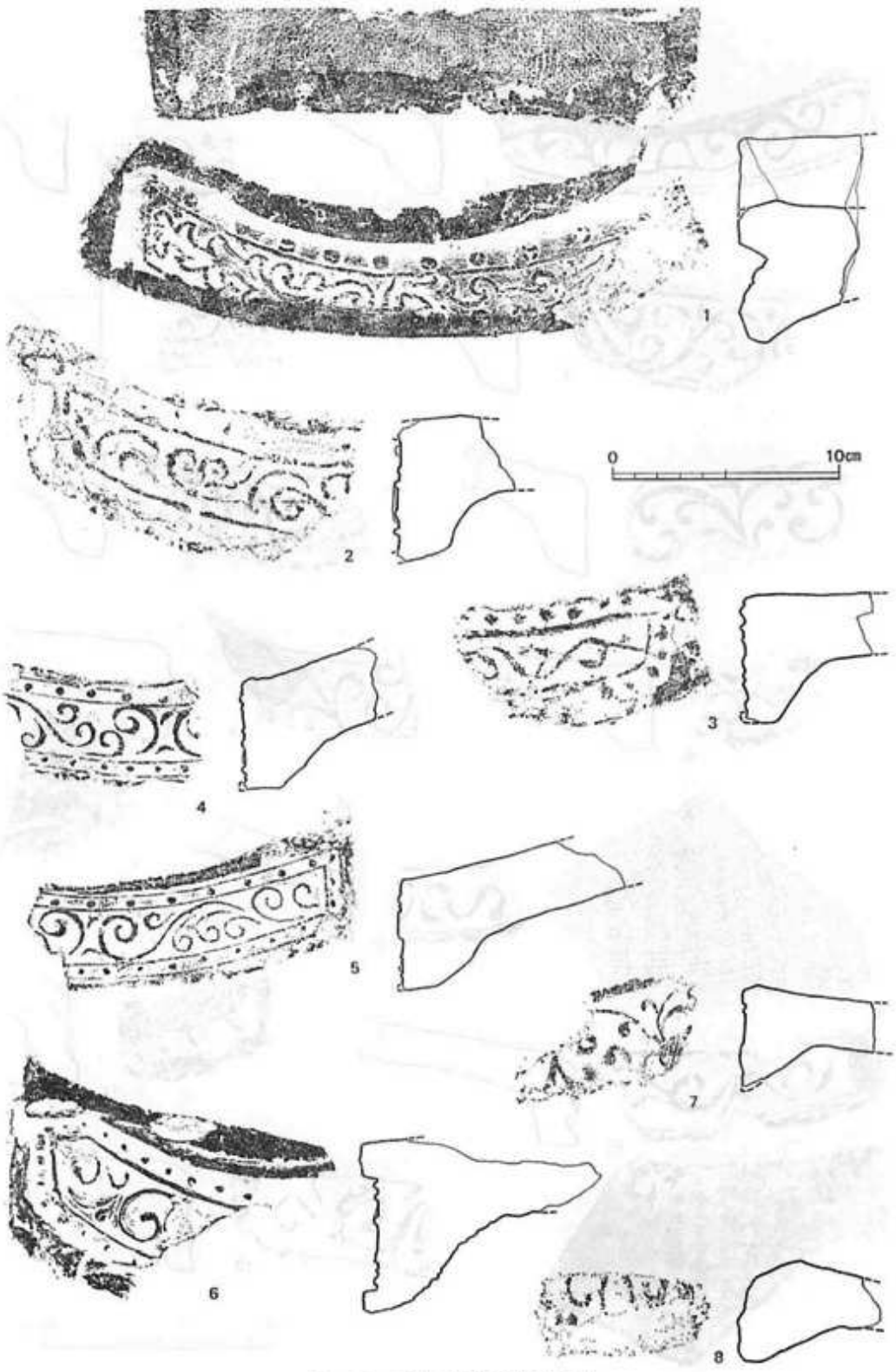
第117図1～9は半折り曲げと称される瓦当部成形技法をとっている。すなわち，平瓦分の厚さの粘土板の一端をかるく折り曲げ，または押しつぶし，顎部に若干の粘土を付加したもので，平瓦部と瓦当面のなす角度が鈍角になるものが多い。凹面の布目は，瓦当面から1cm程度のところで終っている。胎土はいずれも砂を含むが多くはない。1は中央に卵形の文様をお



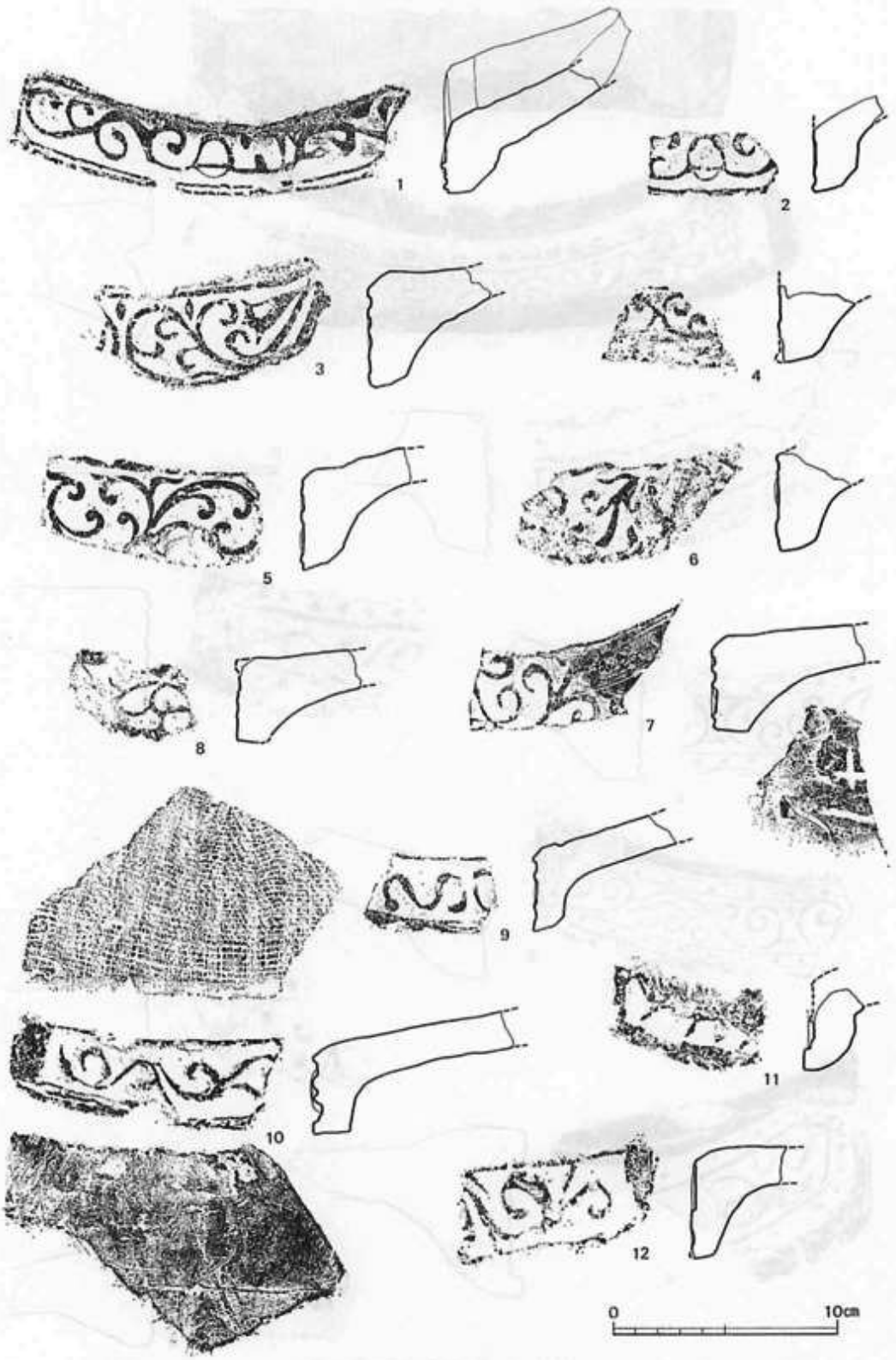
第114図 発掘区出土瓦実測図 (4)



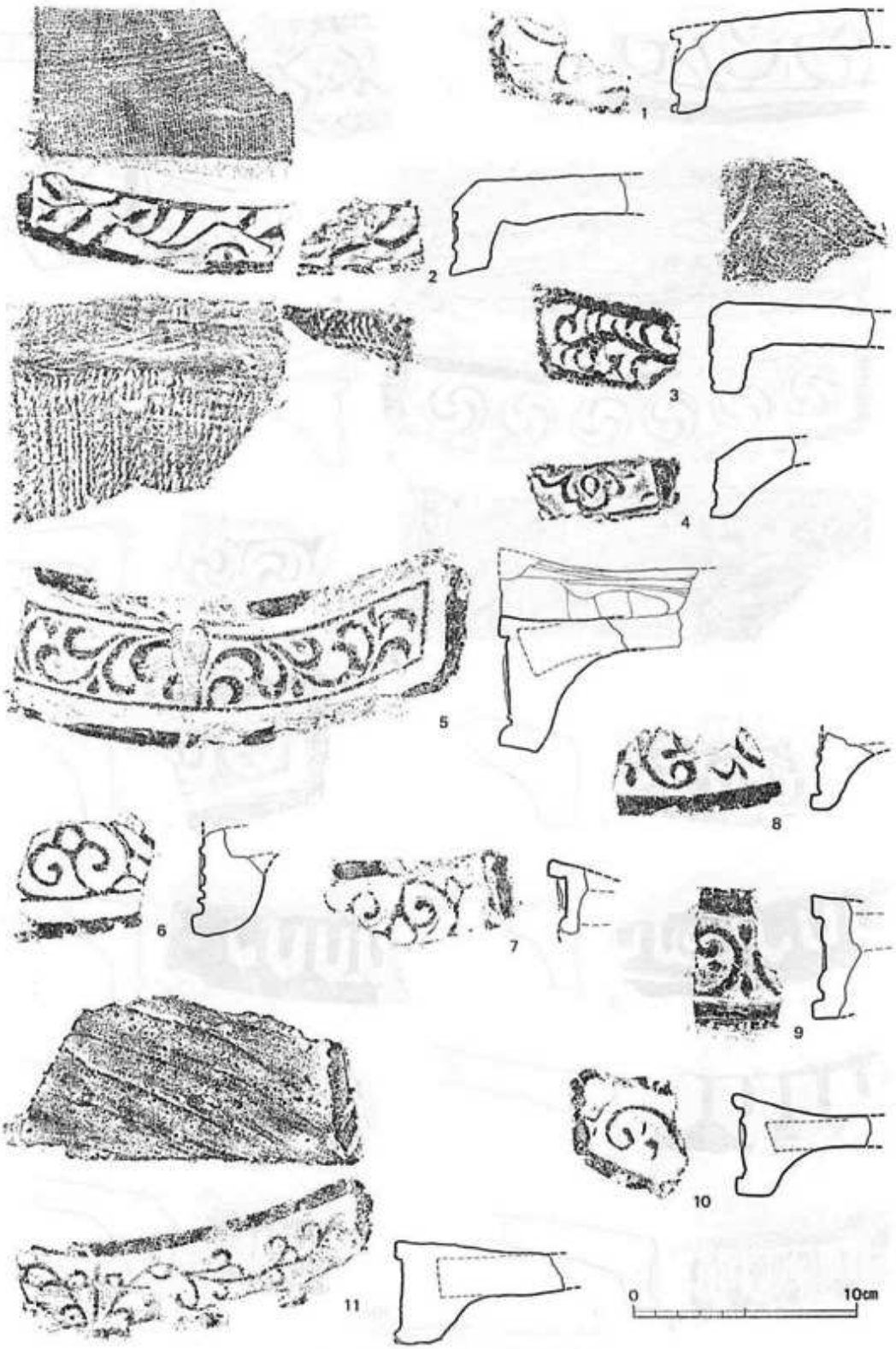
第115図　発掘区出土瓦実測図 (5)



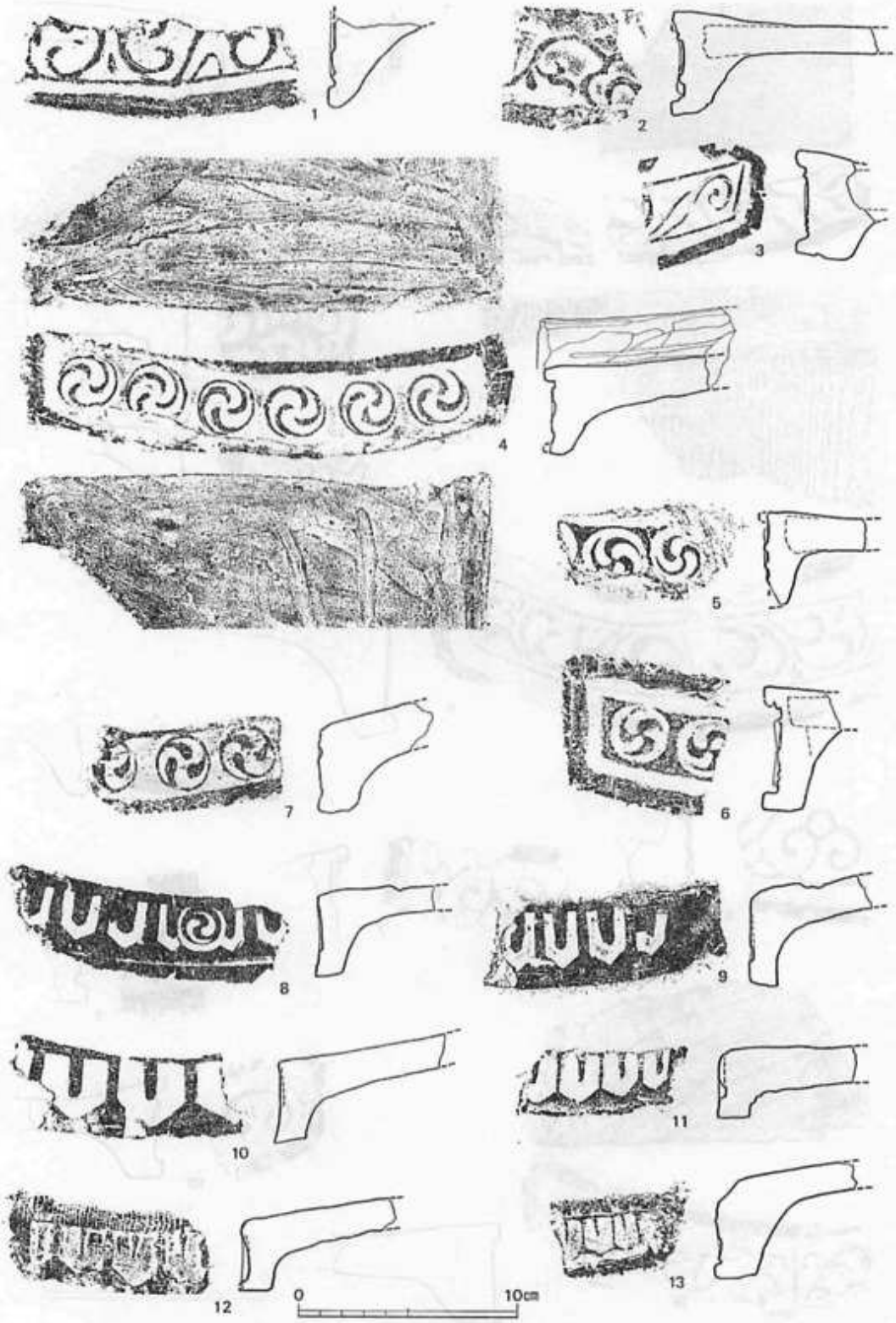
第116図 発掘区出土瓦実測図 (6)



第117図　発掘区出土瓦実測図 (7)



第118図 発掘区出土瓦実測図 (8)



第119図　発掘区出土瓦実測図 (9)

き，左右に唐草を展開させるものであるが，左右でやや形を異にしている。やや硬質の焼成で，灰色を呈している。2は1とほとんど同様の文様で，同笵例を見るとその唐草の左右の様子は1を反転させたものかと思われる。硬質の焼成で，青灰色を呈している。3は左右から中央に向う唐草文である。瓦下端の角が丸味をもっているため，瓦当の外形が半月状となっている。やや軟質の焼成で，灰色を呈している。4も左右から中央に向う唐草文の中央部と見られるが，小片のため全体はわからない。火を受けたものか，赤褐色を呈している。5，6は同笵品である。左右の唐草一方を180度回転させた関係にある。いずれもやや硬質の焼成で，灰色を呈している。7は左から右に向う栗栖野瓦屋産偏行唐草文軒平瓦の右半である。右端部は瓦笵の押しが弱く，瓦当面のケズリ痕が残っている。顎部には右端よりに十字形のヘラ記号がある。硬質の焼成で，淡灰褐色を呈している。8も栗栖野瓦屋産の軒平瓦で，中央あたりから左右に唐草が展開するが中心はあいまいである。軟質の焼成で，黒色を呈している。9はM字状の文様が残るが，これが単位となるものかどうかはわからない。やや硬質の焼成で，淡灰褐色を呈している。

10～12，第118図1～4は瓦当を平瓦端の折り曲げによって作っている。10は左から右に向う唐草文軒平瓦である。顎部から平瓦部凸面にかけてはナデ調整されており，中央部には，横一線に斜線を加えたヘラ記号がある。胎土には砂を含み，やや硬質の焼成で，灰色を呈している。11は一応唐草文かと思われるが全体はわからない。顎部には縄目が残っている。胎土に砂を含み，やや軟質の焼成で淡褐色を呈している。12は中央から左右に向う唐草文軒平瓦である。顎部は横方向にナデ調整されている。胎土には砂を多く混え，軟質の焼成で淡褐色を呈している。第118図2はかなり退化した唐草文の軒平瓦である。瓦当面には部分的に布目が残り，顎部から平瓦部にかけて縄目叩き痕がある。また平瓦凸面には2本線のヘラ記号がある。胎土には砂を含み，やや硬質の焼成で灰白色を呈している。1は唐草の一部が残るのみで全体はわからない。平瓦部凸面にヘラ記号の一部が認められる。胎土には砂を含み，硬質の焼成で暗灰色を呈している。3もかなり退化した唐草文で，全体はわからない。平瓦部凹面に2本の斜線のヘラ記号がある。胎土には砂を含み，やや軟質の焼成で暗灰褐色を呈している。4は宝相華文の軒平瓦で，半截花文を上下交互に配するものである。瓦当は折り曲げによるものであるが，顎部に多少粘土を付加している。胎土には砂を含み，硬質の焼成で，暗灰色を呈している。

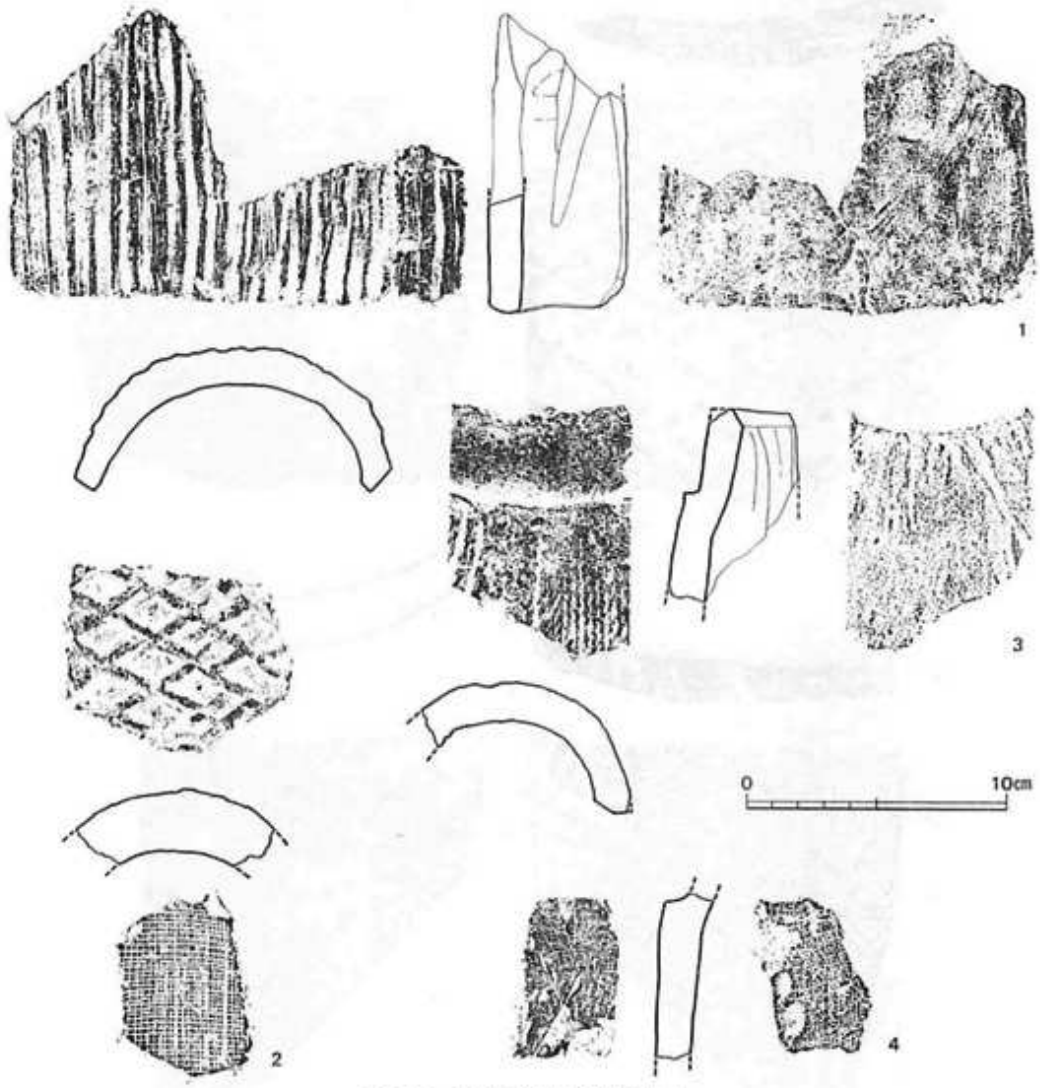
5～11，第119図1～6は播磨系の軒平瓦である。総て瓦当は平瓦との接合式で，整形は指ナデ調整である。5の左半は第1次調査時の出土である。瓦当文の中央部は亀裂を補修したものか指ナデが見られる。胎土には砂を含み，硬質の焼成で，表面黒色，内部灰白色を呈している。6，7は同笵と見られる。いずれも胎土には砂を含み，硬質の焼成で，灰色を呈している。8～10は同笵品で，神出窯跡の宮ノ裏支群の製品である。いずれも胎土にはあまり砂を含まず，やや硬質の焼成で，灰色を呈している。11は瓦当面に細かい砂粒が目立つ。瓦当と平瓦との接合部は斜の指ナデ痕が顕著に残っている。胎土には砂を含み，やや硬質の焼成で，暗灰褐色を呈している。第119図1は胎土に砂をあまり含まず，硬質の焼成で，淡灰褐色を呈して

いる。2は宝相華唐草文で，胎土に砂を含み，硬質の焼成で，灰黒色を呈している。3は胎土に砂を含まず，硬質の焼成で，暗灰色を呈している。4～6は連巴文の軒平瓦で，5，6も巴文が6個並列するものと思われる。4は胎土に砂を含み，かなり硬質の焼成で，青灰色を呈している。5は胎土にほとんど砂を含まず，硬質の焼成で，灰色を呈している。6は胎土に砂を含み，やや軟質の焼成で，黒色を呈している。

7～9は瓦当部を，半折り曲げによって形成している。7は連巴文軒平瓦で，上記の播磨系連巴文と同様に，巴文を6個程度並列させたものであろう。胎土には，あまり砂を含まず，やや軟質の焼成で，灰白色を呈している。8の文様はU字形の剣頭文を8つ並列し，中央の2つの剣頭文に右巻き二つ巴文を重ね合わせたように表現されている。胎土にはあまり砂を含まず，やや硬質の焼成で，瓦当面の一部が黒色，他は灰色を呈している。9は右端の剣頭文の一部が欠けている。胎土にはあまり砂を含まず，やや軟質の焼成で灰褐色を呈している。10は剣頭文の中ではその1単位が大きいものである。瓦当は平瓦端に粘土を付加して形成したように見える。凹面の布目は瓦当面際まで続いている。胎土には粗い砂を含むが多くはない。やや硬質の焼成で明灰褐色を呈している。11～12は瓦当を折り曲げにより形成している剣頭文軒平瓦である。11は右端に行くに従って1単位の大きさが小さくなっている。胎土には砂を含み，やや軟質の焼成で，赤褐色を呈している。12は瓦当面に明瞭に布目痕を残している。胎土には砂を含み，やや軟質の焼成で，黒～灰白色を呈している。13は剣頭文の上方に珠文帯をもつものである。同文例には中央に巴文を入れるものもあるが，この場合は不明である。瓦当部は折り曲げによるが，顎部に多少粘土を付加したものである。胎土には砂を多く含み，軟質の焼成で，淡褐色を呈している。

第120図1はやや小形の丸瓦で，凸面には平行条線文の叩きがなされている。凸面は指ナデ調整され，布目は認められない。胎土には砂を含み，やや軟質の焼成で，灰色を呈している。叩き目やナデ調整から播磨産のものかと推定される。2は凸面に斜格子文の叩きを施した丸瓦である。凸面の布目は乱れがなく明瞭である。胎土にはほとんど砂を含まず，硬質の焼成で，暗灰褐色を呈している。3は小形の丸瓦である。凸面には縄目叩きがなされ，凹面には布目と糸切り痕が認められる。胎土には砂を含み，やや硬質の焼成で，表面黒色，内部灰白色を呈している。4も3と同様の小形の丸瓦である。凸面は縄目叩きを施した後，ナデ調整され，×印のヘラ記号が付されている。胎土には砂を含み，軟質の焼成で，灰黒色を呈している。

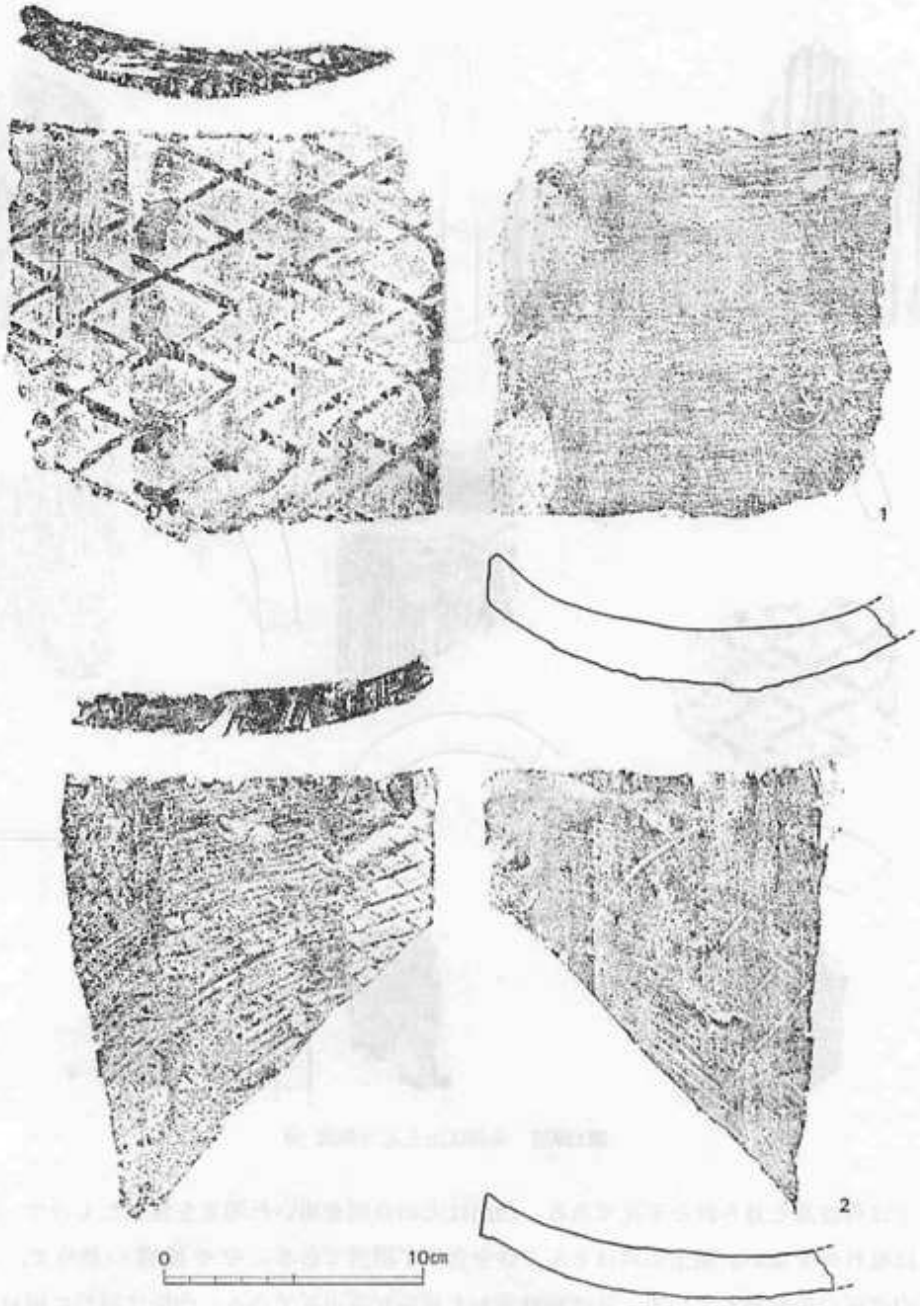
第121図1は凸面に大形の斜格子文の叩きを施した平瓦である。凹面の布目は比較的細かく乱れは少ない。また凹面には丸印の中に『大』字を入れた刻印がある。丸印の径は17㎜で『大』字は裏字になっている。胎土に砂を多く含み，軟質の焼成で，淡灰褐色を呈している。2は凸面に細かい斜格子文の叩きを施した平瓦である。格子叩きは凸面全体になされておらず，他の部分には糸切り痕が顕著に残る。凹面には部分的にかなり細かい布目が残っている。胎土にはあまり砂を含まず，硬質の焼成で灰白色を呈している。第122図1はかなり厚手の平瓦である。凸面には平行条線文の叩きがなされている。凹面には糸切痕が顕著で，布目はかなり細かいものである。胎土には砂を含み，やや硬質の焼成で，表面灰黒色，内部灰白色を呈してい



第120図　発掘区出土瓦実測図 (1/3)

る。2は丹波産と見られる平瓦である。凸面は太めの縄を用いた叩きを施したもので，凹面の布目は乱れが少ない。胎土にはほとんど砂を含まず緻密である。やや硬質の焼成で，表面灰色，内部灰白色を呈している。3は讃岐産かと見られる平瓦である。凸面は扇形に縄目叩きを施したもので，凹面の布目はやや粗いものになっている。胎土には砂を多く含み，軟質の焼成で，淡褐色を呈している。4は凸面に縦方向の縄目叩きを施した平瓦で，凹面の布目は比較的細かい。端面に2本の短い刻線があり，ヘラ記号かと見られる。胎土には砂を多く含み，軟質の焼成で，褐色を呈している。

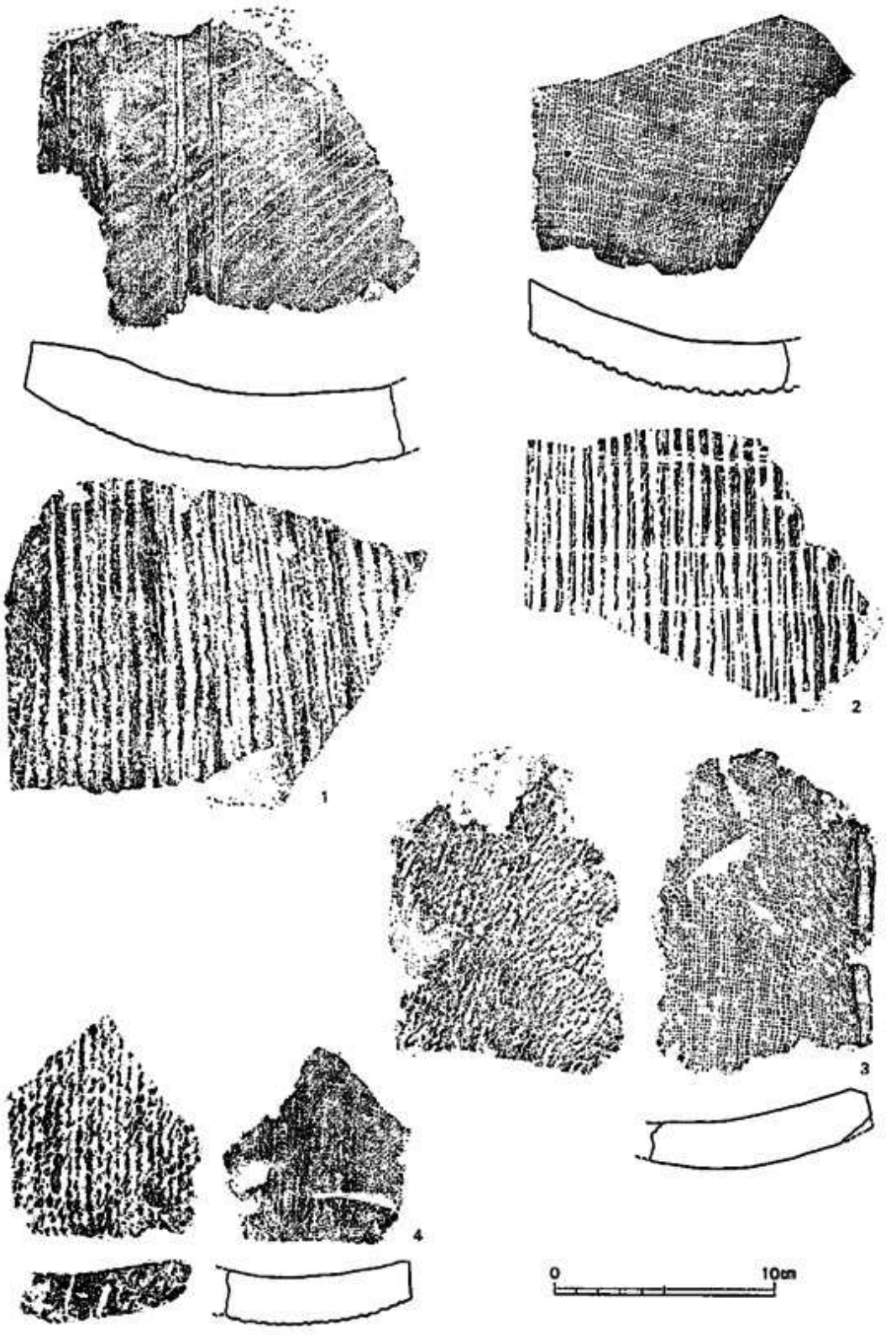
第123図1は平安時代前期の型造りによる鬼瓦である。この破片は鬼の額の部分にあたり，同笵例により2のように復原できる。かなり立体的に表現され，型の中に少しずつ粘土をつめて造られたものである。裏面はヘラ調整により，平坦にされている。胎土には砂を混え，表面



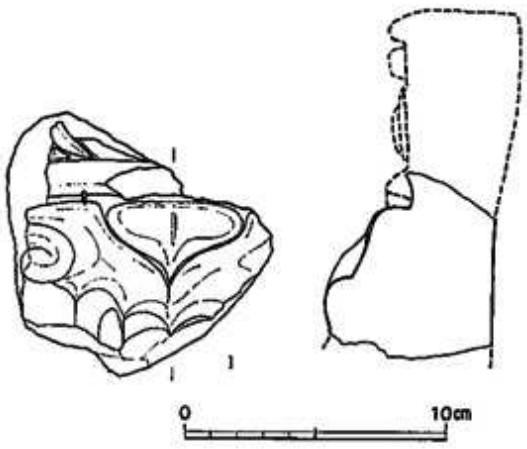
第121図　発掘区出土瓦実測図 (1)

は硬質で，裏面側はやや軟質の焼成になっている。

第124図1は円圏の中に『妙行寺』の銘を入れ，周囲にやや大粒の珠文を廻らせた軒丸瓦である。瓦当は厚く，裏面の調整も丁寧である。軒丸瓦の瓦当文として寺名を入れるものは，鎌倉期より盛行するが，造りや『妙行寺』銘からこの瓦は室町中期頃のものと見られる。妙行寺は法華諸山の中でも妙顕寺などと同じく幕府との交流もあったようで，これも瓦に寺名を入れることのできた背景となろうか。妙行寺の沿革はかならずしも明らかではない。その所



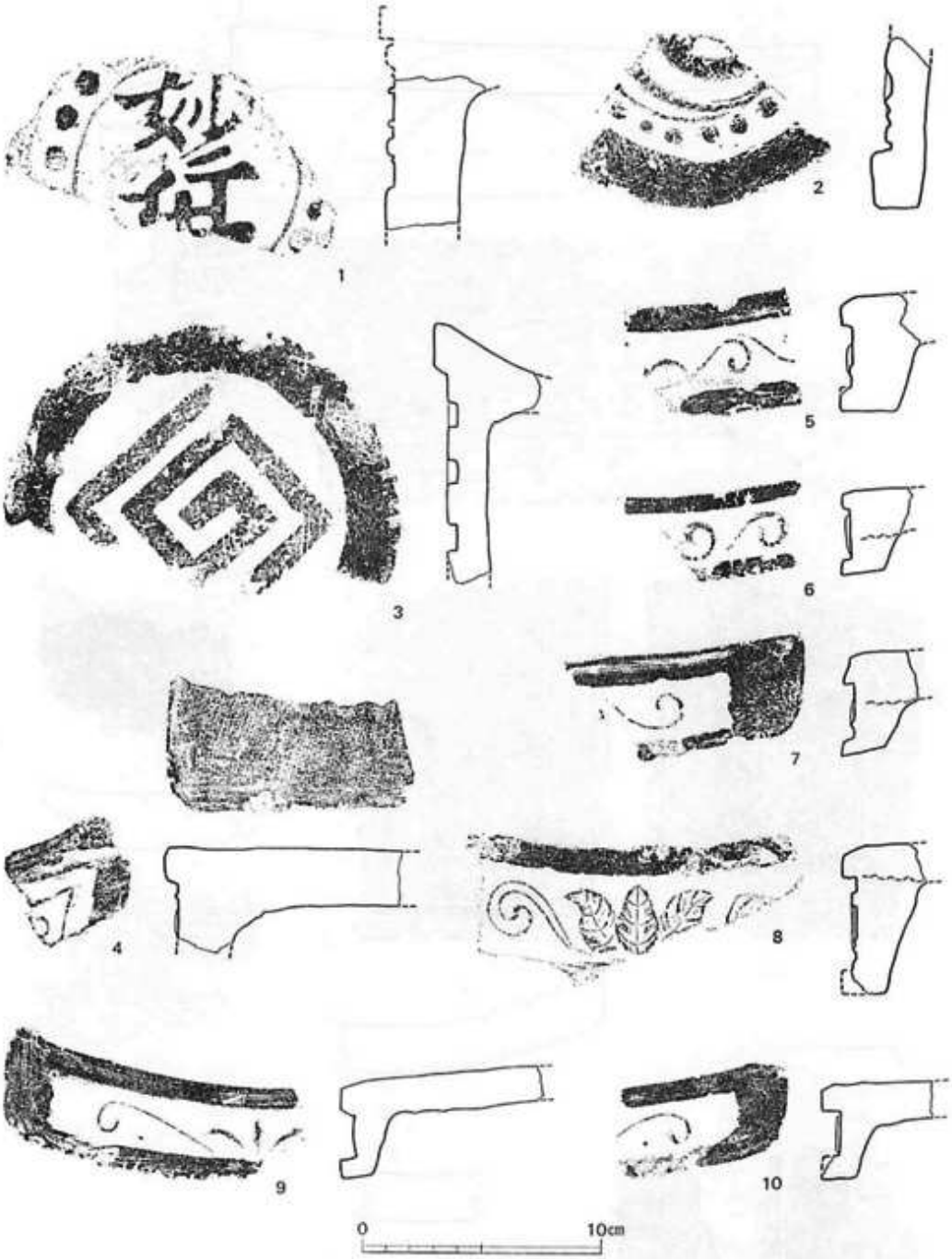
第122図 発掘区出土瓦実測図 (1/3)



第123図　発掘区出土瓦実測図 (3)

在地は『康富記』応永廿九年(1422)六月十七日条には冷泉室町とある[13]。今回の調査では1点のみの出土であるため，記載地と妙行寺との関係を云々できないが，この瓦は京都における法華宗弘通を考える上でも貴重な資料となろう。2は右巻きの三つ巴文軒平瓦である。瓦当面には離れ砂が認められる。磨滅のため細部の調整はわからないが，室町期に属するものと思われる。胎土には細かい砂を含み，やや軟質の焼成で，表面黒色，内部灰色を呈している。3は左巻きの雷文を表わした軒丸瓦である。ヘラ調整による整形がなされ，胎土や焼成などは2と同様である。第1次調査で同笵が出土している他類例はないが，室町期に属するものと思われる。4は唐草文軒平瓦の右端部で，凹面には布目痕を残している。これも室町期のものと思われる。胎土には細かい砂を含み，硬質の焼成で，表面黒色，内部灰色を呈している。5～10は室町末期から江戸初期にかけての軒平瓦であるが，細かな時期比定は困難である。いずれも平瓦端に粘土塊を加えて瓦当部を形成したもので，接合の際，平瓦端にきざみ目を入れたものが多い。胎土や焼成はほぼ同様で，砂をある程度含み，やや軟質の焼成で，表面灰黒色，内部灰色を呈するものである。7には瓦当面に離れ砂が認められる。8は瓦当面の大きなもので，桐葉文を表わすことなどから桃山期かと思われる。

第125図1は室町前半期頃のものと見られる丸瓦である。凸面は丁寧にヘラ調整され，凹面の布目は比較的細かいものである。硬質の焼成で，全体に灰黒色を呈している。2，3は凸面に斜格子文の叩きを施した平瓦で3の格子目は2本の吹き寄せになっている。どちらも両面に離れ砂が顕著で，凹面には布目は認められない。胎土には長石粒の目立つ砂を含み，2は硬質で灰褐色を呈し，3はやや軟質で褐色を呈している。4も同時期頃と思われる平瓦である。凸面に型押しによる文字あるいは文様があるが，小片のため全体はわからない。胎土は砂を含み縞状に見えるもので，須恵器の土器細片も含んでいる。やや硬質の焼成で灰白色を呈している。5は江戸時代のものと見られる平瓦で，凸面に墨書されている。文字は『□無阿□』とあり，『南無阿弥陀仏』かと推定される。これは時期は異にするが上述の『妙行寺』銘の軒丸瓦や，あわせて巡礼札，柿経など各宗派を象徴する遺物の一つとして興味深いものである。



第124図 発掘区出土瓦実測図 (4)

4) 自然遺物

(1) 動物遺体

主要な動物骨は第5表に示し，番号は図版第73・74・75の番号と一致する。

当調査地より出土した動物骨は保存状態が良好で，ウシ(*Bos taurus*)，ウマ(*Equus Przewalskii*)，イノシシ(*Sus scrofa*)，ニホンジカ(*Cervus nippon*)，イヌ(*Canis familiaris*)

第125図　発掘区出土瓦実測図 (9)

などの獣骨に加え，カモ(*Anatidae gen. et sp.*)，ワシタカ科(トビ *Milvus migrans?*)の鳥類，タイ(*Chrysophrys major*)，スズキ(*Lateolabrax japonicus*)の魚類の骨を同定することができた。

獣骨の大半は三条大路側溝に推定されている溝から出土しており，溝中の平安時代後期層から出土した骨にのみビビアナイトが付着していた。これらの獣骨を時代ごとに分けてみると，平安時代ではウシとウマ，室町時代後半ではイノシシとシカを中心に，先にあげた獣骨5種の総て，室町時代末期～江戸時代初期にはウシ，シカ，イヌがそれぞれ出土している(第4表)。しかし，室町時代末期～江戸時代初期の層から出土したシカ，イヌについては，同じグリッド内の室町時代後半期層から出土したシカ，イヌの一部が混入した可能性が強い。

室町時代後半の層に最も多種の獣骨が含まれ，かつ量的にもこの時期に集中している。骨の部位および出土地点を考慮して，時代別に最少個体数を推定した結果，ウシとウマは各時代を通じて個体数に顕著な違いはないが，室町時代後半期層からのみ出土するイノシシとシカはいずれも3体ずつで，個体数の多さが注目される(第6表)。

加えて，骨片に切痕や擦痕などの人工的処理の痕跡をみるものがイノシシとシカに限られていることから，これらは食用に供されたと考えられる。しかも，解体の痕跡が残る骨片のうち，イノシシの頭蓋は正中と前後 (M_1/M_2) との二方向に切断されており，脳髄も摘出して食べた可能性がある。

さらに未成獣骨を手がかりにして，同一個体と思われる骨の出土状況をみると，同じグリッド内から一括で出土する傾向が知られる。したがって，解体は調査地の付近で行われたと推定でき，上京と呼ばれて中世京都の最も繁栄した地区の一角を占めた当地での解体作業は，脳髄食とならんで，応仁の乱前後における都の荒廃した様相を物語っていると言えるかもしれない。

鳥類骨はB4土壙1から出土し，その最少個体数はカモ3，トビ1を数える(図版第73の63がカモ頭骨)。いずれの骨にも切痕をみとめないが，鳥の解体は容易であり，羽毛を除去するために熱湯処理を行うことによってさらに容易となるので，カモについては切痕がみとめられないからといって食用でなかったとは即断できない。

魚類骨はB4土壙1とB6土壙1から出土し，いずれも海水魚である。最少個体数はマダイ1(B6土壙1)とスズキ2(B4土壙1)で，スズキの左鰓蓋骨の一つに切痕が残る。

(2) 植物遺体

地山直上で検出されたニレ属(*Vimaceae*)の葉以外は保存状態は良好で，アカマツ(*Pinus sp.*)の球果，オニグルミ(*J. mandschuriea sp.*)，ヒメグルミ(*Var. corditormis kitam*)，モモ(*Prunus persica*)の堅果が出土している(第7表)。クルミ9個はいずれも半分に割れているが，打割の痕跡は認められない。なお，同定に際しては，京都大学理学部植物学教室村田源教授に御教示いただいた。

(3) 貝

江戸時代の遺構から貝が出土したが，その種類は限られている。以下残りの良いものだけを

記す(なお，番号は図版第76・77の番号と一致する)。

1．アカニシ(*Rapana thomasiana*) ……溝西Ⅱ
2．〃　〃 ……B4土壙1
3．オニニシ(*Hemifusus tuba*) …… 〃
4．ハマグリ(*Meretrix lusoria*) ……B5ムロ
5．〃　〃 …… 〃

第4表　出土獣骨の時代

時代	遺構		種	部					
				頭蓋・下顎骨	椎・肋骨	肩甲骨 左 右	寛骨 左 右	上腕骨 左 右	橈骨 左 右
平安	溝Ⅳ		ウシ	1				1　1	1
			ウマ						
室町後半	A6土2		ウマ						
	溝Ⅲ B	C6	ニホンジカ		1	1		2	
			イノシシ	①　2	③　3		1　1	①　1(注1)	1(注1)
			イヌ						
		D6	イノシシ		1　1	1			1
			イヌ		1				
		C・D6	イヌ					1	
			ウマ						
	溝Ⅲ		ニホンジカ				①	1	
	溝西Ⅱ	C6	ニホンジカ		1			2	
			イノシシ		1	1		1　2	1
		D6	イヌ	1					
			ニホンジカ	1					
桃山～江戸初	溝西Ⅰ	C6	ウシ						
		D6	イヌ						
			ニホンジカ					1	
溝西	Ⅰ～Ⅲ		ウシ						
			イノシシ						

6．アワビ(*Haliotis* 種名不明) …… 〃

7．アカガイ(*Andara broughtonii*)……瓦溜4

8．サザエ(*Turbo cornutus*) …… 〃

9．セタシジミ(*Corbicula sandai*) ……井戸7

10．アカガイ(*Andora broughtonii*)……井戸24

11．ハマグリ(*Meretrix lusoria*) …… 〃

別の種と部位一覧表

位									
尺骨 左	尺骨 右	大腿骨 左	大腿骨 右	脛骨 左	脛骨 右	腓骨 左	腓骨 右	踵・距骨	中手・中足骨	指骨	角・歯
1		1		1					1		1
									1		
											1
(※1) 2				(※1) 1							
	(※1) 1		1		(※1) 1			1			
				1		1					
	1										
1		1									
				1	(※1) 1						
										1	
1				1	2				3		
	1										
											1
					1						
											1
											1

備考

1. 遺構の溝は三条大路北側側溝である。
2. ○で囲んだものは切痕や擦痕が認められる骨片。
3. (※) は骨端の化骨化が完了していない骨片で，その右の数字は個数を示す。

第5表　出土獣骨一覧表

図版第73・74・75	種	部位	出土遺構	図版第73・74・75	種	部位	出土遺構
1	ウシ	角	三条大路側溝西Ⅰ	32	イノシシ	尺骨(右)	〃
2	イヌ	脛骨(右)	〃	33	〃	肋骨(左)	〃
3	ニホンジカ	上腕骨(右)	〃	34	〃	〃 (左)	〃
4	イヌ	下顎骨	三条大路側溝西Ⅱ	35	〃	踵骨(右)	〃
5	ニホンジカ	〃	〃	36	ニホンジカ	肩甲骨(右)	〃
6	〃	脛骨(右)	〃	37	イヌ	尺骨(左)	〃
7	〃	〃 (右)	〃	38	〃	脛骨(左)	〃
8	〃	上腕骨(右)	〃	39	〃	上腕骨(左?)	〃
9	〃	中足骨(?)	〃	40	イノシシ	橈骨(右)	〃
10	イノシシ	肩甲骨(左)	〃	41	〃	尺骨(右)	〃
11	〃	上腕骨(右)	〃	42	イヌ	脛骨(左)	〃
12	〃	椎骨	〃	43	イノシシ	椎骨	〃
13	〃	上腕骨(右)	〃	44	ニホンジカ	上腕骨(左)	〃
14	ニホンジカ	椎骨	〃	45	〃	寛骨(右)	〃
15	〃	尺骨(左)	〃	46	ウマ	指骨(右)	〃
16	イノシシ	下顎骨	三条大路側溝西ⅢB	47	イヌ	脛骨(右)	〃 Ⅰ
17	〃	寛骨(左)	〃	48	ウシ	角	三条大路側溝西Ⅱ
18	〃	上腕骨(左)	〃	49	イノシシ	上腕骨(左)	〃 Ⅲ
19	〃	下顎骨	〃	50	〃	上顎骨(右)	〃
20	〃	頭骨	〃	51	〃	犬歯(右)	〃
21	〃	肩甲骨(右)	〃	52	ウシ	大臼歯	三条大路側溝 Ⅳ
22	〃	肋骨(左)	〃	53	〃	中手骨(左)	〃
23	〃	寛骨(右)	〃	54	〃	上腕骨(右)	〃
24	ニホンジカ	脛骨(左)	〃	55	〃	肋骨(右?)	〃
25	〃	尺骨(左)	〃	56	ウマ	中足骨(左)	〃
26	〃	椎骨	〃	57	ウシ	橈骨(左)	〃
27	イノシシ	下顎骨	〃	58	〃	脛骨(左)	〃
28	〃	大腿骨(右)	〃	59	〃	上腕骨(左)	〃
29	〃	上腕骨(右)	〃	60	〃	大臼歯	〃
30	〃	脛骨(右)	〃	61	ウマ	大臼歯	A6土壙2
31	〃	肋骨(右)	〃	62	ウシ	大腿骨(左)	三条大路側溝Ⅳ

第6表　出土獣骨の時代別最少個体数表

時代＼種	イノシシ	ニホンジカ	ウシ	ウマ	イヌ
平安時代			1	1	
室町時代後半	3	3	1	2	2
安土・桃山～江戸時代初		(1)	1		(1)
計	3	3	3	3	2

第7表 出土植物遺体一覧表

図版第77	種	出土遺構
1	オニグルミ	三条大路側溝 Ⅳ
2	〃	〃 西ⅢB
3	ヒメグルミ	〃 〃
4	オニグルミ	〃 〃
5	ヒメグルミ	〃 〃
6	モモ	〃 〃
7	アカマツ球果	〃 〃
8	モモ	〃 西Ⅱ石組直下
9	モモ	〃 西Ⅱ
10	モモ	〃 〃
11	オニグルミ	A6土壙2
12	〃	〃
13	ヒメグルミ	〃
14	〃	〃
15	モモ	〃
16	モモ	〃

註

1）亀井明徳『日本出土の明代青磁碗の変遷』(『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』所収，福岡，昭和55年)の分類による。

2）小野正敏『15～16世紀の染付碗，皿の分類と年代』(『貿易陶磁研究』第2号掲載，福岡，昭和57年)。

3）平良泰久他『平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要』(『埋蔵文化財発掘調査概報1980―3』所収，京都，昭和55年)。

4）平安京調査会『平安京跡発掘調査報告―左京四条一坊―』(京都，昭和50年)。

5）白石太一郎『いわゆる瓦器に関する二・三の問題』(『古代学研究』第54号掲載，堺，昭和44年)。

6）高槻市教育委員会『上牧遺跡発掘調査報告書』(『高槻市文化財調査報告書』第13冊，高槻，昭和55年)。

7）愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏の御教示による。なお，本遺跡の灰釉陶器の産地・年代に関しては主に神戸市教育委員会の森田稔氏の御教示によるところが大である。

8）渡辺誠『松本城二の丸跡出土の焼塩壺』(『信濃』第34巻第1号掲載，松本，昭和57年)。

9）『シリーズやきもの小辞典(1)，印版―コンニャク版』(『セラミック九州』創刊号掲載，有田，昭和56年)。

10）古代学協会『平安京左京五条三坊十五町』(『平安京跡研究調査報告』第5輯，京都，昭和56年)。

11）矢部良明『鍋島』(『日本陶磁全集』第25巻，東京，昭和51年)。

12）註8に同じ。

13）『康富記』には他に，宝徳元年(1449)八月廿六日，宝徳三年八月十三日，同廿二日条に妙行寺僧の法花経談義のことが見える。五島邦治氏の御教示による。

Ⅳ. ま　と　め

1. 遺構のまとめ

今回の調査の第一の目的でもあった三条大路北側側溝と烏丸小路西側側溝の確認については前章のような成果が得られたが，三条西殿自体に関する遺構は明らかではなかった。ここでは三条大路，烏丸小路に関する結果をまとめ，残された問題について記して行く[1]。

1) 三条大路北側側溝

三条大路北側側溝と推定される溝状遺構は時期を違えたものが4条検出された。この内，平安時代に属する溝は，断続的ながら調査区の東端から西端を通して検出された，素掘りの溝である(溝Ⅳ)。溝底はほぼ平坦であるが，溝底の幅は一定していない。溝内出土遺物には土器類，中国陶磁，瓦類および牛骨などがあり，これらの年代は11世紀中葉から12世紀中葉頃までの約1世紀間にほぼ限られるものである。これにより溝Ⅳの下限を12世紀中葉頃におくことができる。上限については，遺物から11世紀中頃の年代が与えられる。ただし，後述するように平安時代前期の瓦がこの溝を中心に分布することから，前期段階においても同じ溝が側溝として機能していたことも考えられよう。溝幅が一定しないことや溝がやや南北にふれることは改修の結果とも考えられる。いずれにしても平安時代の溝を検出できたのは今回の調査の大きな収穫であった。

溝Ⅳのほぼ中心となっているグリッド5と6の境の線より南へ約2mのところを肩とする溝も素掘りのものであった(溝Ⅲ)。この溝状遺構は第1次調査で平安時代に上ると推定されたものであったが，今回の調査では溝内出土遺物の検討の結果，平安時代の遺物も含んではいるが，主体となるものは15世紀末以降のものであることが判明した。ただしこの溝Ⅲは発掘区南壁にそって検出されたため南側たちあがりを明らかにできず，溝底も多数の掘り込みにより一様ではなく，さらに東端はB6の半ばで終っており，その性格は判然としないものである。

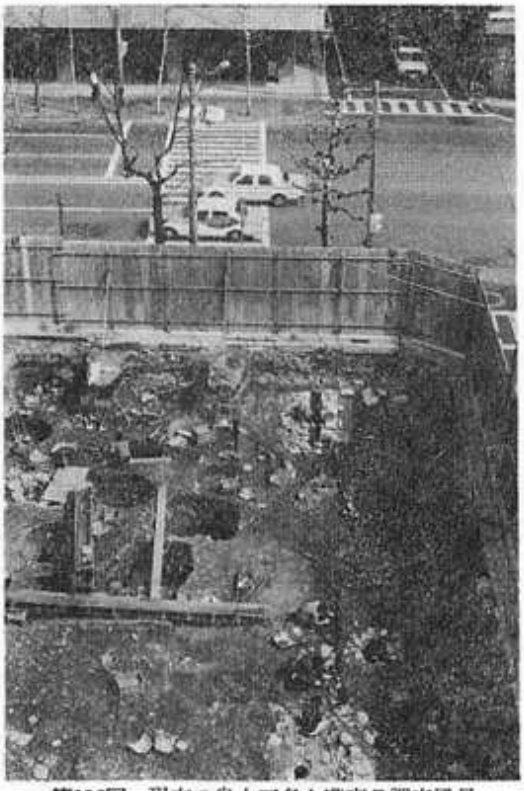
溝Ⅲ埋土の上層は，多数の拳大ほどの礫が混在する粘質土になっており，これが溝Ⅳを切って設けられた石組の溝(溝西Ⅱ)の埋土になっていた。この溝内埋土に含まれる遺物は15世紀末～16世紀中葉頃のもので，溝西Ⅱの下限が与えられる。この溝はB6からC6にかけての部分が攪乱されているため，同時期と見られる東の石組の溝(溝東Ⅱ)との直接のつながりは見いだせなかった。

溝東Ⅱは溝西Ⅱの延長線より北へ約1.1mずれるものである。この溝は改修を受けており，南側の石組が溝幅を狭めて積み直しされ，この部分の裏込め土には焼土が含まれていた。溝内出土の遺物から，溝西Ⅱと同じく15世紀末から16世紀中葉頃の年代が与えられる。南側の石組の改修の時期は裏込め土中の遺物が乏しいため定かではない。

溝西Ⅱの上部にはさらに南に張り出した状態の石組の溝(溝西Ⅰ)がある。側石は溝西Ⅱよりやや小さいものを用いている。溝の年代は埋土中の遺物より16世紀後半から17世紀代にかけ

ての時期にあたる。この溝はC6で北方にやや湾曲するが，その先は撹乱により破壊されている。湾曲を始める部分には，この溝に取り付くような砂の堆積した狭い溝があるが，その東の延長もB6の撹乱により定かではない。

東の部分で溝西Ⅰに対応すると見られる溝は，西の部分と同様，溝東Ⅱの上面でこれも南に張り出すように石組の溝(溝東Ⅰ)が設けられている。この溝の年代も埋土中の遺物から，16世紀後半より17世紀代のものと見られる。側石に用いられている石材に石仏などが含まれていることは，京都市高速鉄道(地下鉄)烏丸線建設に伴う調査で発見された旧二条城の石垣とも通ずるもので，その年代ともほぼ合致するものと思われる[2]。



第126図　現在の烏丸三条と溝東Ⅰ調査風景

なお，第126図は調査地東南角を西より眺めたもので，溝東Ⅰなどの調査作業風景である。現場の仮囲いの外は烏丸三条の交差点で，並木のある通りが現在の烏丸通になっている。この図を見ると，溝東Ⅰの延長線上に烏丸通東側のビル(電電公社京都ビル)の南面があることがわかる。現在の三条通は調査地付近でも縦の通りごとに多少南北にずれているがこの図からは，このビルの南辺が17世紀頃の町割りを踏襲している可能性が窺え興味を引く。

2) **烏丸小路西側側溝**

烏丸小路西側側溝と推定される溝状遺構は第1次調査の東西トレンチ東端で発見された。この溝は2層に分かれ，上層の溝には礫を含むものであった。今回の調査でも発掘区東端にそって溝状遺構が検出されたが，その様相は第1次調査時とはやや異にするものである。また今回の調査でも南と北で少し異なることは前記のとおりである。溝の年代は13世紀後半から14世紀初めにかけてのものと推定され，第1次調査時の所見ともほぼ一致するものである。ただし平安時代に遡りえるものかは明らかではない。

一方，後述する出土軒瓦の分布から，グリッドのB列に平安時代前期瓦が分布していることがわかる。この部分は削平や井戸により大きく撹乱されているため遺構は明らかでないが，グリッドAとBの境を肩にするように地山がわずかに落ち込んでいる部分があり，これがあるいは平安時代初期の側溝に相当するものかも知れない[3]。

3) **溝のまとめ**

以上のように，烏丸小路についてはあまり明確ではないが，三条大路についてはその各時期の北側側溝を明らかにできた。そのあり方を見ると，漸時道路面側に張り出て行く様子が明ら

かである(図版第5下)。また，道路敷遺構の発見でさらに三条大路が確かになった。ただ道路敷の発見は新たな問題を提起するものでもある。すなわち，烏丸小路の平安時代の側溝がグリッドA列の西にそうものならば，溝は道の交点で直交するものではなく，一方の側に合流するものであった可能性もでてくる。また平安時代については明らかでなかったが，石組溝の段階では道幅が交差点付近で異なる様子を見せることも注意される。今後，平安京の条坊関係の調査において以上のような点に留意するとともに，各時期の溝の位置がほぼ重複するものの完全に重なるものではない場合もあることが注意されよう。　(植山)

2. 遺物のまとめ

1) 中国陶磁について

今回の調査でまとまって中国陶磁が出土したのは，三条大路の側溝からである。その一つは，平安時代の溝であり，他は中世の溝である。

平安時代の溝には，越州窯青磁(皿，壺か水注)，白磁(椀，皿)，青白磁，褐釉陶器が伴っていた。この溝に伴う土師皿の上限は京都市中京区壬生車庫出土の寛治五年(1091)銘須恵器に伴出した土師皿より明らかに古式に位置づけられるもので，11世紀中頃前後に置くことができる。従って，越州窯青磁は少なくともこの頃まで残存していたことを明らかにするもので，こうした例は灰色粘質土層の土師皿と越州窯青磁椀との関係においても確かめられた。

中世の三条大路の側溝には下層から溝ⅢB，溝ⅢA，溝西Ⅱと称した層位的堆積がある。この各層に伴う土師器相互間には若干の相違があり，時代的先後関係を示しているものと解される。

溝ⅢBに伴う磁器は雷文青磁椀，B－Ⅱ細蓮弁文椀，溝ⅢAは内面に捩花文を持つB－Ⅱ細蓮弁文椀，『顔氏』銘青磁椀，稜花皿，溝西ⅡはB－Ⅱ細蓮弁文椀，染付が伴って，B－Ⅱ細蓮弁文椀を共通の軸として，各層間には若干の組み合わせの違いを持っている。溝ⅢBで雷文椀とB－Ⅱ細蓮弁文椀が共出しているが，これが本来的組み合わせであるかどうか疑問である。一つには，他遺跡において両者は層位を上下して出土する例があり，二つには，B－Ⅱ式より型式学的に先行するB－Ⅰ式が存在しているからであり，このことから考えると，雷文椀は伝世された可能性が高い。そうすると，溝ⅢBと溝ⅢAは層位的上下関係があるとはいえ，同じ文化期内で考えることができ，実際に土師皿もわずかの違いしかなく，両者は青磁からみると同期的段階にあるということができる。

溝西Ⅱは溝ⅢBの上層に位置している。青磁からみると，両者は共にB－Ⅱ細蓮弁文椀を出土し，同じ内容を持っているが，溝西Ⅱには明の染付を伴い，中国陶磁全体からみると組み合わせを異にしている。土師皿も溝ⅢA，溝ⅢB間の相違よりも，溝ⅢB，溝西Ⅱ間の相違の方が大きく，両者間に一つの小画期の存在が予想される。すなわち，他遺跡に類例の多い，B－Ⅱ式と明染付の共伴段階の以前に，染付の伴わないB－Ⅱ式単独段階の存在が想定されるのである。　(下條)

2) 瓦について

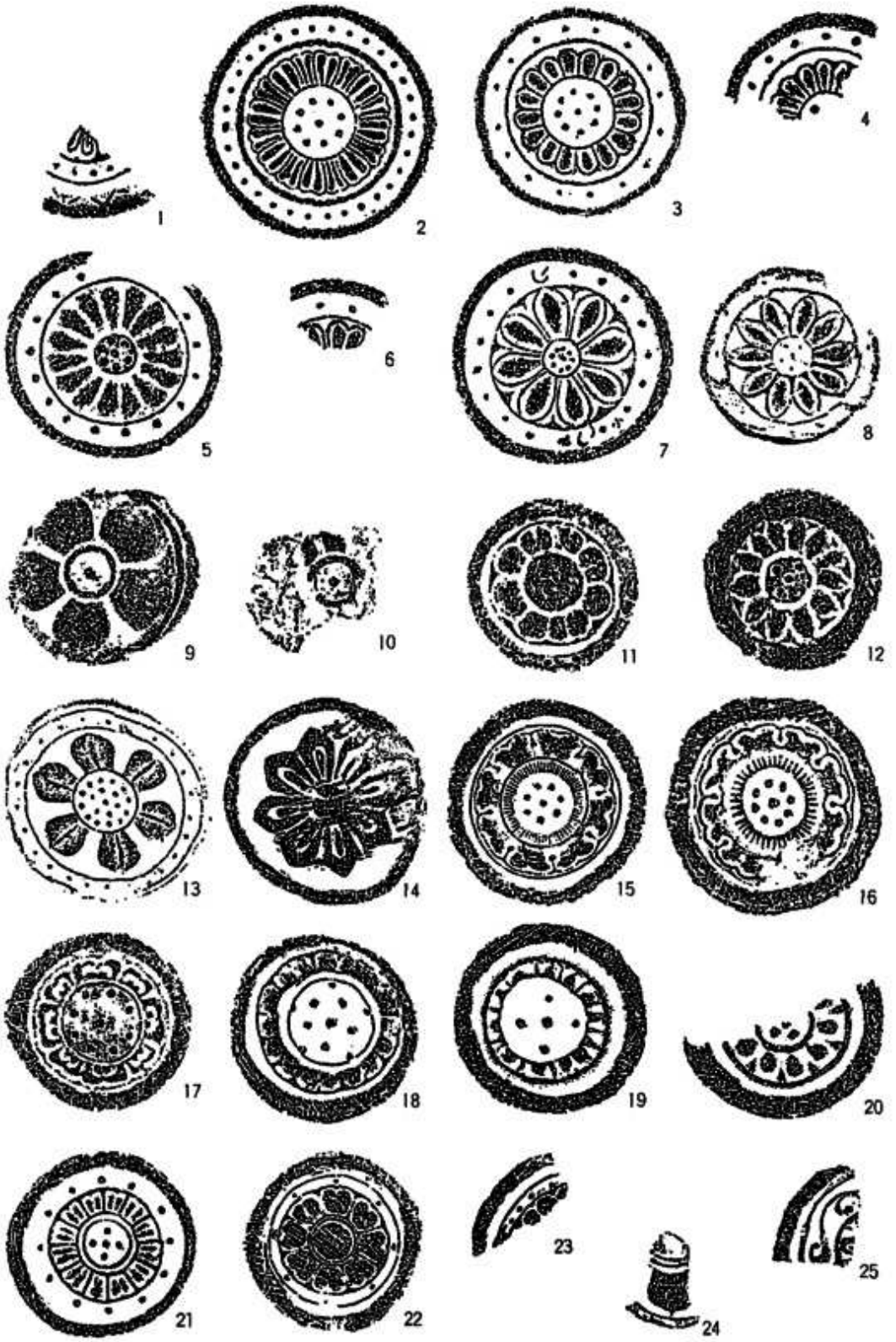
今回の調査で出土した瓦類には，平安時代前期より，江戸時代までのものが含まれている。中でも平安時代の瓦では，その前期より後期に至る各時期のものがあり，軒瓦の瓦当文様の種類では100種以上におよび，平安京の遺跡としては，極めて多彩なものであった。以下，この平安時代の，主として軒瓦を中心に，その特徴や問題点をまとめてみたい。

今回の調査地内から出土した軒瓦は第1次調査分[4]を含めて118種にのぼる。第127～131図は出土した軒瓦の文様を拓影等により復原したものである。多少時期的に前後するものもあるが9世紀～12世紀代までまず時期的に概観して行く。

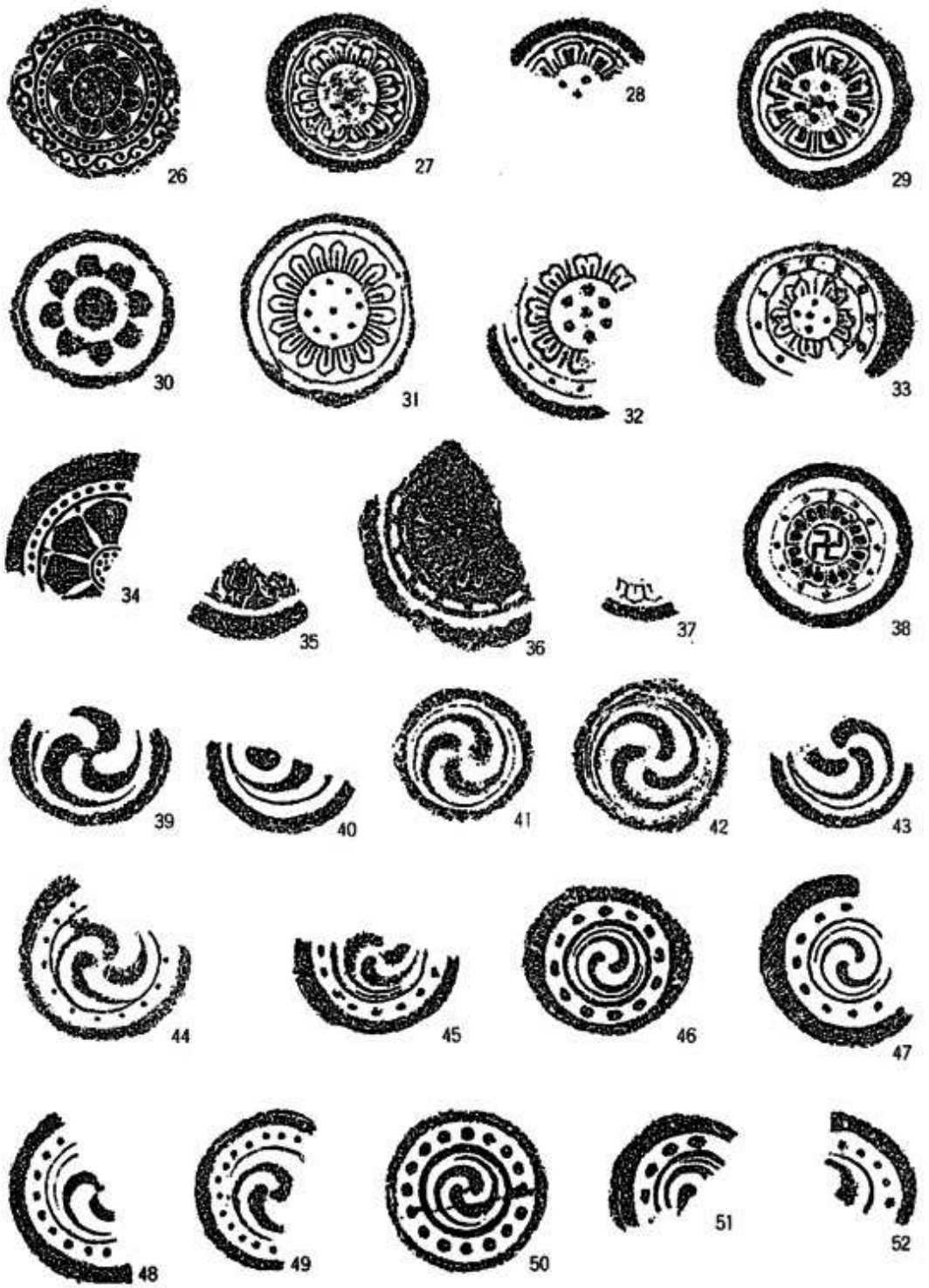
9世紀前半の前期に属するものは1～6，53，54がある。この内，53は平城宮型式瓦で，長岡宮や平安宮にも用いられた瓦である。1も平城宮で同笵例は知られていないが，少なくともその系統に入るものと思われる。3，54は今回の調査地周辺で出土する瓦である。すなわち，六角堂および東洞院大路跡の調査において，この同笵品が出土している[5]。またこの両者に極めて近い同文例が滋賀県の瀬田廃寺で出土している[6]ことからも，これがセット関係にあることが確かめられる。4も3と同じ造瓦所の製品であろう。2と5は平安宮内からも出土しているもので，2は3とほとんど同じ造瓦技法であるため，これも同一造瓦所の産かと思われる。6は複弁8葉の蓮華文であろうが，他に同笵例を確認できなかった。

7～10は一本造りによる軒丸瓦で，10世紀代の中期に属するものである。軒平瓦では56～59がこの時期にあたる。いずれも同笵品ないし同文例は平安宮跡で多く見られるもので，中期の小野，栗栖野両瓦屋を始めとした官窯製品である。55はこれらにやや先行する軒平瓦で，9世紀後半代のものであろう。60は58，59の文様系統に続くと見られるもので，11世紀に入ると思われる。62は57の文様をやや単純化した唐草文の軒平瓦である。これは先に記述していないため，ここでふれておく。この瓦の造瓦技法は56～59と同様のもので，凸面の幅の広いヘラケズリで整形されている。胎土には砂，小石を多く含み，火を受けたものか，瓦当面は赤褐色を呈している。63も57または56の文様を単純化した唐草文の軒平瓦であり，これに後出するものであろう。61は類例が平安宮跡でも出土しているもので，造瓦技法より11世紀代と思われる。64や67も例が少ないため確実ではないが，これも11世紀代のものと思われる。

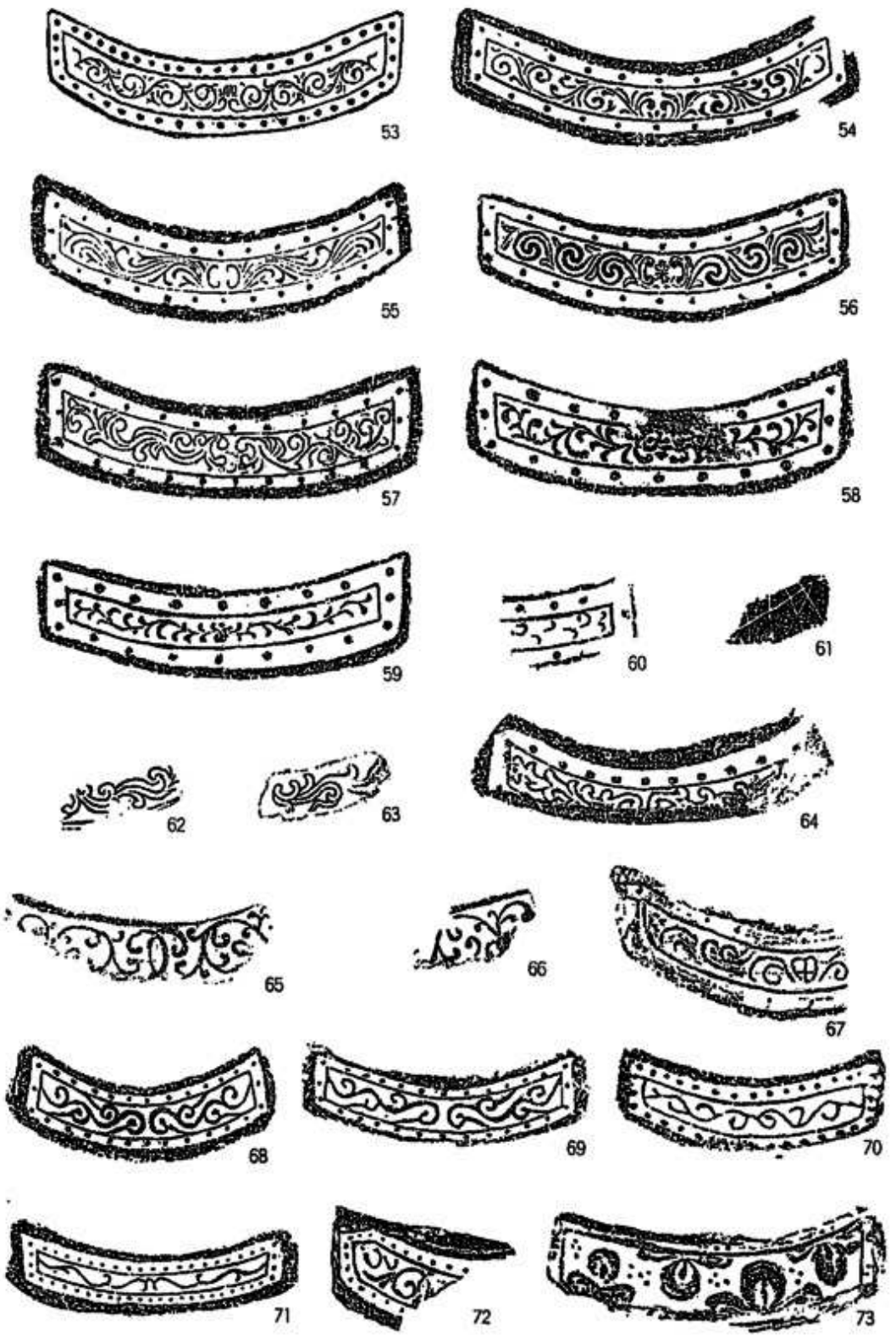
65は法勝寺で同文例が出土しており，その創建期(承暦元年，1077)頃に比定される。66は65と似た唐草文の軒平瓦で，これも11世紀代かと思われる。11，12，68，69は後にふれるように，溝Ⅳに集中して出土しており，また造瓦技法からもこれらが組み合うものであることは確かであろう。11，6は平安宮跡でも出土している。造瓦技法，すなわち凸面の指オサエによる整形などから，11世紀後半頃のものと思われる。70，71も68，69と同様の造りで，71は法勝寺跡でも出土しており[7]，11世紀後葉頃のものと思われる。なお70は大宮河上瓦窯の産である。13，72，73は丹波産の瓦である。13は土御門殿跡[8]で同笵が出土しているが，他に類例は見られない。72は丹波産軒平瓦の一般的な文様であるが同笵は確認できなかった。73は法成寺跡出土の同笵例に緑釉品があり[9]，法成寺の創建時(寛仁四年，1020)頃のものと見られる。74も半裁花文の軒平瓦で，三条西殿跡出土品は今回も第1次調査でも極く小片であったが六角堂の調



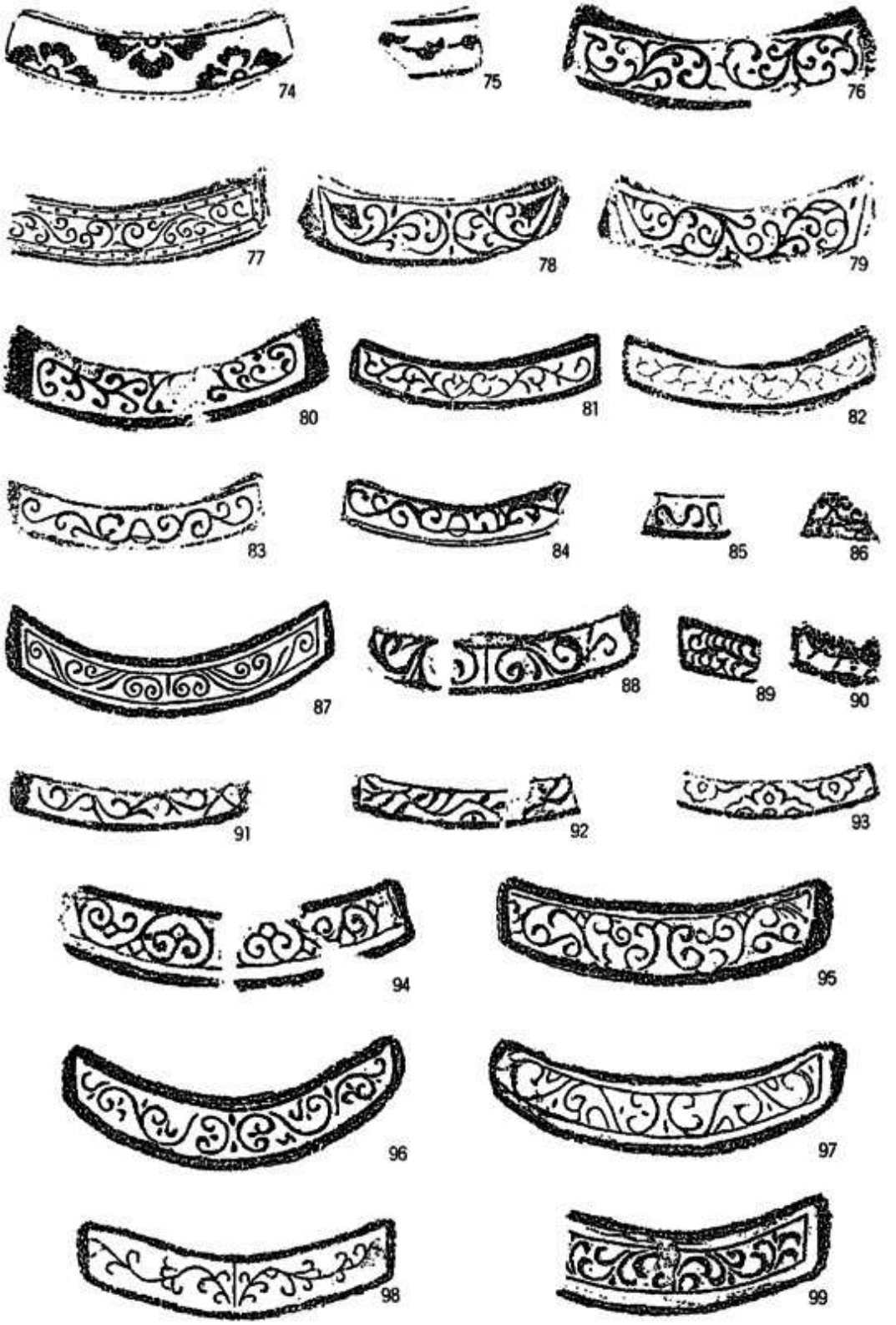
第127図　出土軒瓦一覧図 (1)　(縮尺：⅙)



第128図　出土軒瓦一覧図 (2)　(縮尺：⅓)



第129図　出土軒瓦一覧図 (3)　(縮尺：⅙)



第130図　出土軒瓦一覧図 (4)　(縮尺：½)

100

101

102

103

104

105

106

107

108

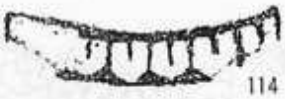
109

110

111

112

113


114

115

116

117

118

一覧図番号	挿図番号	一覧図番号	挿図番号	一覧図番号	挿図番号	一覧図番号	挿図番号
1	111-1	31	113-1	61	34-3	91	117-10
2	31-2	32	第1次調査分	62	—	92	118-2
3	31-1, 111-2	33	45-3	63	33-5	93	118-4
4	111-3	34	113-3	64	116-1	94	118-6, 7
5	111-4	35	113-4	65	116-8	95	34-4
6	111-5	36	113-5	66	116-7	96	118-8～10
7	111-6	37	第1次調査分	67	116-2	97	119-1
8	第1次調査分	38	第1次調査分	68	34-1	98	118-11
9	31-3	39	第1次調査分	69	33-6, 7	99	118-5
10	111-7	40	114-6	70	116-3	100	119-3
11	31-5, 111-8	41	第1次調査分	71	34-2	101	119-2
12	31-4	42	114-7	72	116-6	102	45-6
13	32-1, 111-9	43	114-8	73	45-5	103	119-7
14	32-2	44	45-4	74	—	104	119-4
15	32-5	45	114-5	75	115-8	105	119-6
16	32-4	46	114-1, 2	76	117-5, 6	106	119-5
17	第1次調査分	47	114-3	77	116-4, 5	107	119-8
18	32-3	48	第1次調査分	78	117-3	108	119-13
19	112-3	49	114-4	79	117-7	109	119-10
20	112-2	50	90-1	80	第1次調査分	110	第1次調査分
21	112-4～6	51	90-2	81	第1次調査分	111	第1次調査分
22	32-6	52	90-3	82	117-8	112	第1次調査分
23	第1次調査分	53	115-1, 2	83	117-2	113	119-9
24	112-7	54	33-1, 2, 115-3	84	117-1	114	第1次調査分
25	第1次調査分	55	33-3	85	117-9	115	第1次調査分
26	112-1	56	第1次調査分	86	117-4	116	119-22
27	112-8, 9	57	33-4, 115-4	87	第1次調査分	117	第1次調査分
28	45-1	58	115-5	88	117-12	118	119-11
29	45-2, 112-10	59	115-6	89	118-3		
30	113-2	60	115-7	90	117-11		

第131図　出土軒瓦一覧図(5)　縮尺：⅙

査でも出土しており，大宮河上瓦窯の製品と見られる。75の瓦当文様は平安京跡の瓦では異質の文様であるが，造りなどから74と同じ瓦窯の製品かと思われ，ともに11世紀代と見られる。14は尊勝寺跡出土品[10]を例示したもので，笵傷が多数見えるが，法勝寺跡出土例ではさほどではない。尊勝寺例からこの瓦は12世紀初めのものと見られる。

軒平瓦76～93および102は12世紀代の平安京周辺の造瓦所で造られたと見られる，中央官衙系と称されるもので，軒丸瓦では26～33がこれにあたる。この中では77や26が11世紀的な造瓦技法によるもので，やや古く位置付けられよう。23～25，34～37は小片のためあるいは類例が乏しいため確実ではないが，12世紀代のものと思われる。15～21は播磨系の軒丸瓦で，94～101がこれに伴うものである。播磨系瓦が平安京にもたらされるのがいつに始まるかは明確にできないが，少なくとも12世紀初頭の尊勝寺創建時(康和四年，1102)には存在するものであろう。なお，15は尊勝寺跡出土品を例示したもので，第32図5と確実に同笵とはいえないもので，100も左側は尊勝寺跡出土品であり，重なる部分がないため，別笵の可能性もあることをことわっておく。

39～52はやや小形の巴文軒丸瓦である。巴文の初現についてはまだ定説を見ないものであるが，12世紀後半には瓦に表わされてくるようである。103～106は連巴文軒平瓦で，103以外は播磨産のものである。107～118は剣頭文軒平瓦で，巴文を入れるものや，珠文帯をもつものもあるが時期的な差は認められない。剣頭文も巴文同様その初現を明らかにしないが，巴文と同時期に出現するものと見られる。例示した巴文軒丸瓦と剣頭文軒平瓦は平安時代に属すると思われるが，51や52はあるいは13世紀に入るものかも知れない。38は鎌倉時代初期の瓦であるが，平安時代末期の瓦と伴出することが多いため例示したものである。

以上を概観すると，この遺跡出土瓦には平安時代前期より後期に至る各時期のものが含まれるが，同じように各時期にわたる平安宮跡の出土瓦と比較すると，その様相をやや異にしている。すなわち，平安宮跡出土瓦は前期，中期を中心にしたもので，11世紀後半以降は以前に比べ極端に，いわば貧相なものになってくる[11]。これに対し，この三条西殿跡ではこれを受けるように11世紀後半以降の瓦が多くなり，特に11世紀末から12世紀にかけての瓦が主体となっているようである。まさにこの時期は白河法皇による院政の開始期にあたり，院の御所としての三条西殿の重要性が瓦にも反映しているように思われる。

平安時代前期の瓦で特徴となるのは，平安宮所用瓦は西賀茂瓦窯産が中心となるのに対し，ここではそれが認められないことである。後述するように前期段階の瓦は調査地の南辺，東辺の三条通，烏丸通にそって分布し，3，54の組み合わせはやや離れた東洞院大路跡および六角堂でも出土しており，この瓦が調査地周辺の条坊を区画する築垣等に用いられていた可能性がでてくる。そしてこれが現在までに知られている西賀茂瓦窯群の瓦とは明らかに胎土，焼成が異なっていることが注意される。

中期段階の瓦は前期の時期に比べるとかなり少ないものである。その内容は中期内でも古いものから新しいものが含まれており，量的に見ても本来この地で用いられていたものかどうか疑問である。

中期から後期にかけての時期にあたる11世紀代の瓦は先に述べたように，この遺跡で最も目立つものである。12世紀代の瓦では，平安京跡で一般的に見られるように播磨系の瓦が多いように見受けられる。

次に調査地内での瓦の分布状態を見ると第132図のようになる。Ⅰは平城宮型式瓦を含む前期瓦の分布である。先に触れたように三条通，烏丸通にそった形で分布しており，特に三条通側では溝Ⅳの内外にほぼ限られている。烏丸通側もグリッドのB列に限って分布しており，平安時代初期の烏丸小路側溝がこのあたりにあった可能性を示唆するものかと思われる。

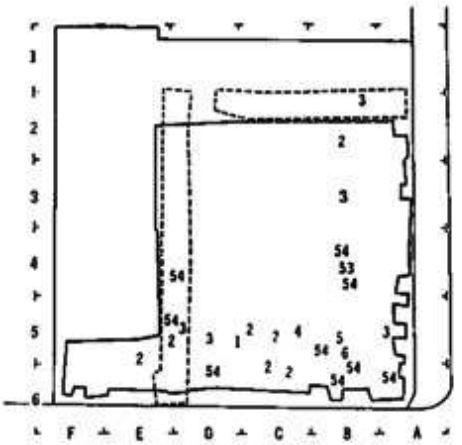
Ⅱは中期瓦の分布であるが，先にふれたように量が少なく，分布状態もⅣ～Ⅵの後期瓦の分布状態に近いもので，分布の点からも元から当所に用いられたものでなく後期のある時期に平安宮あたりから運ばれた可能性がある。なお小片ではあるが緑釉の軒丸瓦(瓦当面を欠く)や緑釉熨斗瓦も出土しており，この点でも平安宮から運ばれた瓦があることを窺わせる。

Ⅲは11世紀代の瓦の分布である。中でも11，12，68，69はほぼ溝Ⅳからの出土であり，この時期に三条大路北側の築地等に用いられていた瓦であろう。なお溝Ⅳ出土瓦中には，熨斗瓦がある程度目立つ。軒瓦，熨斗瓦と一般の丸，平瓦との割合は正確なものではないものの前者が多く認められる。これは屋根の全面積に比べ，軒先の延長の長いもの，すなわち築垣等の屋根が推定されるものである。

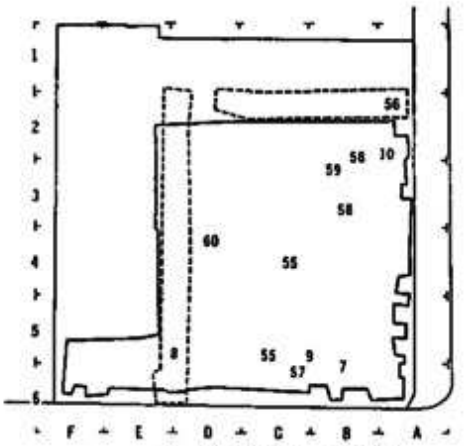
Ⅳは播磨系瓦の分布である。ここではⅢと同じく，溝Ⅳに関連するものも多いが溝Ⅳよりやや北に偏している。また調査地北区にもある程度集中することが注意される。条坊が築垣で厳重に区画されている場合は，今回の調査地のような場所はその最も隅にあたり，瓦を用いるような建物などの存在は想定しにくいが，築垣が取り払われるようになると道に面した部分が利用されるようになってくる。すなわち，これは京都の古代的条坊都市が変容していく過程にもあたる。この播磨系瓦は12世紀前半期頃のものがあり．この時期の京都の変化を裏付けるものと思われる[12]。

Ⅴは後期の中央官衙系の蓮華文，唐草文の軒瓦分布で，Ⅵは巴文，剣頭文の軒瓦分布である。この二つは12世紀後半の瓦が主になっている。この段階では溝Ⅳとの関係は薄く，すでに溝Ⅳは機能していなかったものと見られよう。そして，この時期にはグリッドの2列とB・C－4・5に瓦が集中し，このあたりに何らかの建物があったことを思わせる。A・B6にも瓦が集中しているのは三条大路の路面であり，ここの瓦は路面に砂利と混ぜて用いられた廃瓦と見られる。したがって，直接三条西殿に関するものかどうかはわからないが，少なくともこの付近の建物に用いられていたであろうことは推測できる。なお，この部分の瓦には火を受けたらしいものの多いことも注意される。

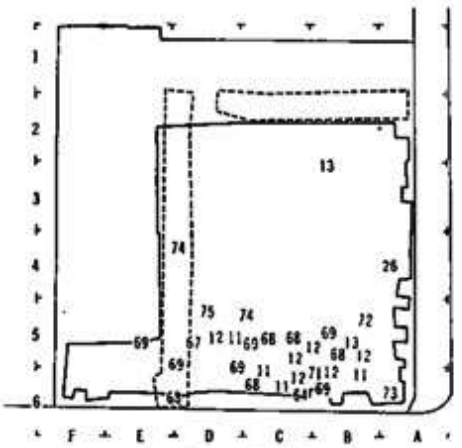
鎌倉・室町期の瓦は今回の調査ではあまり多くはなく，井戸や包含層に散見される程度であった。この中では『妙行寺』銘の軒丸瓦が興味深い。桐文を表した軒平瓦は桃山期または江戸期のものであるが，この時期の瓦も多くはなかった。江戸時代の瓦については，まだ細かな時期比定ができないためおおまかになるが，中期以降には京都でも瓦葺きの民家も多くなるようで，幕末の元治の大火にかかると見られる焼瓦が多数出土している。　　(植山)



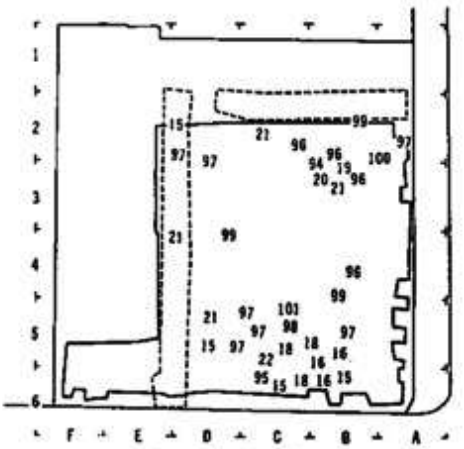
Ⅰ. 平安時代前期



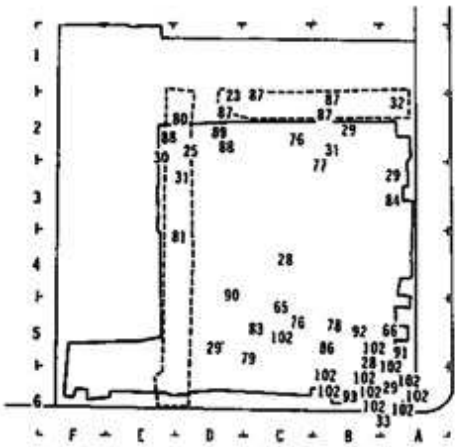
Ⅱ. 9世紀後半～10世紀代



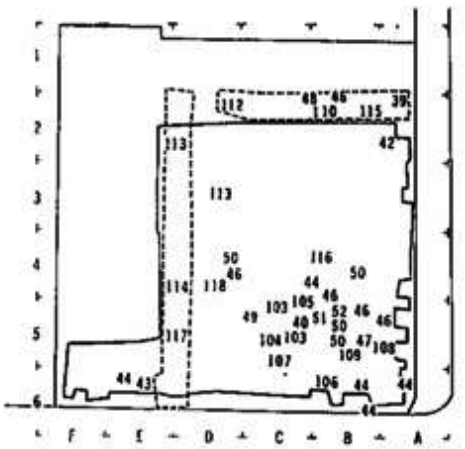
Ⅲ. 11世紀代



Ⅳ. 平安時代後期(1)



Ⅴ. 平安時代後期(2)



Ⅵ. 平安時代後期(3)

第132図　軒瓦出土分布図（数字は一覧図番号）

3)　巡礼札について

今回の調査で，15世紀末～16世紀中葉頃の時期と考えられる三条大路北側側溝ⅢBより，木製巡礼札が3枚出土した。巡礼札が発掘調査によって出土したのは，本遺跡においてが全国で最初である。3枚とも，大きさ・書体等に若干の差異はあるが，『西国卅三所順礼』ないしその後に『同行二人』の墨書をしたためているものである。

このような巡礼札に関しては，紀年銘のある伝世品が若干残存している。滋賀県石山寺には，永正三年(1506)，弥勒二年(永正四年，1507)，永正八年(1511)，天文十五年(1546，銅製)の室町時代後半から安土・桃山時代の紀年銘巡礼札4枚の他，江戸時代の紀年銘巡礼札が伝世されている[13]。また，岩手県中尊寺には，永正十三年(1516)の紀年銘ある西国三十三所巡礼札，栃木県鑁阿寺には，坂東三十三所巡礼札が伝世されている[14]。

以上の伝世品のうち，江戸時代を除いて，最も古いものは石山寺の1507年のもので，最も新しいものは1546年のものである。本遺跡出土の巡礼札も，上限を15世紀末とし，下限を16世紀中葉頃とする溝からの出土であるので，これらの伝世品の巡礼札とほぼ同時代のものと言えよう。

三十三所巡礼は観音信仰であり，平安時代末期にその原形が成立したが，庶民信仰として確立するのは室町時代に入ってからのこととされている。第133図は室町時代に成立したといわれる『三十三番職人歌合』(町田本)の中の巡礼の部分である。背に『三十三所巡礼同行三人』とある笈摺を着て，手に同文の巡礼札を持った人物が描かれている。

第133図　『三十二番歌合』巡礼図

この西国三十三所巡礼は，第1番札所を和歌山県青厳渡寺とし，近畿の諸寺をめぐり，最後の第33番札所を岐阜県華厳寺とするものである。ここ三条西殿跡のすぐ南西には，第18番札所である如意輪観音を安置した六角堂(頂法寺)が存在しており，本遺跡出土の巡礼札はあるいはそこへ納められるものであったのかもしれない。

(定森)

3.　文献学的考察

1

三条西殿(西三条内裏)は，12世紀の初めに白河法皇が御所とされたことで普く知られた邸宅である。その上，法皇は，この西殿の西対で崩御され，その殿舎が鳥羽殿に移築されている。

三条西殿は，平安京の条坊制で表記すれば左京三条三坊十二町ということになり，一町(方40丈)を占めていた。三条三坊といえば，摂関家伝領の東三条院をはじめ鴨院，高松殿，三条

院，押小路殿，三条東殿といった名だたる邸宅が所在した地域である。烏丸小路をはさんで東には，平治の乱で焼き打ちに遭った三条東殿があり，三条大路をはさんで南には，鳥羽上皇，上西門院(統子内親王)，七条院(藤原殖子)らの御所となり，平清盛と13歳の源頼朝が顔を合わせたことでも知られる三条南殿(三条烏丸殘敗殿)があるなど，ことに三条西殿の周辺は，院政期における洛東の白河殿界隈，洛南の鳥羽殿などとともに脚光を浴びた場所であった。

2

それにも拘らず，この西殿がそもそもの初めは誰の邸宅であったのか，地点標示を明記した拠るべき文献は得られない。ただ草創の頃に関して，11世紀の半ばに摂関藤原頼通の妾妻の進命婦こと藤原祇子が住み，子息の師実が伝領したとみる角田文衛博士の考証があるので[15]，その説を紹介する形で三条西殿の歴史をひもとくことにしよう。

『春記』天喜二年(1054)五月二十三日条に『今日故進命婦周忌正日也，於三条本宅行之，関白所行給也，殊尼殿供云々，申剋許督殿参給彼三条，』とある。これは，1年前に死去した進命婦の一周忌を夫の関白藤原頼通が主催したことを伝えるものであるが，ここで注目しなければならないのは，彼女の邸宅が三条に所在したという事実である。そんなことから進命婦は『三条殿』と呼ばれていた[16]。しかし，三条殿の位置を確認できる史料は見当らない。

いっぽう，頼通の子息の師実も三条殿と呼ばれる邸宅を所持していたことが『後二条師通記』『中右記』などから知られる[17]。なお『中右記』寛治六年(1092)三月六日条によれば，このとき京の三条大路から五条坊門小路の間で大火があって『自万利小路，三条東洞院，京極，四条坊門宅，皆悉為煨燼』とあり，人家の被災は60余ヶ所にのぼり『関白殿御所三条殿』も焼亡したことを伝えている。さらに『三条殿造畢後，已経九ヶ年』と註記されているところから，9年前に築造されたことを知る。

しかし，師実の三条殿は，それよりさらに遡って存在したことが確認される。ところで，白河天皇の中宮であった藤原賢子は，応徳元年九月，養父である師実の三条殿で崩御しており[18]，このときが，ちょうど九年前に当るところから賢子の崩後，取り壊して新築したとみる。

さて，かんじんの師実の三条殿の平安京内における位置については，寛治六年二月六日条の忠実が春日祭使として祖父師実の三条殿から出向する記事[19]に注目され，その記述内容から『師実の三条殿が三条大路の北に接し，烏丸小路の西に位置していた』いわゆる『三条西殿』にほかならないと推定された。そして，この三条殿は，頼通が愛妾の祇子に買って与えたもので，祇子から子の師実に伝領された。さらに，この邸は師実の養女である中宮の藤原賢子(師実の義兄の女)が里第としており，一時，夫の白河天皇もここに住み，内裏(三条内裏)とした。この後に藤原基隆の所有となって白河法皇や待賢門院の御所となった三条西殿は，新たな展開をすることになるが，いうなれば，三条西殿の前半史ともみれる祇子，師実を中心とした部分に関しての角田説の沿革は以上のごとくである。

3

三条殿の伝領過程は，上のような解釈で不都合な問題は生じないと考えられるが，これが，いわゆる三条西殿であると断言するには，まだ検討の余地がありそうに思われる。

すなわち，角田博士がその根拠とされた寛治六年二月の藤原忠実の春日祭使出立(この日の出立は祖父の関白師実の三条殿)について，『後二条師通記』『為房卿記』『中右記』などの記述をあわせ考えると，西対から出立した祭使は，西中門，西門を通って東洞院大路に出て，これを南下し，五条大路を東行して万里小路を南行し，七条大路から京外へと進んでいる。また，この祭使出立からちょうど1ヶ月後に起きた火事の被災地域が，三条以南で五条坊門以北，東西は東洞院と京極両大路の間ということで，この中にあった関白殿の御所三条殿が焼失している。さらに前年六月の関白師実の祇園社参詣について，子息の師通が日記にその道順を『自東洞院(脱アルカ)・自三条更東行，至京極』と記述しており，東洞院大路を南行し[20]，三条大路を東行したと見做され，忠実の春日祭使の場合と同様である。

以上の3例から判断すると，師実の三条殿は，三条大路の北，東洞院大路の東に位置した公算が大きく，これを三条西殿と同一視することはいささか無理のようである。

そういうことになると角田博士が明らかにされた伝領過程の中で部分的に新たな問題が生じてくる。それは，白河天皇が一時期，居住した三条内裏を[21]『拾芥抄』にある西三条内裏(三条北，烏丸西)と見做すならば，これまで述べてきた師実の三条殿と場所を異にするわけで，この点，師実のいわゆる三条殿が中宮賢子を媒介として白河天皇の内裏となったという個所は修正を要することになる。

また頼通の三条第に関してであるが，長暦四年(1040)十一月二十二日の賀茂臨時祭における使以下の祭列の道順に触れて『春記』には，東洞院を北行して一条に出た際に関白第の西門の前を通ったとある。さらに『春記』同日条に後朱雀天皇と女の祐子内親王が方違えしたのが関白の三条第とあるが，前者とは別の邸宅と考えるべきであろう。同一なら師実の三条殿とも一致して，まことに好都合ではあるが，『春記』にみる前者は，頼通第としてよく知られた高倉殿(土御門大路南，東洞院大路東)を指していると理解せざるを得ない[22]。しかし，そうだからといって師実の三条殿と頼通の三条第が異所ということにはならず，伝領関係の点からみると父子ということで，むしろ同所と見做し得る可能性の方が大きいというべきであろう。

中宮賢子が崩御された三条殿は，『九年』云々の記事からみても父師実の邸宅であるから，頼通―祇子―師実―賢子までの伝領ないし同居の形態は肯定されるが，賢子から白河天皇へという場合には，三条西殿ではない師実の三条殿ということであるならば認知できるが，白河のそれが三条西殿となると話は別である。いずれにしても，この点だけは疑問として残るわけであるが[23]，三条西殿の前史ともいうべき点の詮索はこの程度にして，西殿が確実に文献に登場する方に話をすすめることにする。

4

元永元年(1118)正月二十六日は，烏羽天皇女御の藤原璋子が中宮に冊立された日であるが，その日の夜，璋子は土御門内裏(里内裏で源雅実の土御門第)から烏丸小路，中御門，東洞院大

路を経て三条烏丸で下車し，東門から入っている[24]。烏丸小路に面した東門は『四足門』であったというが，『中右記』の正月二十日条によれば，この門は近日，俄に造作されたものであった。この邸は，院近臣の藤原基隆の家であったものを基隆から白河法皇に進上され，院御所となったもので『如法一町宅』ではあったが，前池はないものの『承香殿代』とするなど内裏風に見立てており，法皇は養女璋子の立后に備えて造作を命じ，東四足門もその一環であった。

これが三条西殿であるが，この後，中宮は養父の法皇とともに御所としている[25]。璋子が院御所，三条西殿に退下した前日に法皇はそこへ渡御しているが，『中右記』には『三条烏丸新宰相中将宅』つまり藤原信通邸としており，『是可有立后之家也』と明記している。これによって，白河法皇が院御所とした三条西殿は藤原信通の三条烏丸宅であったことが知られるのであり，信通は天仁元年(1108)に基隆の女婿となったことで居住人となったのであった[26]。なお，その前年のこと，法皇は基隆の新造三条宅を皇子の堀河天皇の皇居とするような動きを見せたが[27]，間もなく天皇の崩御に遭って，この話は沙汰やみとなったらしい。

基隆の三条宅について堀河天皇の皇居の件は話だけで終ったが，それからちょうど10年後の永久五年，次代の鳥羽天皇の臨時の皇居となった。当時，天皇は右大臣源雅実の土御門第を皇居としていたが，頻りに怪異があったという理由で『三条烏丸宰相中将信通家』に行幸となったわけである[28]。行幸があったのは四月二十日夜のことであるが，その前日に白河法皇は，この孫の行幸に備えて『三条烏丸基隆朝臣宅』の下見を行っている[29]。

鳥羽天皇は，基隆・信通邸を皇居とすること半年余りで，同じ年の冬には，新皇居の土御門殿(土御門烏丸の西南)に遷御された。その際の道順は，信通の三条宅の東門から出御し，烏丸を南行，三条を東行，東洞院を北行，近衛から室町まで西行し，新皇居の西門から入御している[30]。

中宮璋子が立后にともなって，三条宅を御所としたのは，夫の鳥羽天皇が新皇居への移徙で，三条宅を去ってから２ヶ月余り後のことであった。しかし，璋子は御所としたものの常時ということではなかったようで(その意味では里第の性格が強く)，天皇とともに皇居の土御門殿にも居住している。その証左となるのが，立后の日からちょうど１年目の元永二年正月二十六日の方違行啓の記事である。『中右記』同日条に『従禁中出御三条烏丸亭』とあり，中宮の車は東洞院を南下し，三条を西行，烏丸の三条宅の東門から邸内に入っている。法皇は，この行啓を三条坊門東洞院の辻に車を留めて見物しているが，中宮の方違行啓には，法皇の見物が多かった[31]。

ところで三条西殿と中宮璋子との関係で重要なことは，鳥羽天皇の第一皇子，顕仁親王(後の崇徳天皇)の産所となったことであろう。御産のために中宮が三条殿(第)，つまり三条西殿に退下したのは四月十五日のことで[32]，４日後には御産に必要な調度類が天皇のもとより届けられているが，運搬責任者の蔵人高階盛行らは『中宮御所三条烏丸西中門方，東洞院御所，』より参入したとある[33]。これによれば，中宮御所は寝殿で，法皇御所は東対をあてていたようである。

中宮が三条西殿の寝殿の産所で無事に皇子を出産したのは五月二十八日のことであった[34]。この慶事を『中右記』の作者藤原宗忠は，『誠為法皇御為天下大慶也，就中見曽孫皇子我朝未有此例，上皇大幸冠絶古今也』と述べている。このあと中宮，若宮(皇子)，法皇は三条烏丸亭(三条西殿のこと)を御所としており，法皇は東対，中宮は寝殿，若宮は西対を用いていた[35]。

三条西殿は，烏丸小路に面した東門を晴の門としていたらしいことは，すでに触れたことからでも頷けるが，それは，保安元年(1120)における鳥羽天皇の朝覲行幸の例をもって確認できる[36]。天皇は，院御所三条烏丸亭に行幸されたのであるが，その際に三条烏丸の東門から邸内に入御しているが，『東門』に『烏丸西』という割注があり，三条西殿の位置を明確にしている。中宮璋子が第二皇子の通仁親王を産んだのも三条西殿であったが，その年月が5年後の五月二十八日[37]と第一皇子と同月日であるのは，偶然のこととはいえ不思議なことである。

以上，みてきたように三条西殿の歴史は，中宮璋子が立后して里第(中宮御所)とした元永年間から保安にかけて脚光を浴びたが，その契機は白河法皇の院御所となったことによっている。なお三条西殿における法皇と中宮との密会などについては角田博士に詳細な研究がある[38]。

5

そもそも，三条西殿の名が東殿に対しての呼称であるのは言うまでもないことで，この両者が同時に登場し，かつ当時の記録に意識的に使いわけられるのが12世紀前半のことである[39]。その最初の例である大治元年(1126)二月二日の『永昌記』から関連部分を次に掲示してみよう。

> 雪降，今日太上法皇移徒東殿，唐御車，……殿下兼令候新所給出御，御車本御所寄西北妻戸，無御反閇，経姉小路烏丸等，入御新御所西南門，本是経房守家保朝臣宅，今依仰造進，

白河法皇は近臣の藤原家保に命じて，その邸宅を造進させ，院御所として遷御されたのである[40]。この記事から知られるように新御所を東殿と称し，本御所ないしは西本御所[41]を西殿と呼んでいる。なお，法皇の遷御は，西殿の西北門から姉小路を東行，烏丸小路を南行して東殿の西南門から邸内に入るといった道順をとっている。

新造から1年，大治二年正月の時点における三条東殿は，白河法皇，鳥羽上皇，待賢門院璋子の三院御所であり，この年の崇徳天皇による朝覲行幸は東殿(三条東洞院第)へということであった。この行幸に先だって三院は西殿から渡御され，また天皇の還幸のあとで西殿に還御されているから[42]，常時の三院の居所は西殿の方であったと見做される。

ところで三条西殿を舞台に展開した歴史の中で，劇的で，かつ最大の出来事といえば，何といっても白河法皇の崩御であろう。法皇が77歳の生涯を閉じたのは大治四年(1129)七月七日のことであるが，藤原宗忠の『中右記』から当日の三条西殿内の動きを探ってみれば以下の通りである。

> ……参入三院御所三条北烏丸西第，入従東御門間，雑人満門内，走参，先参新院，殿上人人済々，南庭作丈六御仏五体之間，仏師数百人，又被作始五重御塔工等奉庭中，凡雑人成市以参本院御方……

法皇の死を知って一般の人までが門内に入り込み，その数は市を成すほどであったという。また南庭では五体の丈六仏と五重塔の造作が始められている。

いっぽう法皇の崩後，『本所三条烏丸』(西殿)は一品宮こと禎子内親王(鳥羽皇女)領，『東之新三条』(東殿)は待賢門院領となり，そのほか二条東洞院第が鳥羽上皇領となったのをはじめ，六条殿，鳥羽殿，白河殿，御倉二百余所などの伝領がなされているが[43]，これによっても白河法皇の権力が絶大であったことが推察できる。

ところで白河法皇が崩御された場所は西殿の西対であった。その殿舎は，『故院崩御後，破彼御在所西対，被立鳥羽泉殿』とみえ，法皇の昇霞後，壊して鳥羽殿に運ばれたことが知られる[44]。

いっぽう，西対を失った西殿はその跡に新たに殿舎が建造され，大治五年(1130)十二月二十六日に修理後はじめて鳥羽上皇と待賢門院が渡御された。このことに関して『中右記』および『長秋記』は，西対の跡地に新たに小寝殿が造作され，渡殿を作って他の殿舎と結ばれるようにしたが，その新造および修理のいっさいを越後守藤原清隆が勤仕した。清隆は，造進のみならず御簾・畳類におよぶしつらえまで行ったのである。この時点での西殿は待賢門院の御所となっている。当日，上皇と女院の車ならびに一品宮以下3人の宮の車は，室町小路に面した西門から邸内に入った。その翌日，上皇，女院は揃って東殿に御幸されたが，このときは東門から出御している。

白河法皇の崩御から西対の新造(小寝殿)に伴い女院御所となって御幸をみるまでわずか二年足らず，その間，西殿において故法皇の仏事が盛んに行われているが，それらの事柄は『中右記』ほかに詳しく，ここでは，いっさいを省略に委ねることにする。

法皇なきあと女院御所として出発した西殿であったが，長承元年(1132)七月の火事で焼亡し[45]，再建なったのは康治二年(1143)六月のことで，翌月，前斎院の統子内親王(鳥羽皇女，後の上西門院)は新造の三条烏丸第(西殿)に移徙した[46]。このときから三条西殿は，待賢門院，統子内親王母娘の御所となったが，3ヶ月足らずで再度焼失し，母娘は崇徳上皇の三条西洞院御所に渡御し，鳥羽法皇の臨幸もあった。西殿の相つぐ災難について『天之令然歟，地有盛衰，人有哀楽，何可強哉』とある[47]。

6

白河法皇以来，鳥羽・崇徳両天皇，待賢門院，上西門院の御所として半世紀近くもの間，脚光を浴びた三条西殿の歴史は，12世紀中期の焼失をもってひとまず幕を降ろすことになったが，完全に終焉を迎えたわけではなかった。

治承二年(1178)閏六月十一日の夕刻，高倉天皇は三条殿に行幸されたが，その場所について『山槐記』は『三条北烏丸西院御所』と明記しており，当日，天皇は皇居の閑院内裏の東門から出御，北行して二条を東行，東洞院を南行，三条から西行して烏丸に面した南門(東南に位置していた)から入御された。この行幸の理由は，中宮の平徳子(後の建礼門院)が懐妊6ヶ月で物気に悩まされているにも拘らず，里亭への退下がなされず，邪気を避けて天皇が他所へ渡ったというわけで，同じ月の二十七日に閑院に還御されているから[48]，三条殿には半月ほど滞

在されたことになる。

『山槐記』の行幸の記事によって，かつての三条西殿の場所が，12世紀後半には院御所つまり後白河法皇の御所であったことがわかるのである。それでは，いつから御所となったのか，ということであるが，これに応えるのが『玉葉』承安二年七月二十一日条の『此日法皇有御移徙，新造三条御所 別当成親卿造之，』である。つまり承安二年(1172)の秋，後白河法皇の御所となったわけで，造作には院近臣の権中納言藤原成親が当った。新たに院御所となったこの場所は，後白河法皇にとっては，かつて父母や兄姉が居住したゆかりの地であり，御所の決定に当っては法皇の意志にでるものであったにちがいない。法皇にとって感慨ひとしおであったことであろう。

新造御所への初移徙には，法皇は女御の建春門院(平滋子)とともに遷御された[49]。その２日後には，この両親のもとへ高倉天皇が行幸し[50]，八月二十日には，閑院内裏に納が群集したため夜になって俄に還幸している[51]。これ以外にも高倉天皇は，何回か三条烏丸院御所へ行幸を試みたが，安元二年(1176)二月を最後に記録には見当らない[52]。そして，これが管見の限りでは院御所として知られる下限でもある。

いわゆる三条西殿としては，待賢門院，上西門院の御所であったとき，焼失によってその歴史を閉じたが，それから30年を経て，その地は後白河法皇の院御所として再出発した。その間のことは全く不明であるが，後白河の御所となってからの５年間は記録にも登場し動きがつかめるが，安元二年を最後にその後の動静は全く知られない。この時期になると法住寺殿ほか有力な院御所が多く出現することもあって，三条烏丸のそれは徐々に使用されなくなったものであろう。

以上が平安時代における左京三条三坊十二町の沿革である。この場所は，いわゆる三条西殿が経営されるなど院政期には脚光を浴びたが，今日までの長い歴史の中で，平安時代を措いてそういうことはなかった。鎌倉時代以降で皇室はおろか貴族が居住したことを示す文献はない。ただ時代と場所を反映して商店が存在したことを示す史料は散見している。そこで，以下においては残された文献によって近世にいたる当地の歴史の断片を素描してこの項を終えることにする。

7

鎌倉時代のことは不詳であるが，室町時代以降の当該地は商業地区に属し，その方面での発展は著しい。この地域は時代とともに町組として組織化されていくが，自治的な町としてはもっとも早い例に属する。

さて，当該地(平安京の左京三条三坊十二町)が，そういう形で史料に登場する早い例は，『祇園社記』応永四年(1397)九月十七日条で，そこに綿売本座神人の居所の一つに『三条室町東北頬　二人』とあって，14世紀末の時点で祇園社に課役を納める綿商人の存在が知られるのである[53]。また15世紀前半には，当該地に祐慶・祐阿弥という酒屋があったし[54]，近くには材木屋も存在した[55]。

このように商工業地区であったから蔵なども多く存在したと察せられるが[56]，それを裏付け

るのが散見する焼亡記事である。例えば『康富記』享徳三年(1454)九月十三日条に『今夜三条烏丸与姉小路間西頬酒屋土蔵焼亡，土焼板蔵，』とあって，まさに当該地の東側，烏丸小路に面して酒屋が存在し，その土蔵が焼失したことを伝えている。なお，この火事は，この月，土一揆が起こって近郊の馬借らが京中の土蔵を襲ったことによるものであろう。

いっぽう，絵画史料にはどのような形で描かれているのであろうか。調べてみたところ，洛中洛外図屏風の中に当該地と推定される場所があった。上杉家本のそれには，右隻四扇の部分に室町通り(中央に小川が流れる)と三条通りの東北の辺りに『竹田ずいちく』との書き込みがあり，周辺の商店とは異なる立派な門と建物の一部がのぞまれる(図版第80，上)。竹田家といえば代々医学を家業とし，歴代が法印になったところから『竹田法印』とも通称された家系で，『ずいちく』に当る人は，瑞竹を号した竹田定珪のことであろう[57]。上杉家本『洛中洛外図屏風』の成立は天正二年(1574)以前，つまり16世紀後半ということであるから定珪と年代的な矛盾はない。ただ，問題なのは，同じく上杉家本『洛中洛外図屏風』の右隻三扇に『竹田ほういん』の書き入れがあり，この法印が具体的に誰を指しているのか，明確にし得ないことである。場所については，瑞竹邸の南に位置しており，他の文献で知られるように四条坊門南，錦小路北，東洞院東と見做してよい[58]。なお同様の医師，後水尾天皇やその中宮東福門院和子の治療に当るなど17世紀前半に活躍した武田道安が有名であるが，彼の邸宅は三条通両替町東にあったというから[59]，瑞竹の居宅と同じ場所ということになる。当該地には16世紀後半から17世紀におよんで医家宅もあったことが知られる。因に池田家旧蔵岡山美術館所蔵の『洛中洛外図屏風』(図版第80，下)は17世紀前半の京都の様子を伝えているとされるが，当該地周辺を眺めても上杉家本とは様相を異にしており，殷賑のさまが伝わってくる。道安の邸もこの中に描かれているのであろうか。17世紀前半から中期に作成された洛中絵図(図版第78，79)にはその辺のことは描かれていない。

ところで当該地を町名で表示すれば，場之町(西部)，役行者町(東部)，御倉町(北部)，柿本町(南部)を含んでおり，役行者町と場之町は寛永の洛中絵図にも見えている。場之町の初見は，永禄十一年(1568)のことで，福留又三郎，同甚三郎という公人が住んでいたことを伝えるが[60]，この時期の当該地の一面を知ることができる。

時代を反映して17世紀末には銀座として大黒や又左衛門，諸国絹問屋として丹後や源右衛門，新屋市右衛門なるものが当該地もしくは近辺に居住していた[61]ことも知られ，南の饅頭屋町に所在する商店とともに，当該地は商業地区としての確固たる地盤を築いたのであった。中世から近世にかけてのことである。

(聰谷　寿)

〔付記〕 中世以降の史料については，京都市歴史資料館主任川嶋将生氏の御教示を得，閲覧に際しては多大の便宜を与えられた。史料の整備で助力を願った五島邦治氏とあわせて謝意を表します。

註

1）今回は条坊復原図を呈示しなかった。第1次調査報告の図(白石・伊藤・近藤前掲報告，図版第17)は，今回室町期以降と判明した溝にもとづくもので，今回の結果から，平安期の三条大路をやや北に修整しなければならないが，この程度の縮尺であれば大きく訂正するものではなかった。

2）大矢義明『旧二条城跡』(『仏教芸術』115号掲載，東京，昭和52年)。

3）今回の調査地の北(烏丸通御池下ル)で，平安博物館や京都市埋蔵文化財研究所が実施した調査で烏丸小路西側側溝と推定される溝状遺構が検出されており，その南への延長線上にほぼこの落込みがあり，これが平安時代の烏丸小路側溝である可能性が大きい。

4）白石・伊藤・近藤前掲報告，図版第26～30。

5）甲元真之編『平安京六角堂の発掘調査』(『平安京跡研究調査報告』第2輯，京都，昭和52年)。平安博物館編『東洞院大路・曇華院跡』(『平安京跡研究調査報告』第3輯，京都，昭和52年)。

6）滋賀県教育委員会『瀬田廃寺発掘調査報告』(『滋賀県史蹟調査報告』第12冊所収，大津，昭和36年)，図版11－8・9。

7）石田修一『法勝寺瓦に就いて』(『日本史研究』第4号所収，京都，昭和22年)。

8）昭和54年，平安博物館調査，報告書作製中。

9）福山敏男・大塚ひろみ『法成寺の古瓦』(『仏教芸術』68号掲載，東京，昭和43年)。

10）杉山信三他『尊勝寺跡発掘調査報告』(『奈良国立文化財研究所学報』第10冊掲載，奈良，昭和36年)，PL37-86。

11）植山茂『平安宮所用瓦の様相』(『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』所収，京都，昭和58年)。

12）秋山国三・仲村研『京都「町」の研究』(東京，昭和50年)，第2章参照。

13）野口武彦・鷲尾隆輝『古寺巡礼』近江2石山寺(東京，昭和55年)。

14）熱田公編『図説日本文化の歴史』図南北朝・室町(東京，昭和55年)。

15)角田文衛『関白師実の母』(同『王朝の映像』所収，東京，昭和45年)。

16）『栄花物語』巻第三十六，根あはせ。

17）『後二条師通記』ではその索引からだけでも七十余ケ所の多きにのぼる。『中右記』寛治二年十一月二日，同五年正月二日，十六日，三月二十七日，同六年正月一，二，十八，二十，二十六各日条など。

18）『後二条師通記』応徳元年九月二十二日条。なお『後二条師通記』では『三条殿』とするのが『百錬抄』では三条皇居とか三条内裏(応徳元年二月十一日に白河天皇が遷幸した記事)とする。

19）『為房卿記』(内閣文庫本)，『中右記』『後二条師通記』寛治六年二月六日条。

20）大日本古記録の編者が注意を促しているように，『後二条師通記』の脱文のところには『南行』を補って考えるのが妥当であろう。

21)『百錬抄』応徳元年二月十一日条。

22）長暦四年十一月二十九日に祐子内親王は関白頼通の『高倉殿』に渡御したとあり，『春記』の作者は，関白頼通の邸宅について『三条第』と『高倉殿』といったように意識的に区別していると見做される。なお頼通の三条第のことは『百錬抄』康平二年二月八日条，『扶桑略記』同三年八月十一日条ほかに出る。

23）なお二，三問題点をあげるならば，以下のようである。応徳元年二月十一日に白河天皇が行幸された三条殿について『後二条師通記』は，師実がそこへ渡って下見をし，その後に行幸があったことを伝えている。そして，白河はここに移徙し，和歌，相撲などを催している(『後二条師通記』応徳元年三月十六日，七月二十八日条など)ことなどから，しばらく居住したことは明らかである。しかし，その期間は知られない。この三条内裏がいわゆる師実の三条殿とするならば場所的にいって三条西殿とはならないこと，また逆に三条西殿とするならば，師実が母進命婦から伝領し生まれ育ったいうところの三条殿ではないこと前述の通りである。ただ『水左記』承暦五年八月十日条に『今日造三条殿事始云々，美作守清□朝臣所造□初雖有召被造枇杷殿之議定，今俄被改定云々』とある三条殿が，どうも白河天皇が住んだそれではないかと予測されるのであって，同記の永保四年四月二十四日条『関白書状云，遷御三条殿之後未被行除目……』により，白河が移徙されたときが応徳元年(永保四年)二月十一日であることを考えれば，この記事は，それをうけたものと解される(三条殿の造作始めから白河天皇の遷御まで2年半余り)。これに関連して注目されるのが『殿暦』の長治元年十二月二十七日条裏書の『当

時上皇被遣三条内裏令渡給日，今上帝為宣日令渡給云々』の記載である。この一文は，白河上皇が土御門第から伊予守藤原国明の造進にかかる新造の大炊殿に遷御されたことに伴って東宮(後の鳥羽天皇)は『小子』(このとき2歳)であるので新所には渡られるべきでないとして止められたことに対して，大江匡房が質問に応じた解答である。その是非はともかくとして，ここで引用したのは，『今上帝』が宣のとき三条内裏が新造され，白河上皇がその邸へ遷御されたという事実を確認したかったからである。ここで想起されるのは，前述の応徳元年二月十一日の白河天皇の三条内裏遷幸の記事である。ときに堀河天皇は皇太子で6歳であったことにかんがみて匡房の挙例が，まさにこのことを指していることはいうまでもない。そうなってくると，その造進は『美作守□』が当たったことになる。しかし，その位置は謎である。また永久五年(1117)十月二十九日の子剋に三条烏丸で火事があり，『内裏』(里内裏)の南にもかかわらず六角堂が類焼しなかったのは『実不可思議』であると藤原忠実は語っている(『殿暦』永久五年十月二十九，三十日条)。この事実から『内裏』は六角堂の北，すなわち三条大路北，烏丸小路東(後の三条東殿の場所)に位置したことになり，それが本御所『三条内裏』であることが知られるのである(『殿暦』永久五年五月三日条，天永三年五月十五日条，参照)。ただ，この場所は，寛治元年九月二十一日に斎宮善子内親王が初斎院に入るに際して，少なくとも，その直前に去ったところで，『加賀守家道』の邸宅であったことが明らかである(『為房卿記』『本朝世紀』)。

24) 『中右記』元永元年正月二十六日条。

25) 例えば『中右記』元永元年正月二十八日，二月五日条など。

26) 天仁元年四月八日に婚となったことを示す露顕が行われ，その年の七月二十六日になって初めて信通は，岳父の基隆の造作にかかる三条邸に渡っているが，そのことを伝える中で『如法一町家左右対中門等相備也』と記している(『中右記』)。

27) 『中右記』嘉承二年三月二十二日条。

28) 『殿暦』永久五年四月六日条。

29) 同上，永久五年四月十九，二十両日条。なお後世の記録であるが『園太暦』文和二年九月八日条に『同(永久)五四廿，遷幸三条室町皇居』とある。

30) 『殿暦』永久五年十一月十日条，『永久五年遷幸記』(『大日本史料』第三編之十八所引)参照。因に宰相中将の藤原信通は家主賞として従三位に叙せられた。鳥羽天皇が信通の三条宅を皇居としていた間の十月二十九日の夜中に三条烏丸が焼亡し，その場所は内裏の南で，六角堂が焼亡を免れたのは『実不可思議』だと忠実は『殿暦』の同日条に記述している。焼失場所は内御修法壇所で放火によるものという。もっとも火元は『出納之宿所』ということで，忠実は『出納近辺取宿所，未曽有事也，凡近辺取宿所事，此十余年程，院之御所辺如此，付彼例自余人又如此，実為人無術事歟』と述懐している(『殿暦』永久五年十月三十日条，裏書)。

31) 『中右記』元永二年正月二十八日，三月十二，二十一，二十九各日，保安元年正月二十二日，二月十日条ほか。東洞院大路で三条坊門か姉小路に車を留めて見物している。法皇は，養女の中宮璋子をことのほか愛していて，孫の鳥羽天皇との3人で揃って行動するといった奇行はよく知られるところである。

32) 『中右記』元永二年四月十五日条。法皇は姉小路東洞院辻で見物したが，行啓列は西殿の東門から入っている。

33) 『中右記』元永二年四月十九日条。

34) 『中右記』『長秋記』元永二年五月二十八日条。顕仁親王出生の際に臍緒を切ったのも，また乳付をしたのも中宮みずからであったことなど出産前後の様子は『長秋記』に詳しい。なお，この顕仁親王の実父は白河法皇であるということは有名な話である。

35) 『中右記』元永二年六月十九日条。

36) 『中右記』保安元年二月二日条。

37) 『永昌記』『百錬抄』『中右記』(目録)天治元年五月二十八日条。

38) 角田文衛『崇徳天皇の生誕』(同『王朝の映像』〔前掲〕)および『椒庭秘抄——待賢門院璋子の生涯——』(東京，昭和50年)。

39) 三条東殿にも西殿にみられるように前史はあった。例えば『為房卿記』寛治元年九月二十一日条に白河上皇々女の斎宮善子内親王の居所を『加賀守家道朝臣宅，三条以北烏丸以東也』と明記しており，三坊十三町の場所に11世紀末の段階では藤原家道の邸宅があったことを知るのである。

40) 『上皇御所移徙記』(宮内庁書陵部本)大治元年

二月二日条には三条東殿，新造烏丸殿とあり家保が院宣を承って造営したとある。この新造御所は三条東洞院第ともいわれた(『中右記』)。

41) 『永昌記』大治元年二月六日条，参照。この日に白河法皇は西殿に帰っている。

42) 『中右記』大治二年正月三日条。この記事では西殿とか本西御所と記されている。

もっとも三院が一ケ所に長期間おるということは少なく，『中右記』大治四年の条をみても渡御，遊御が散見している。例えば正月七，十九日，二月二日条など。

43) 『中右記』大治四年七月十四日条。因に，この時点での待賢門院御所は藤原家保の三条京極第であったこと，ここから本所三条烏丸亭こと一品宮領(西殿)は『西正方』に当っており，その夜に崇徳天皇の行幸があったことなどは十五日条に記載がある。

44) 『長秋記』大治五年十二月二十六日条ほか。なお同記，天承元年七月八日条によって移築後，鳥羽上皇の命をうけて平忠盛が御堂として造営し，この日に上皇の御幸のもと善勝供養が行われたことを知る。鳥羽泉殿跡に建造されたその堂は九体阿弥陀堂で，成菩提院がそれである(『百錬抄』同日条)。成菩提院に関しては杉山信三『鳥羽殿とその御堂』(同『院の御所と御堂』〔奈良国立文化財研究所学報第十一冊〕所収，奈良，昭和37年，後に同『院家建築の研究』〔東京，昭和56年〕に再録)に詳しい。

45) 『百錬抄』長承元年七月二十三日条。このあと上皇や女院は西殿の南のいわゆる新造の三条南殿を御所とされた(『長秋記』長承三年十二月十九日条)。

46) 『本朝世紀』康治二年七月十一日条。『類聚雑要抄』(『群書類従』巻第四百七十所収)には『康治二年七月十一日丙寅，天晴，前斎院統子，一院御女，三条殿移御，三条室町北東，……但西対母屋内半作，北築垣覆，借覆也』とある。

47) 『本朝世紀』康治二年九月三十日条。なお文中に『件所，故白河上皇御所，多被行吉事，法皇々子上皇併於此所降誕，白河法皇於此處昇霞之後，遊炎上了，去六月新造，統子内親王移徙後，纔経一両月焼失』とある。『台記』康治二年九月二十九日条，参照。

48) 『山槐記』治承二年閏六月二十七日条に『今夜自三条烏丸殿遷幸閑院，日来依被渡中宮御物気，主上御他所也』とある。『愚昧抄』治承二年閏六月十一，二十七日条，参照。因に，中宮はこの年の十一月十二日に皇子を出産するが，これが後の安徳天皇である。

49) 『上皇御所移徙記』承安二年七月二十一日条には『初渡御三条殿，三条北烏丸西皮被御遷造之，建春門院同渡御，』とあり，地点を明記している。また『百錬抄』同日条では三条室町御所と記しており，藤原成親が『不日造営』したことを述べている。

50) 『玉葉』承安二年七月二十三日条。

51) 同上，承安二年八月二十日条。

52) 『玉葉』安元二年二月十一，十八両日条。なお，同記の安元元年九月三日条には，高倉天皇が三条烏丸の院御所で七座北斗法を修したことが記されている。

53) 祇園の綿座については脇田晴子『商工業者の成長』(『京都の歴史』2所収，東京，昭和46年)，参照。

54) 応永三十三年二月十六日付酒屋交名(『北野天満宮文書』所収)。

55) 『祇園社記』に『材木屋在所』として『三条からすまるの衛門次郎殿』を挙げている。年号の記載を欠くが，応永年間頃と推定されている(『史料京都の歴史』4市街・生業〔東京，昭和56年〕)。

56) 『場之町文書』の中に場之町の地図があり，年代は未詳ながら時代は降って江戸末か明治初めごろと考えられる。この地図の西半分は当該地に属するが，烏丸通には玄関口があって，裏に当る西の両替町通側には，ほとんどの家が土蔵を構えているのが知られるが，時代が遡るのでこの状態ではないにしても，商店が存在したとなるとやはり土蔵もあったことはいうまでもない。

57) 『寛政重修諸家譜』巻第七百四十一，藤原氏(公季流)，竹田の項，参照。その系図によれば，瑞竹は天文十九年(1550)に死んでいる。

58) 大永二年(1522)九月十四日付『竹田法印敷地御朱文案文』(『蜷川家古文書』)。

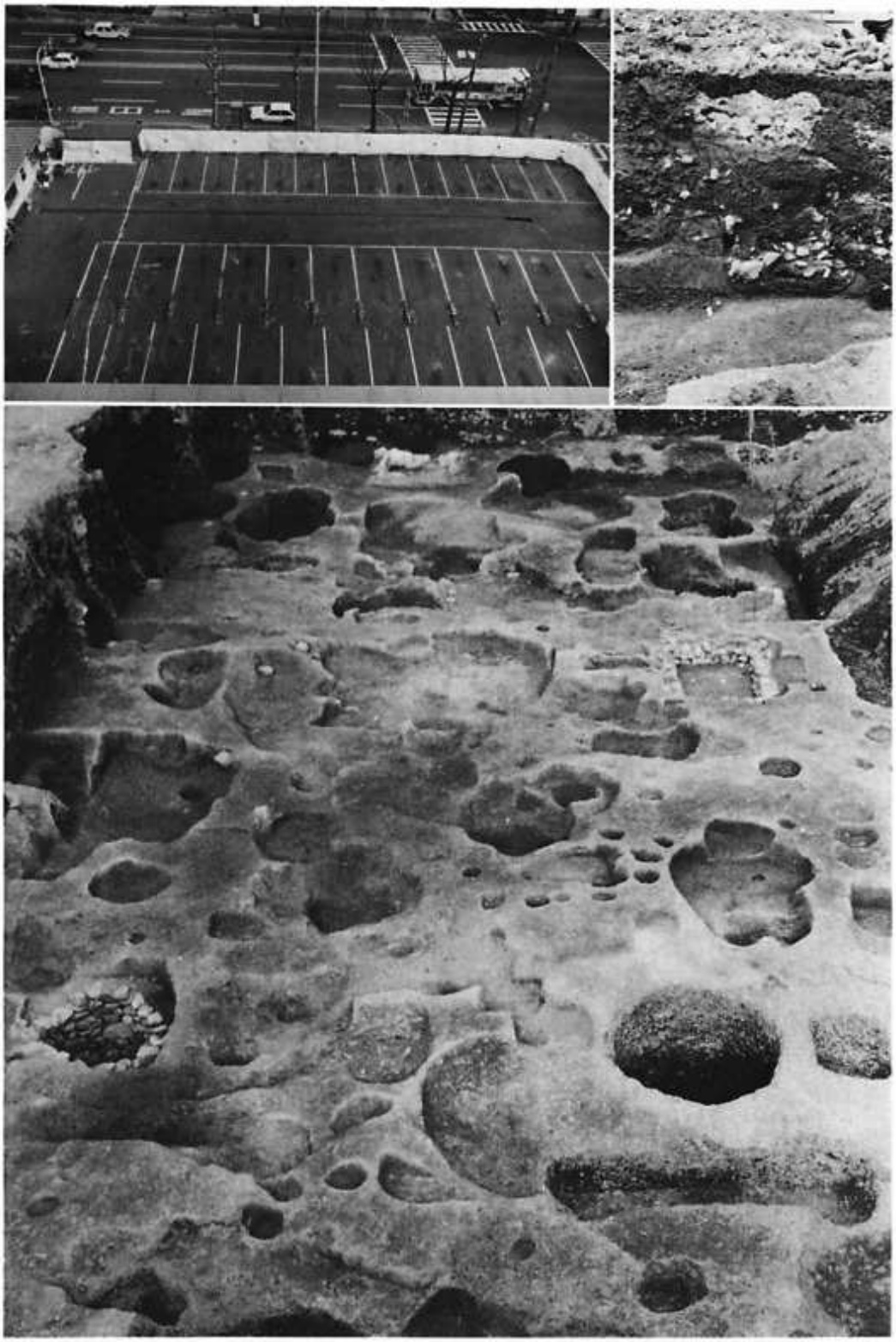
59) 『京都御役所向大概覚書』上巻(大阪，昭和48年)の『五十一，京都大名屋鋪・拝領地并買得屋鋪之事』の中に『三条通両替町東江入町，竹田法印，表口四間余，裏行弐拾三間余』とある。『京都市の地名』(平凡社『日本歴史地名大系』27)では，これを竹田道安邸とみるが，その理由は明らかでない。

60) 永禄十一年七月日付『蜷川家古文書』。なお御倉

町の町名もほぼ同じころ『御蔵町』として出る。

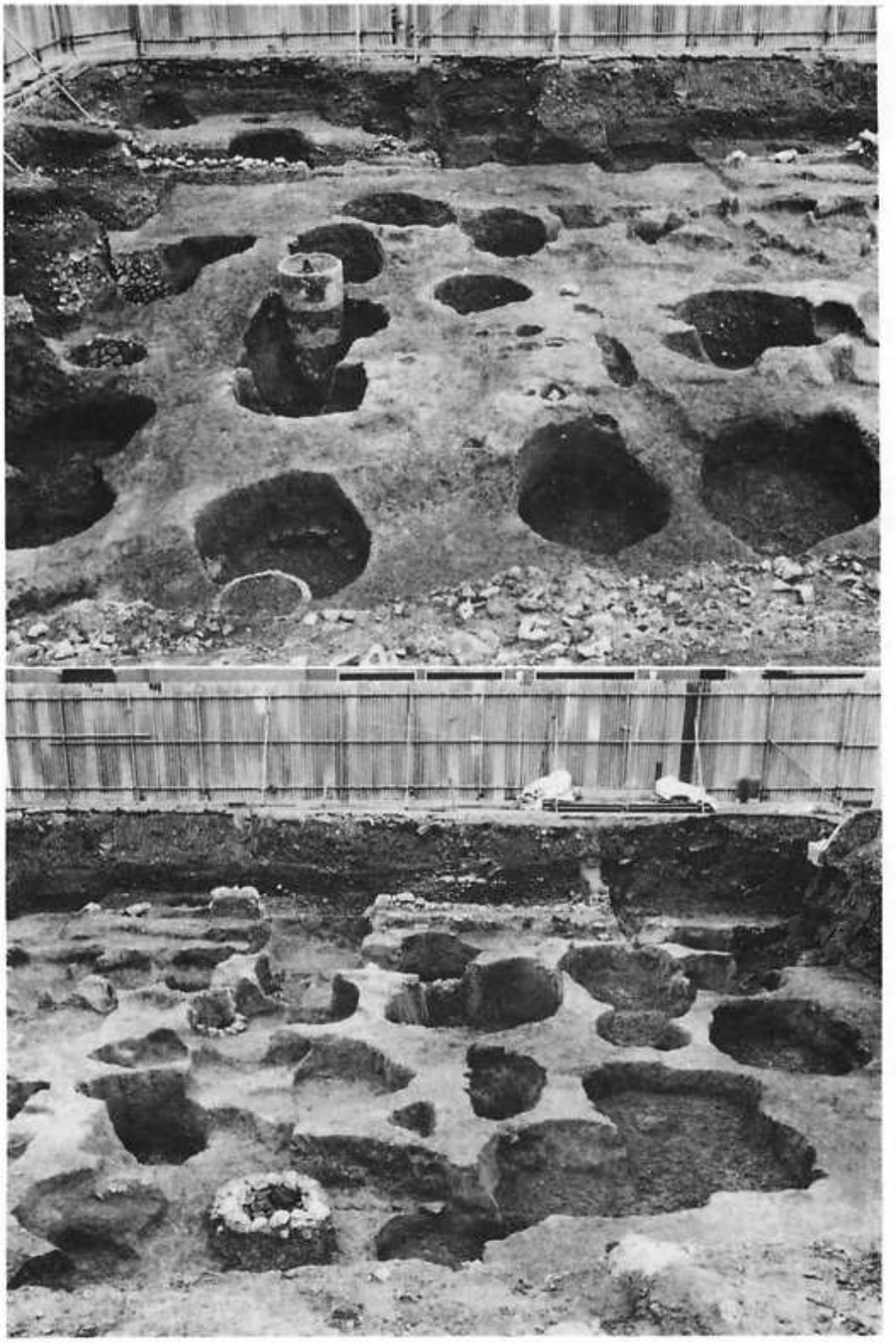
61) 貞享二年(1685)成立の『京羽二重』巻六および『京羽二重織留』巻六(いずれも『京都叢書』所収)。

図　　版

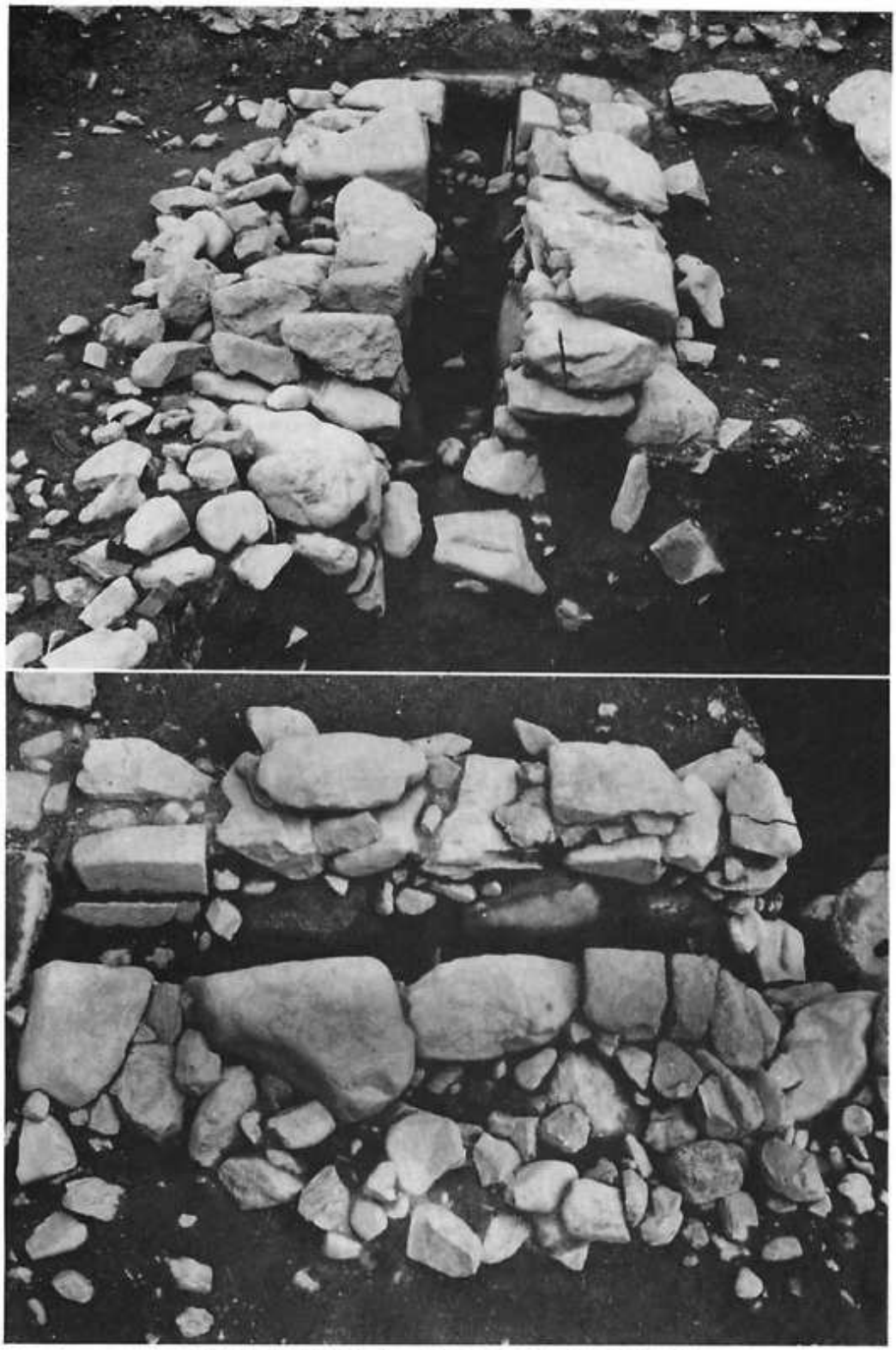


上左：発掘前状況(西より)，上右：南区北壁層位部分，下：北区完掘状況(西より)

図版第2

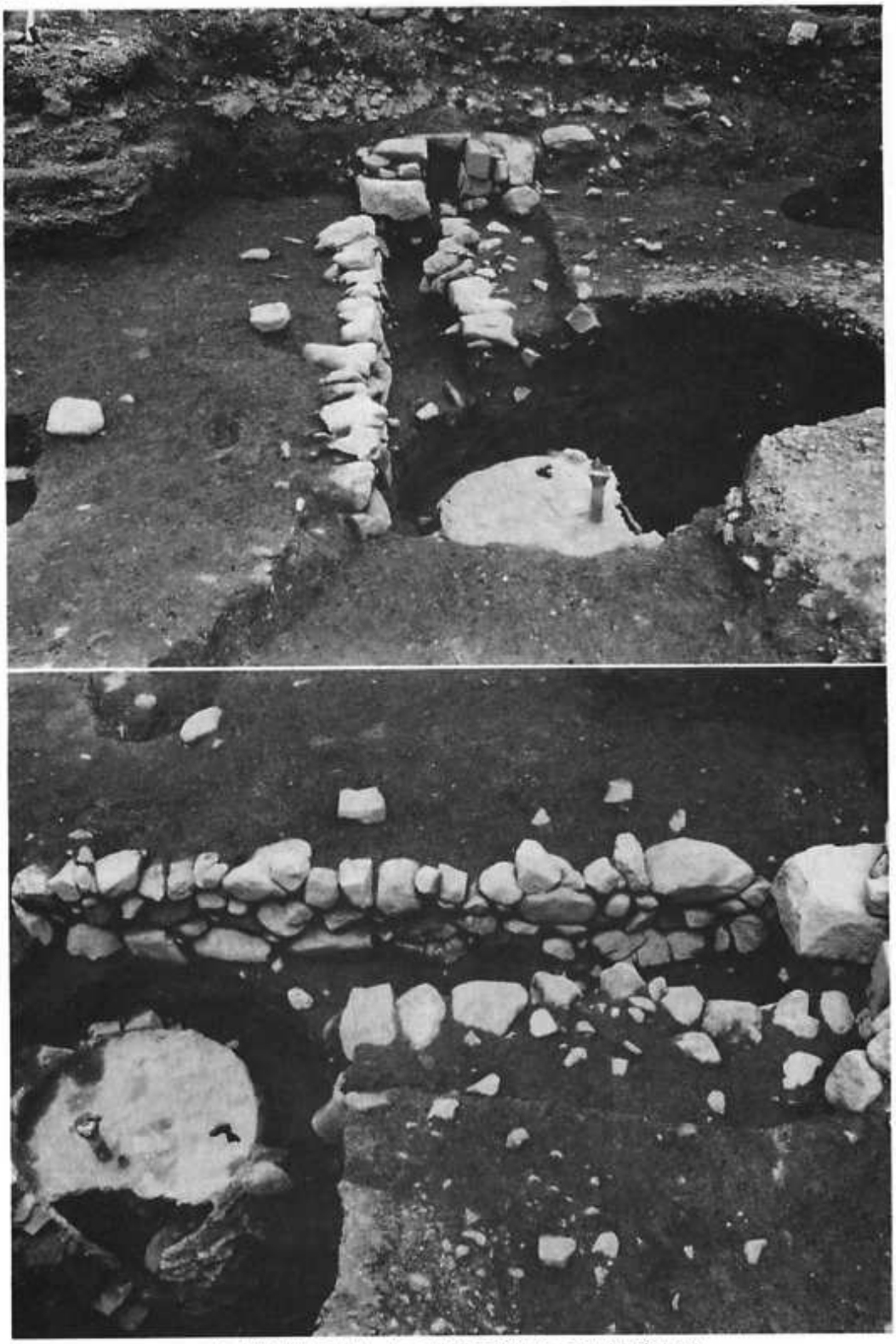


南区完掘状況　上：東半部，下：西半部

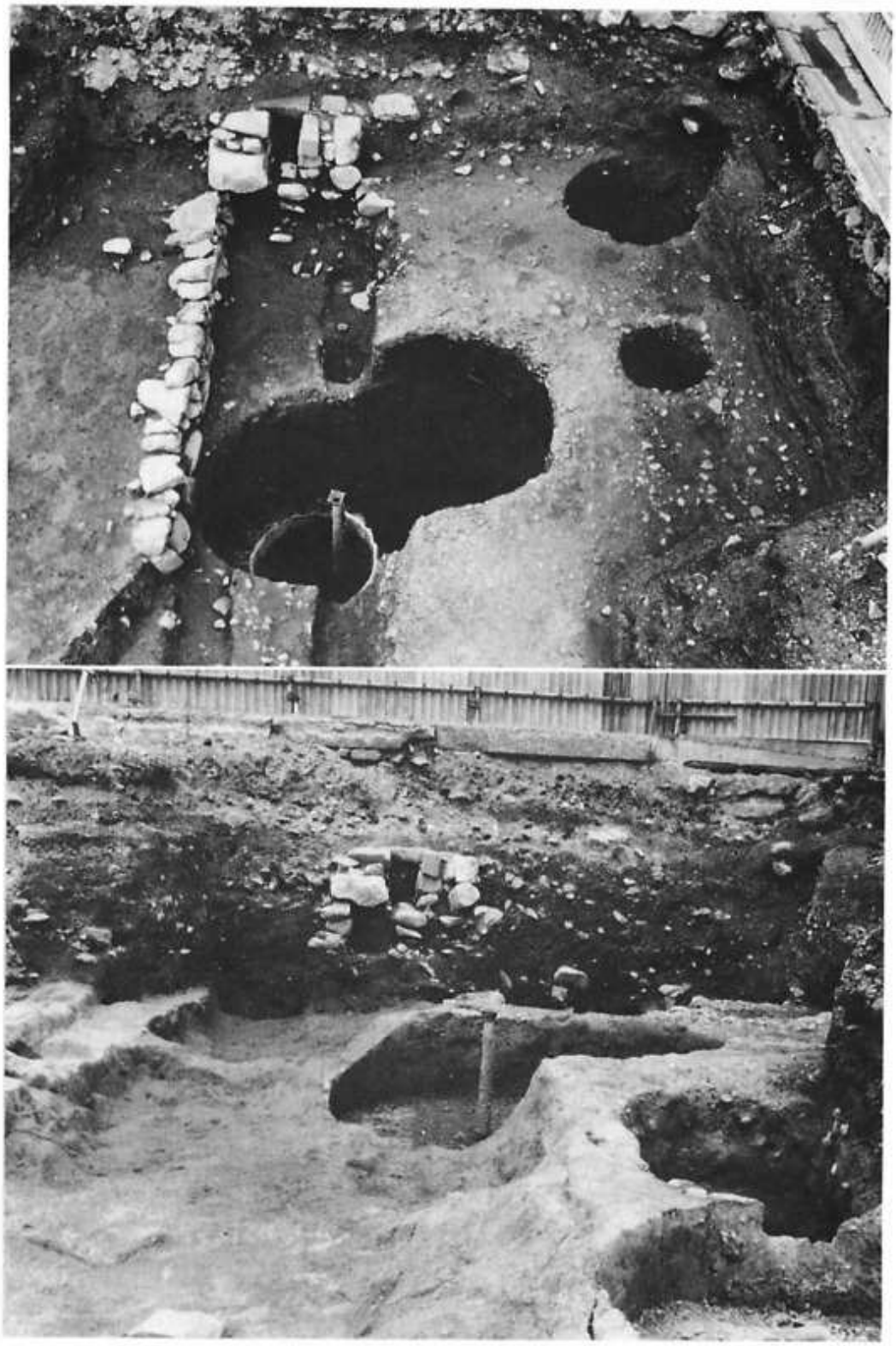


三条大路北側側溝(1)　上：溝東 I（西より），下：同（北より）

図版第4



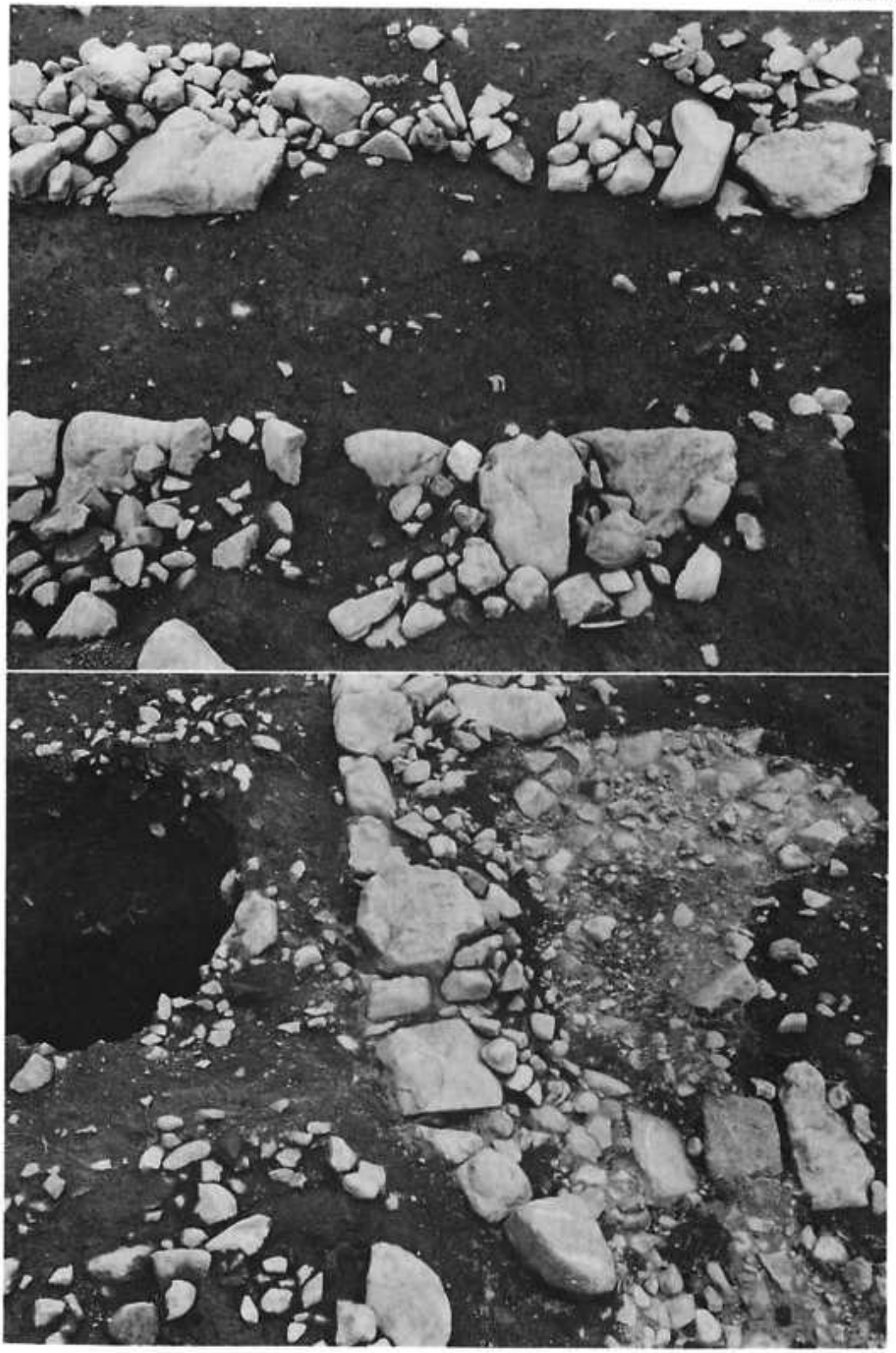
三条大路北側側溝(2)　上：溝東Ⅱ(西より)，下：同(南より)



三条大路北側側溝(3)　上：溝東Ⅱ改築前と三条大路路面(西より)，
下：溝東Ⅰ・Ⅱ，溝Ⅳの重複関係(西より)

図版第 6

三条大路北側側溝(4)　溝西 I（西より）



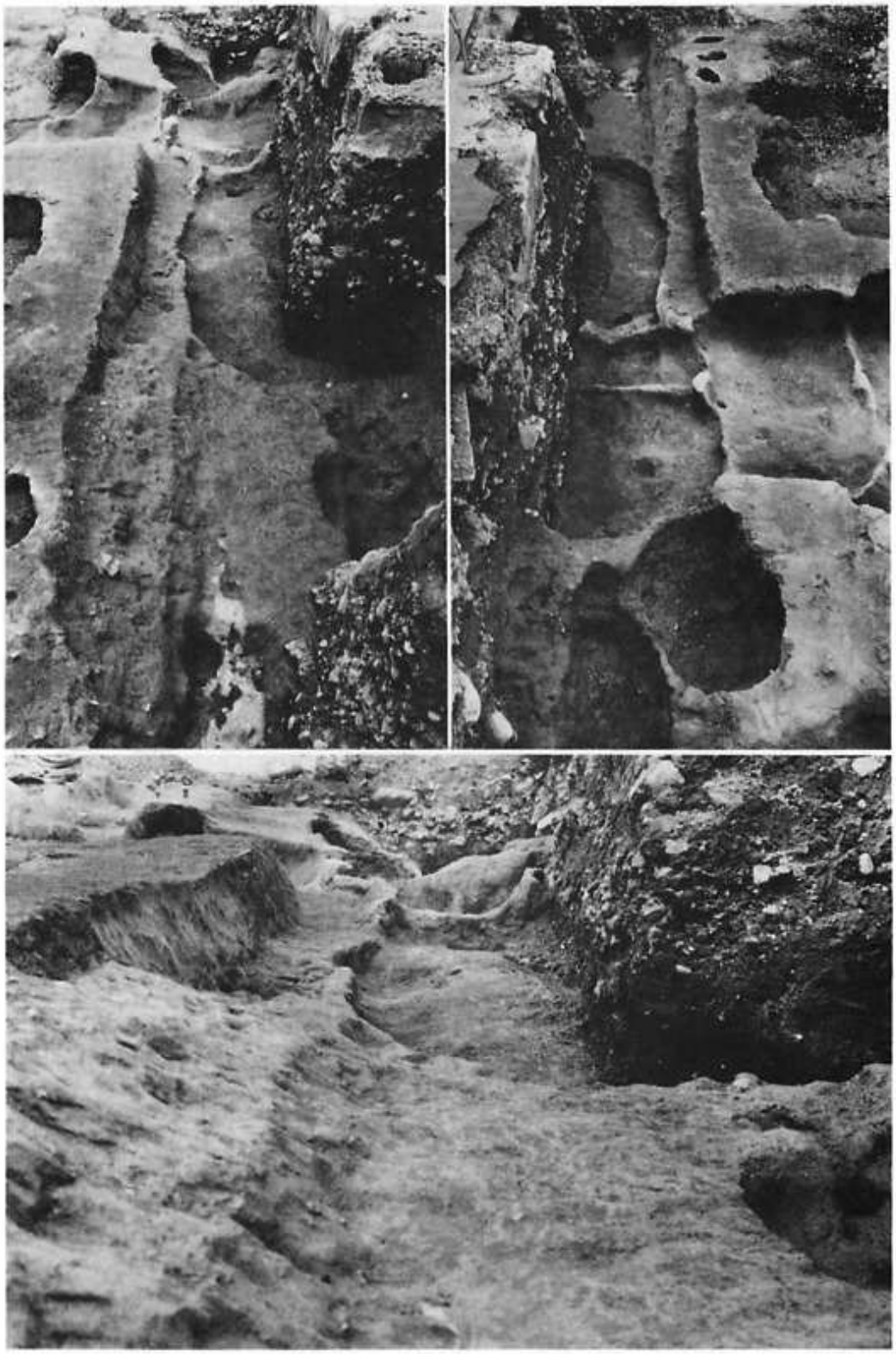
三条大路北側側溝(5)　上：溝西 I 部分(D 6，南より)，
下：　同　(C 6，東より)

図版第 8

三条大路北側側溝(6)　溝西Ⅱ(東より)

三条大路北側側溝(7)　上：溝西Ⅱ部分（Ｄ６，南より），
下：　同　（東より）

図版第10

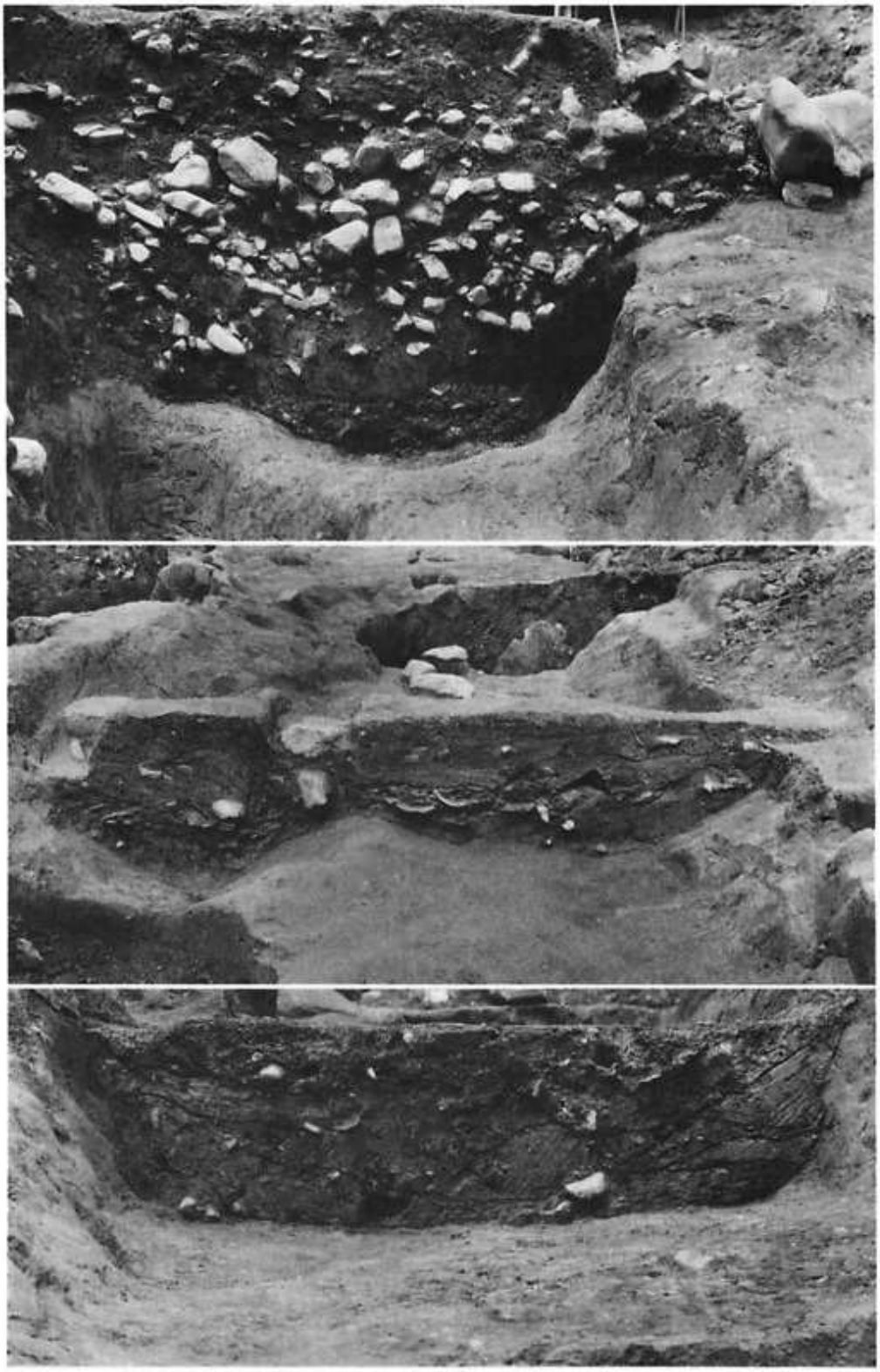


三条大路北側側溝(8)　上左：溝Ⅲ(E・F６，西より)，
上右：同(東より)，下：同(西より)

三条大路北側側溝(9)　溝Ⅲ・Ⅳ(東より)

図版第12

三条大路北側側溝90　溝Ⅲ・Ⅳ(西より)

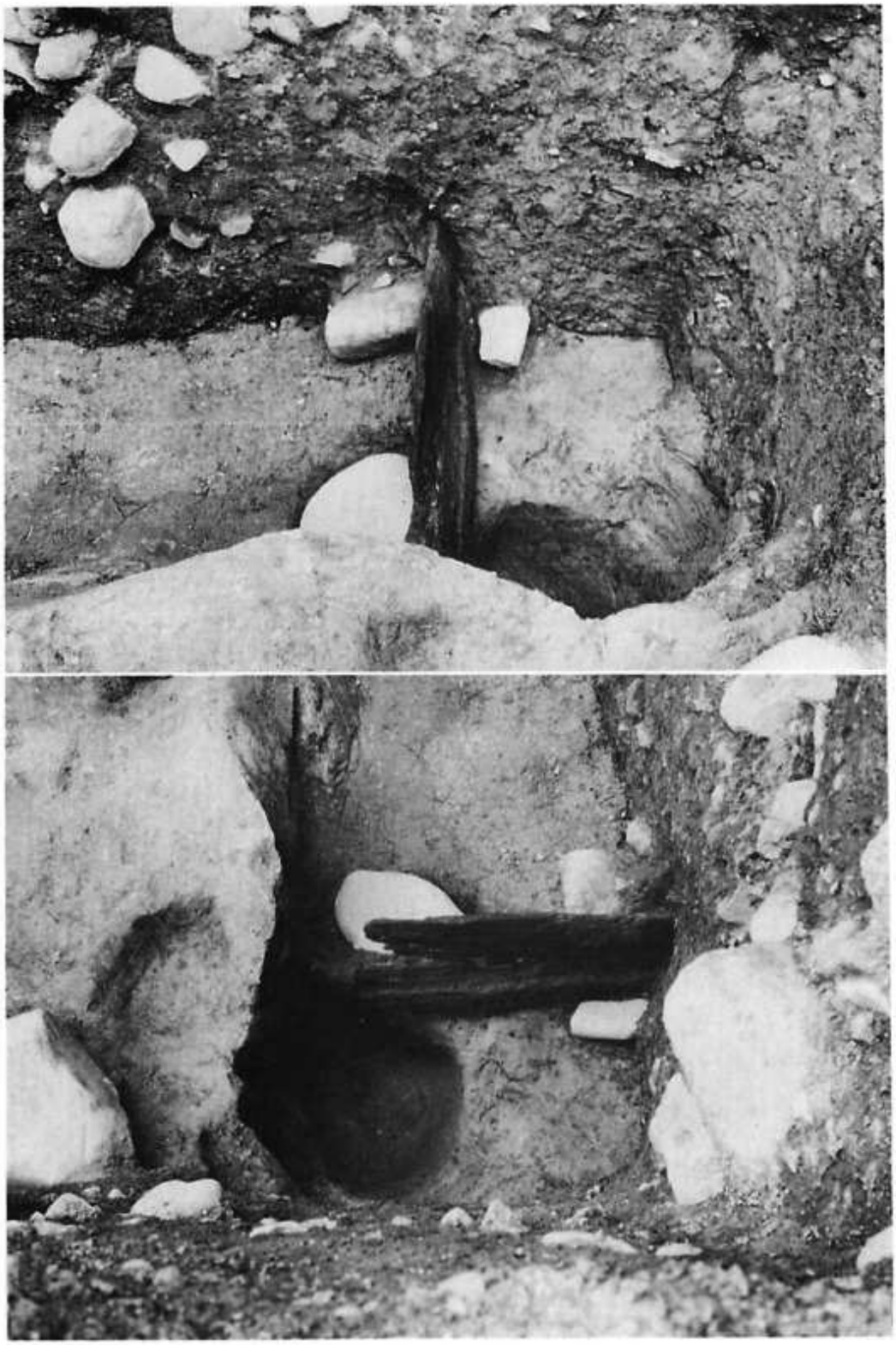


三条大路北側側溝(1) 上：溝Ⅱ・Ⅲ断面(D6，東より)，
中：溝Ⅳ断面(B6，東より)，下：同(D6，東より)

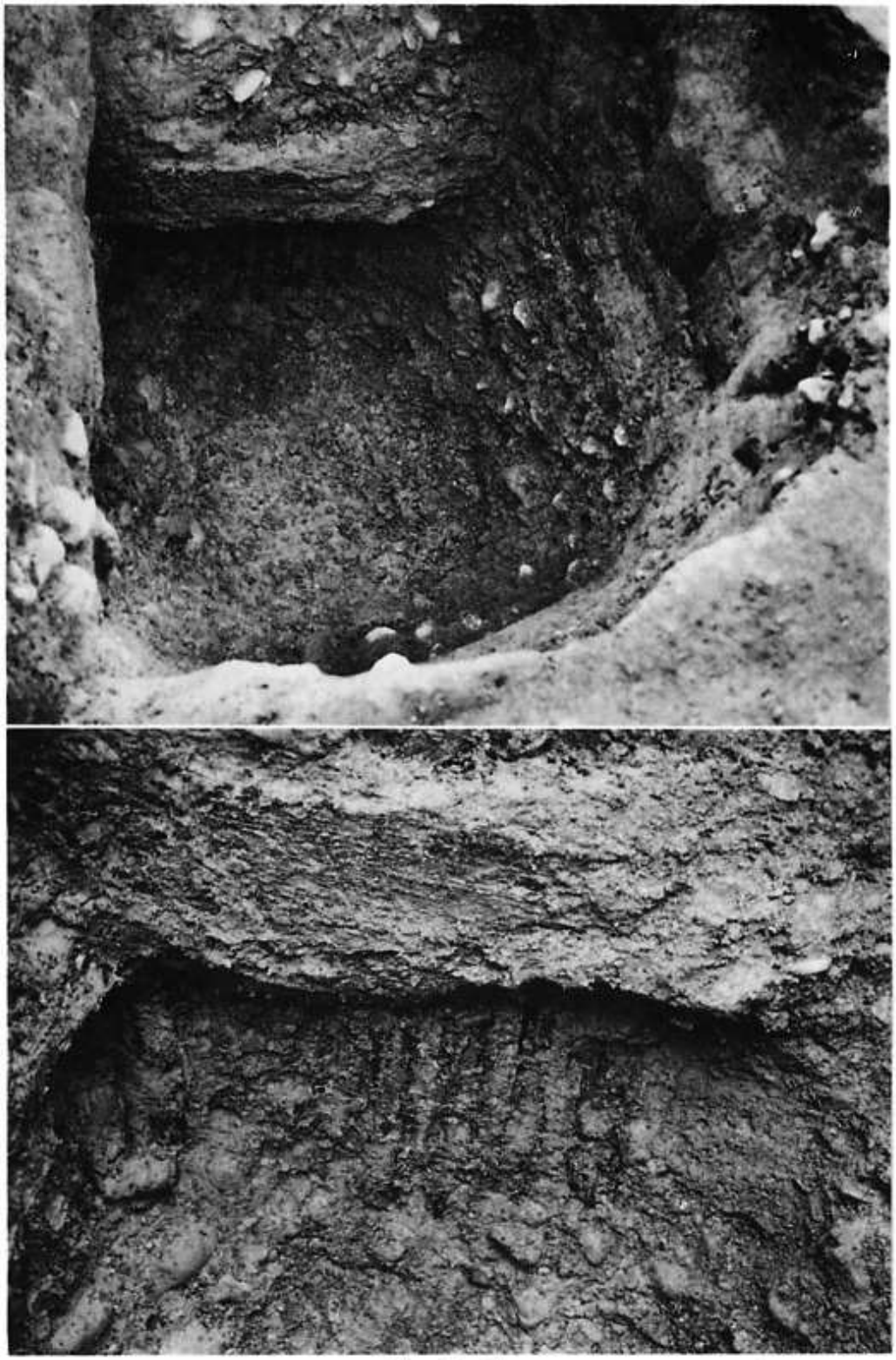
三条大路北側側溝 動物骨，編物出土状況
上右：溝ⅢA，上左・下右：溝ⅢB，下左：溝Ⅳ

烏丸小路西側側溝(南より)

図版第16

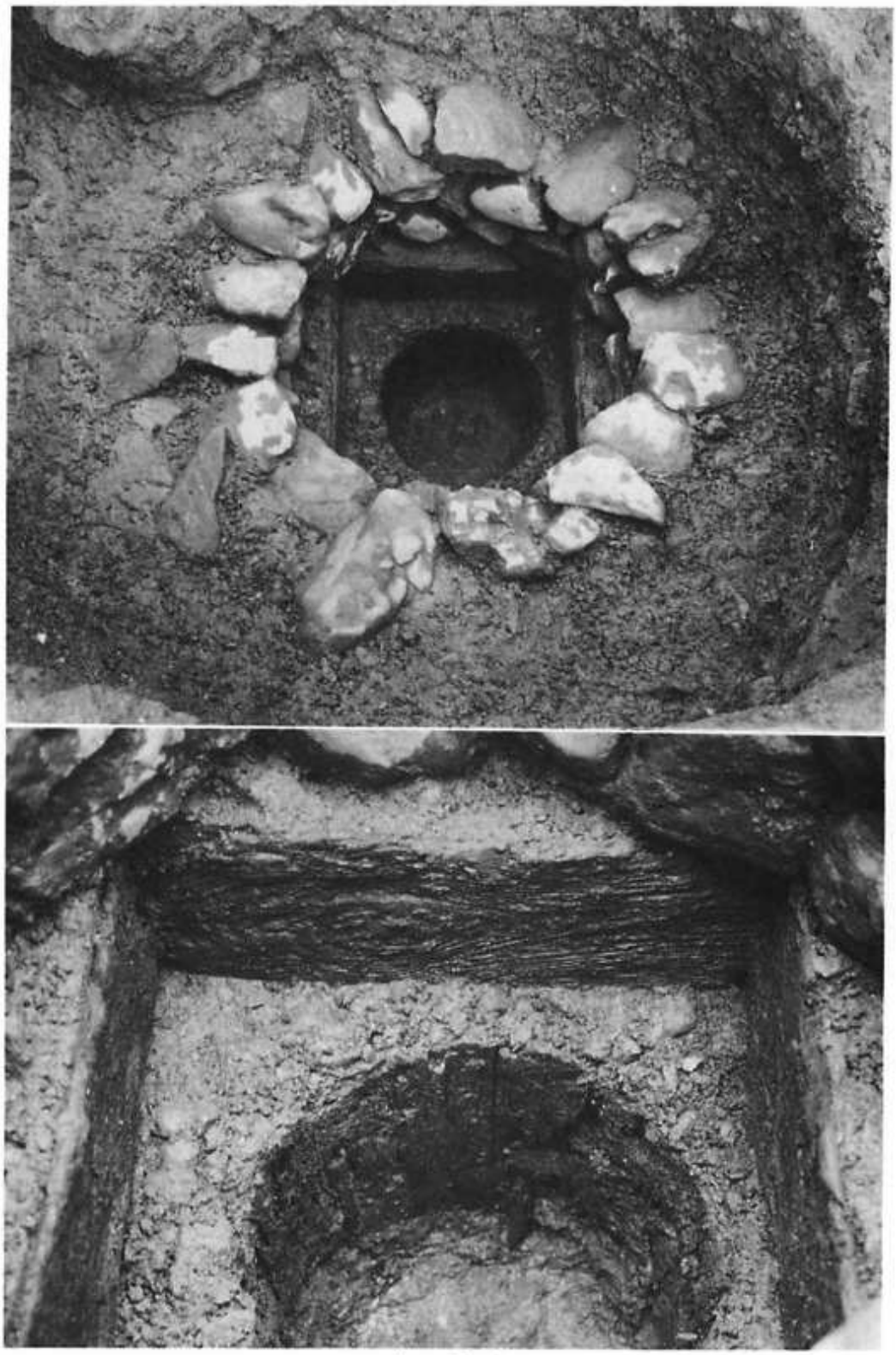


烏丸小路西側側溝堰　上：西より，下：南より

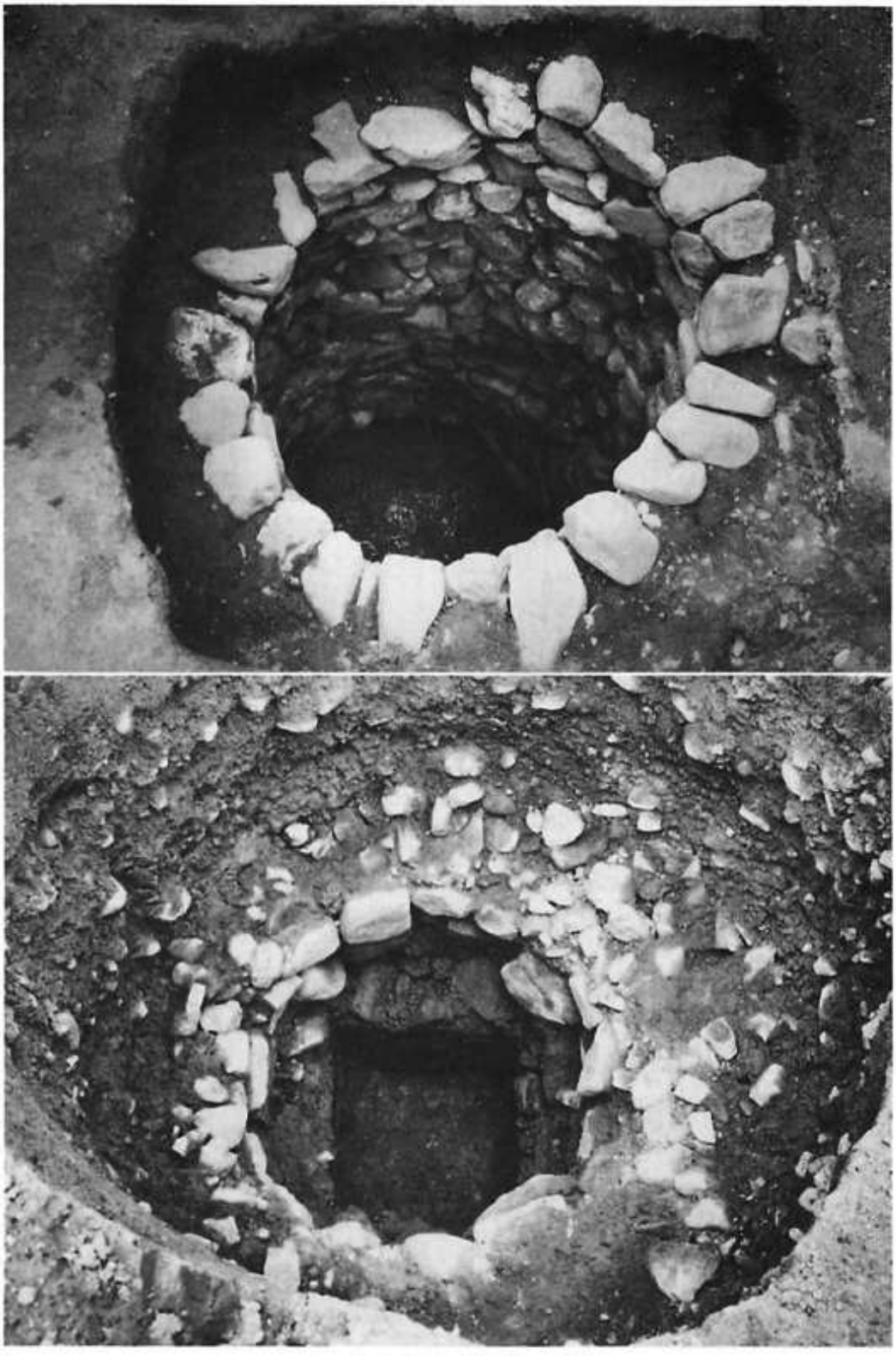


井　戸 34

図版第18

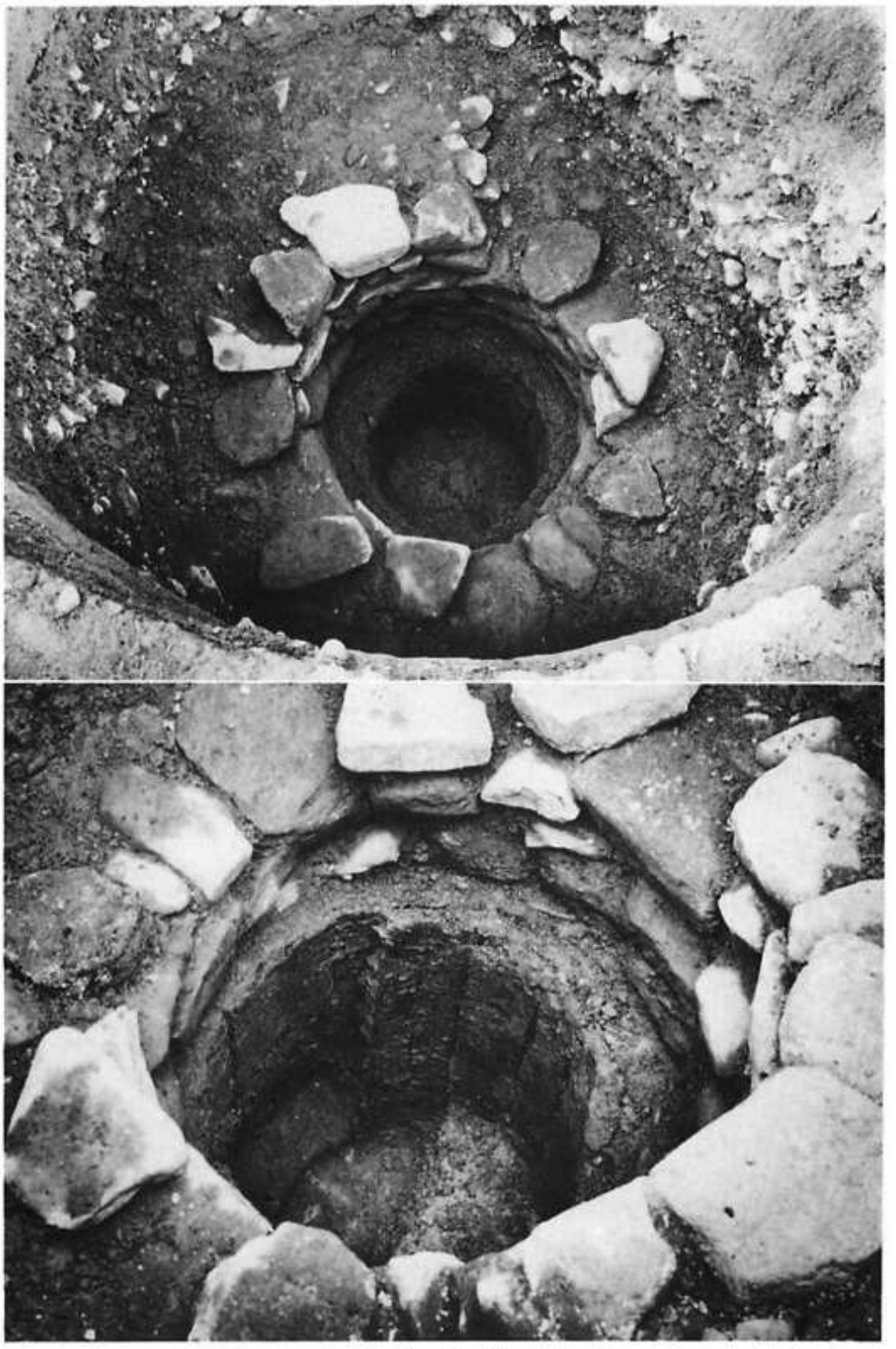


井　戸 40

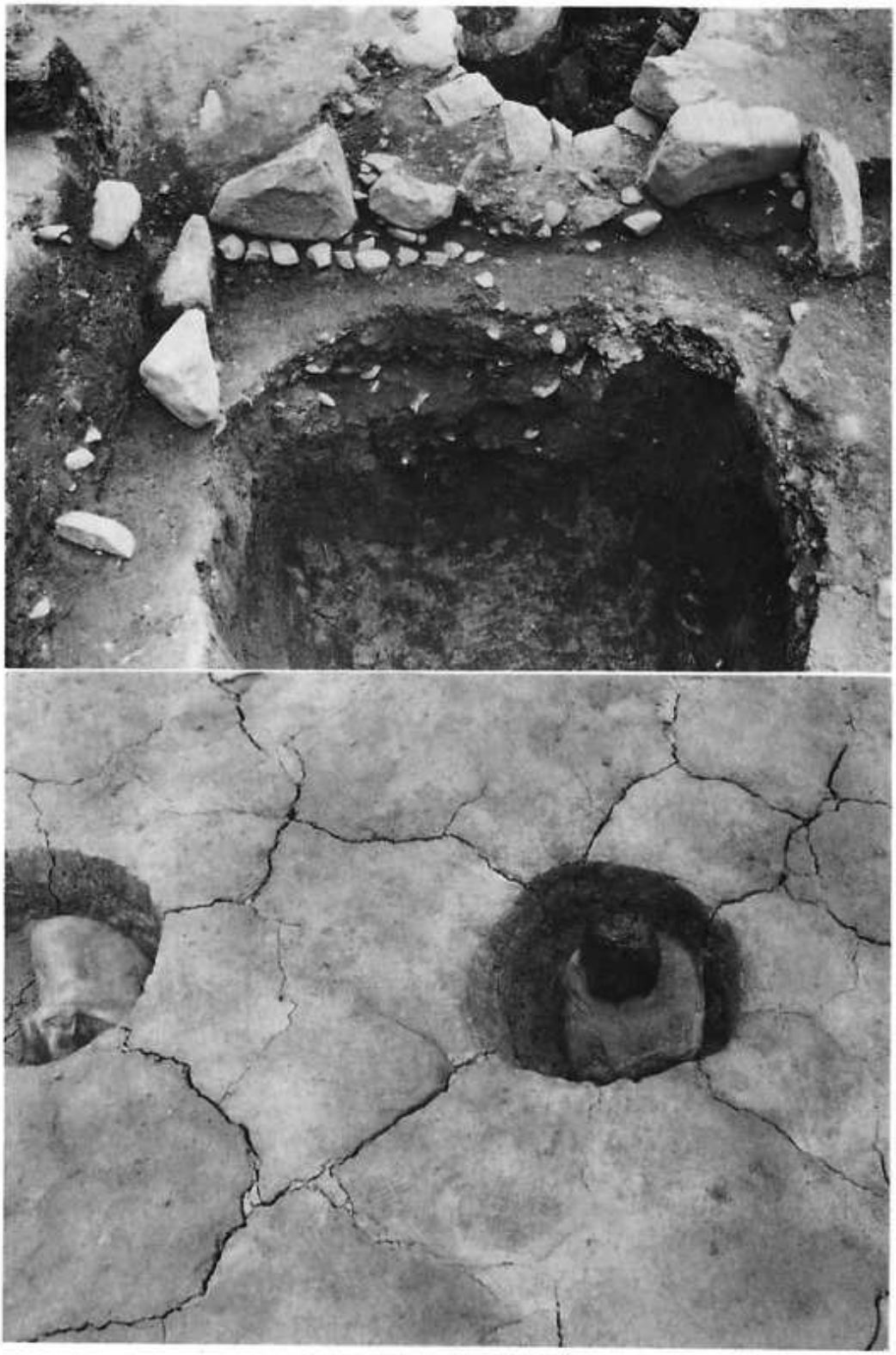


上：井　戸　42，下：井　戸　20

図版第20



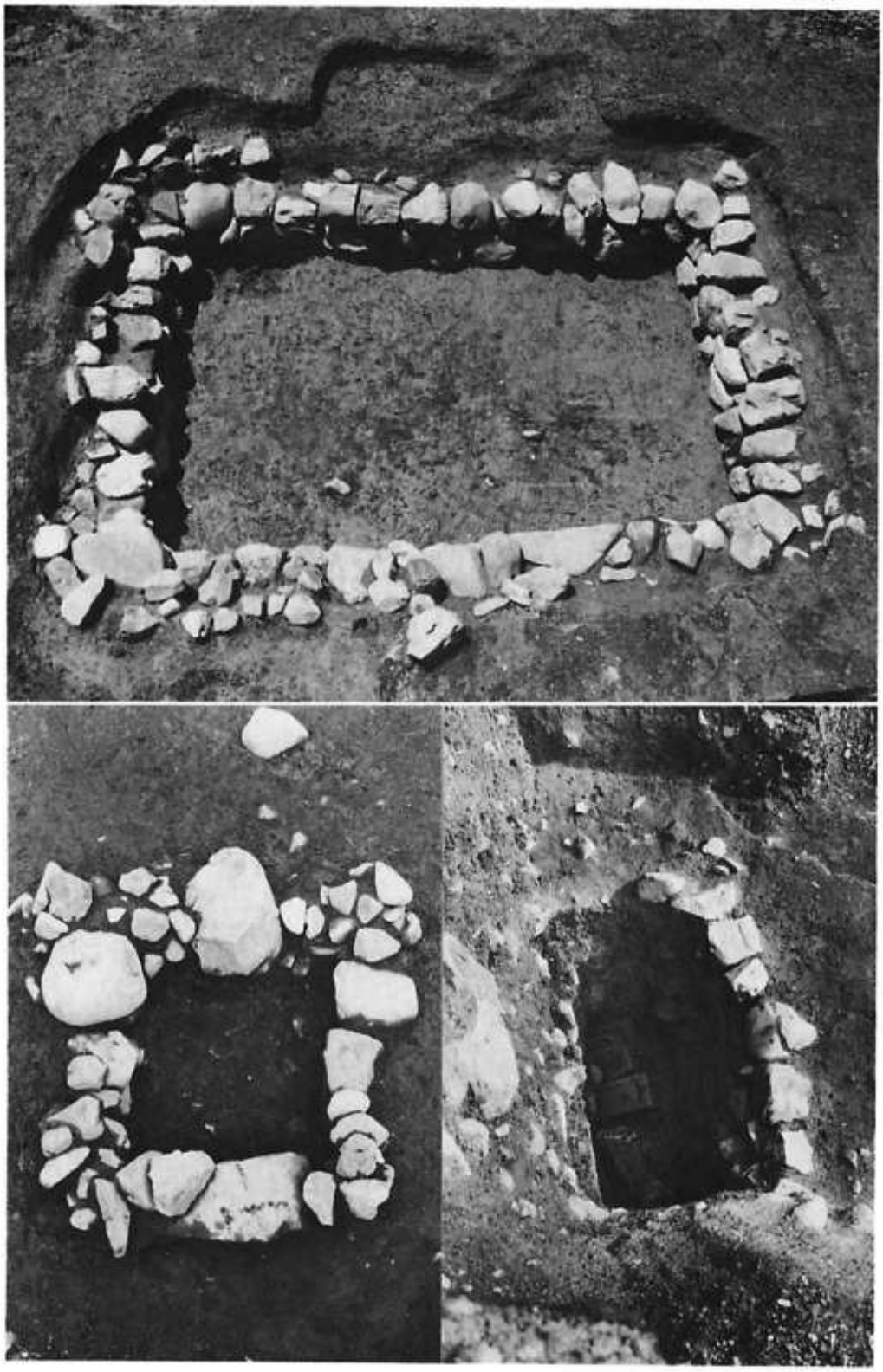
井　戸 50



上：B４土壙１，下：柱穴列部分

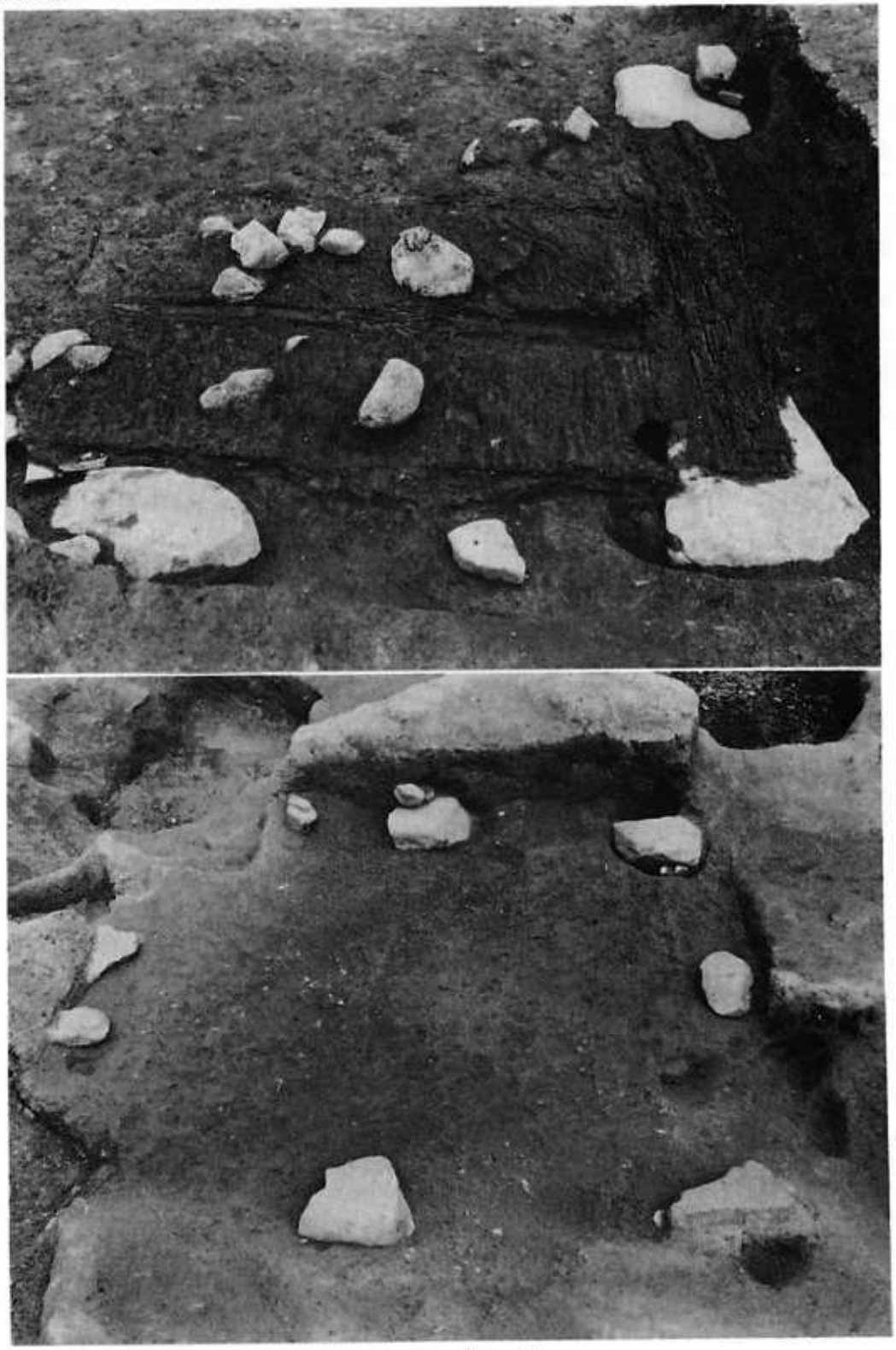
図版第22

B5 ム ,ロ 上：北より，下：北壁部分

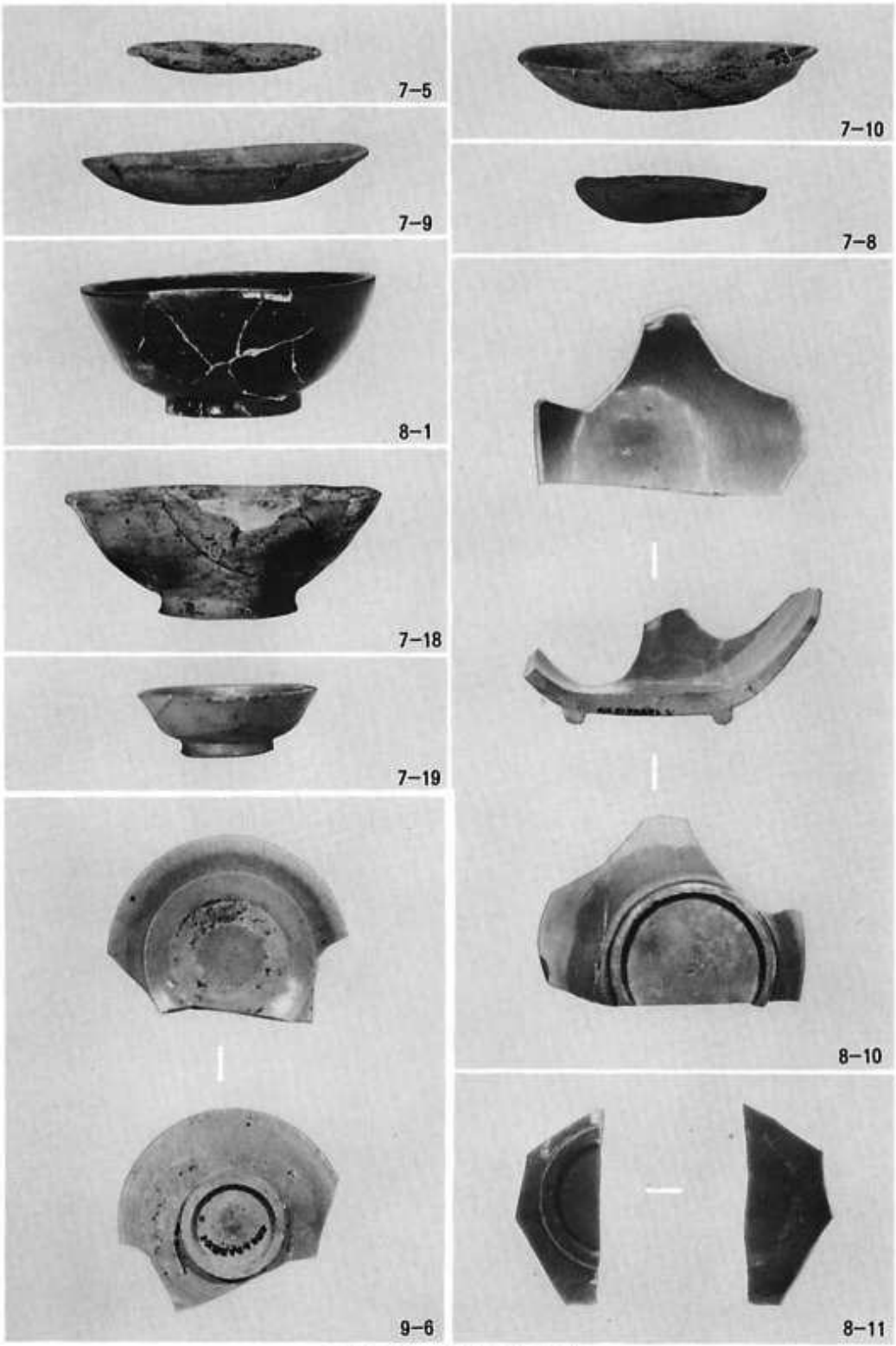


上：C３石組遺構，下左：C５石組遺構１，
下右：A５石組遺構

図版第24

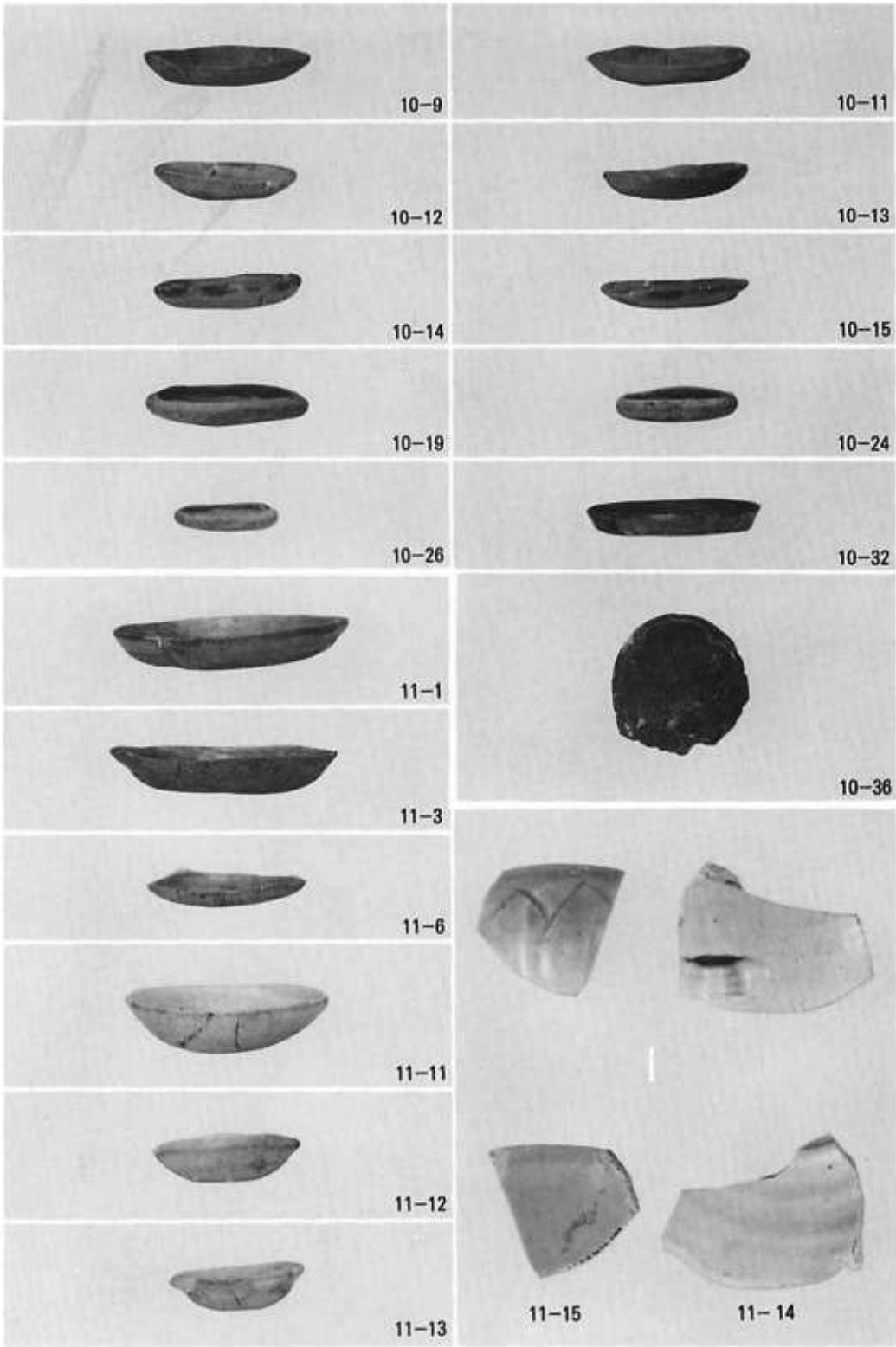


B3 建　物　址

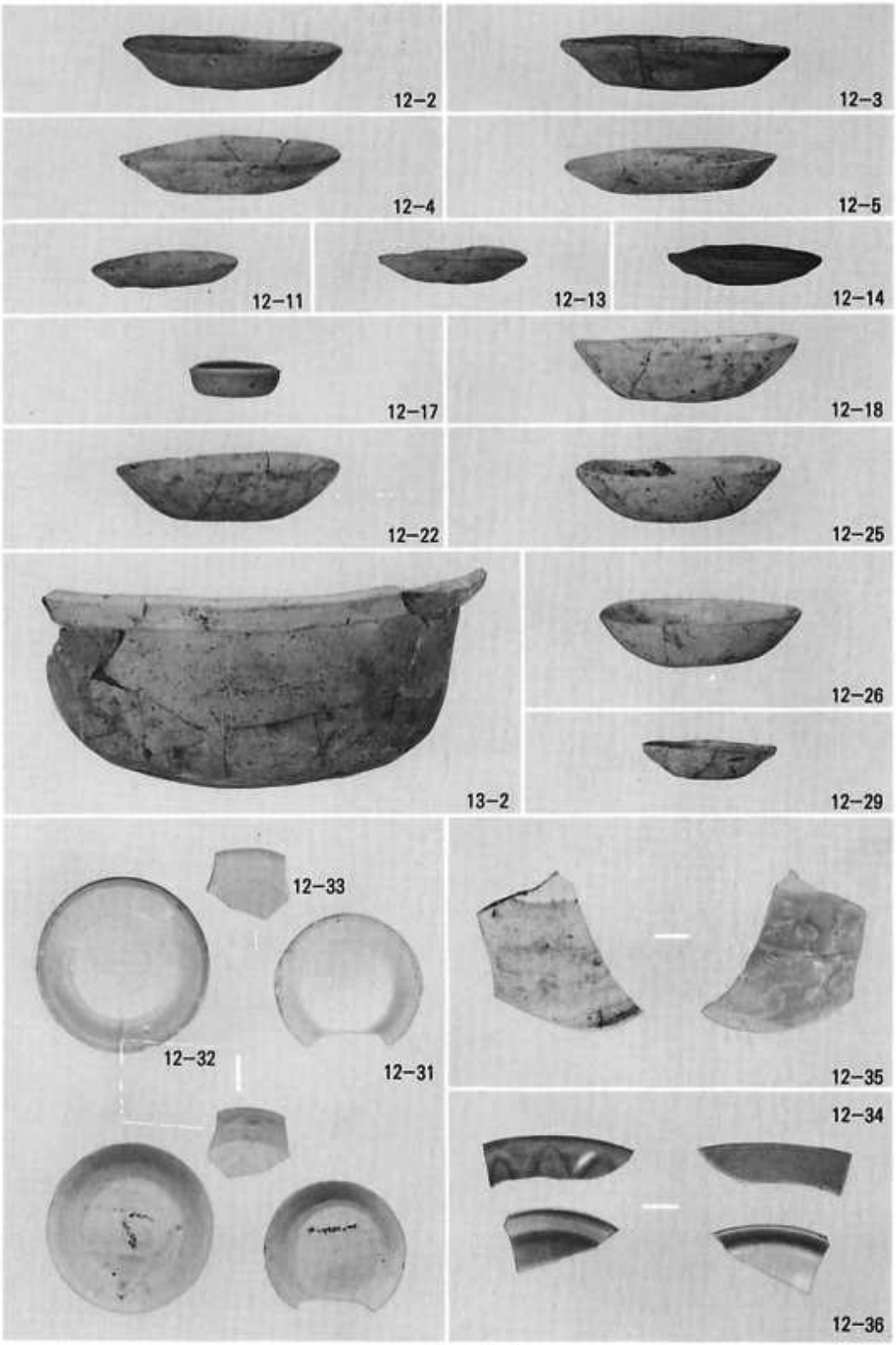


灰色粘質土・灰緑砂2出土遺物

図版第26

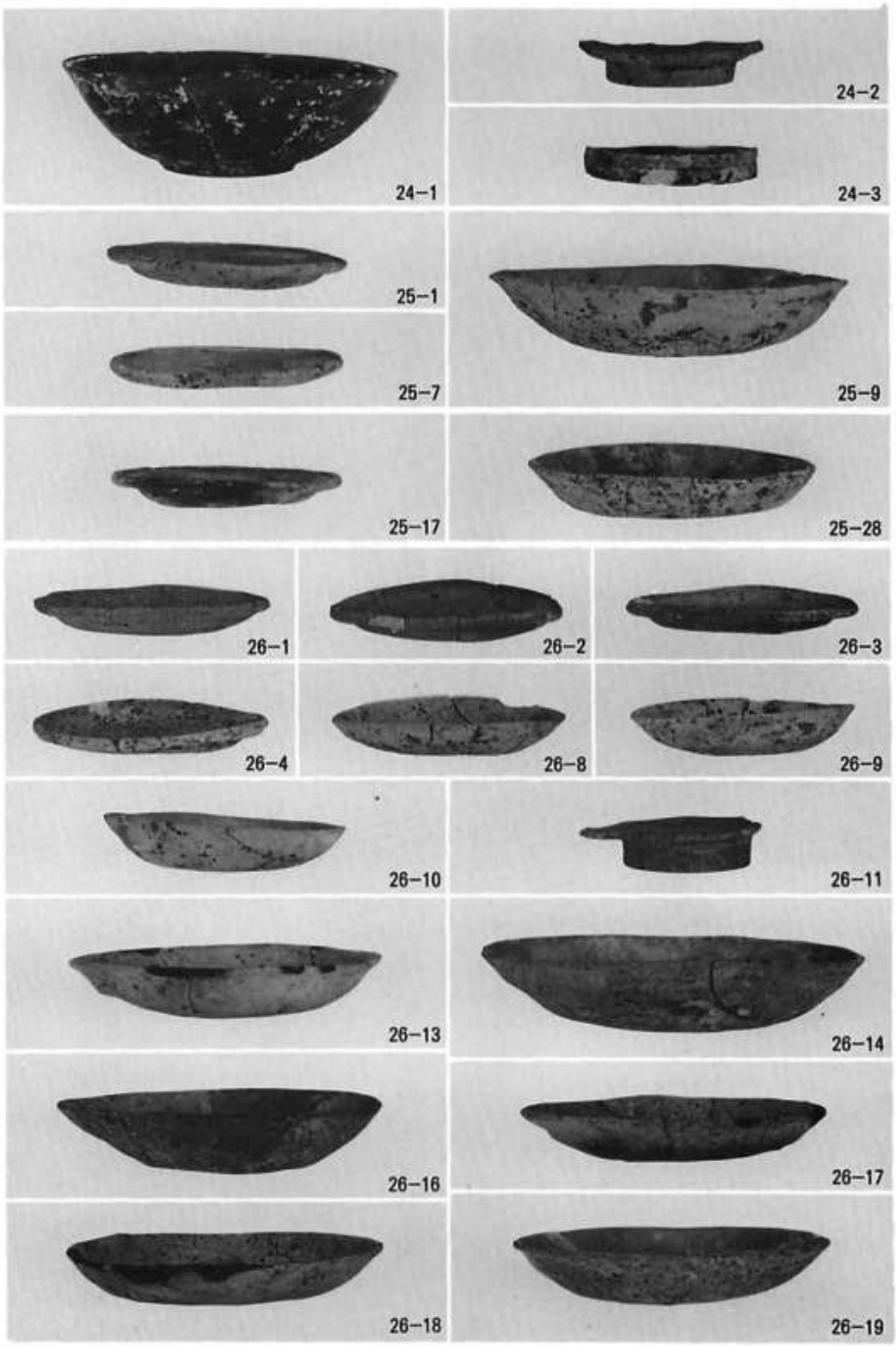


暗灰色土２・１出土遺物

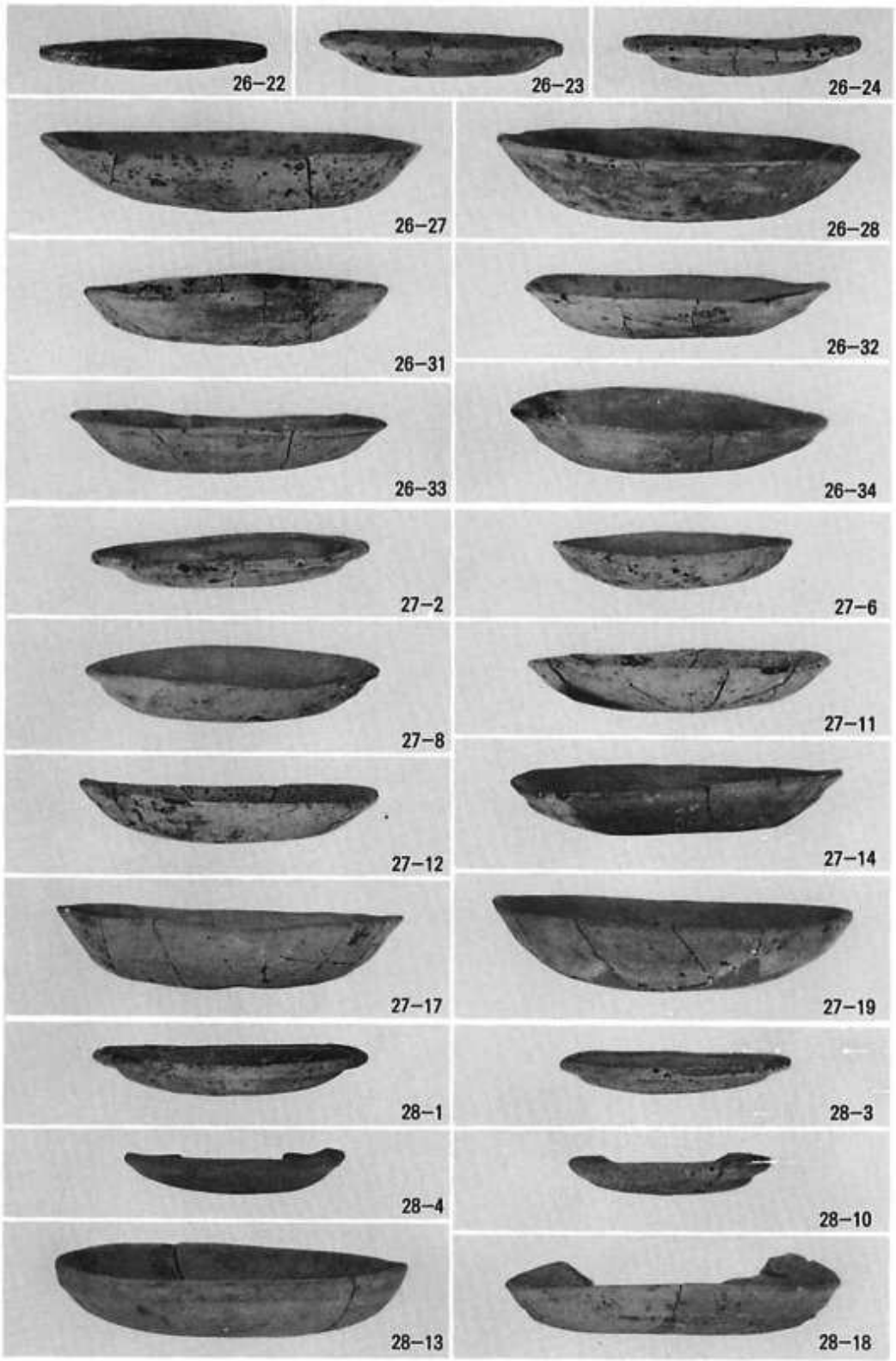

12−2
12−3
12−4
12−5
12−11
12−13
12−14
12−17
12−18
12−22
12−25
13−2
12−26
12−29
12−33
12−32
12−31
12−35
12−34
12−36

灰黒色土出土遺物

図版第28

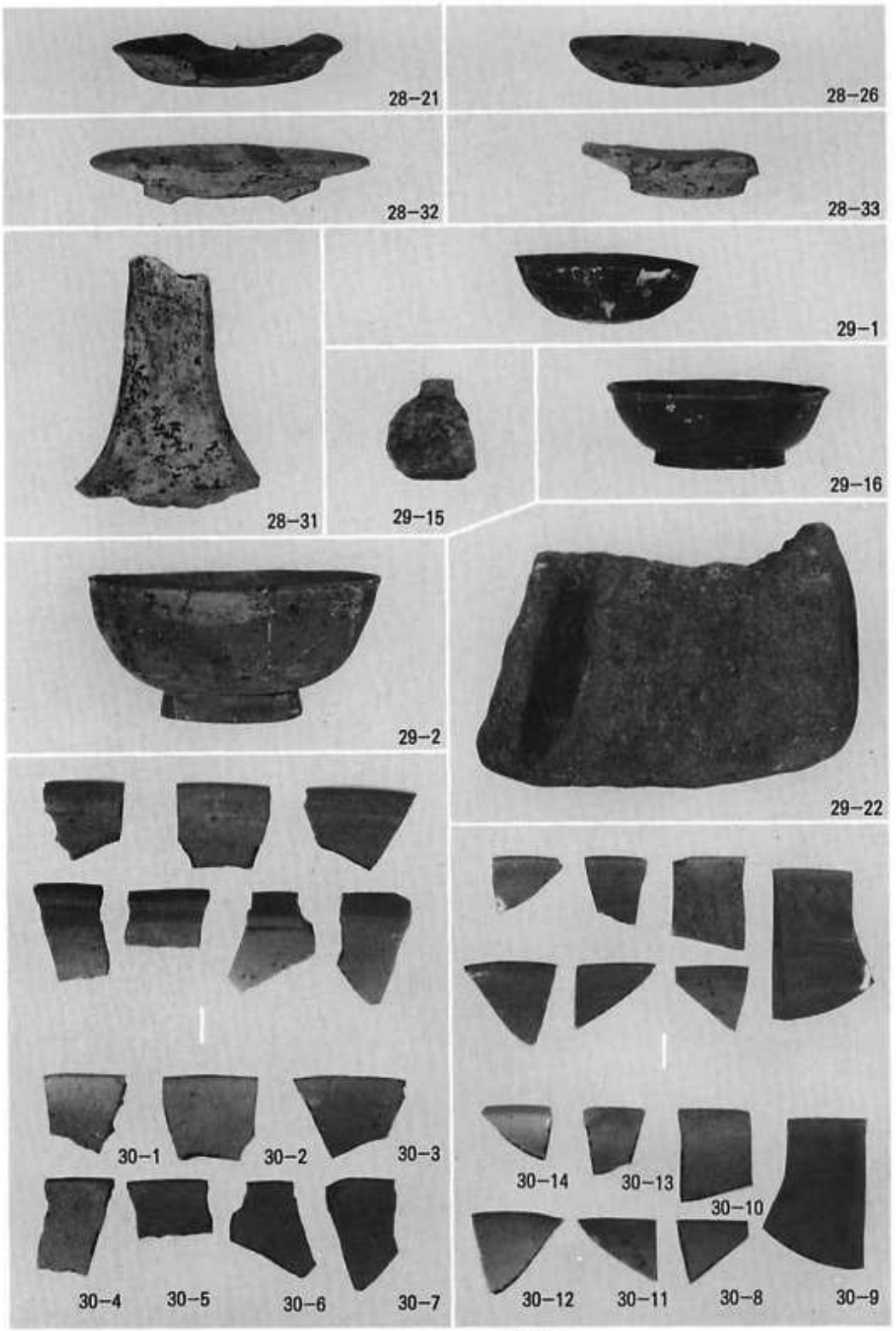


三条大路側溝Ⅳ出土遺物(1)

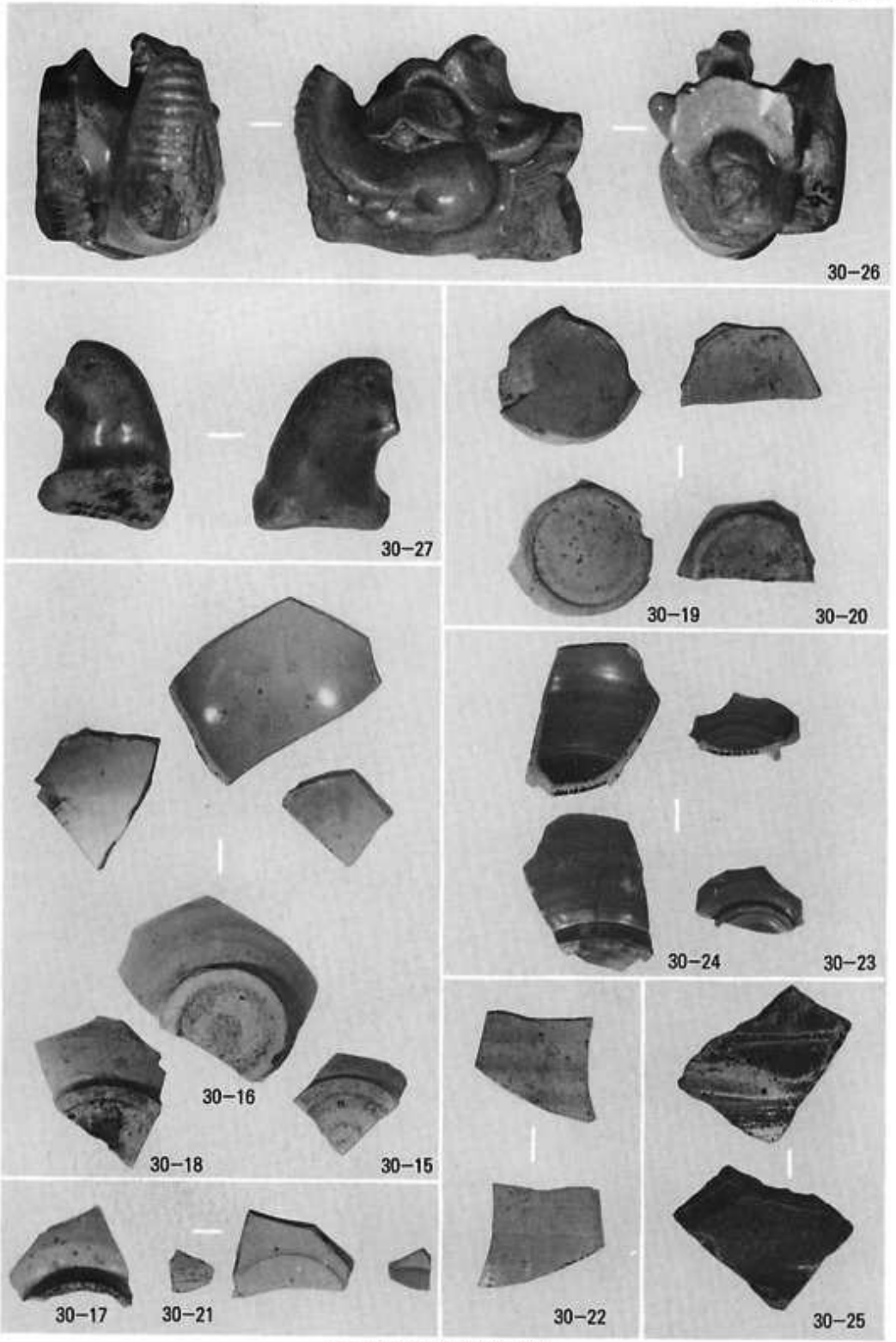


三条大路側溝Ⅳ出土遺物(2)

図版第30

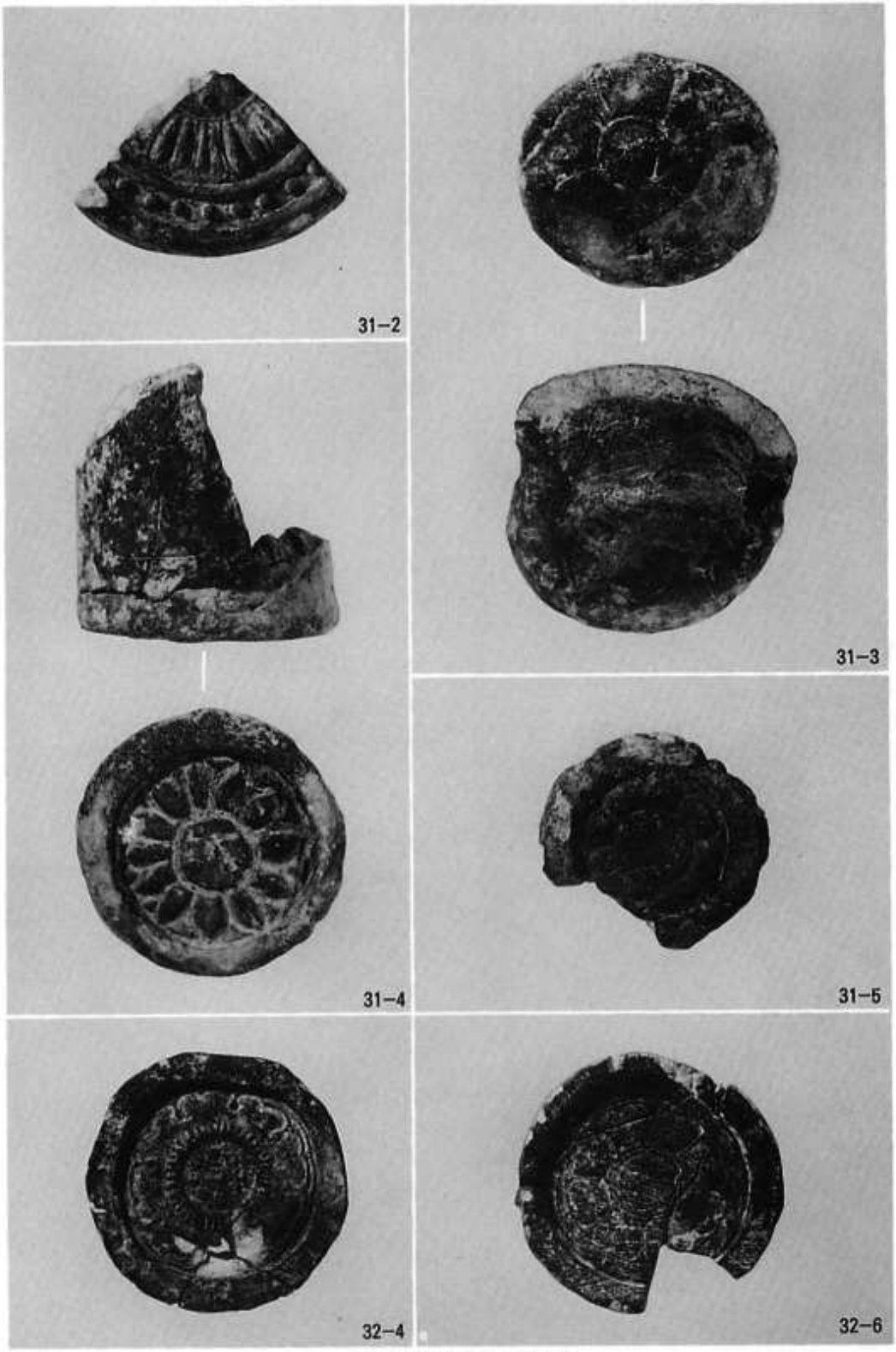


三条大路側溝Ⅳ出土遺物(3)

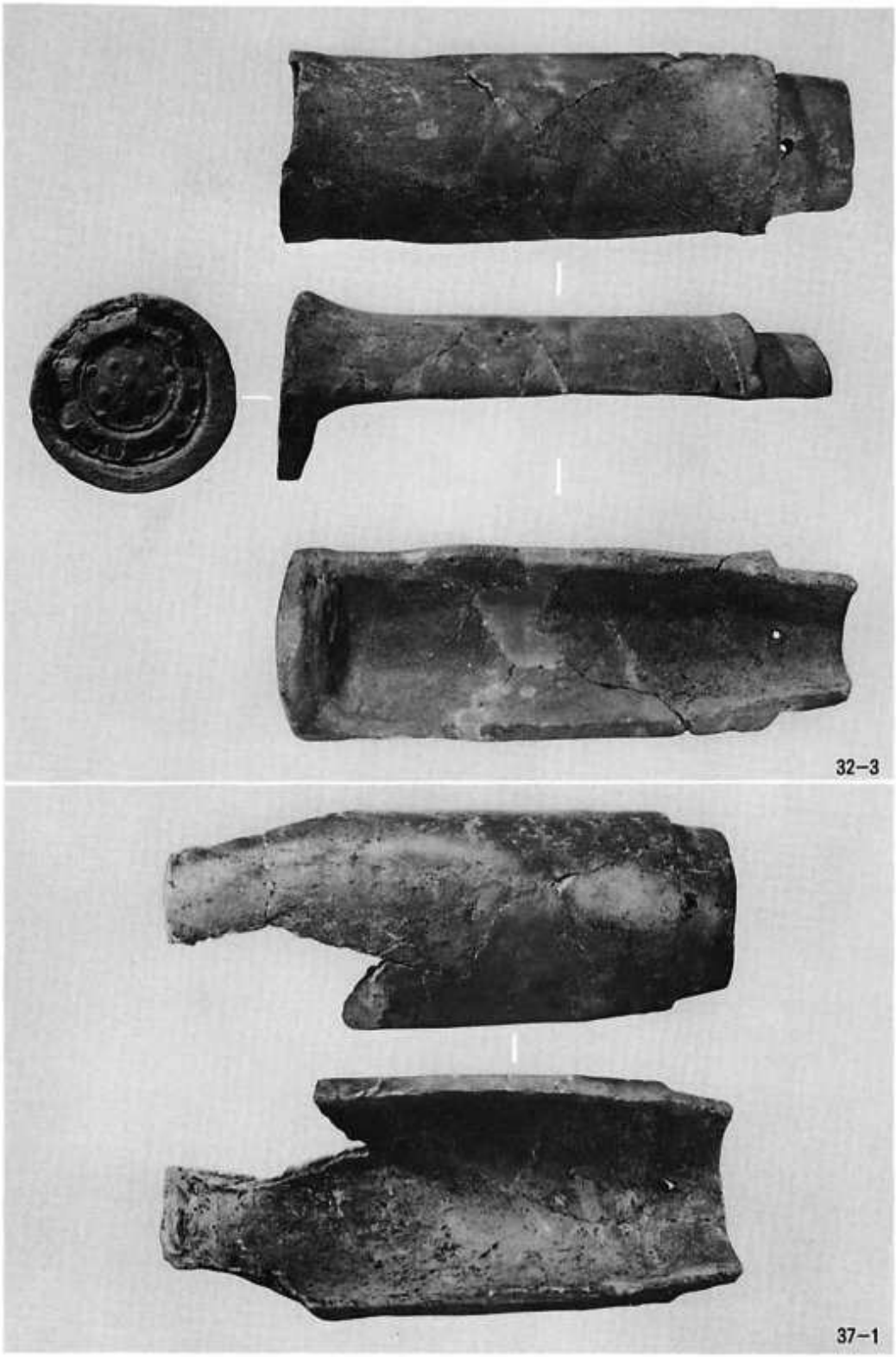


三条大路側溝Ⅳ出土遺物(4)

図版第32

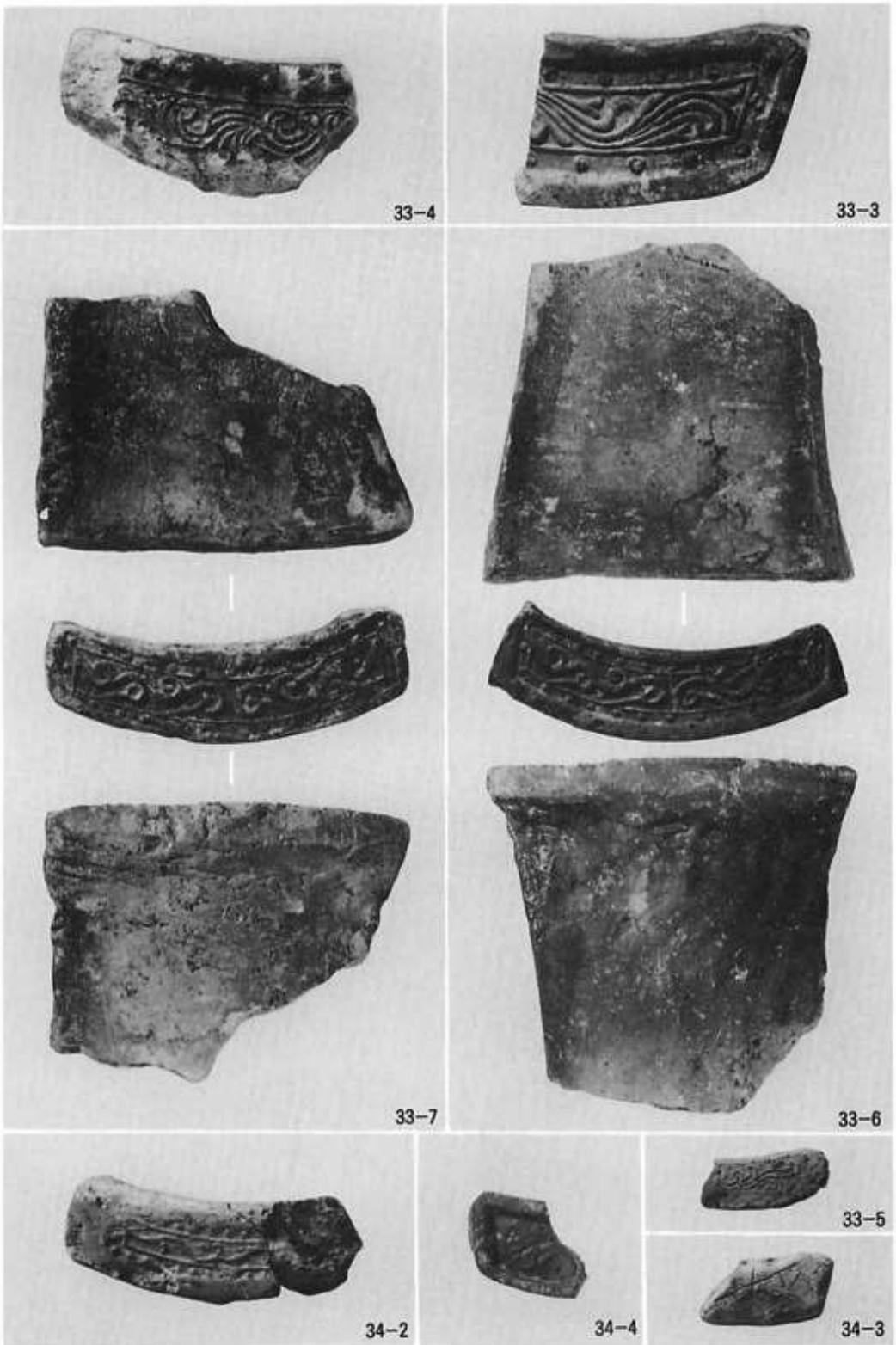


三条大路側溝Ⅳ出土遺物(5)

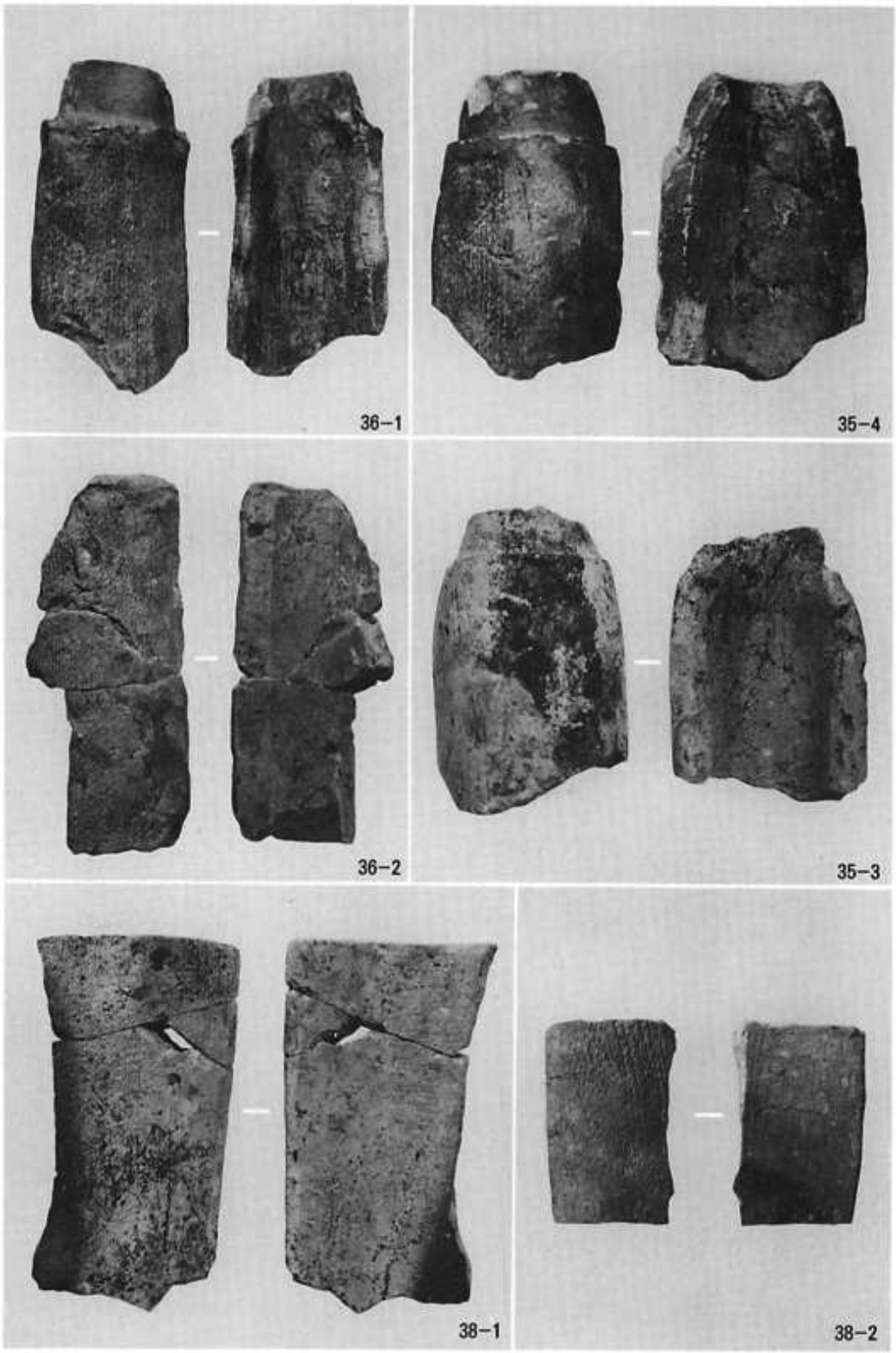


三条大路側溝Ⅳ出土遺物(6)

図版第34

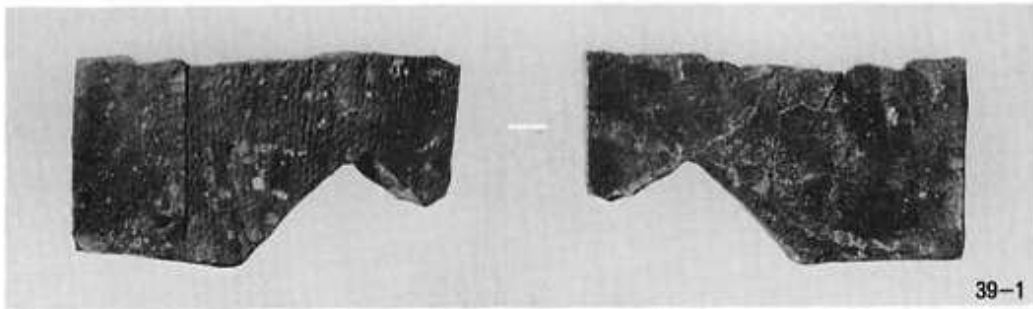


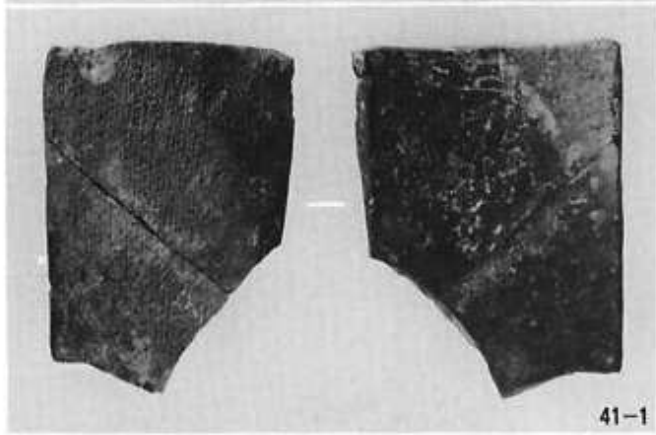
三条大路側溝Ⅳ出土遺物(7)

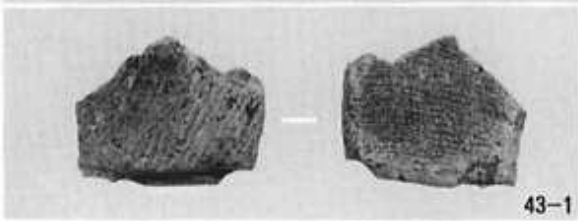


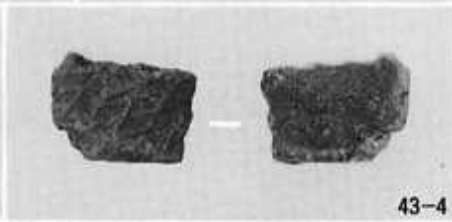
三条大路側溝Ⅳ出土遺物(8)

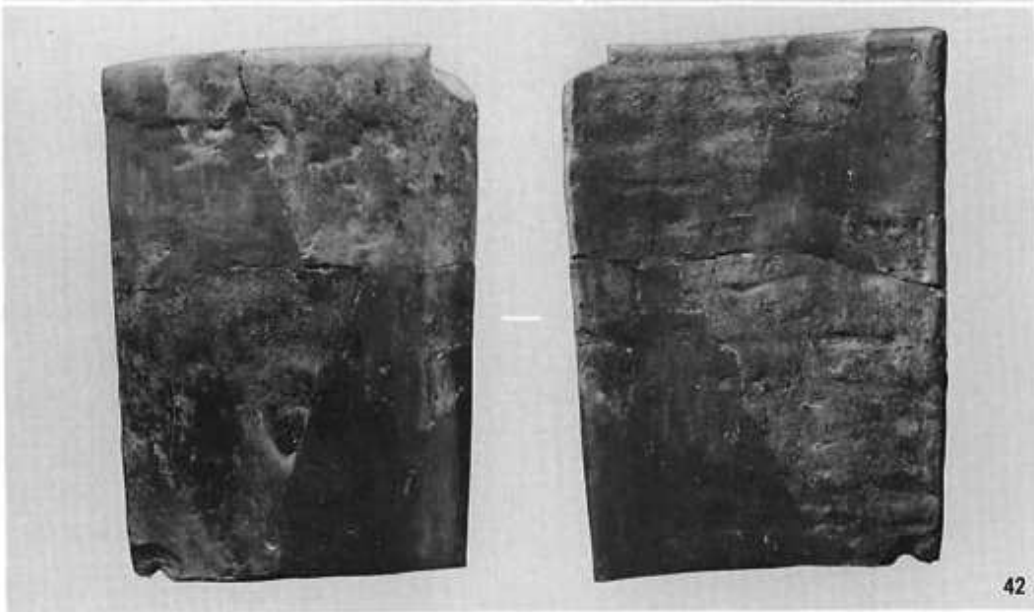
図版第36



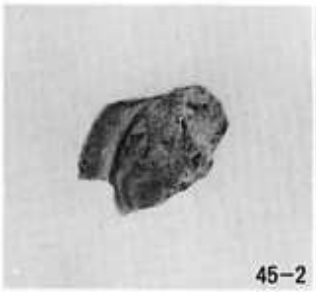


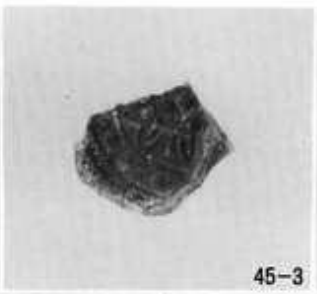






三条大路側溝Ⅳ出土遺物(9)

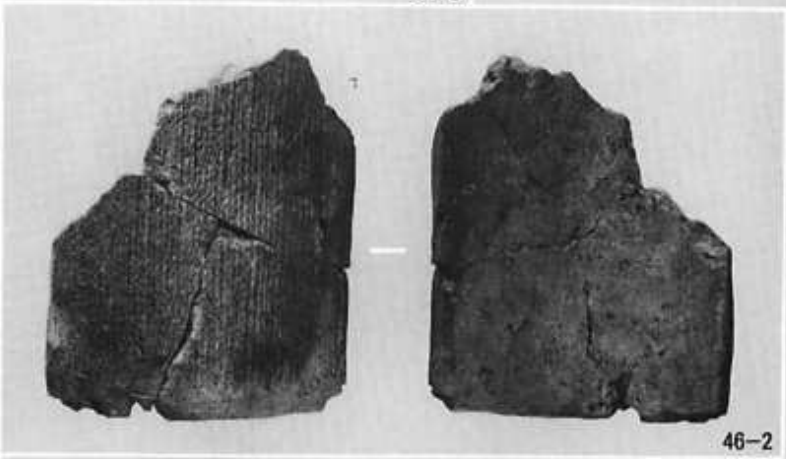

45−2


45−3

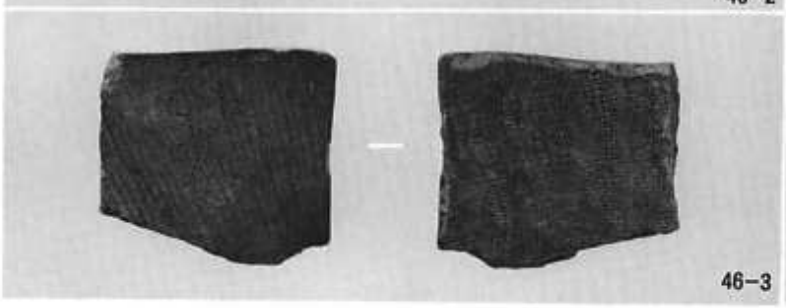
45−4

45−5

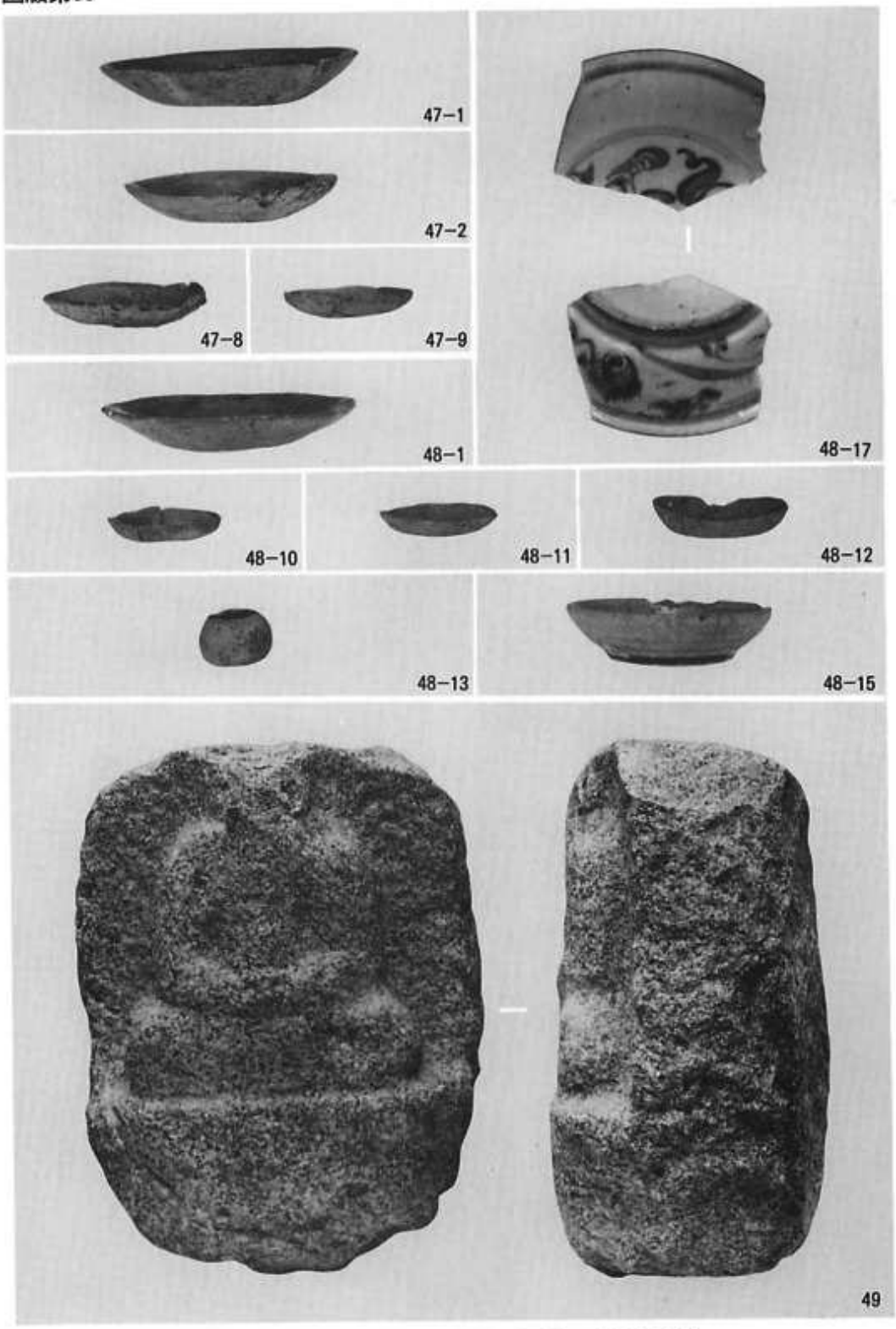
45−6


46−2

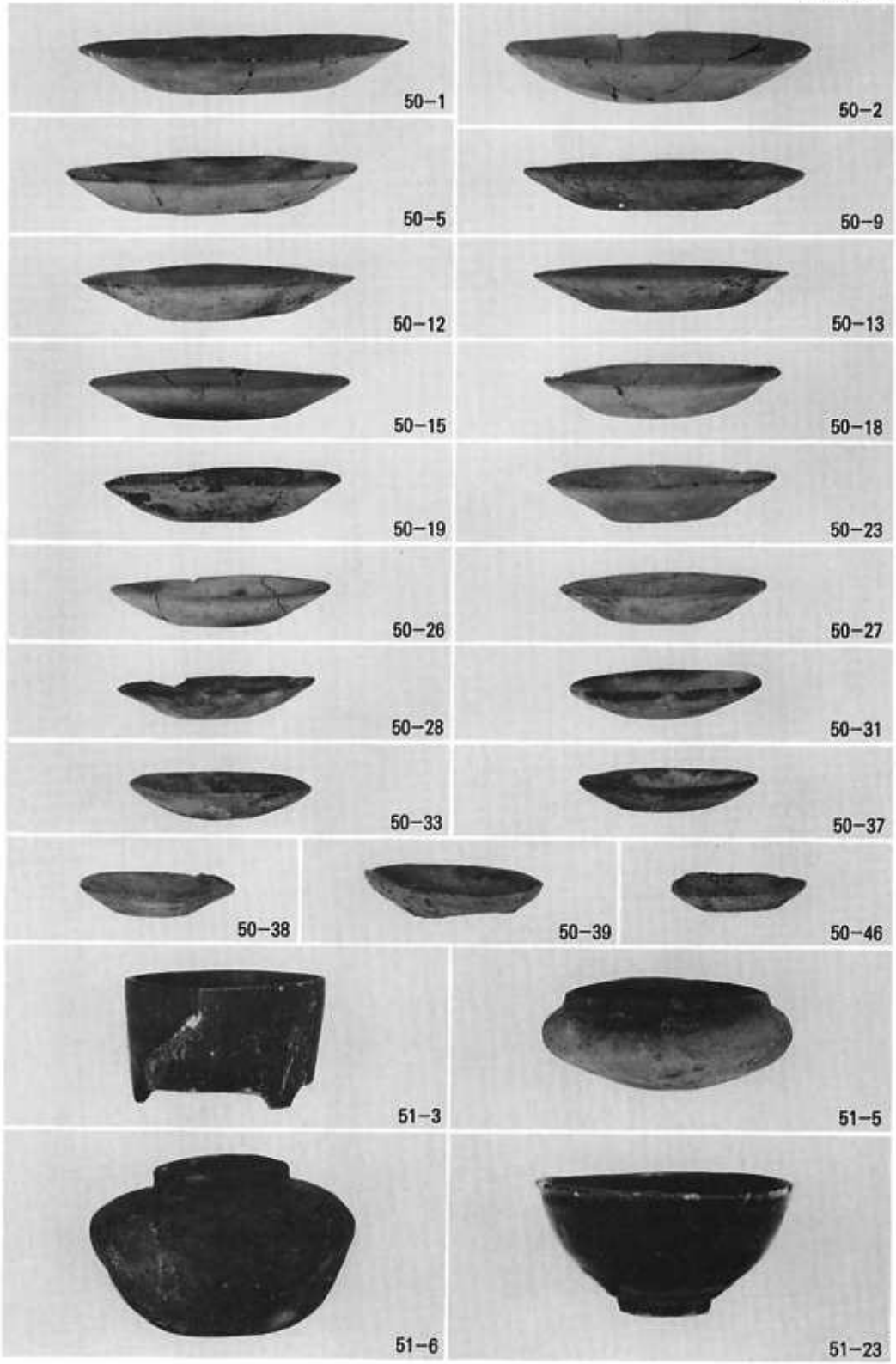
46−1


46−3

図版第38

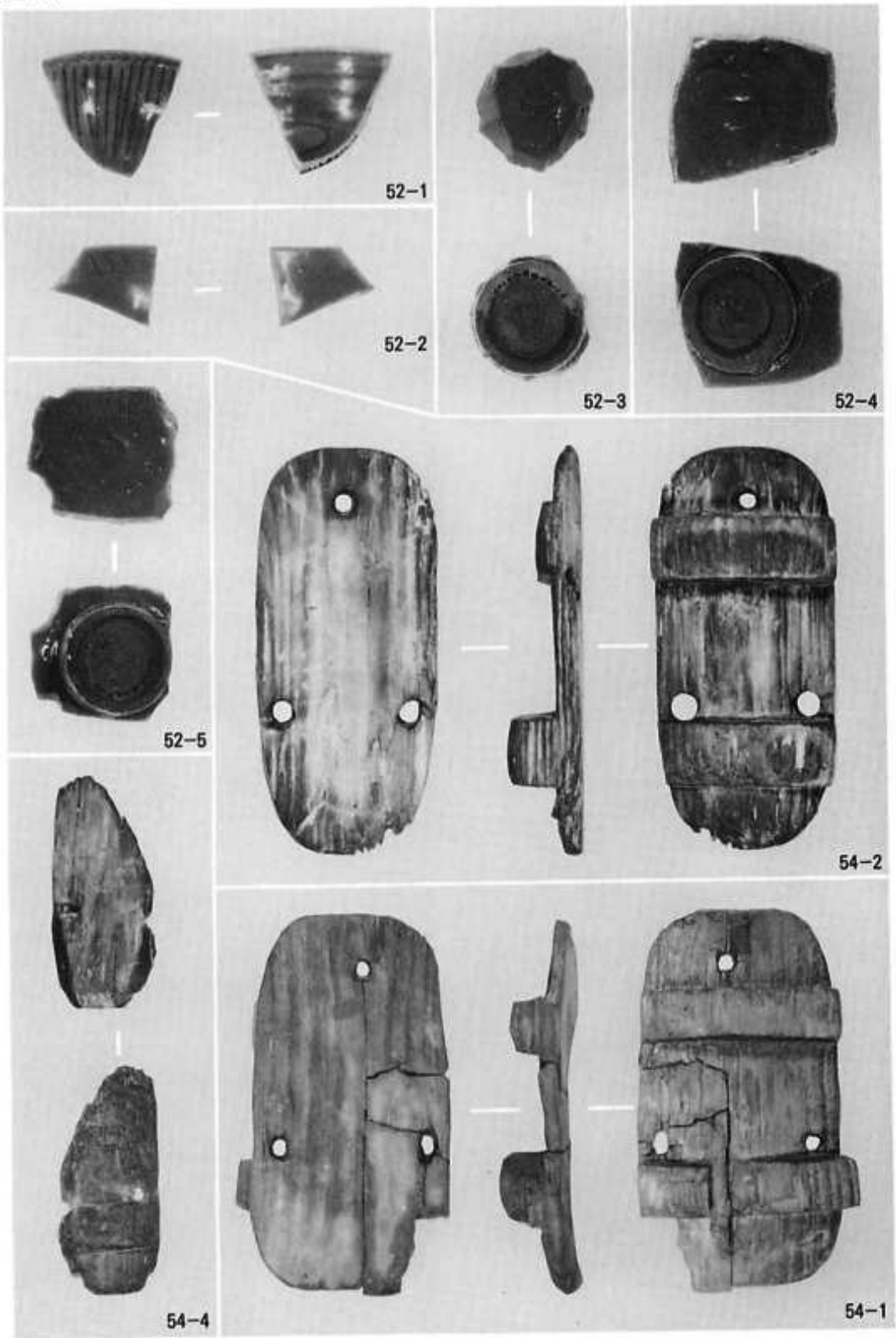


三条大路側溝東Ⅱ・東Ⅰ出土遺物・同溝東Ⅰ石組使用石仏



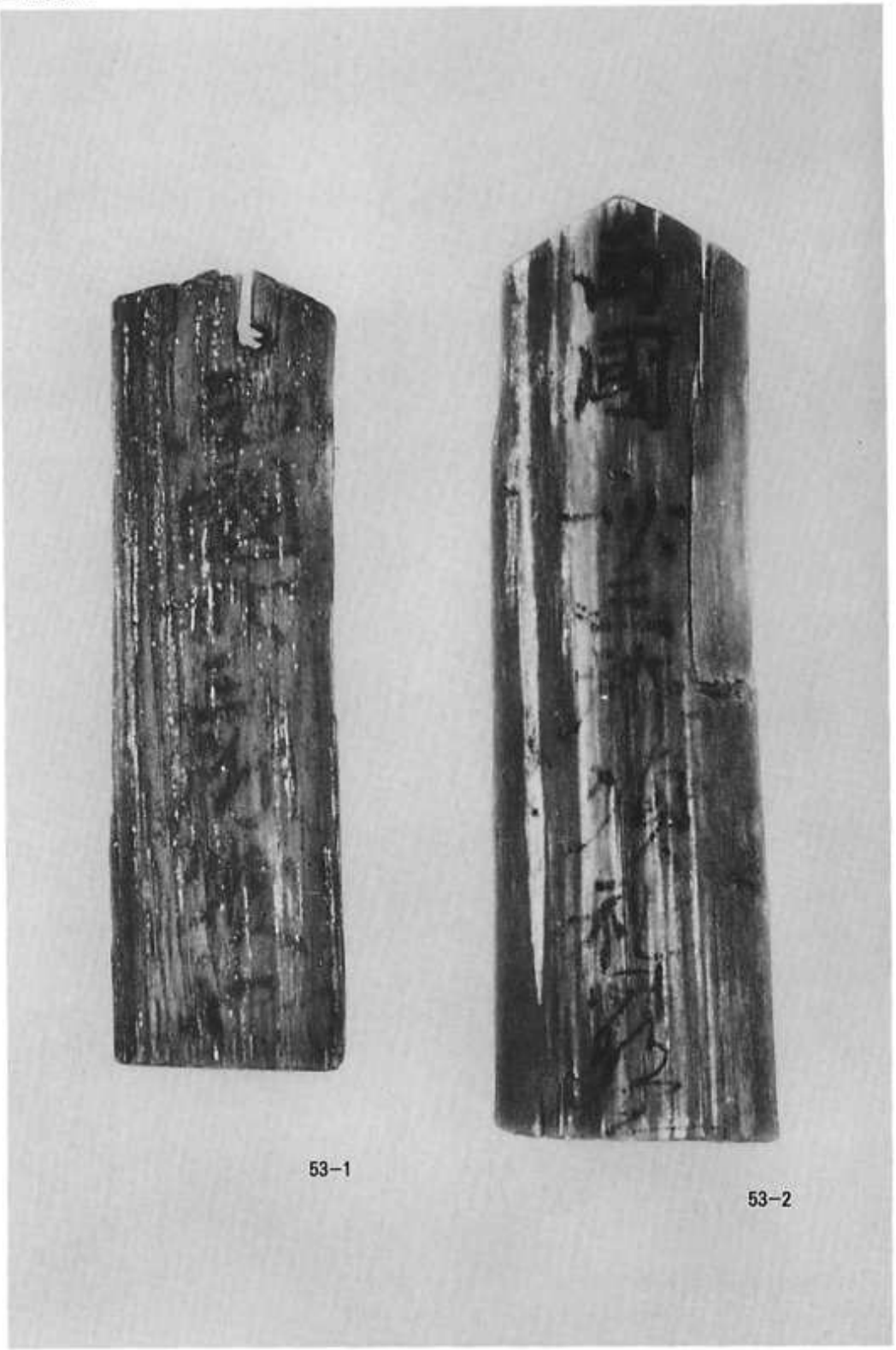
三条大路側溝ⅢB出土遺物(1)

図版第40



三条大路側溝ⅢB出土遺物(2)

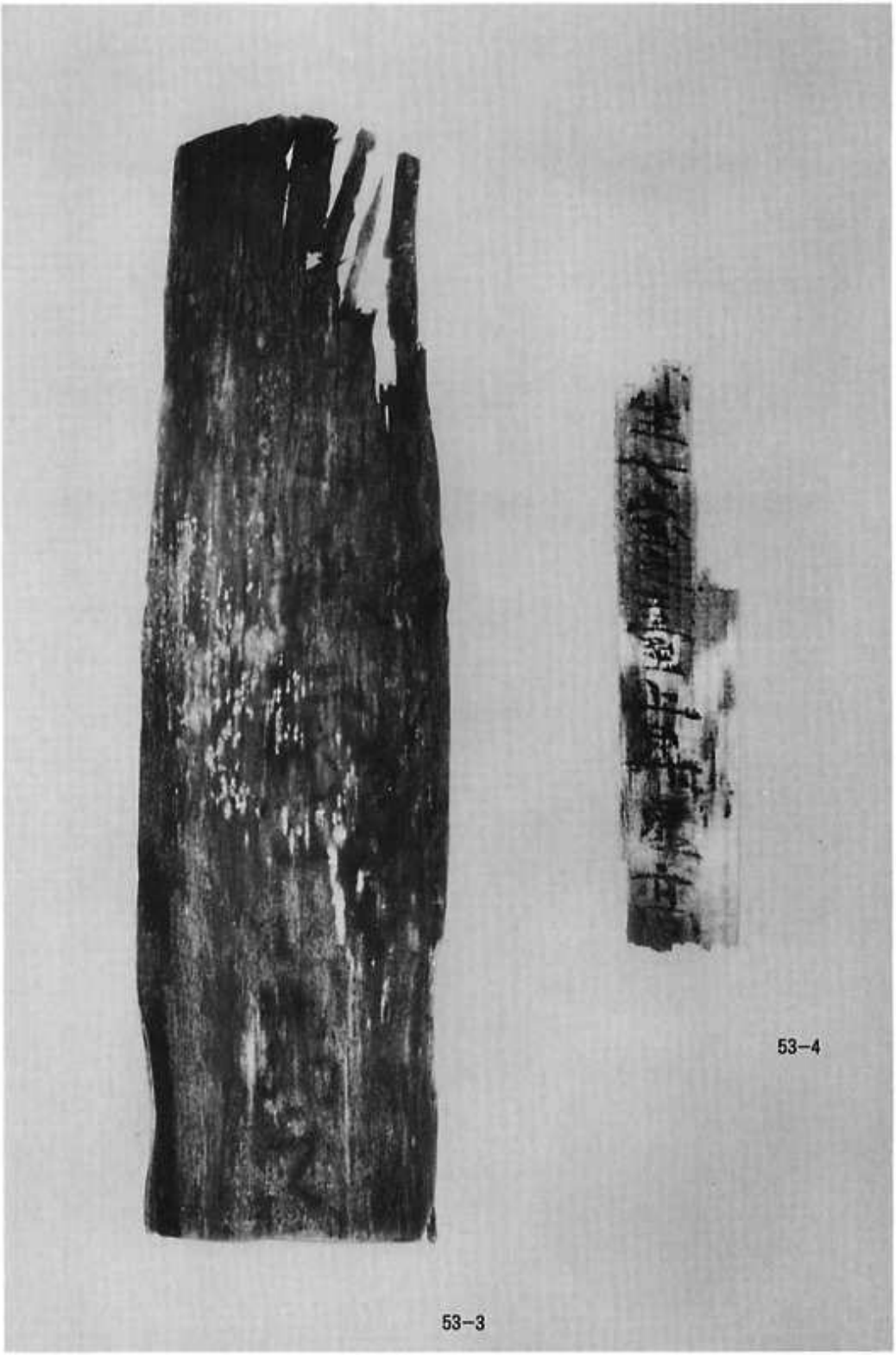
三条大路側溝Ⅲ B出土遺物(3)



53−1

53−2

三条大路側溝ⅢB出土遺物(4)

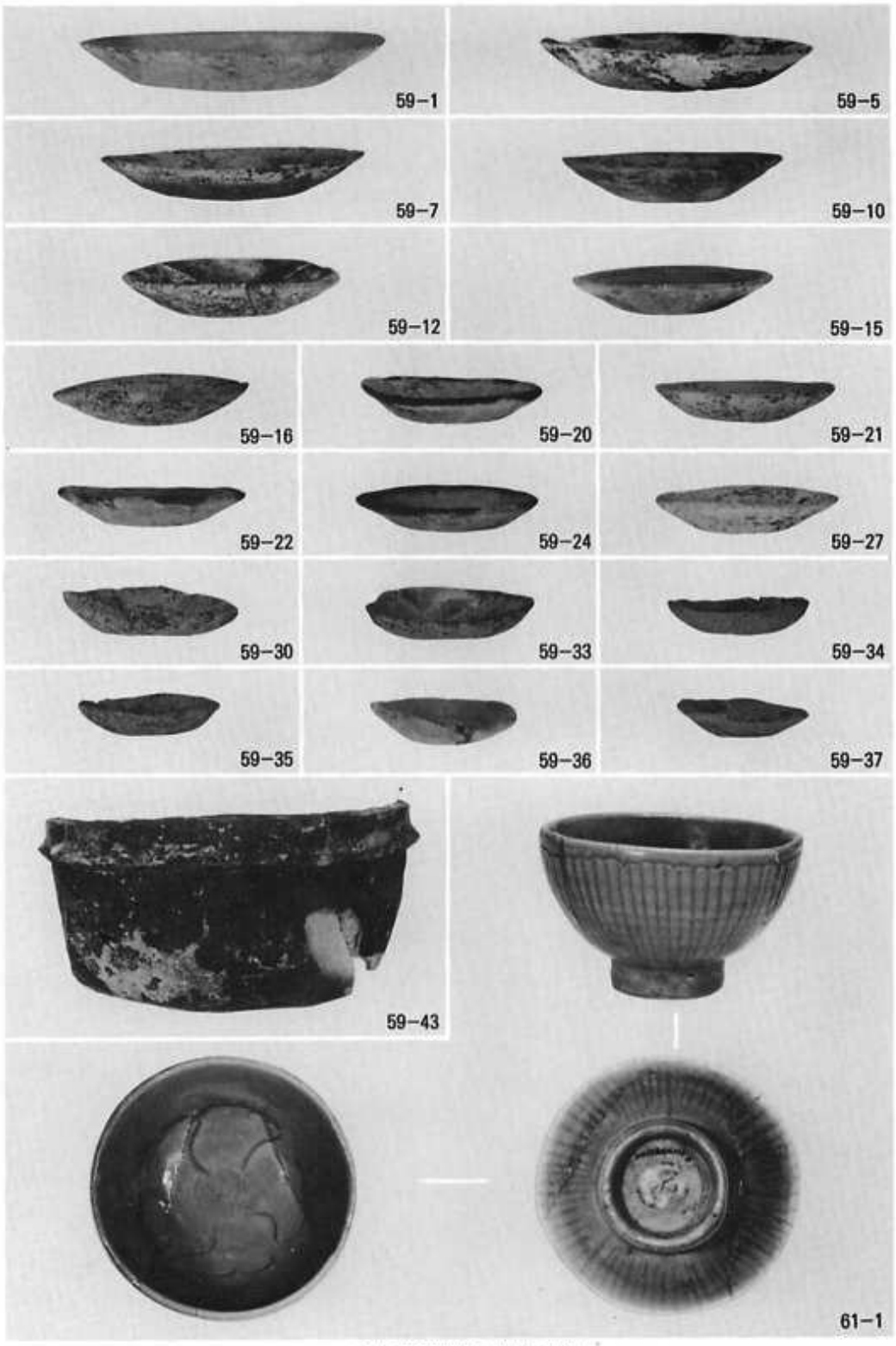


53−4

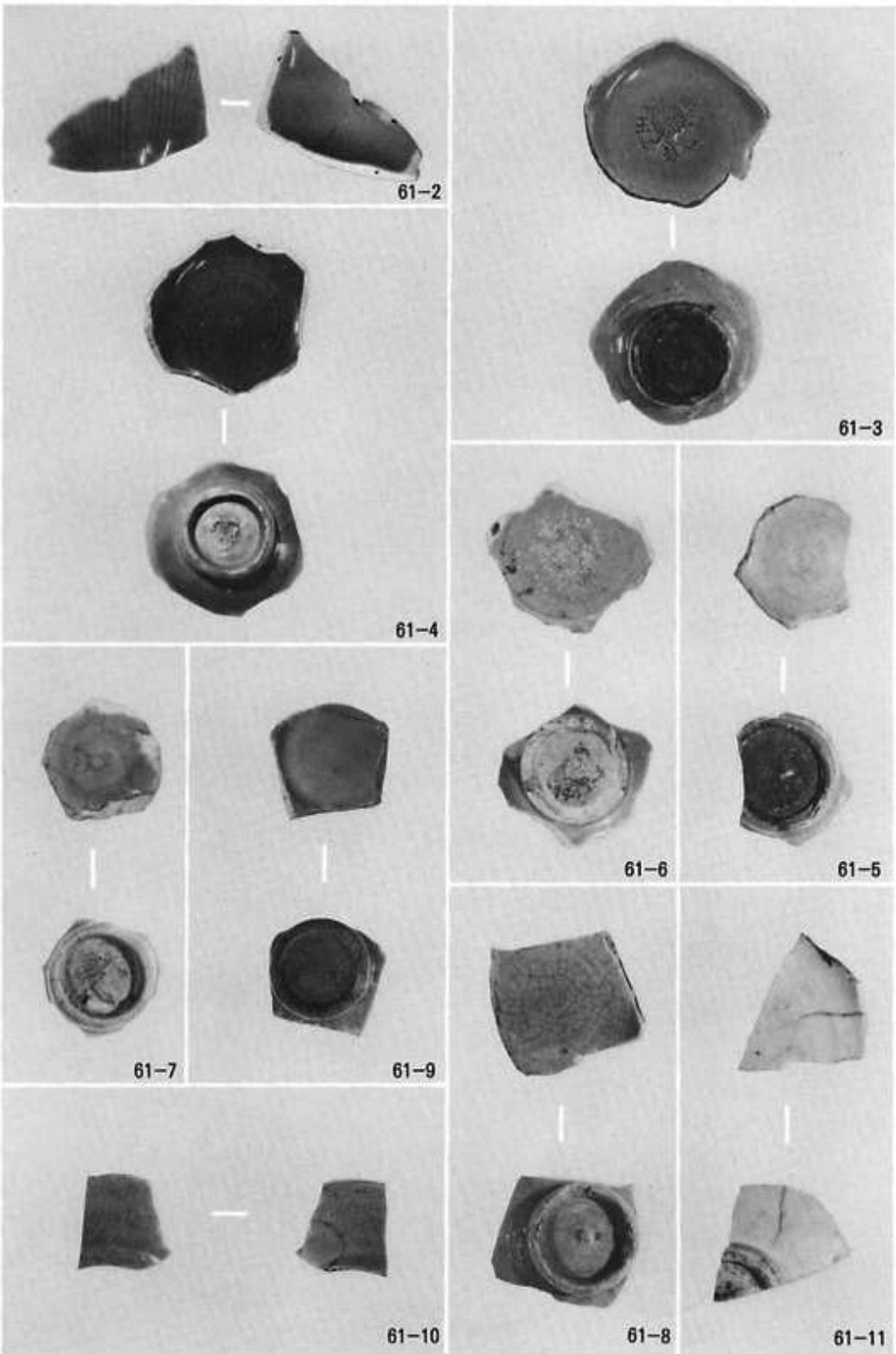
53−3

三条大路側溝ⅢB出土遺物(5)

図版第44

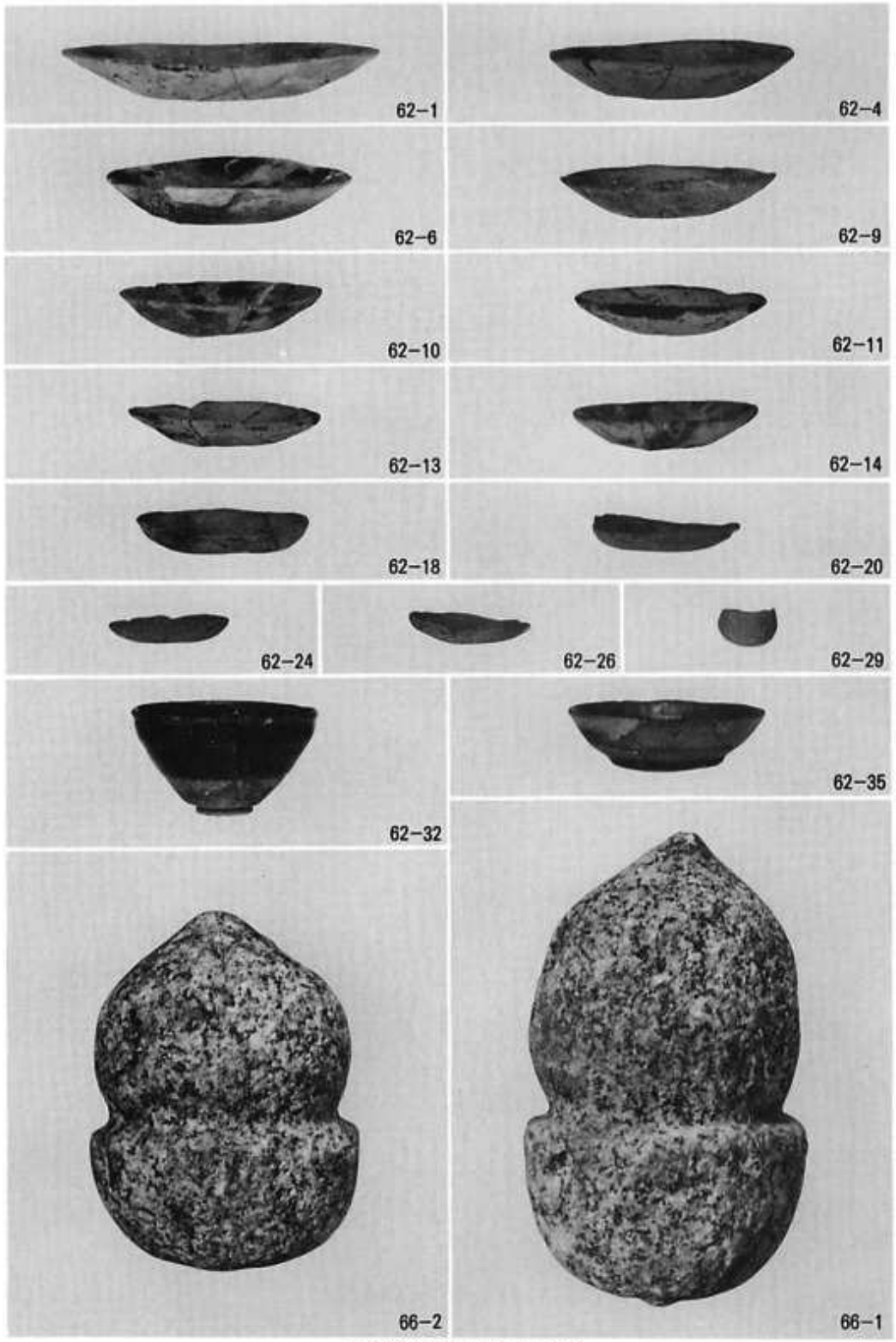


三条大路側溝ⅢA出土遺物(1)

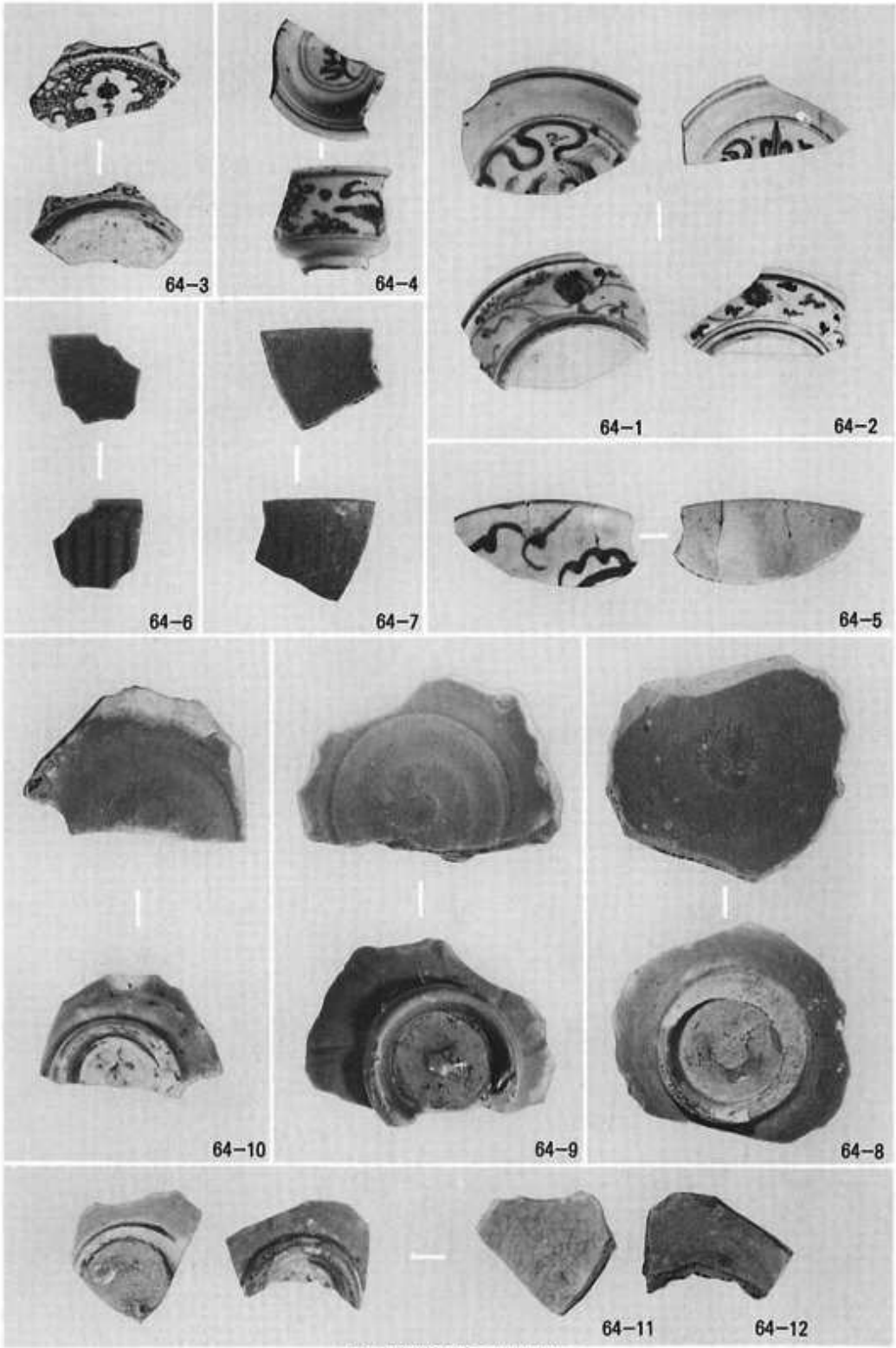


三条大路側溝ⅢA出土遺物(2)

図版第46

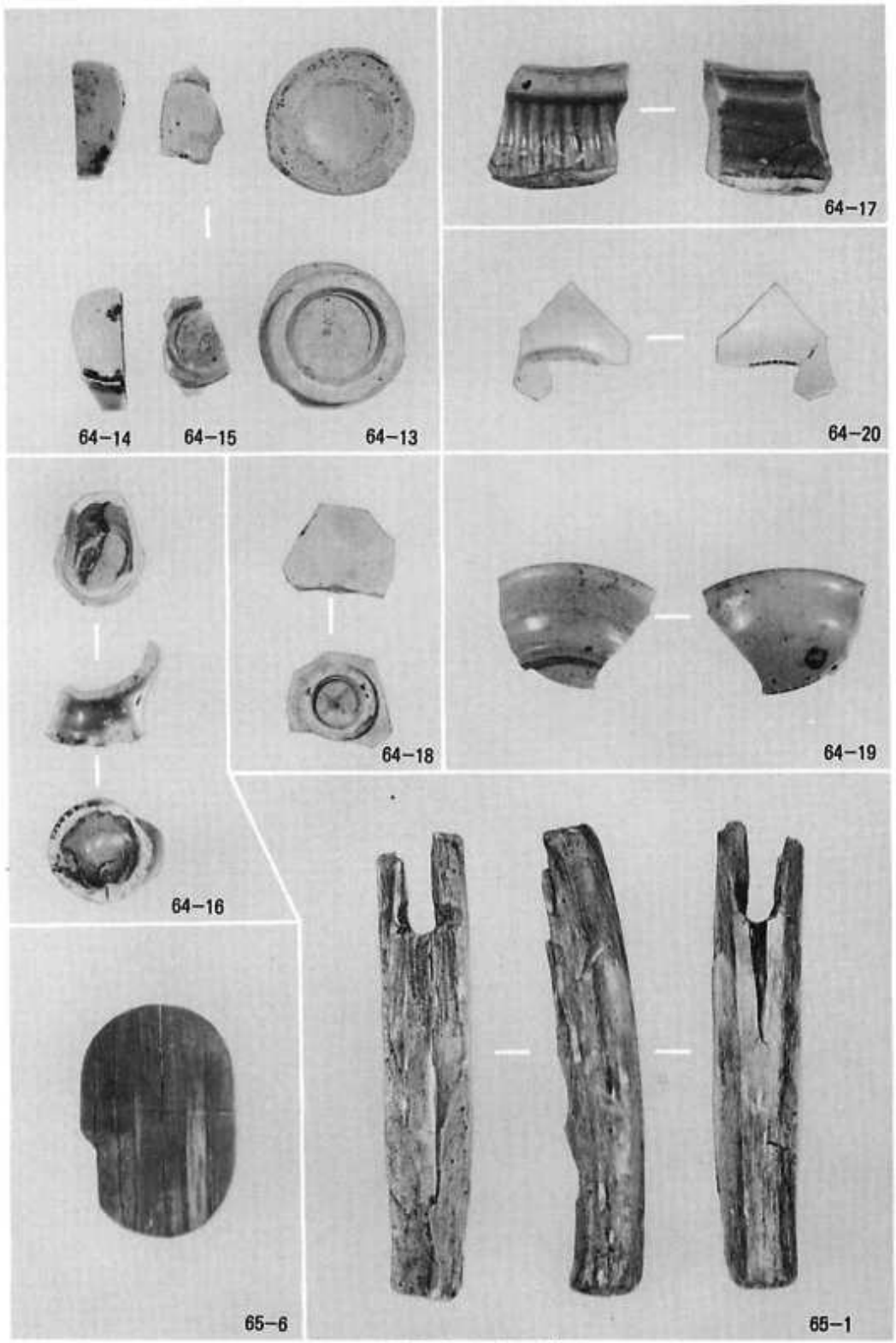


三条大路側溝西Ⅱ出土遺物(1)

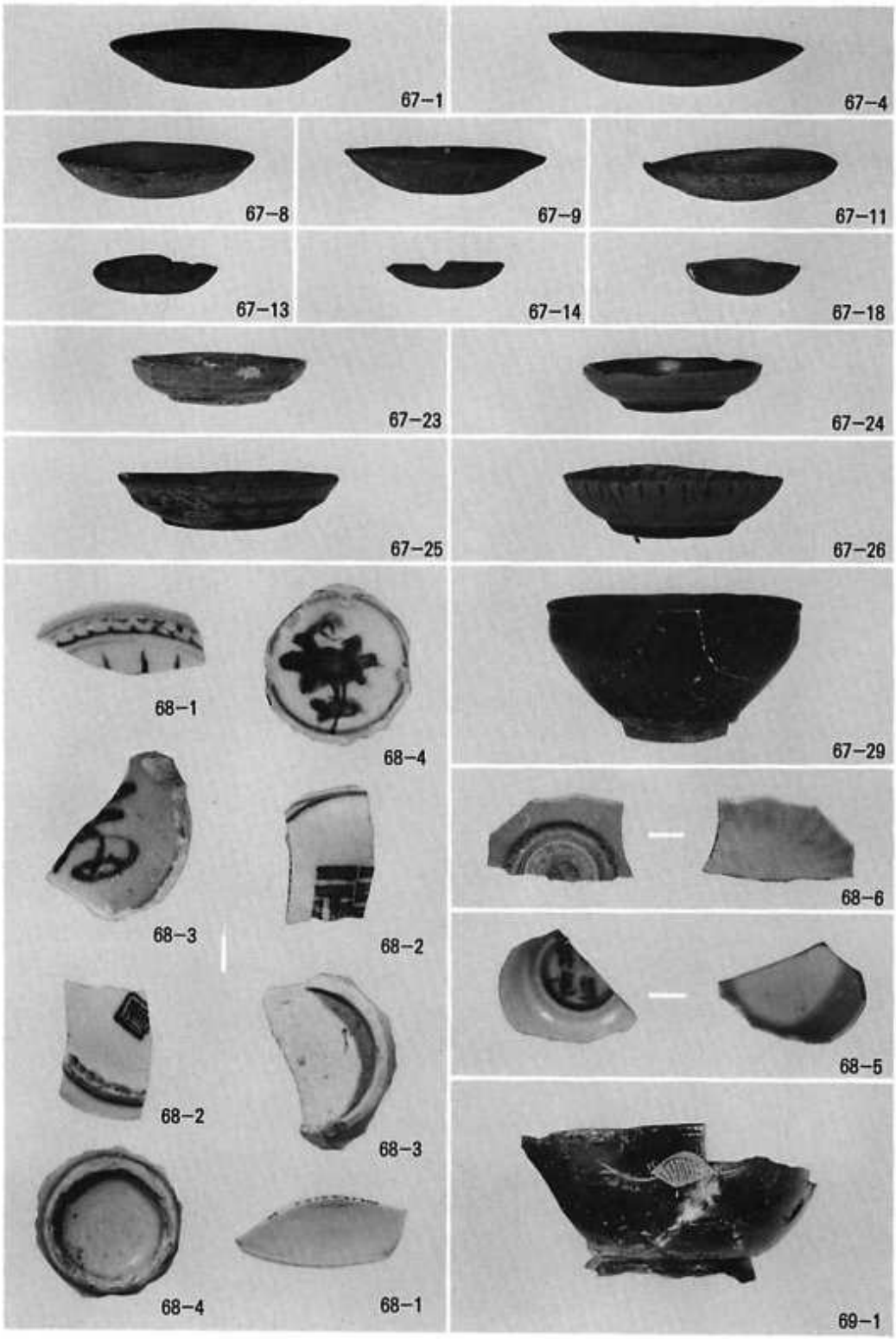


三条大路側溝西Ⅱ出土遺物(2)

図版第48

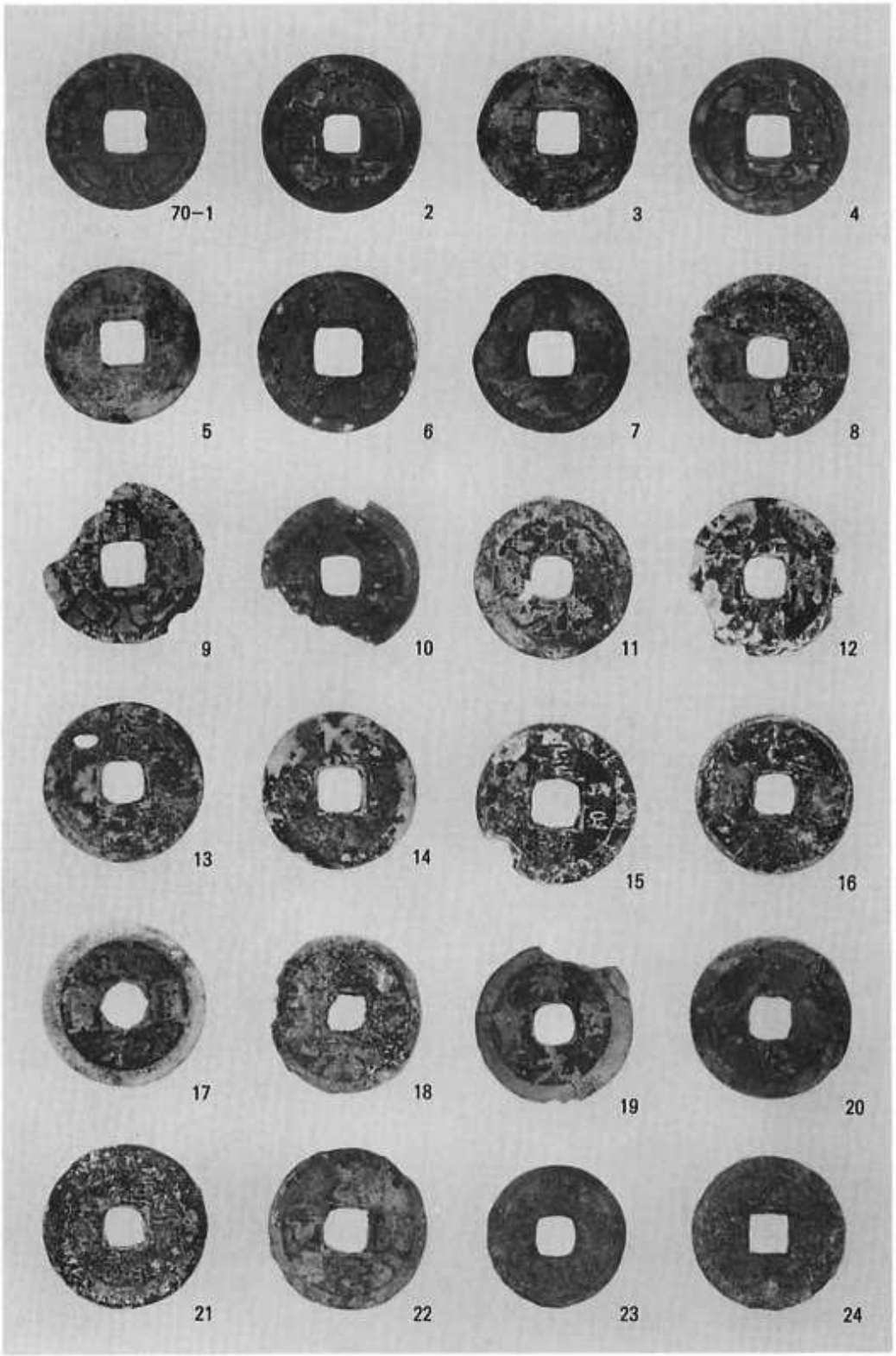


三条大路側溝西Ⅱ出土遺物(3)

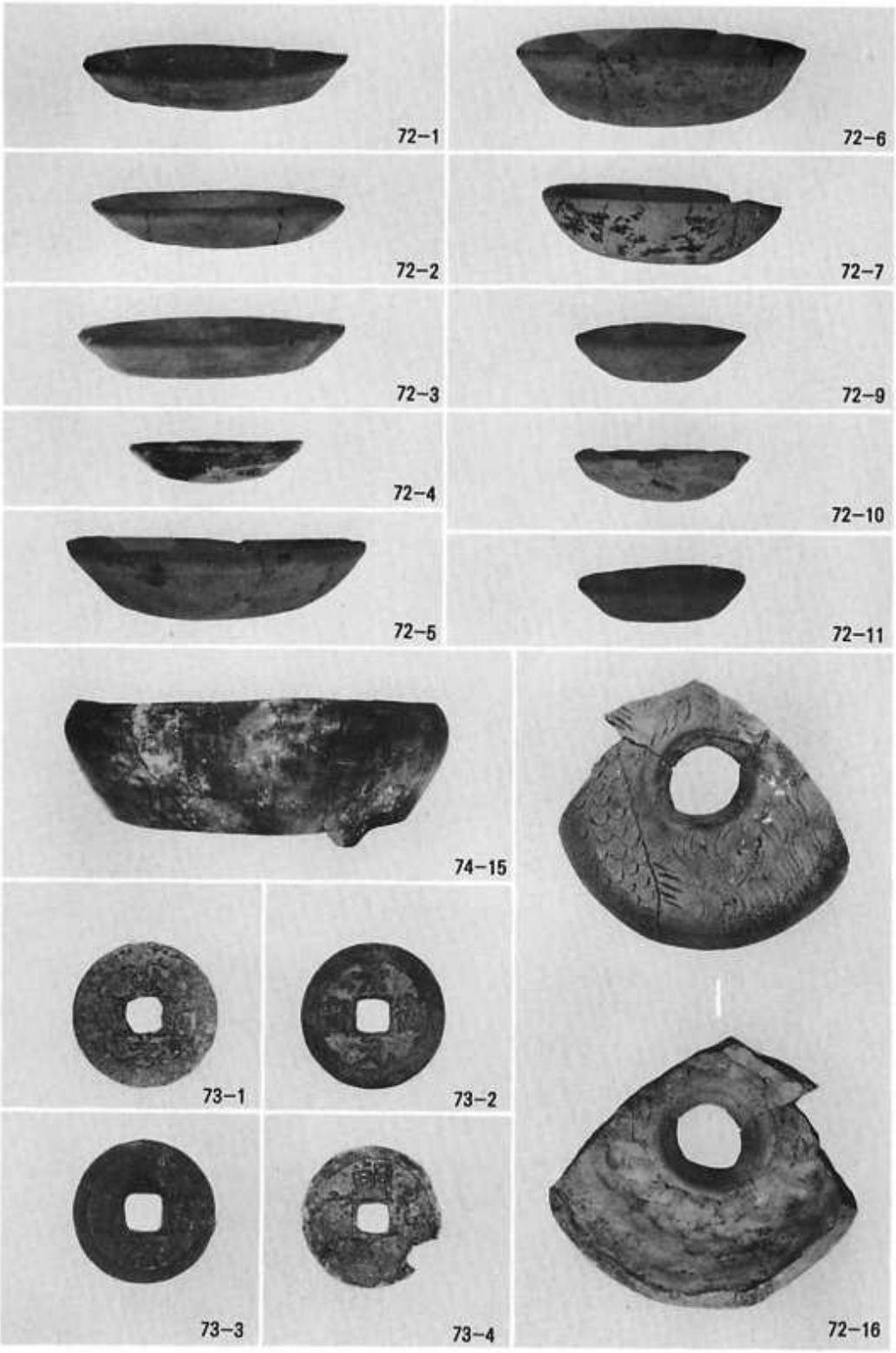


三条大路側溝西Ⅰ出土遺物

図版第50

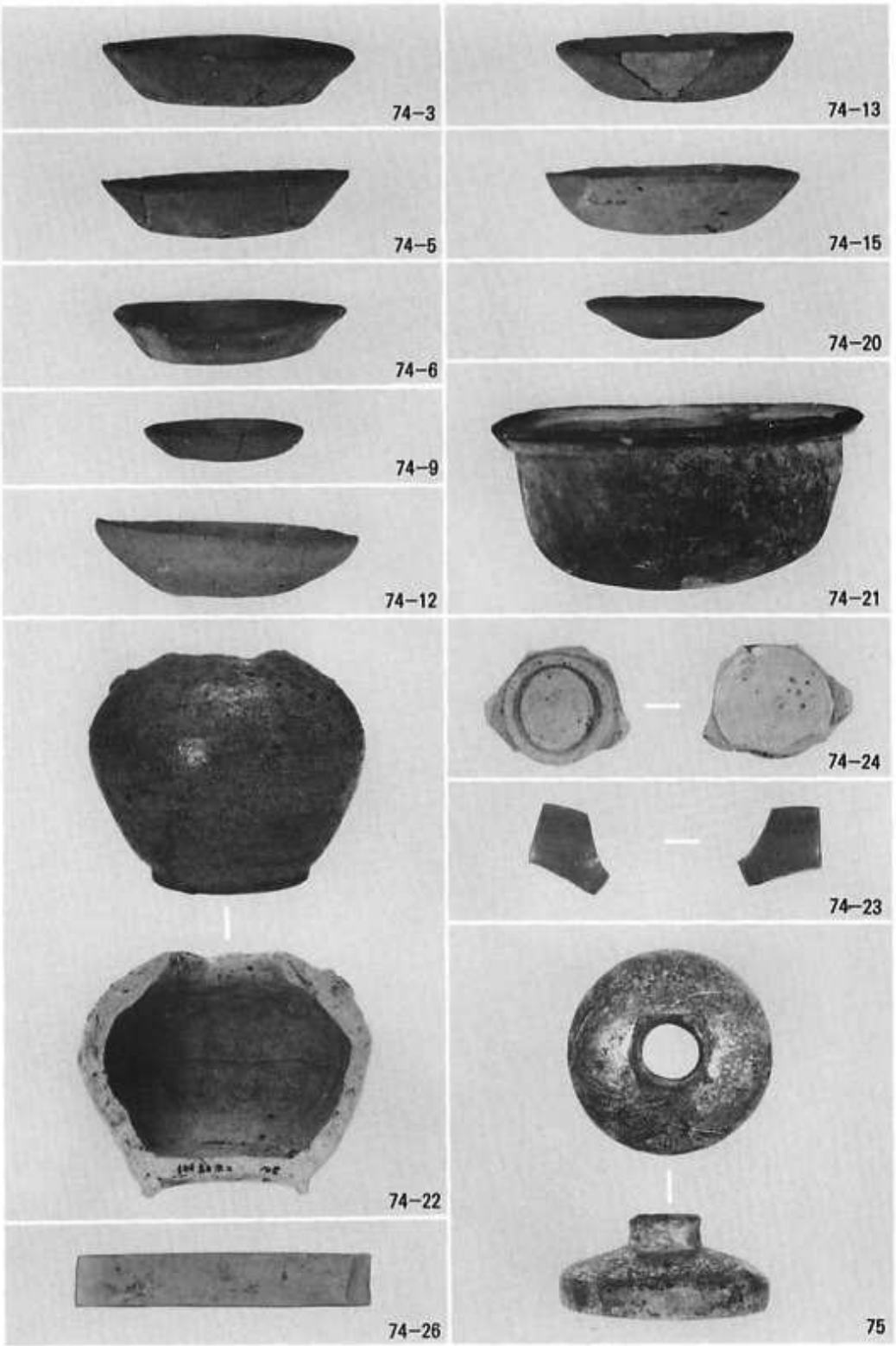


三条大路側溝出土古銭

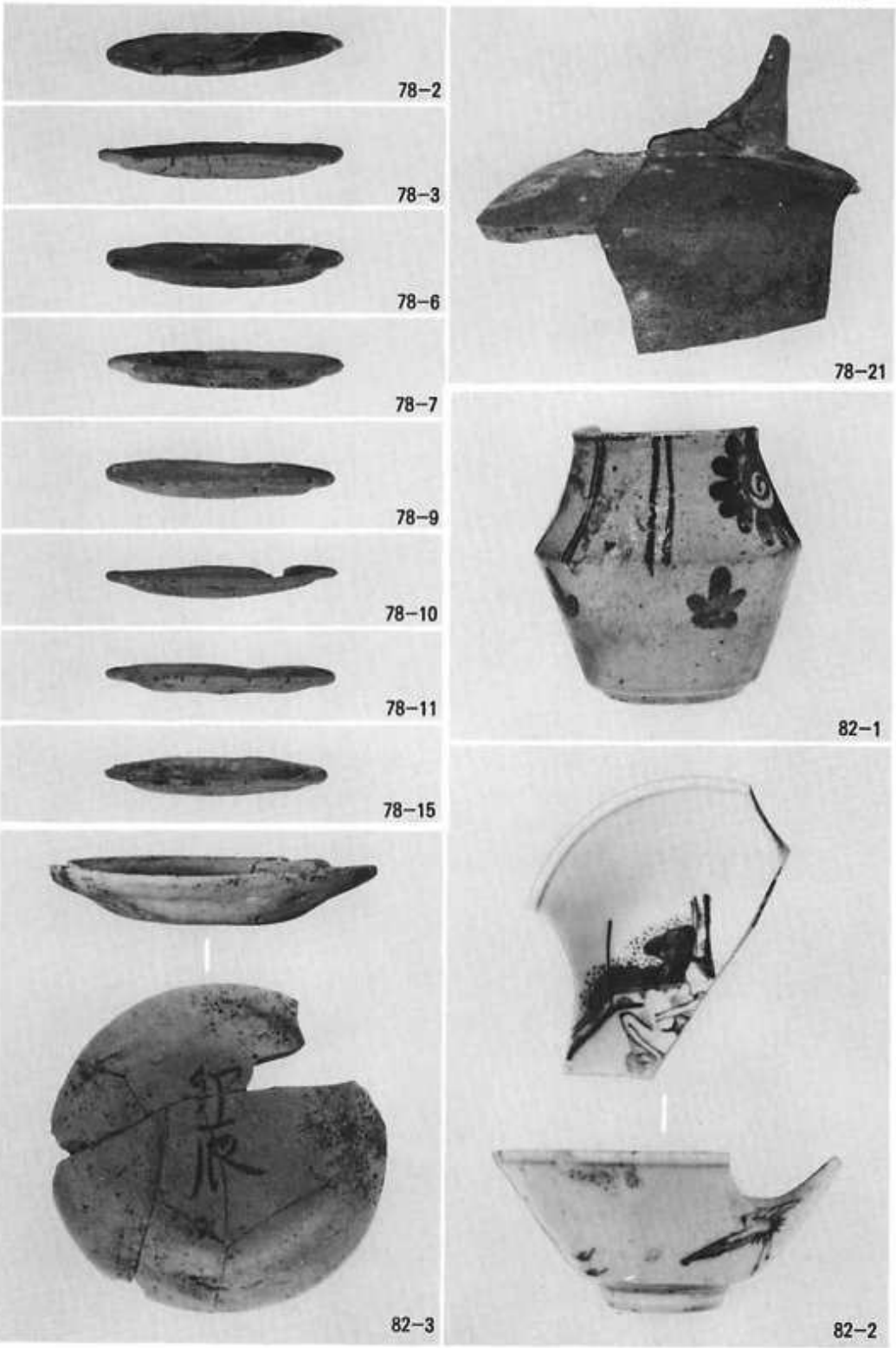

72−1
72−6
72−2
72−7
72−3
72−9
72−4
72−10
72−5
72−11
74−15
73−1
73−2
73−3
73−4
72−16

烏丸小路側溝出土遺物

図版第52

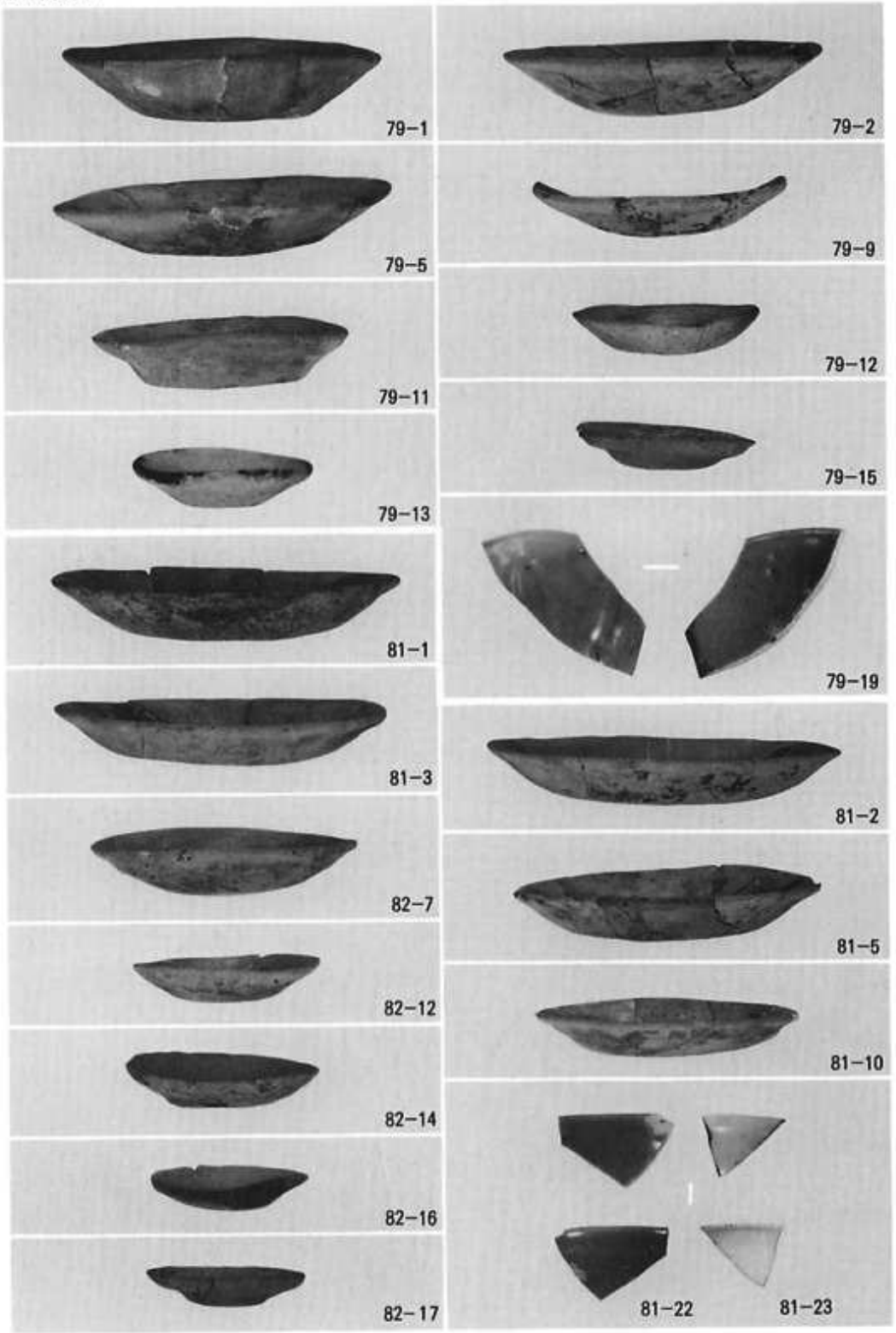


烏丸小路側溝東側截ち割り出土遺物

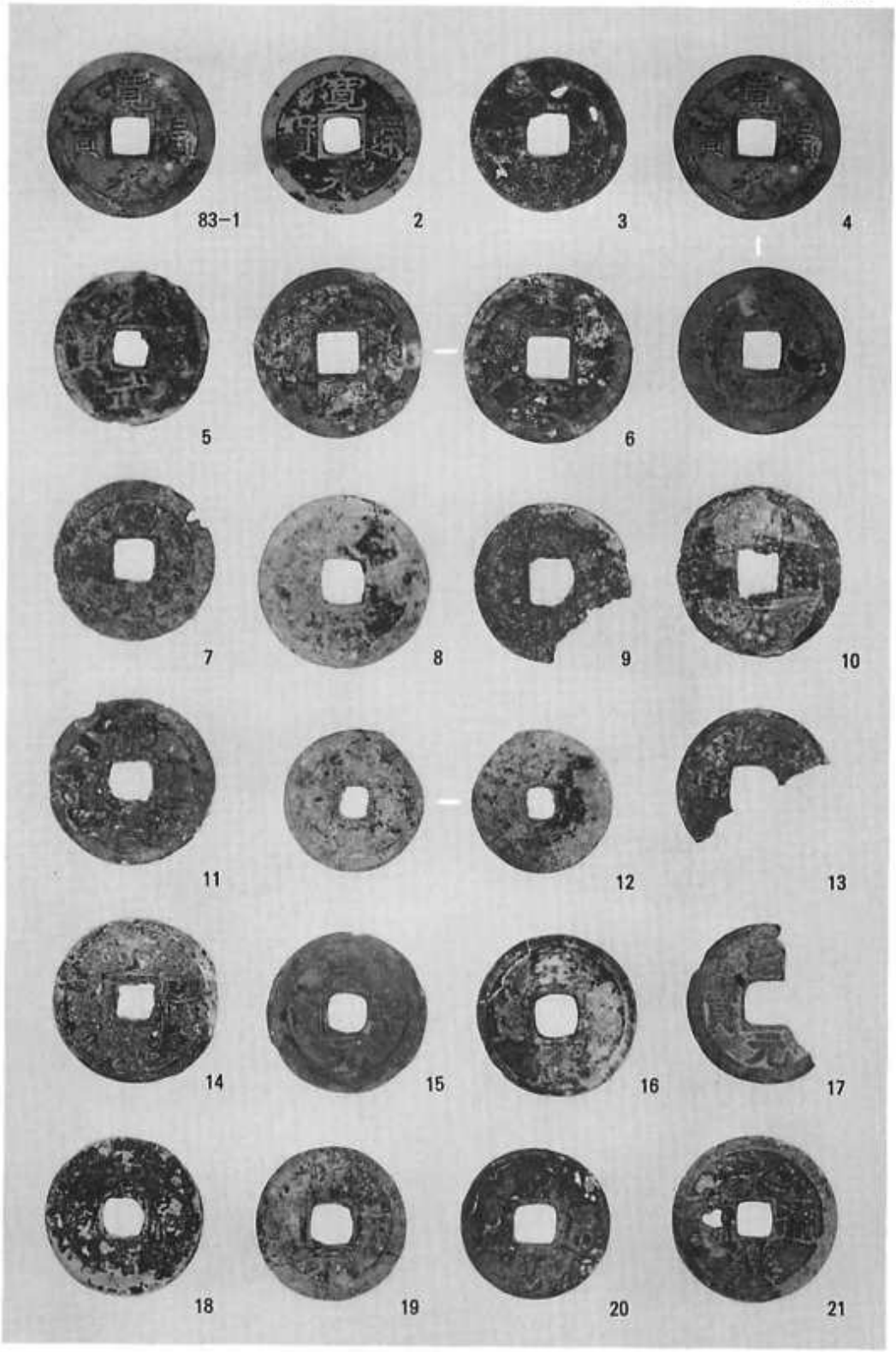


井戸34出土遺物・その他の井戸出土遺物

図版第54

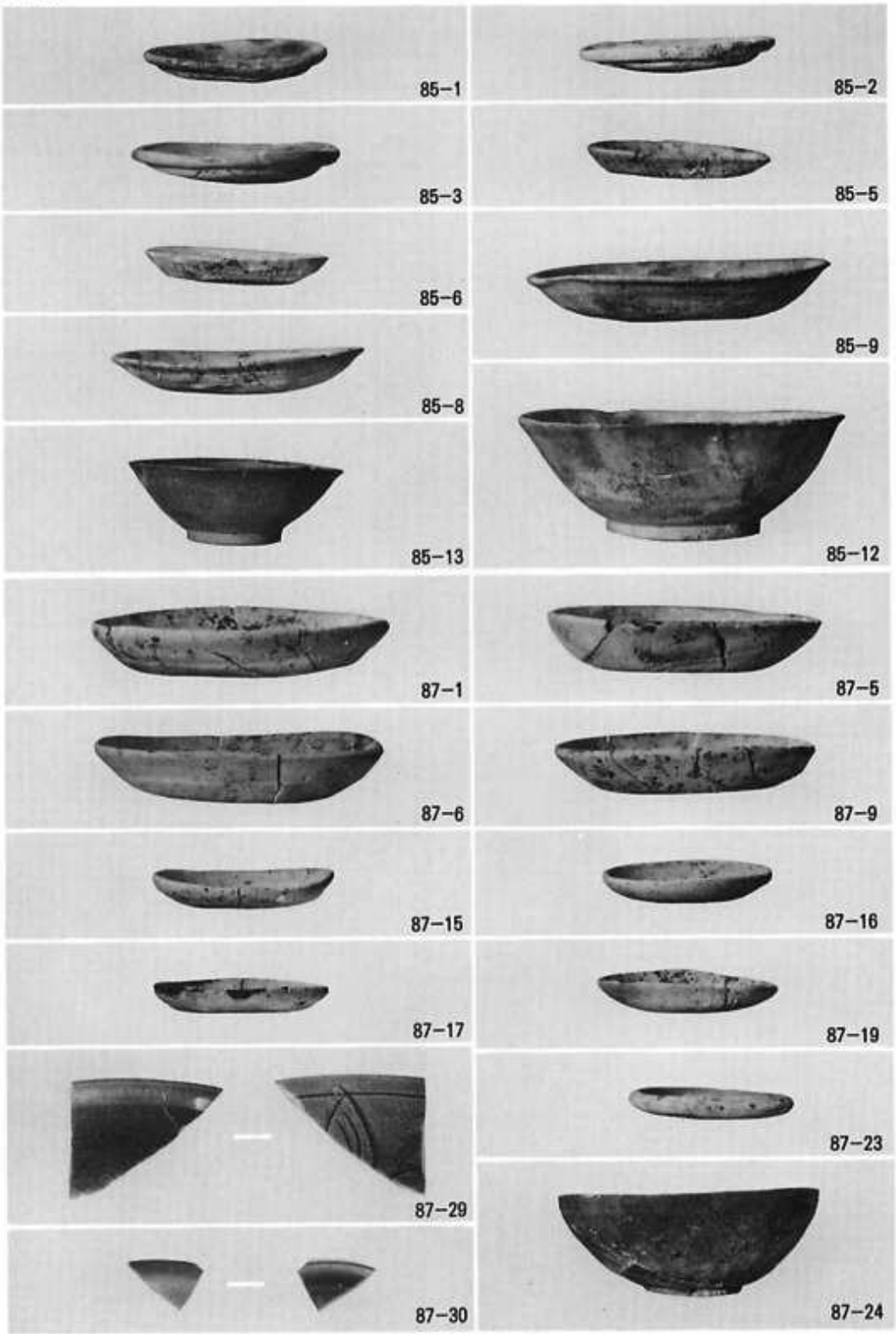


井戸42・井戸40出土遺物

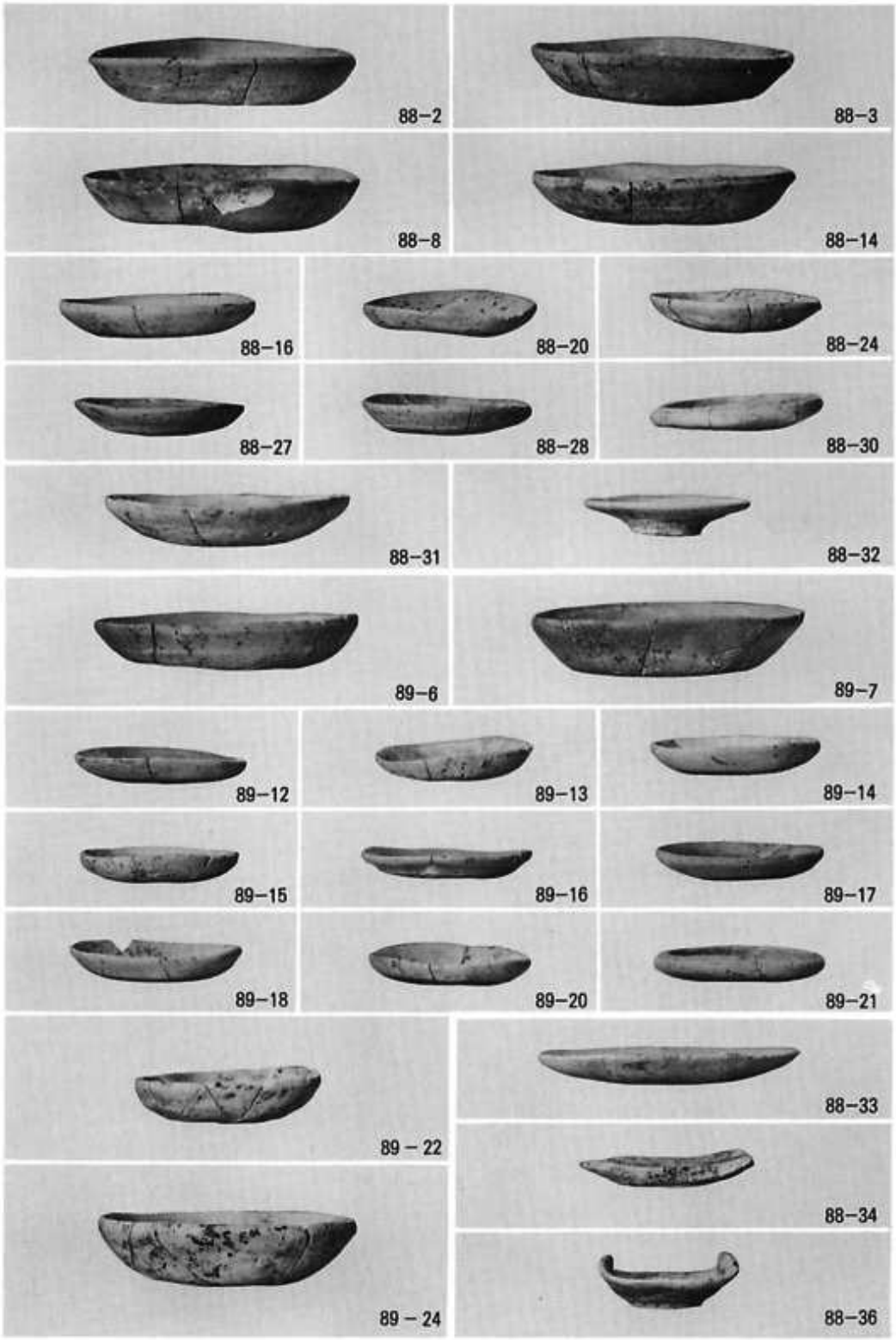


井戸出土古銭

図版第56

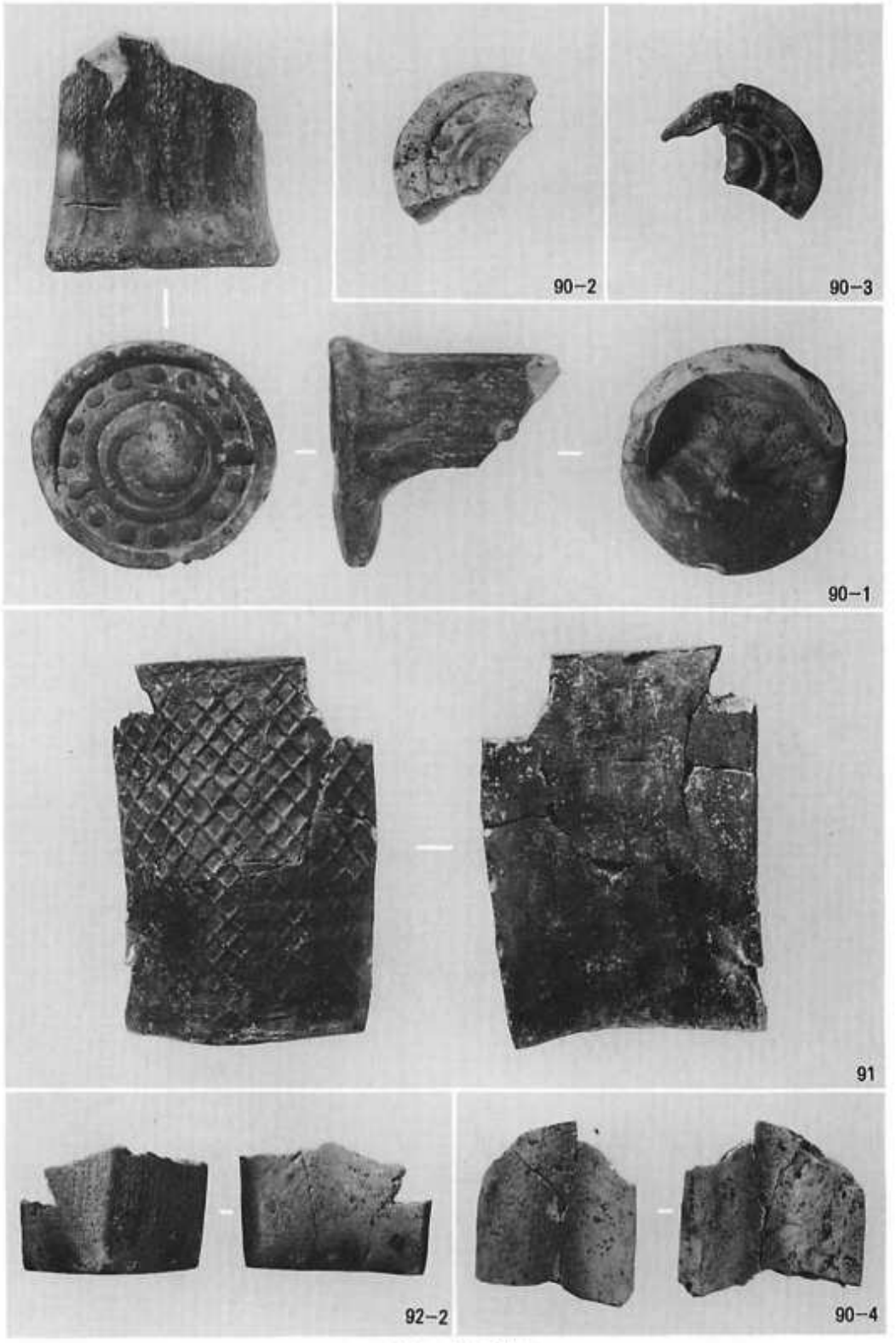


C４土壙11・Ｄ３小土壙群№14出土遺物

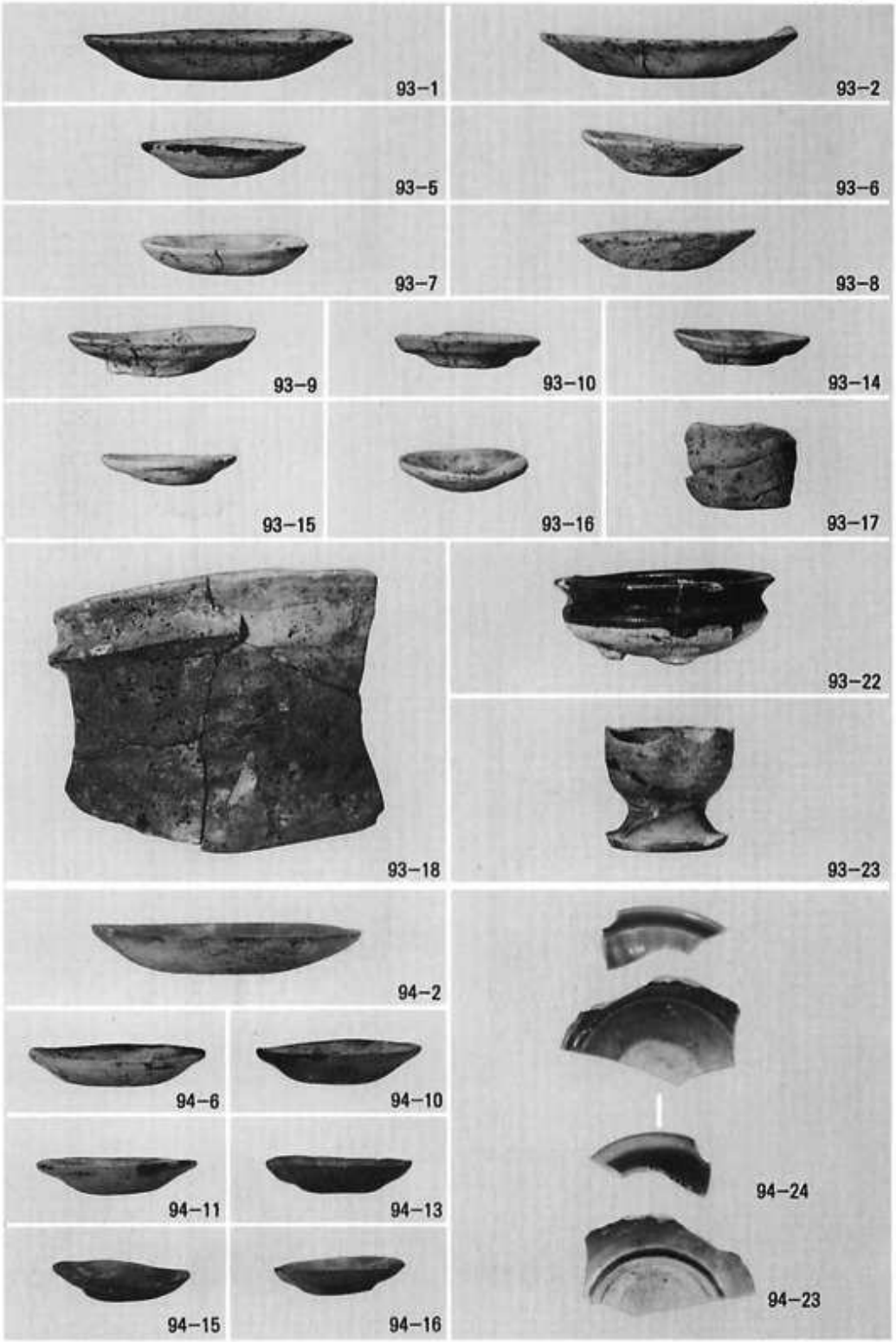

88−2
88−3
88−8
88−14
88−16
88−20
88−24
88−27
88−28
88−30
88−31
88−32
89−6
89−7
89−12
89−13
89−14
89−15
89−16
89−17
89−18
89−20
89−21
89 − 22
88−33
88−34
89 − 24
88−36

B 5 土壙 1 出土遺物(1)

図版第58

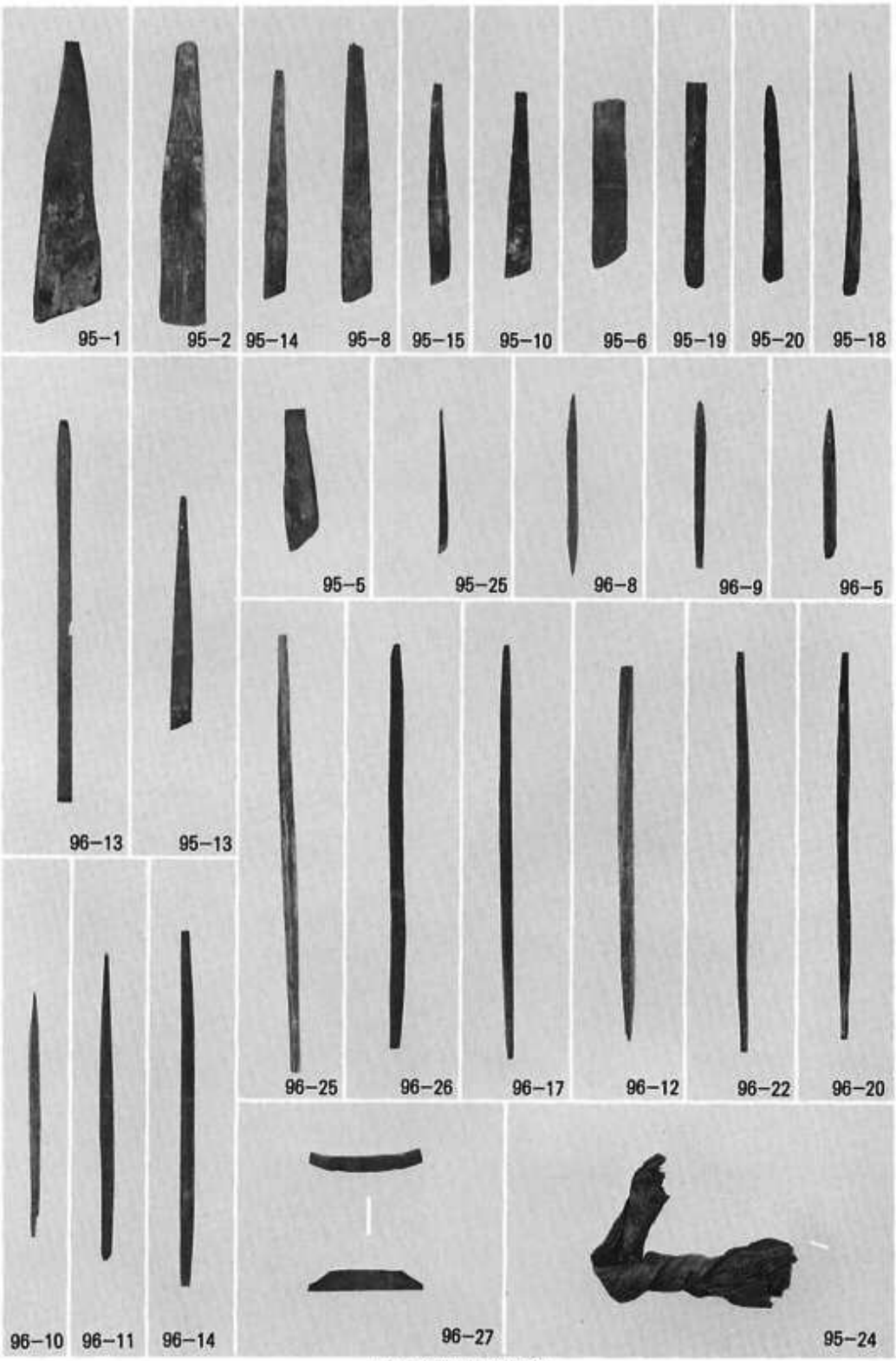


B 5 土壙 1 出土遺物(2)

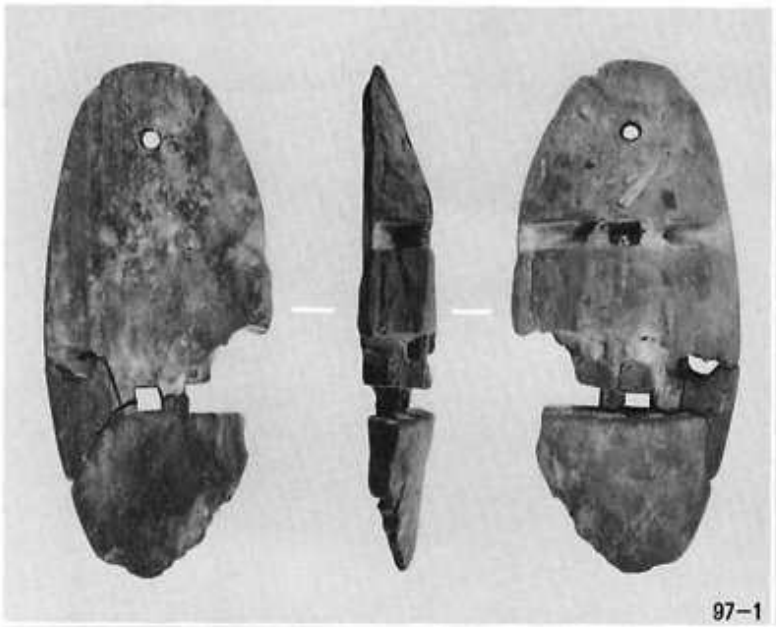


D 2 土壙 6 出土遺物・A 6 土壙 2 出土遺物(1)

図版第60



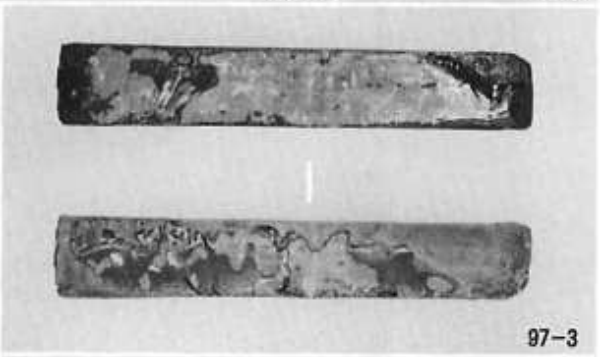
A 6 土壙 2 出土遺物(2)


97-1

98-1

97-5

97-2


97-3

98-2

98-3

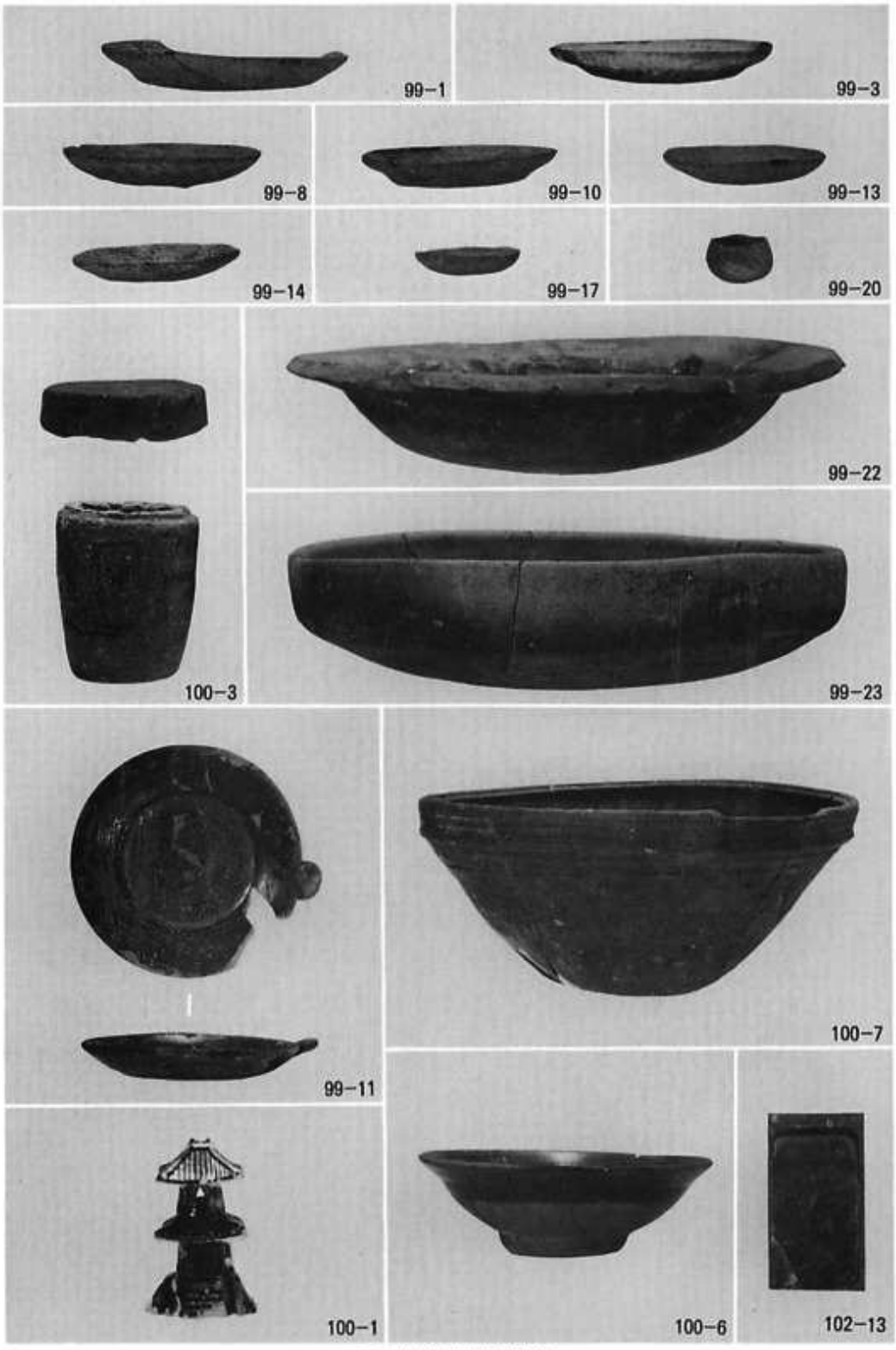
97-7

98-4

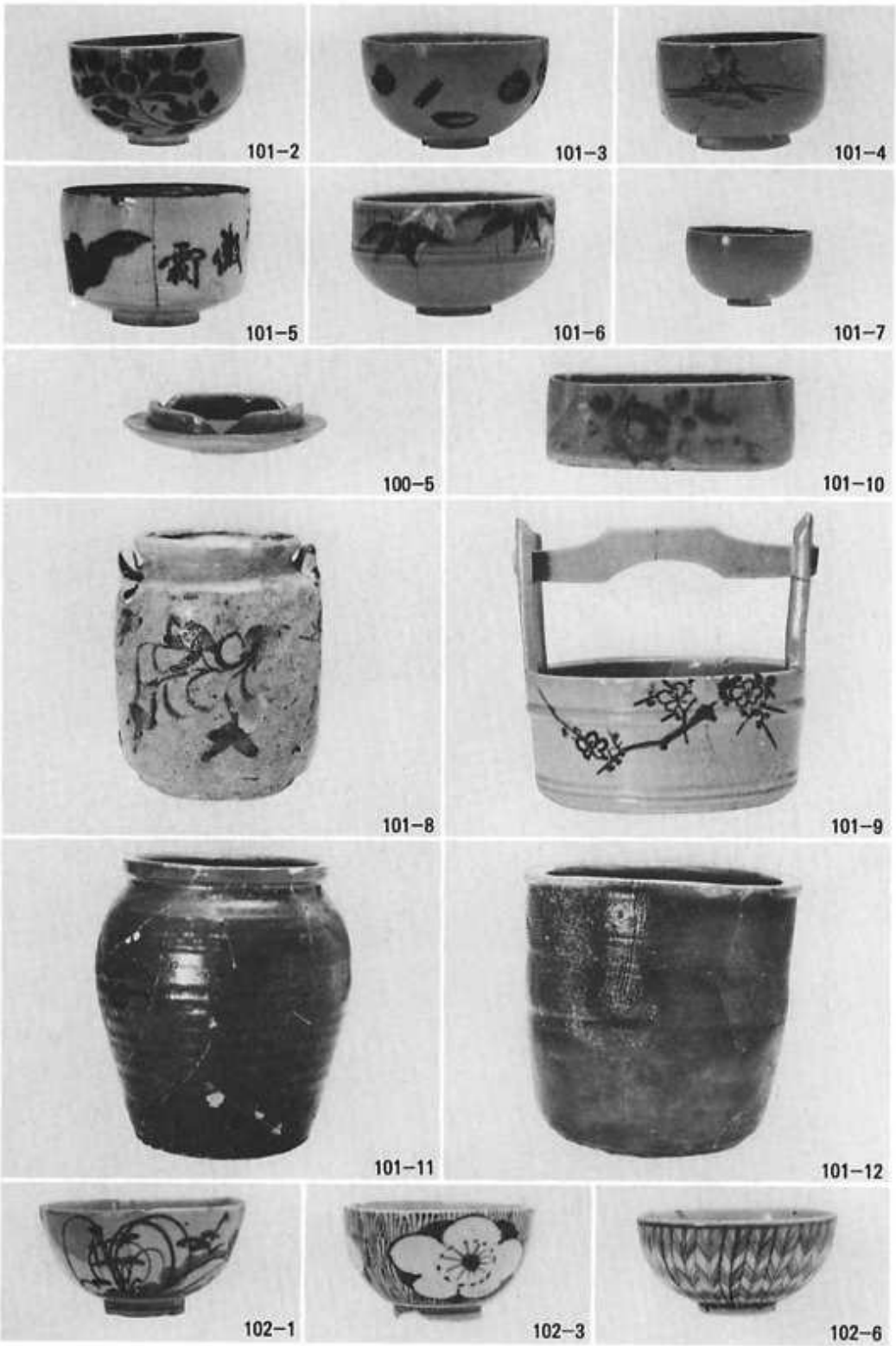
56-5

A 6 土壙 2 出土遺物(3)・三条大路側溝 III B 出土遺物

図版第62

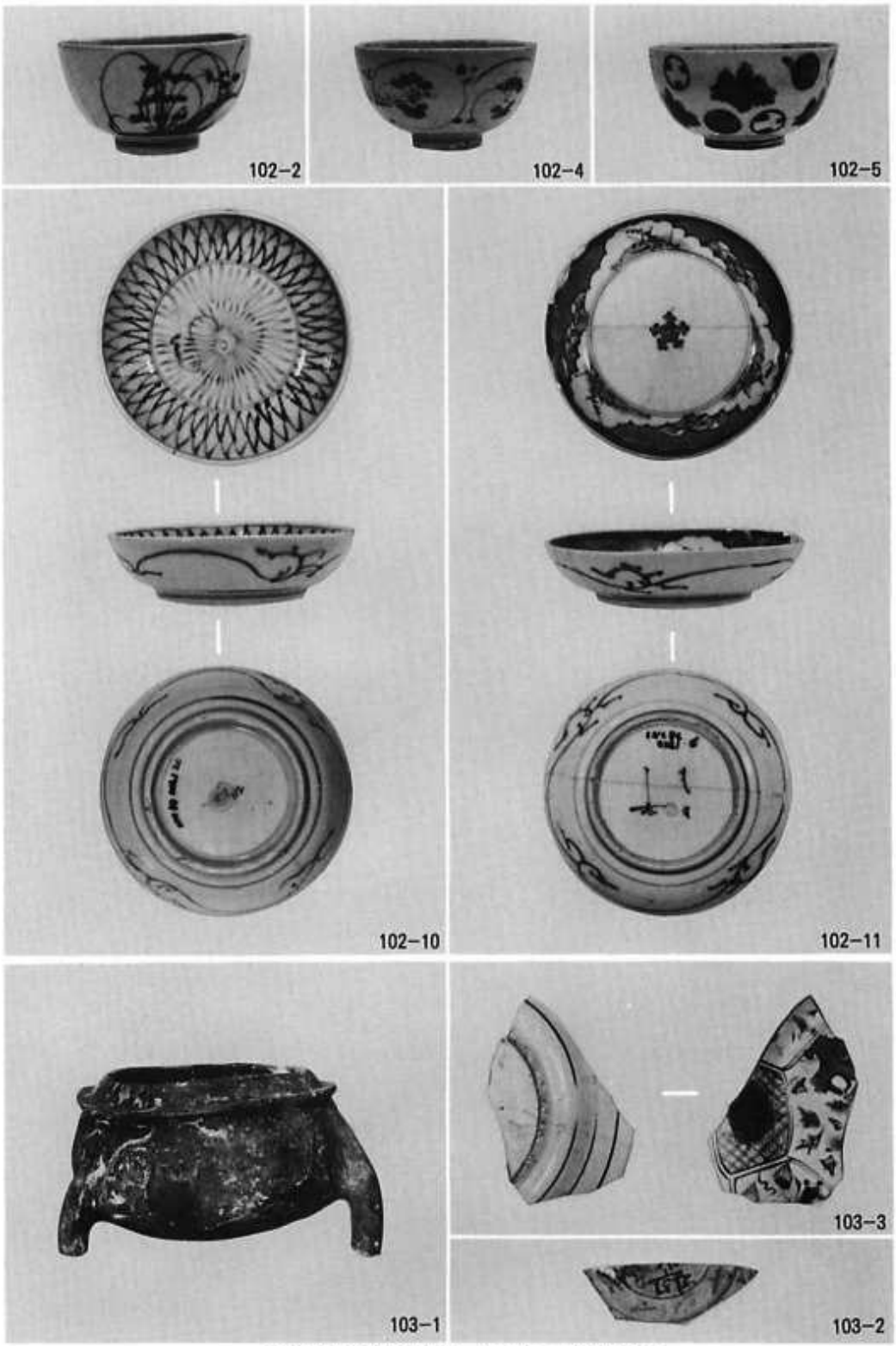


B 4 土壙 1 出土遺物(1)

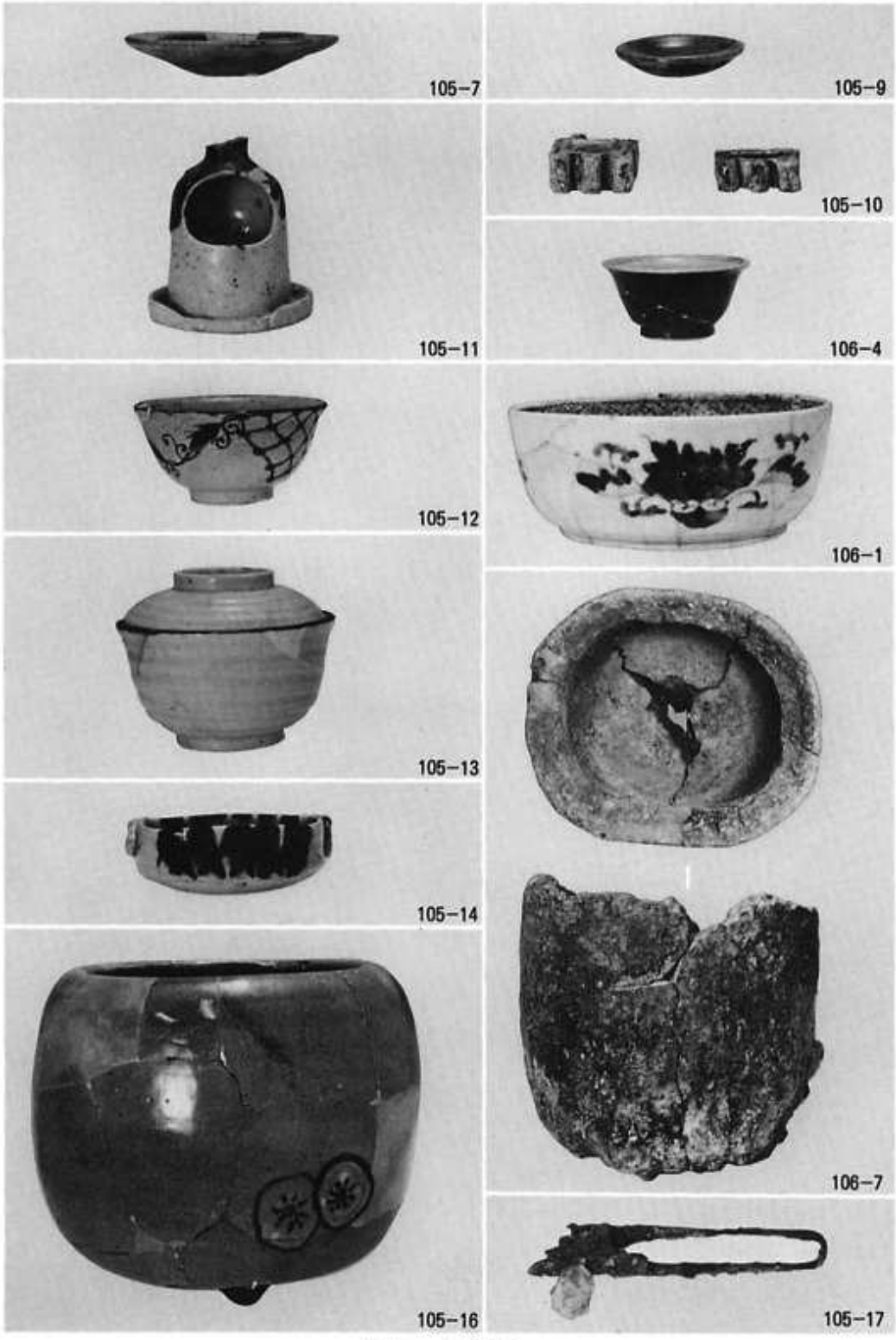

101−2
101−3
101−4
101−5
101−6
101−7
100−5
101−10
101−8
101−9
101−11
101−12
102−1
102−3
102−6

B 4 土壙 1 出土遺物(2)

図版第64

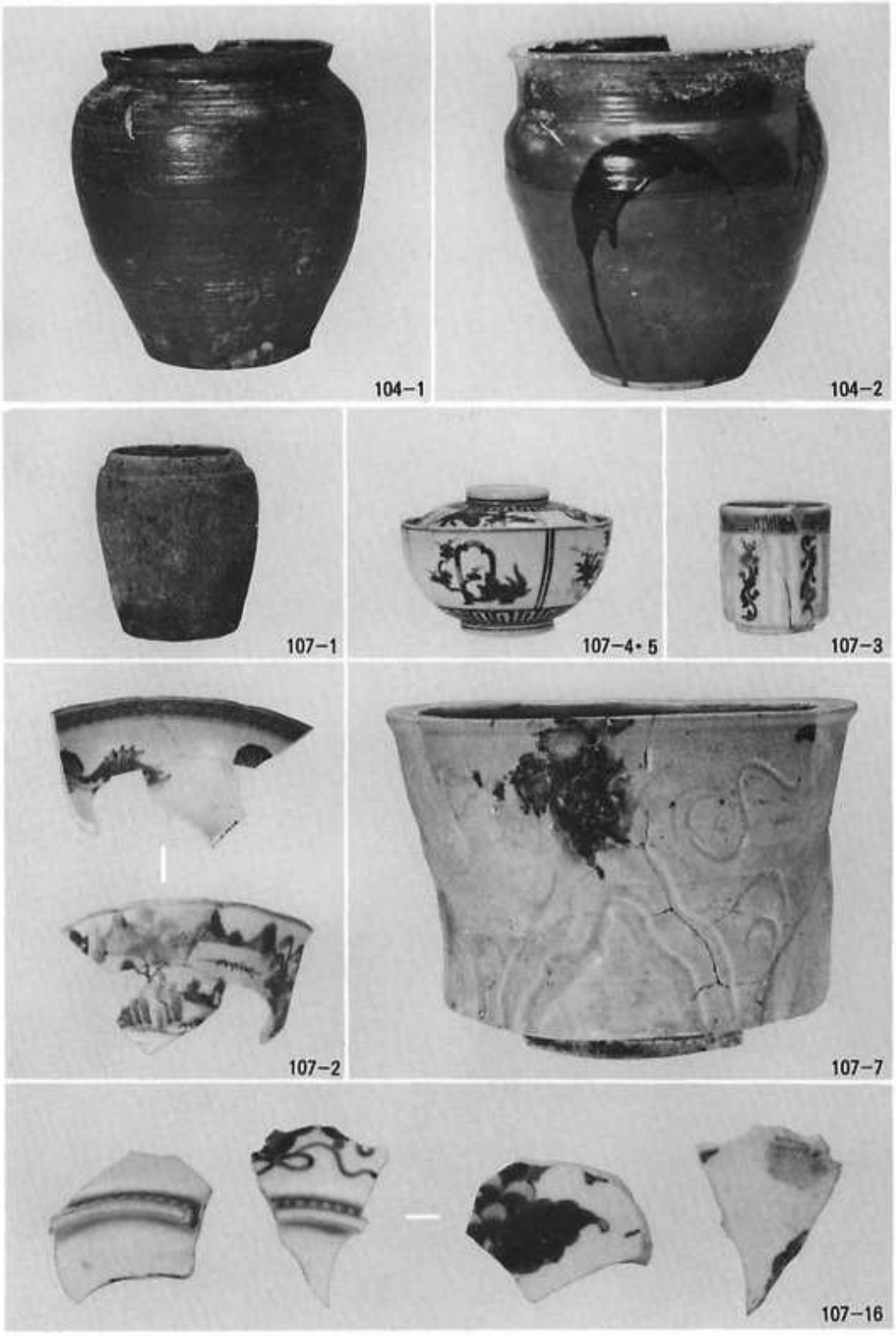


B 4 土壙 1 出土遺物(3)・その他の土壙出土遺物

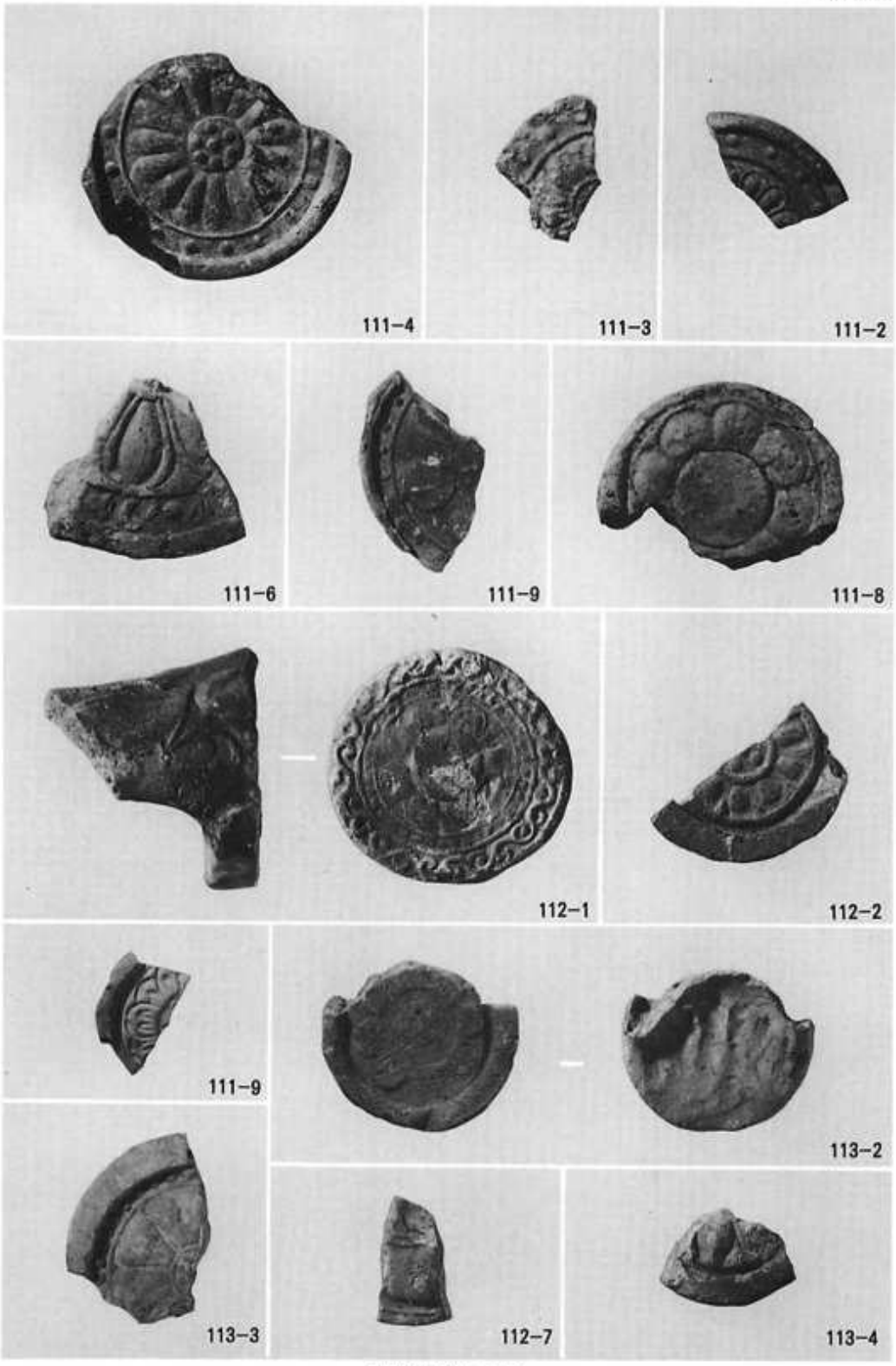

105−7
105−9
105−10
105−11
106−4
105−12
106−1
105−13
106−7
105−14
105−16
105−17

B５ムロ出土遺物

図版第66



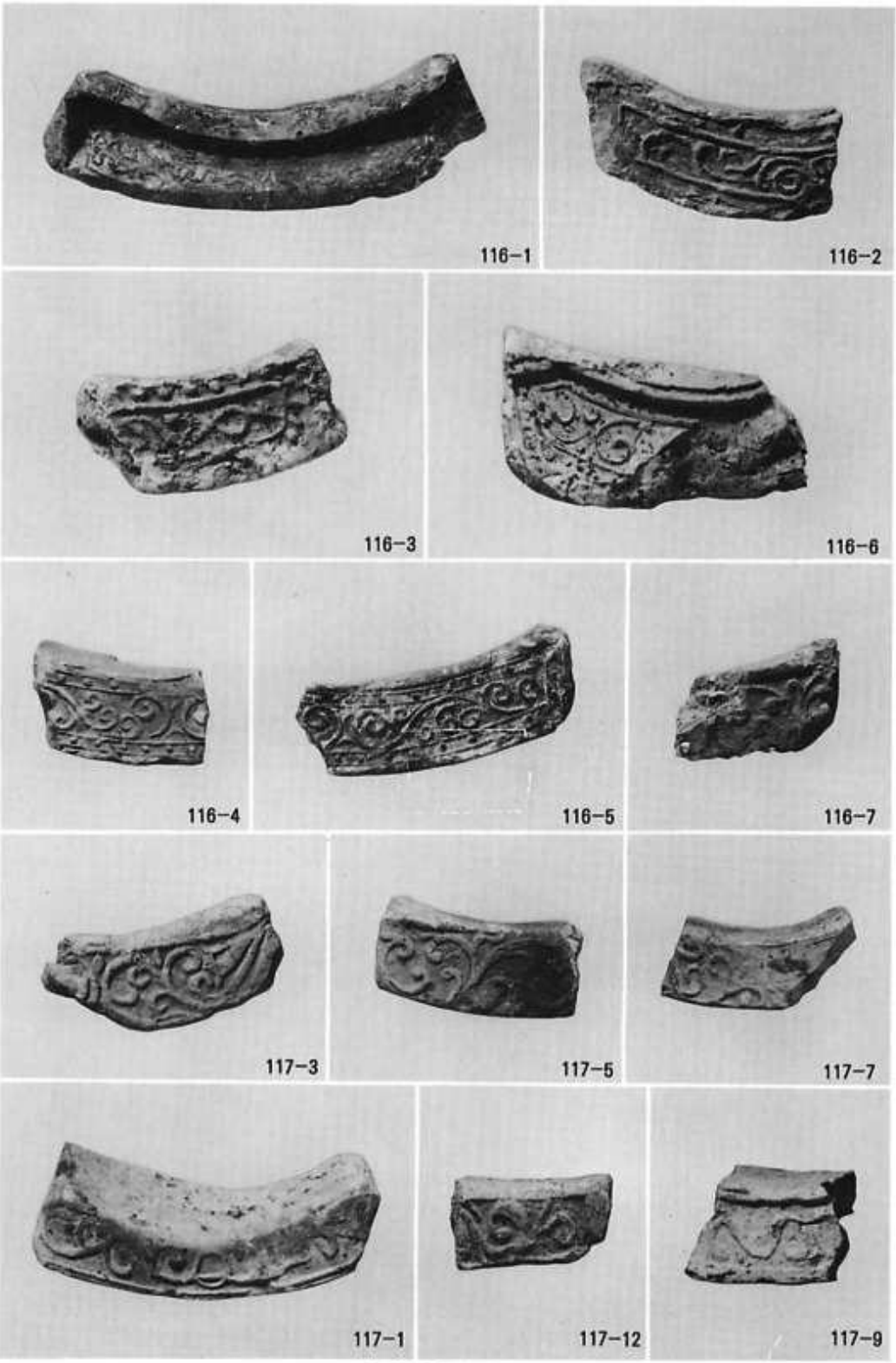
ムロ埋甕・瓦溜13出土遺物


111−4
111−3
111−2
111−6
111−9
111−8
112−1
112−2
111−9
113−2
113−3
112−7
113−4

発掘区出土瓦(1)

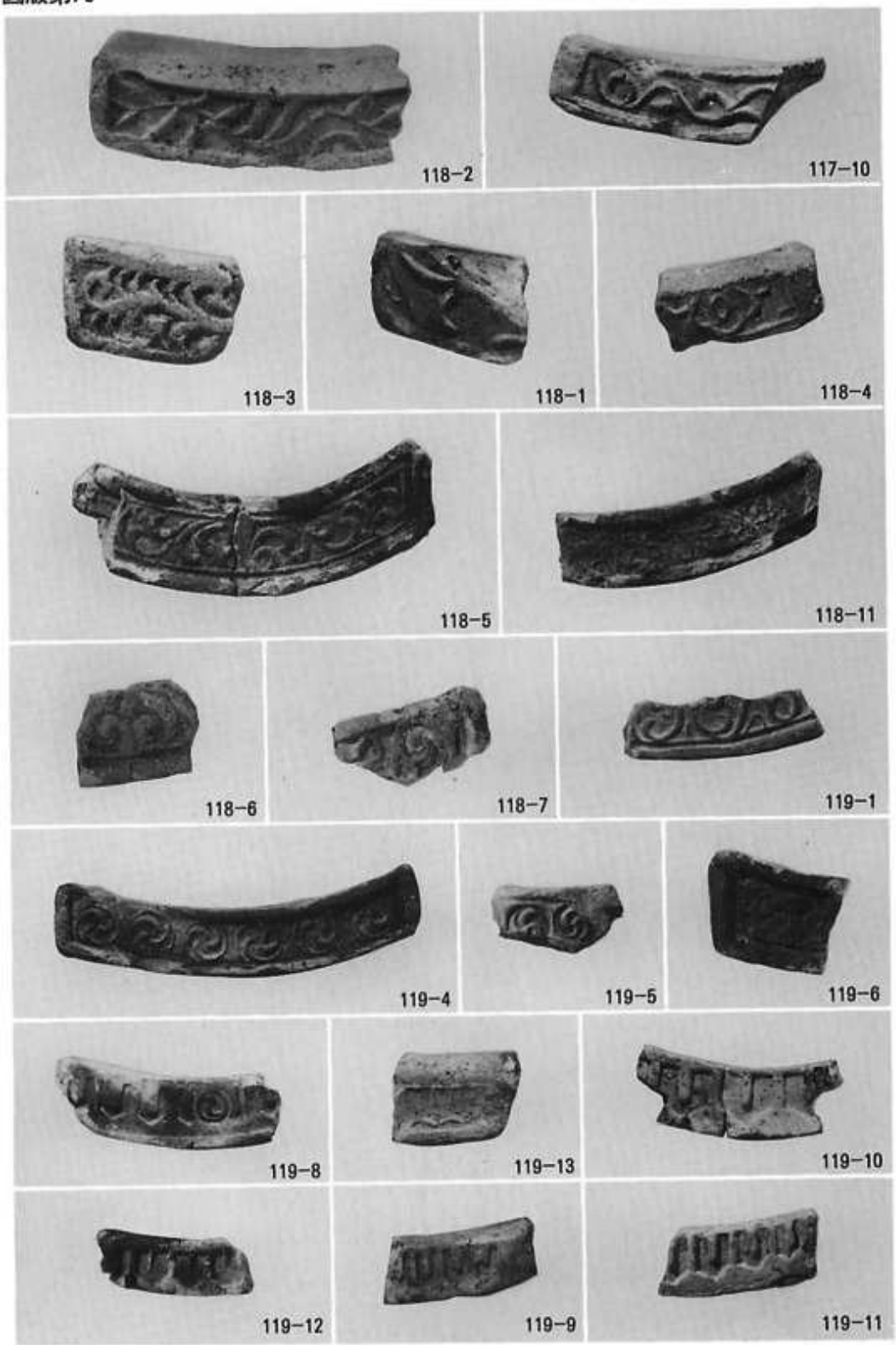
図版第68

発掘区出土瓦(2)

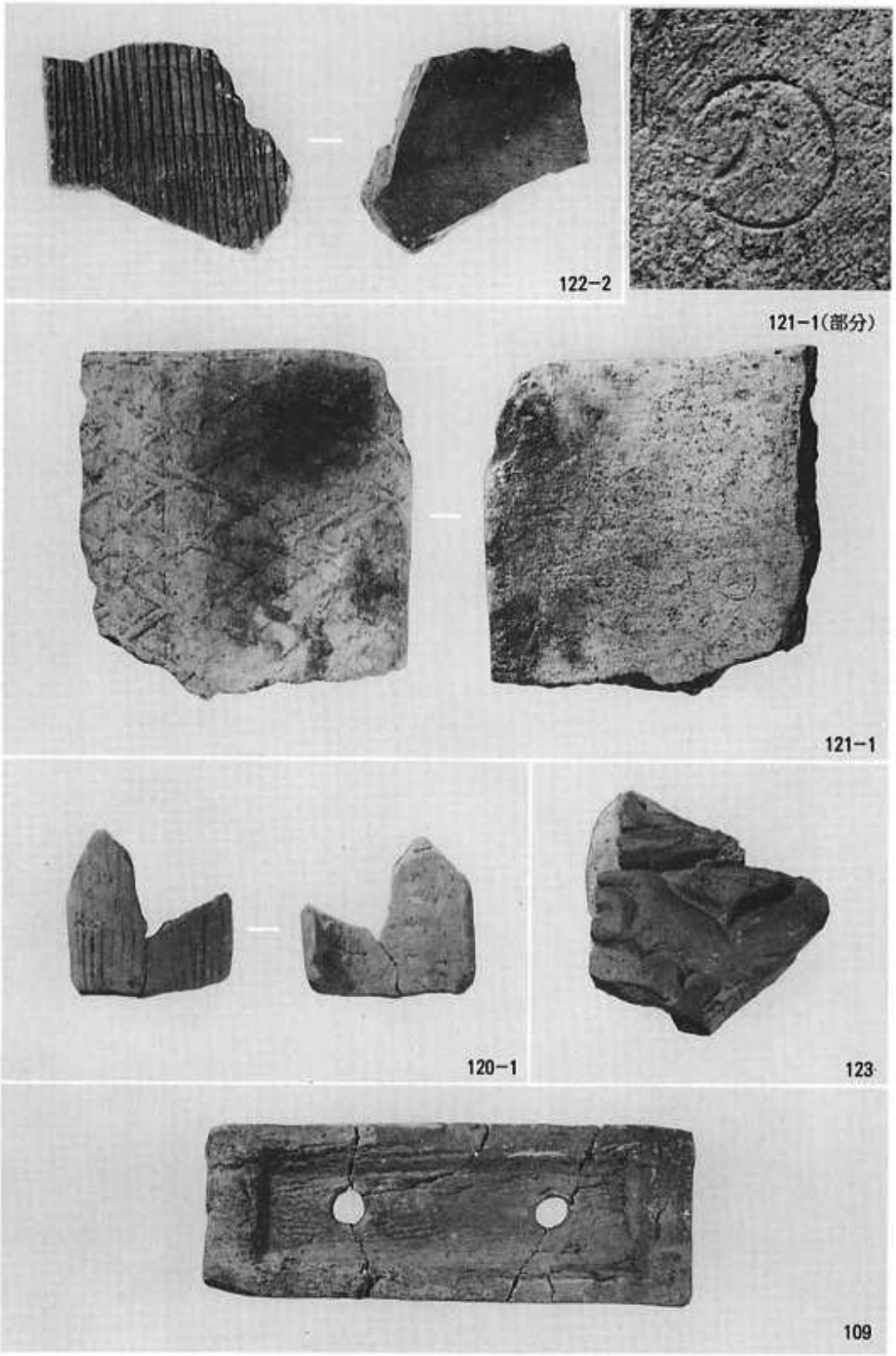

116-1
116-2
116-3
116-6
116-4
116-5
116-7
117-3
117-5
117-7
117-1
117-12
117-9

発掘区出土瓦(3)

図版第70

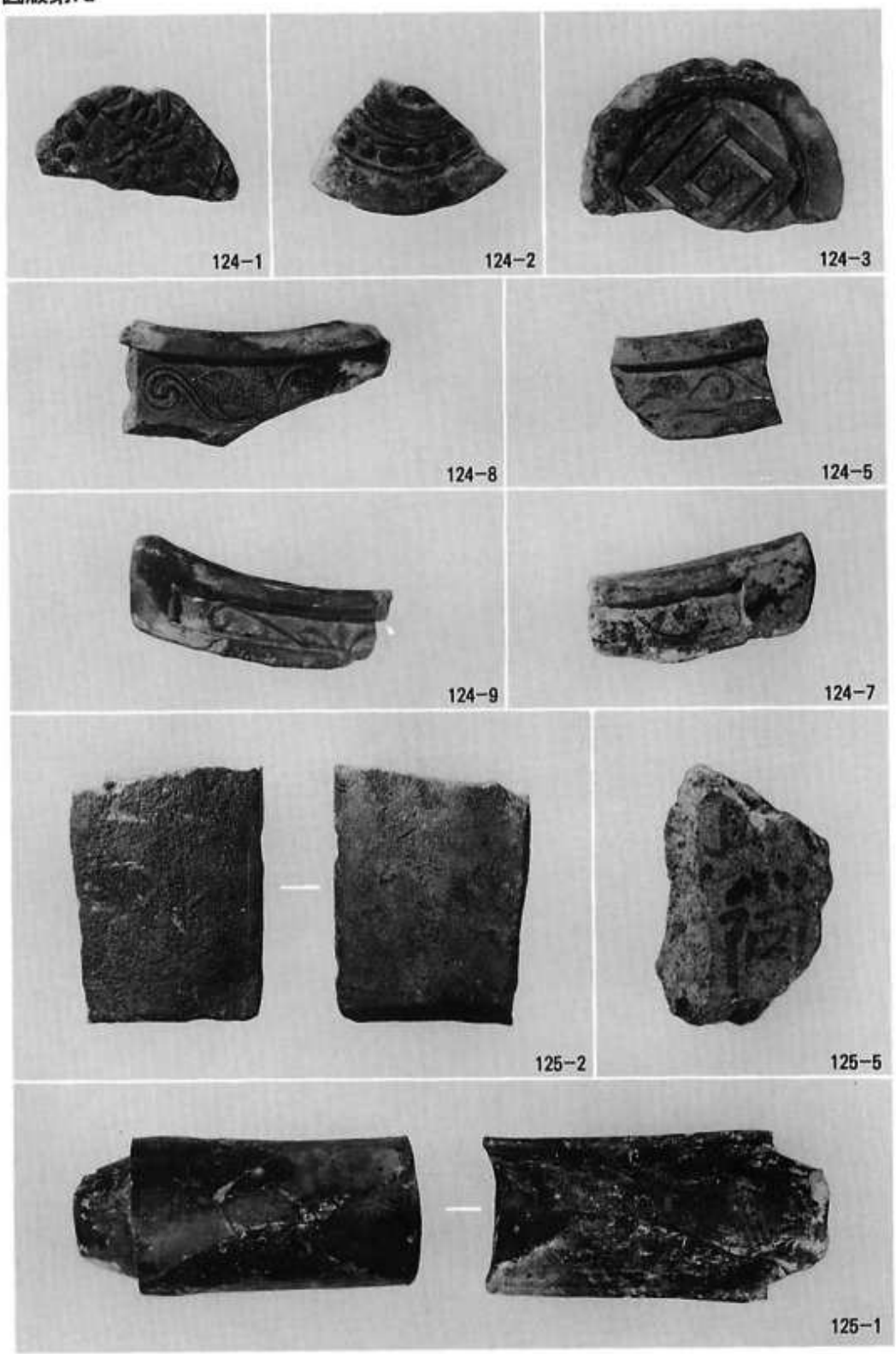


発掘区出土瓦(4)

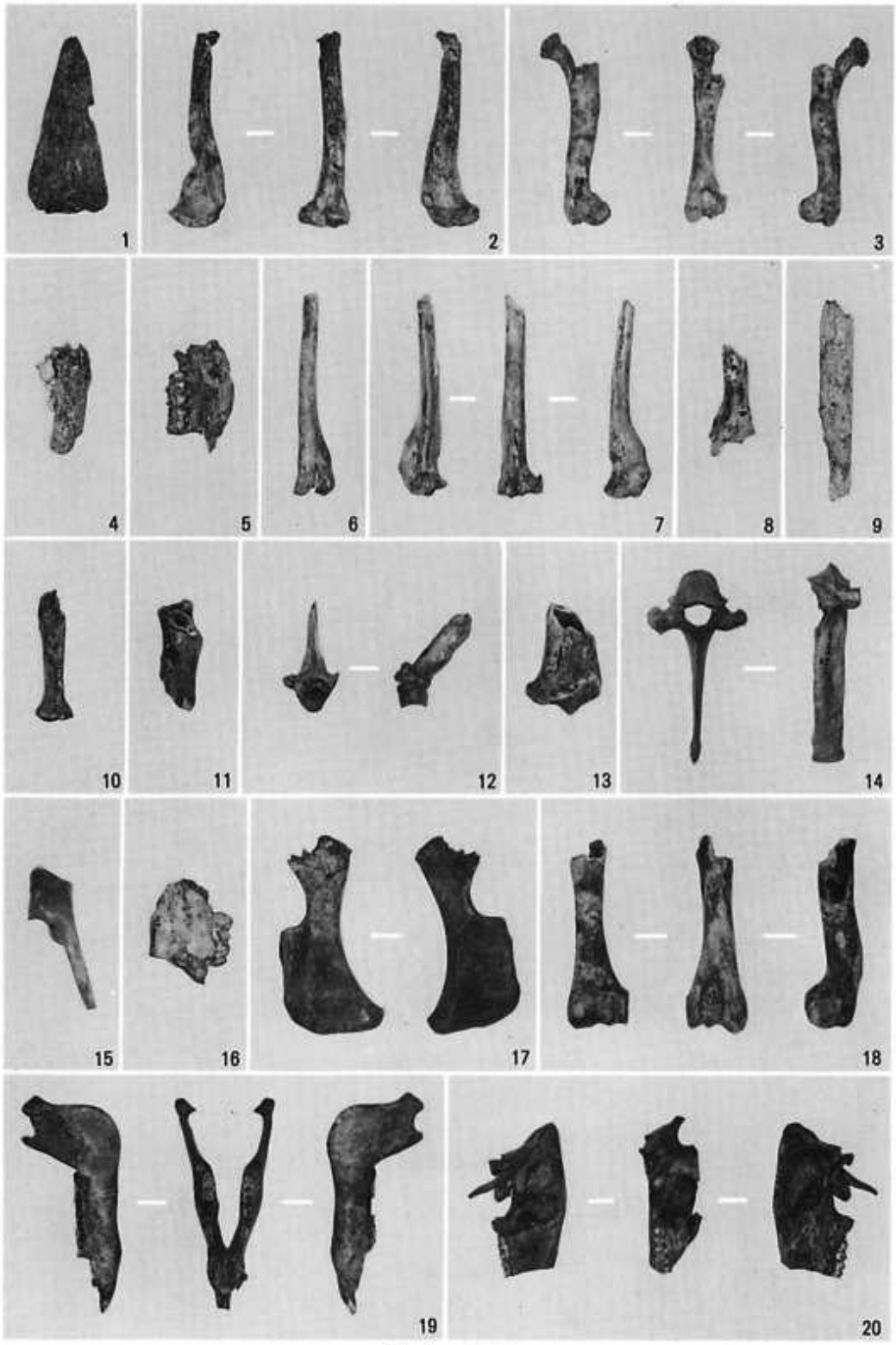


発掘区出土瓦(5)・A石組遺構出土碑

図版第72

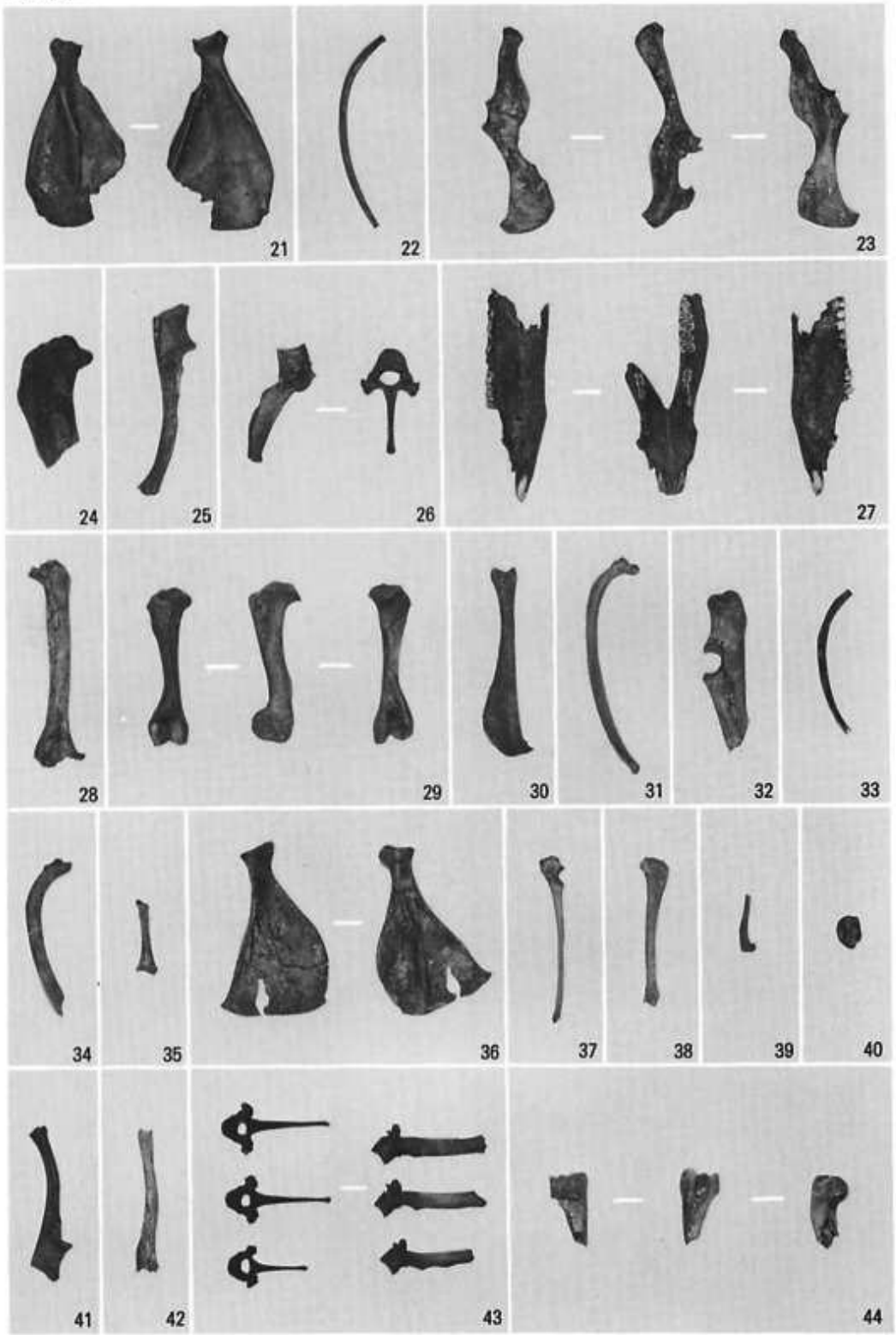


発掘区出土瓦(6)

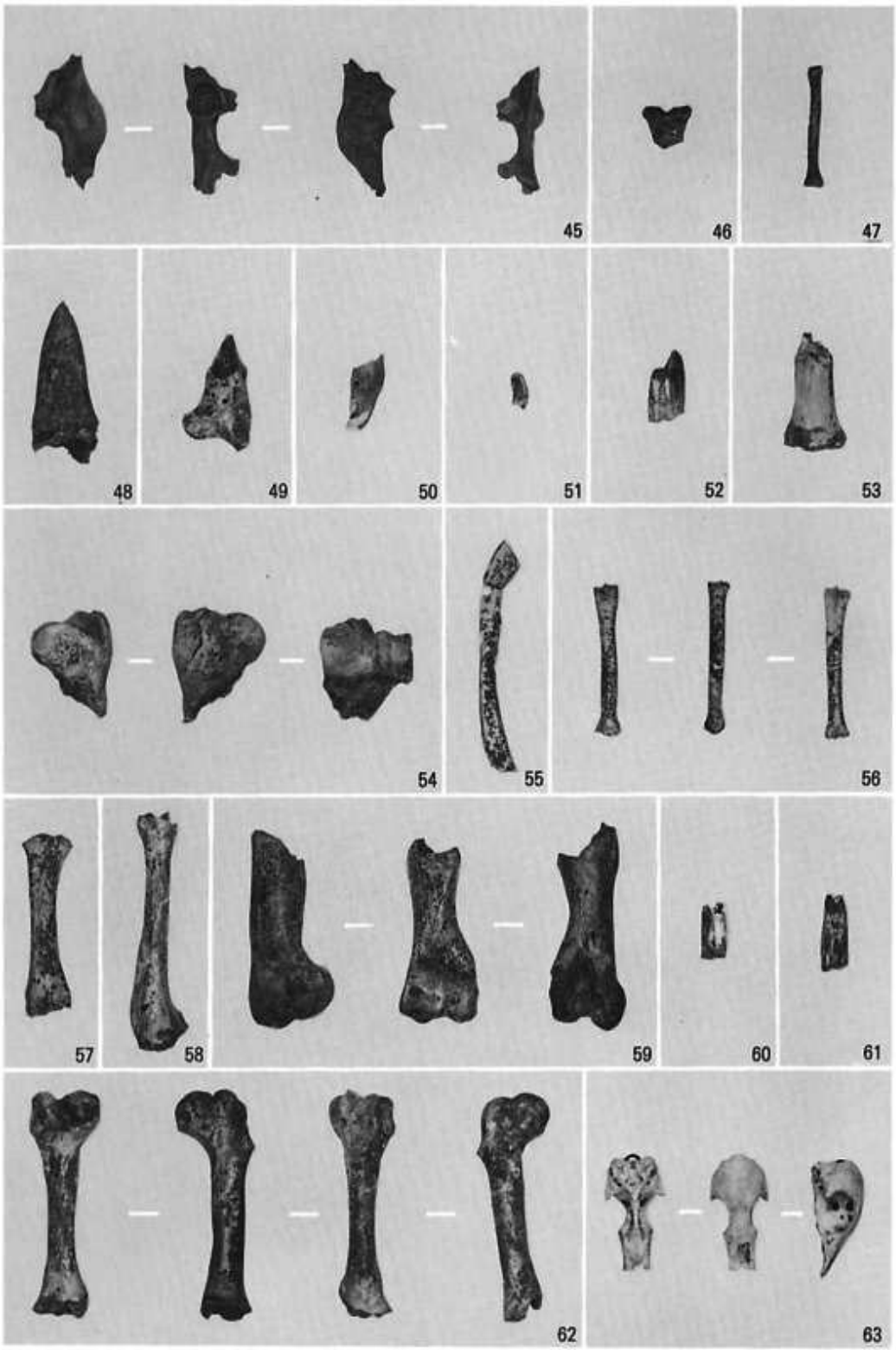


動 物 骨 (1)

図版第74

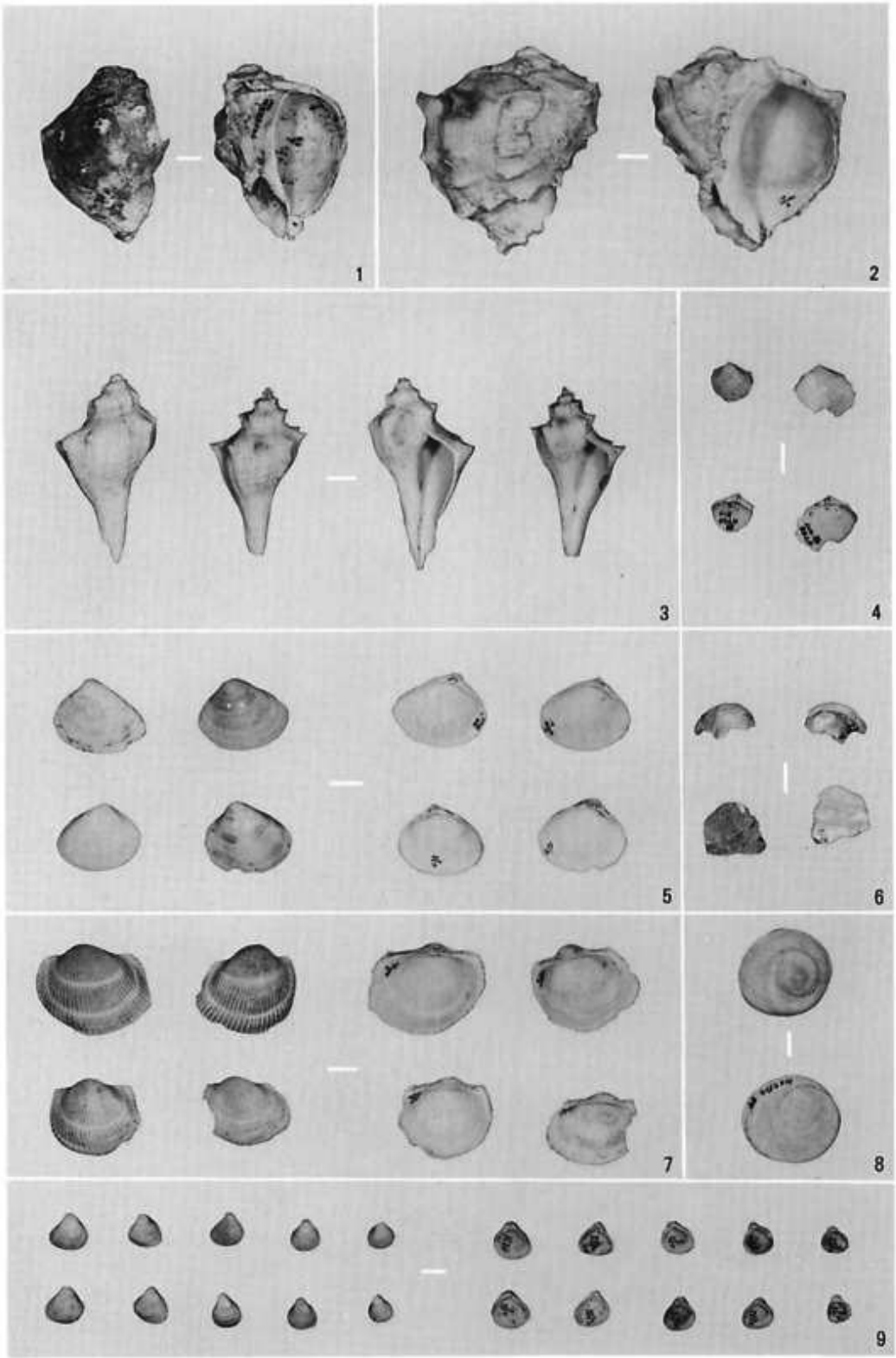


動 物 骨 (2)

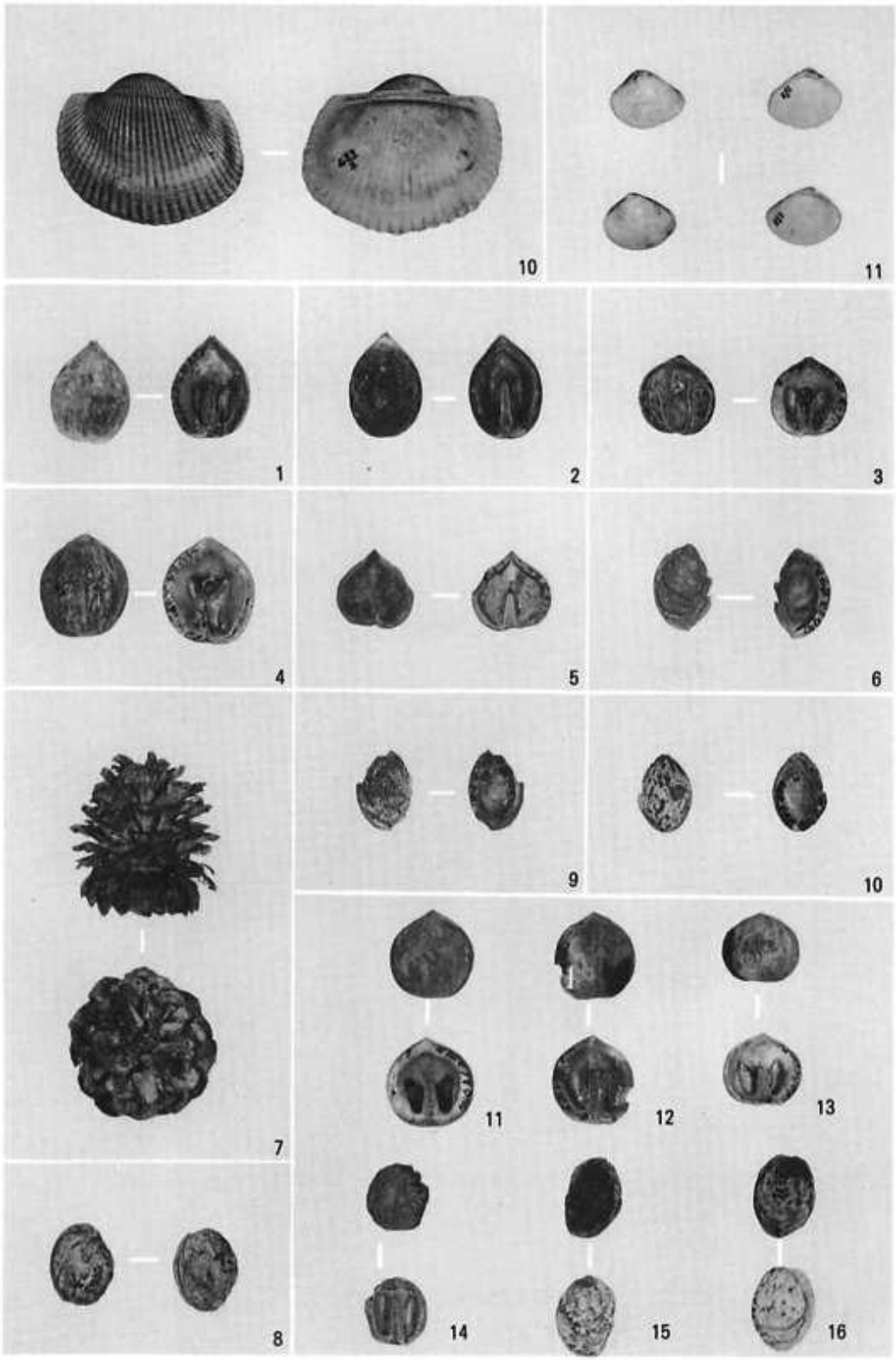


動 物 骨(3)

図版第76

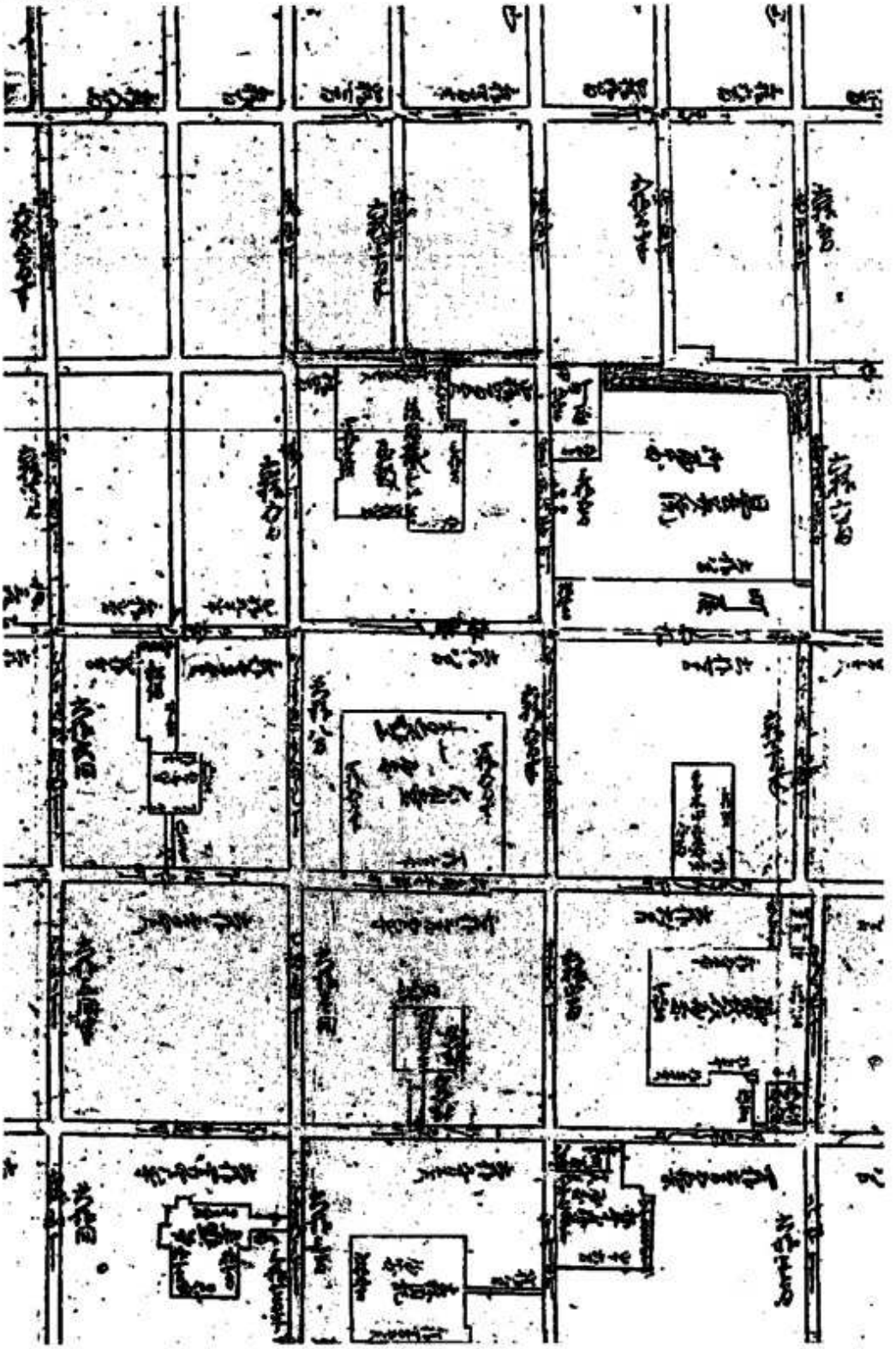


貝 (1)

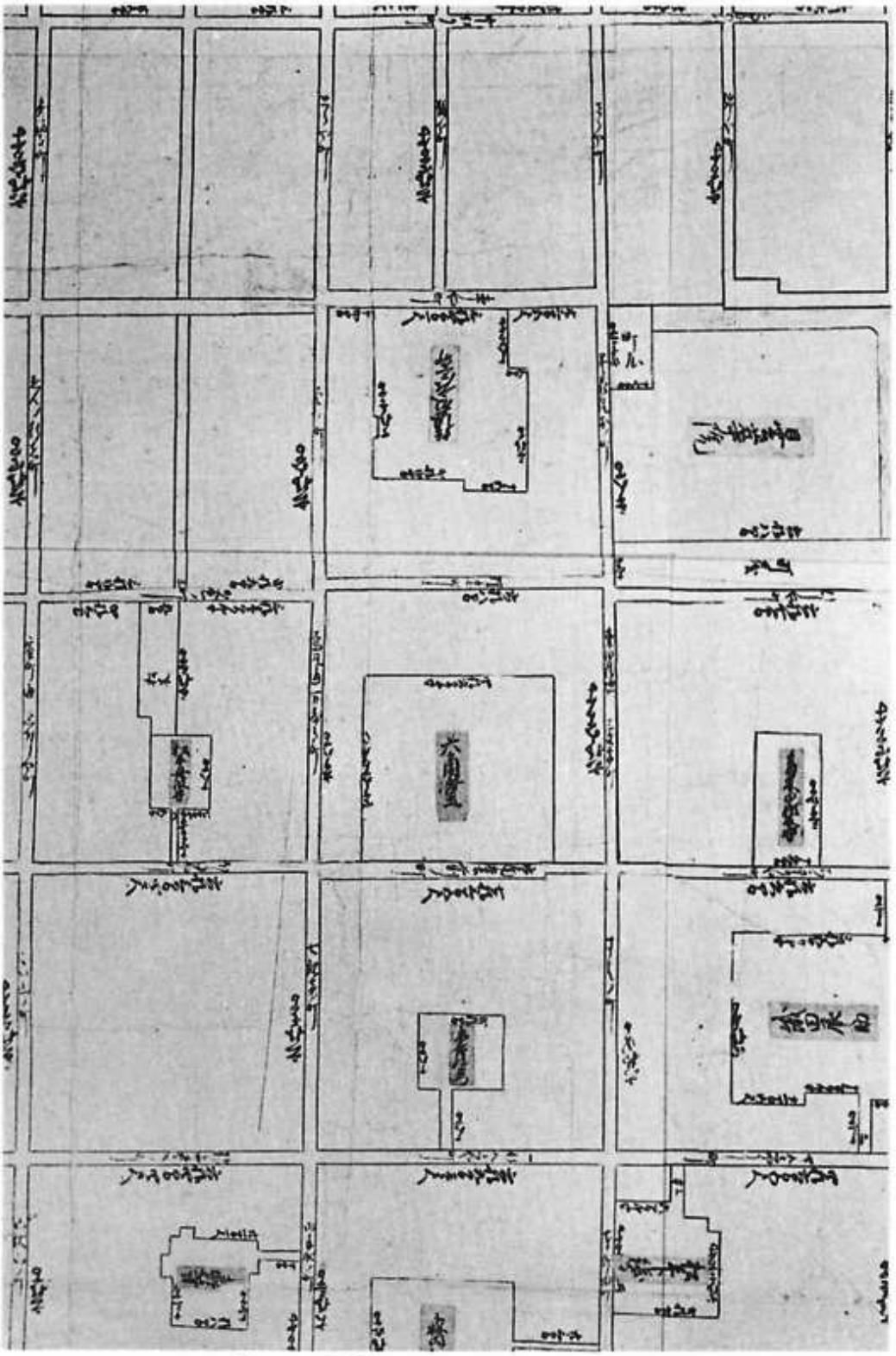


貝　(2)・植物遺体

図版第78

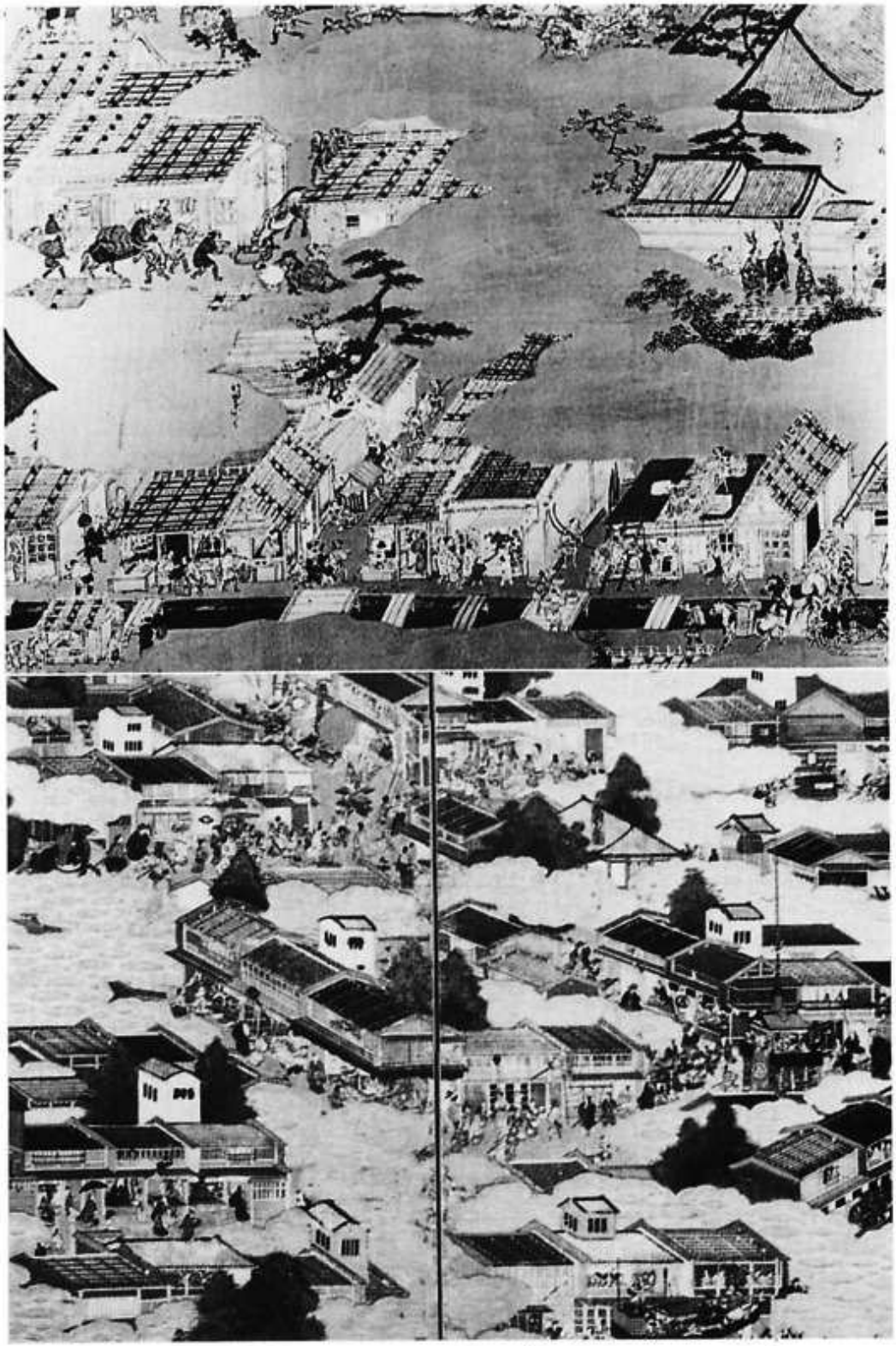


「洛中絵図 寛永十四年七月二日」部分（宮内庁書陵部蔵）



「洛中絵図 寛永後万治前」部分(京都大学附属図書館蔵)

図版第80



『洛中洛外図』部分(右上の寺院が六角堂)
上：上杉家本，下：池田家本(岡山県立美術館蔵)

平安京跡研究調査報告　第7輯
三條西殿跡

発行日　昭和58年7月31日
編集　平安博物館考古学第三研究室
下條信行・植山　茂・定森秀夫
発行　財團法人 古代學協會
604 京都市中京区三条高倉上る
振替京都 8-850番
TEL. 075 (222) 0888
制作　ビクトリー社
604 京都市中京区油小路錦上る
TEL. 075 (221) 1420

PALAEOLOGICAL STUDIES

IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. VII

EXCAVATION ON THE SITE OF THE SANJÔ NISHI-DONO MANSION OF THE CAPITAL HEIAN

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO MCMLXXXIII